

其他鹽剝、過滿俺酸加里、硫酸等ハ日常使用セリ  
塗布劑トシテハ乳酸(五十%)乃至純沃度丁幾過クロール鐵液等應用セララルモ  
予ハ主トシテ其初期ヨリ義膜面ニ沃度丁幾ヲ塗布スルヲ以テ例規トシ、之ト共ニ  
前記諸法ヲ兼行スレバ、其經過ヲ短縮セシメ得ベシ

腐敗性實布埤里ハレフレル菌ト他ノ諸菌殊ニ連鎖球菌トノ混合傳染ヲ示スモ  
ノナレバ、予ハ「ヂフテリ」血清ニ兼テ、對連鎖球菌血清一日一回二〇〇ヅ、連用  
シテ、效果ヲ收メタルノ經驗ヲ有セリ。ブルムノ一ハ之ニピオチアナーゼ(綠濃菌酸  
酵素)ヲ稱用セリ、即本劑ヲ局處ニ撒布シ、以テ原菌ノ増殖ヲ阻礙シ、遂ニ死滅ニ至リ、  
從テ口臭ハ消散シ、滲出モ亦減少スルコト著シト爲セリ、又重症ニシテ病勢ノ甚ダ  
シク進行セル症例ニハ血清ノ靜脈内注射(靜脈)ヲ説クモノアリ

強心劑トシテハカンフル安息香酸、ナトリウムコヒーネ等ハ日常最モ多ク使用  
セラレ、又アドレナリンノ一萬倍稀釋液ヲ一回〇・三乃至〇・五ヲ一日二回ヅ、内用  
シ、若クハ靜脈内注入ヲ行ヒテ奏效アリ

咽頭結核及瘰癧

三 結核及瘰癧 Tuberkulose und Lupus.

咽頭結核ハ肺喉頭等ノ結核ヨリ續發スルコト多ク、主トシテ疾患ノ末期ニ現ハ  
レ、或ハ身體他部ニ宿在セル結核病竈ヨリ、血管ノ媒介ニ據リテ轉移スルコトモ無  
シトセズ、又稀ニハ此部ニ原發スルアリ、而シテ細菌ハ特ニ咽頭淋巴輪ノ組織ニ占

徵候及診斷

居シ易ク、ウエックスハ病的扁桃腺ノ三・三%ニ於テ、結核竈ヲ認メ得タリト爲シ、長  
岡ハ腺性増殖ノ六%ニ結核竈ヲ認メタリ、(京都臨牀)然レドモ此間特別ナル意義ヲ  
有セザルモノノ如シ、茲ニ注意スベキハ肺結核患者ニシテ、已ニ口蓋扁桃腺ヲ侵サ  
レタルトキハ、死期ノ愈々近ヅキタルヲトスベキナリ

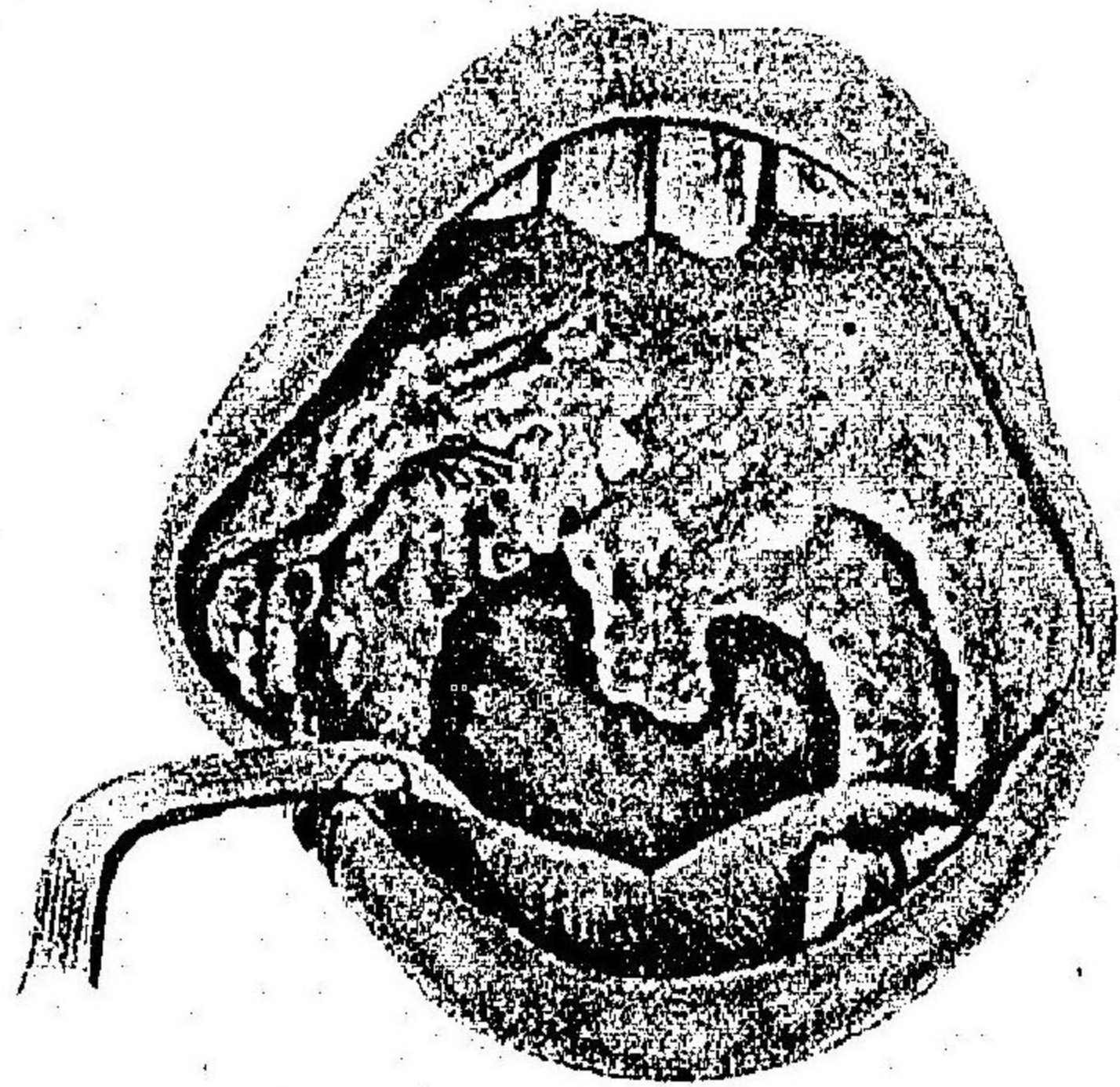
徵候及診斷

咽頭結核ハ多ク初期ニ著シキ自覺症ヲ呈セザルヲ以テ、疾病  
ノ已ニ進行セルモノヲ診スルヲ例トス、而シテ其軟口蓋ヲ侵ストキハ、初メ粘膜炎  
ビ其下織ハ扁平ニ肥厚シ、其色淡黄ニシテ貧血ヲ呈シ、此中ニ粟粒結核ヲ透見ス、如  
斯浸潤ハ急速ニ破壞シテ潰瘍ヲ形成シ、著シク蔓延スレドモ、破壞ハ表在性ニシテ

微毒性潰瘍ニ反シ深部ニ達スルコ  
ト尠ク、隨ツテ口蓋ヲ穿孔スルニ至  
ルコト稀ナリ

扁桃腺ニ於テモ初メハ貧血性肉  
芽ヲ呈シ、後乾酪様底面ヲ有セル不  
正ノ潰瘍ト成ル、末期ニ至レバ潰瘍  
ハ口腔、會厭軟骨及全喉頭入口等ニ  
蔓延シ、又咽頭上部ノ結核ハ歐氏管  
粘膜炎ニ移行シ、次デ結核性中耳疾患  
ヲ惹起ス、硬口蓋ニ於ケル結核ハ骨

第三百三十八圖



咽頭結核

瘍ノ形ヲ以テ現ハルルコトヲ多シトシ、此場合ニハ微毒ニ等シク其穿孔ヲ來スモ、之ニ比スレバ進行ハ稍ヤ鈍ナリ

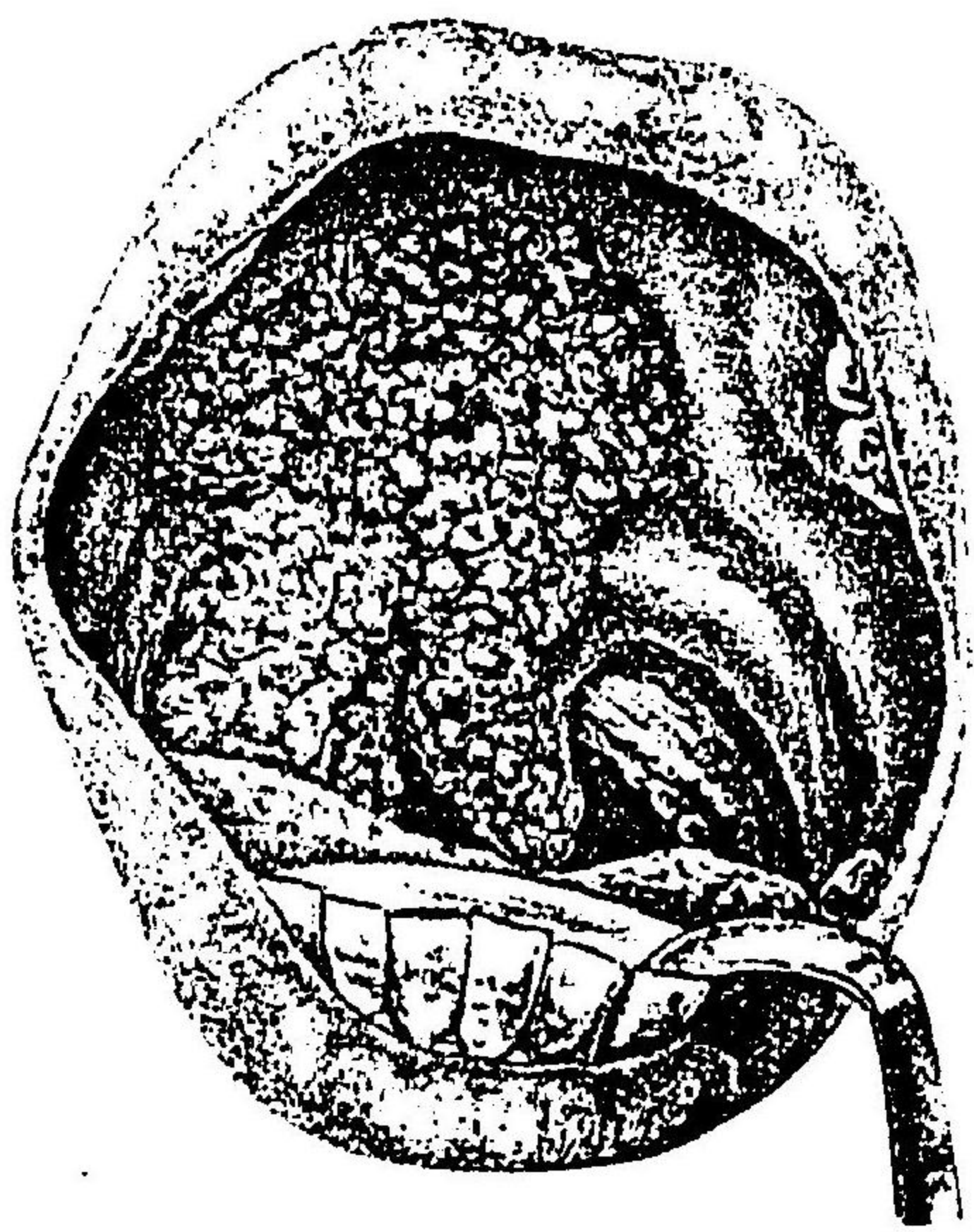
自覺症トシテハ嚥下痛ヲ主トシ、殊ニ空嚥時ニ甚ダシク、又耳内ニ放散スルコトアリ、潰瘍ノ咽頭後壁ニ存スルトキハ疼痛ハ屢々後頭及頂部ニ感ズ、如斯シテ攝食ヲ妨ゲラレ、遂ニハ全身衰弱ノ下ニ斃ルルニ至ル

然レドモ極メテ稀ニハ自然ニ治癒スルモノアリ、如斯ハ上部氣道ニノミ原發セラルモノニシテ、他ノ病竈ヲ有セザル強壯ナル男子ニ限ルガ如シ、而シテ其治癒ヲ營ムヤ、小ナル缺損若クハ白線狀癩痕ヲ留メ、又ハ咽頭後壁ハ軟口蓋ノ一部ト癒著ス

咽頭結核ハ上記諸症狀ト

身體他部ニ結核病竈ノ存スルコト多キヲ以テ、其診斷ハ容易ナリ、最モ疑ハシキハ微毒性潰瘍トノ鑑別ナルモ、後者ニ於テハ結核性潰瘍ニ比シテ、多クハ大ニシテ深ク、且ツ容易ニ口蓋ヲ穿孔スルノ傾キヲ示スモノナリ、而シテ全身の検査ヲ行フトキハ決

第三百三十九圖



軟口蓋瘡

狼瘡

シテ難キニ非ズ、疑ハシキニ及ンデハ組織検査又ハワッセルマン反應ヲ檢スレバ明カナリ、ケルテルハ沃度ノ試驗的内用ヲ否定シテ沃度加里ヲ咽頭結核特ニ其原發性ノモノニ用ヒテ、奏效アルヲ以テナリト爲セリ

咽頭ニ於ケル狼瘡モ結核ガ只或ル條件ノ下ニ其形態ヲ變ジタルモノニ過ギズシテ、小結節ノ密集セル潰瘍面ヲ呈ハシ、其一面ニハ癩痕結成ノ傾向ヲ示スヲ以テ特異トシ、(第三百三十八圖)而シテ其潰瘍ハ結核ニ於ケルト異ナリテ、其邊緣ノ掘鑿スルコト無ク、鋸齒狀ヲ呈セズ、又其浸潤面ヲ呈ハスコト尠ク、加之ナラズ其周縁ハ寧ろ厚壁ヲ以テ圍繞セラレ、其潰瘍面ノ基底ニ於テ蒼白ナル肉芽面ヲ呈シ、蜂窩ニ似タリ、而シテ其一部ハ前述ノ如ク癩痕結成ヲ營ム、又自覺症モ結核ニ比スレバ輕微ニシテ、豫後モ稍ヤ良ナリ

療法

療法

原發性咽頭結核ニシテ身體強壯ナルモノヲ侵セルトキハ、屢々治癒ニ向フコトアルヲ以テ、諸種ノ療法ハ之ヲ怠ル可カラザルナリ、然レドモ其多クハ重症ナル肺喉頭結核ニ續發セルモノナレバ單ニ姑息療法ニ満足セザルベカラズ、即ち毎食前ニ稀薄コカイン水ヲ咽頭粘膜ニ噴霧シ、其他過酸化水素ヲ以テ口腔ヲ洗滌スルモ可ナリ、而シテ潰瘍面ニ向ツテノ塗布料トシテ最モ廣ク用ヒラルルモノハ、乳酸(二五—七五%)メントールオレフ油(一〇—一五%)等ナリトス

内用ニ就テハ已ニ一般結核症病論ニ説ケレバ茲ニ省略ス、ケルネルハ沃度加里ヲ推稱シ、初メヨリ一日二〇ヲ用ユ

咽頭微毒

四 微毒 Syphilis.

口腔篇ニ述ベタルト等シク又之ヲ三期ニ區別スベシ

第一期症

一、第一期症

即初期硬結ハ通常一側扁桃腺ニ占位シ、單ニ表層ノ糜爛ニ過ギザルカ、或ハ堤狀ニ隆起セル潰瘍面ヲ形成シ、或ハ扁桃腺上ニ局限シテ硬キ汚穢灰白色豚脂様ノ被蓋ヲ有シ、其觀恰カモ實布埤里性義膜ニ酷似ス。故ニ實布埤里亞様扁桃腺下疳、Diphtheroider Tonsillenschanker、ノ名アリ、著色圖參照)自覺症ハ多クハ輕微ナルモ、稀ニ激シキ疼痛ヲ發シ、或ハ熱發ス

第二期症

二、第二期症

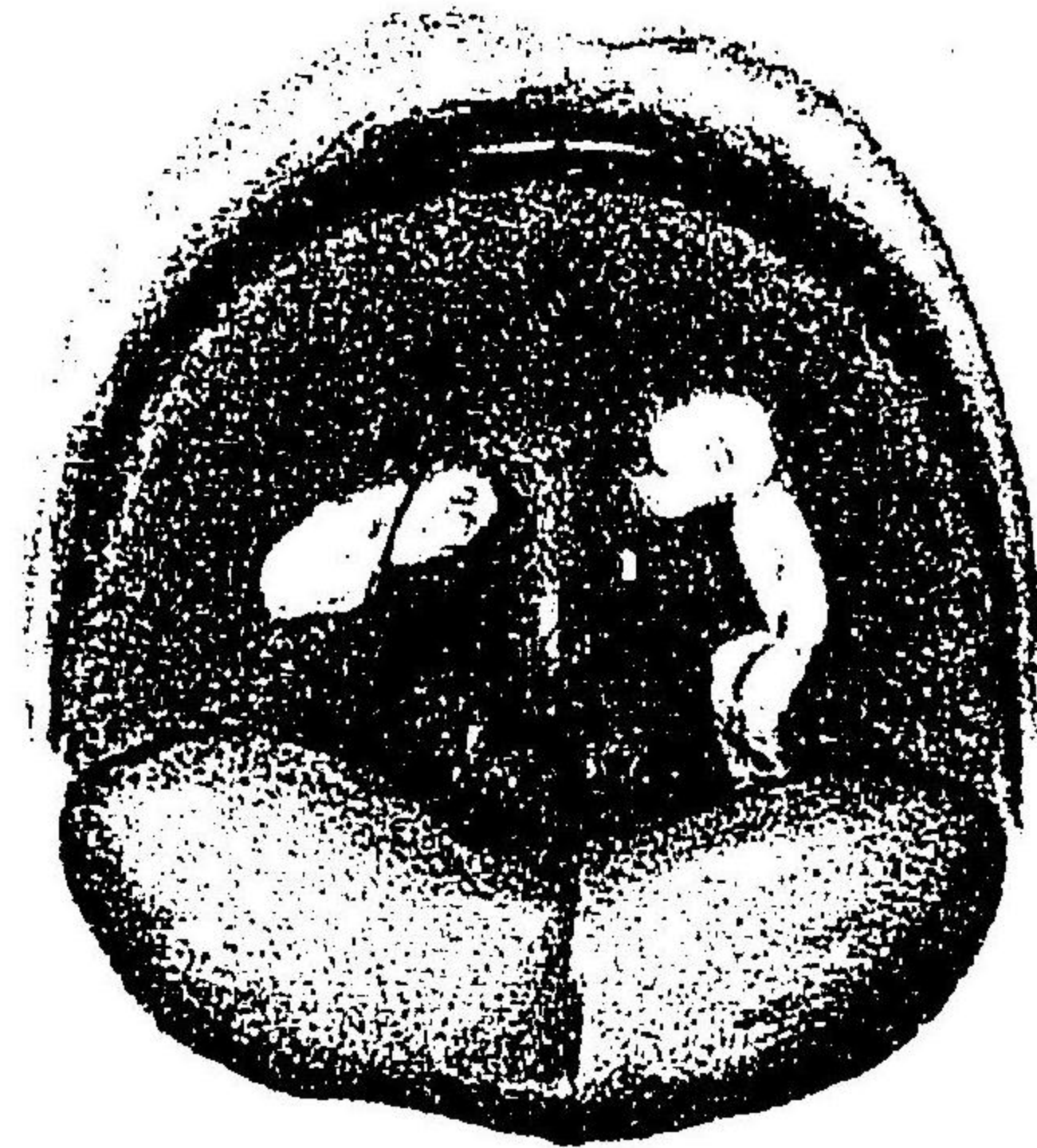
ハ口腔微毒條下ニ述ベタルト等シク、著シク發赤ヲ呈セル紅斑ヲ現ハシ、健康組織ト明ニ限界セラレ、所謂微毒性口峽炎、Angina syphilitica トシテ、若クハ其初メ薄キ灰白色覆面布様ヲ呈セル廣キ扁平粘膜炎、Plaques mucosae 即扁平胼胝腫 breues Kondyloom トシテ現ハレ、著色圖參照)其後上皮ハ壞死シテ、汚穢黃白色ノ斑點ヲ形成ス。而シテ全身症トシテ腺ノ腫脹及皮膚ノ蔷薇疹ヲ見ル、此扁平腫ハ好ンデ軟口蓋ニ占位シ、懸壜垂及扁桃腺之ニ次ギ、稀ニ舌扁桃腺及咽頭後壁等ニモ發ス

第三期症

三、第三期咽頭微毒

ハ硬口蓋ノ骨膜、口蓋帆、扁桃腺及咽頭後壁粘膜下織中ニ於テ、其初メ稍々硬ク、後ニハ柔軟ナル黃白色蠶豆大ノ結節ヲ生ジ、破壞シテ遂ニ纖維腫性潰瘍ヲ形成ス。此潰瘍ハ比較的速ニ發現シ、邊緣ハ強ク屹立シテ、肥厚發赤

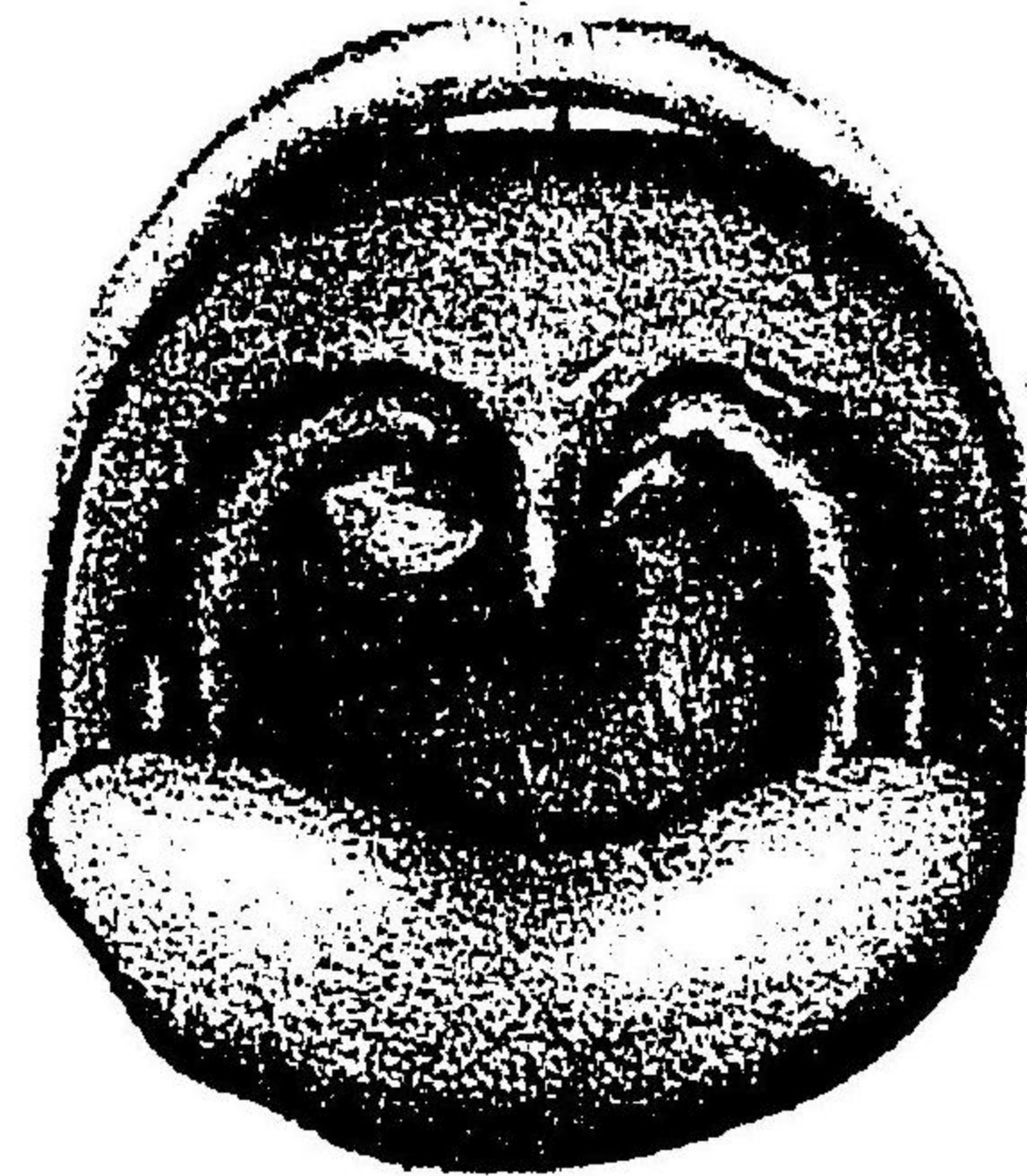
表圖色著四第



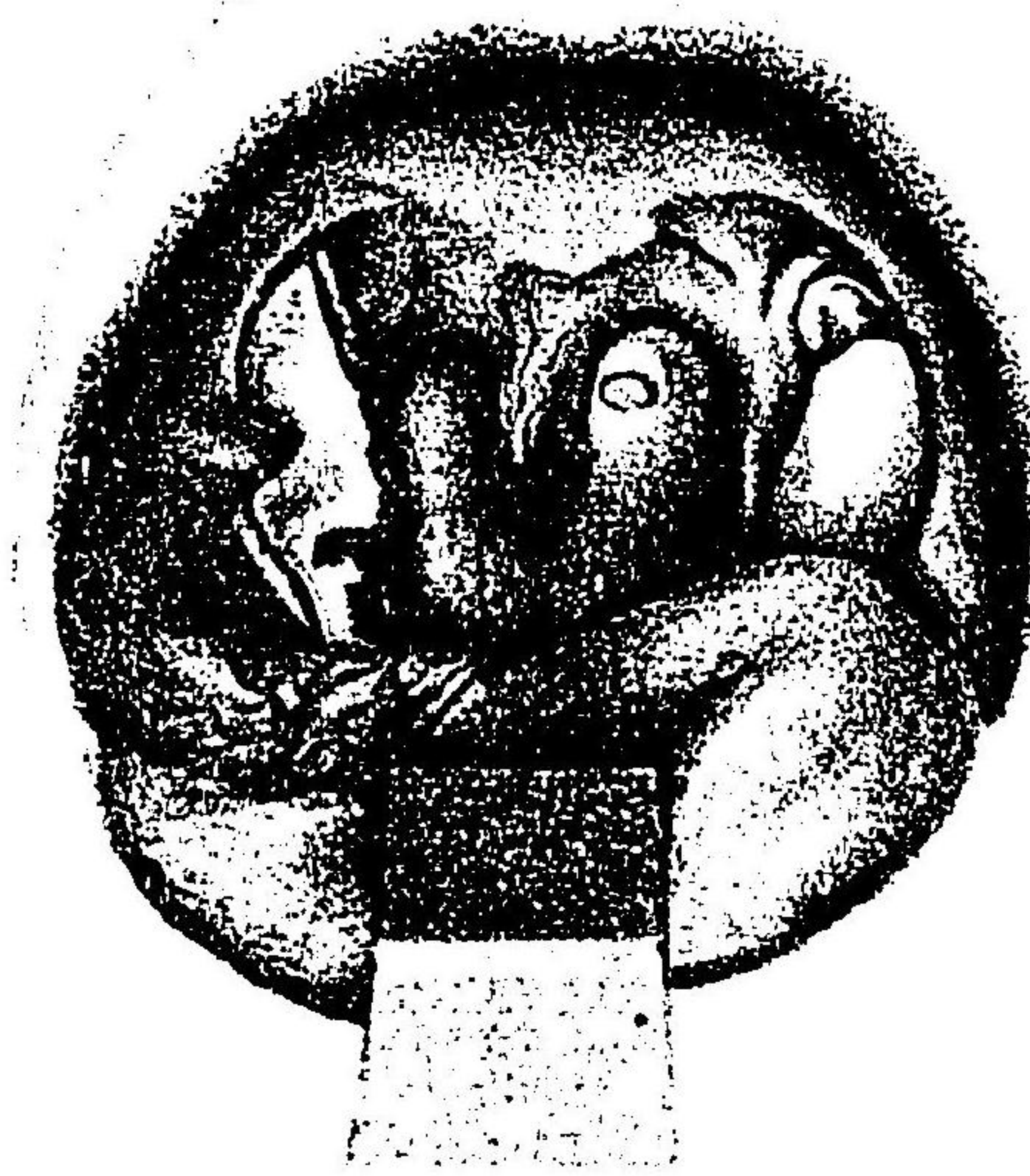
毒微期二第  
(喉底肌平扁)



結硬期初毒微頭咽  
(瘡下様リテフテ腺桃扁側右)

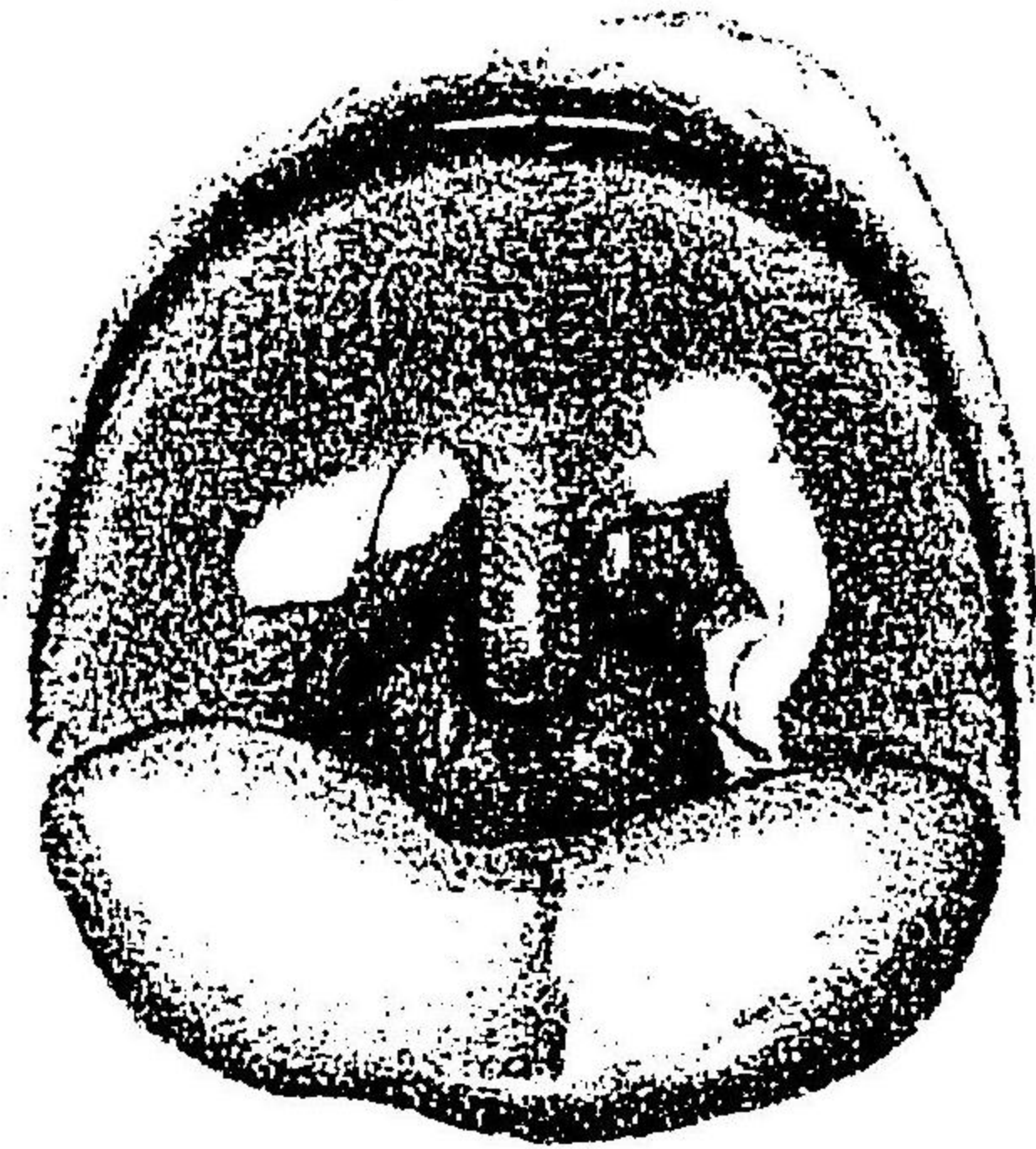


毒微期三第  
(= 腔咽部口ヨリ腔咽部鼻  
ヲ滲性腫膜被ルセ及波)

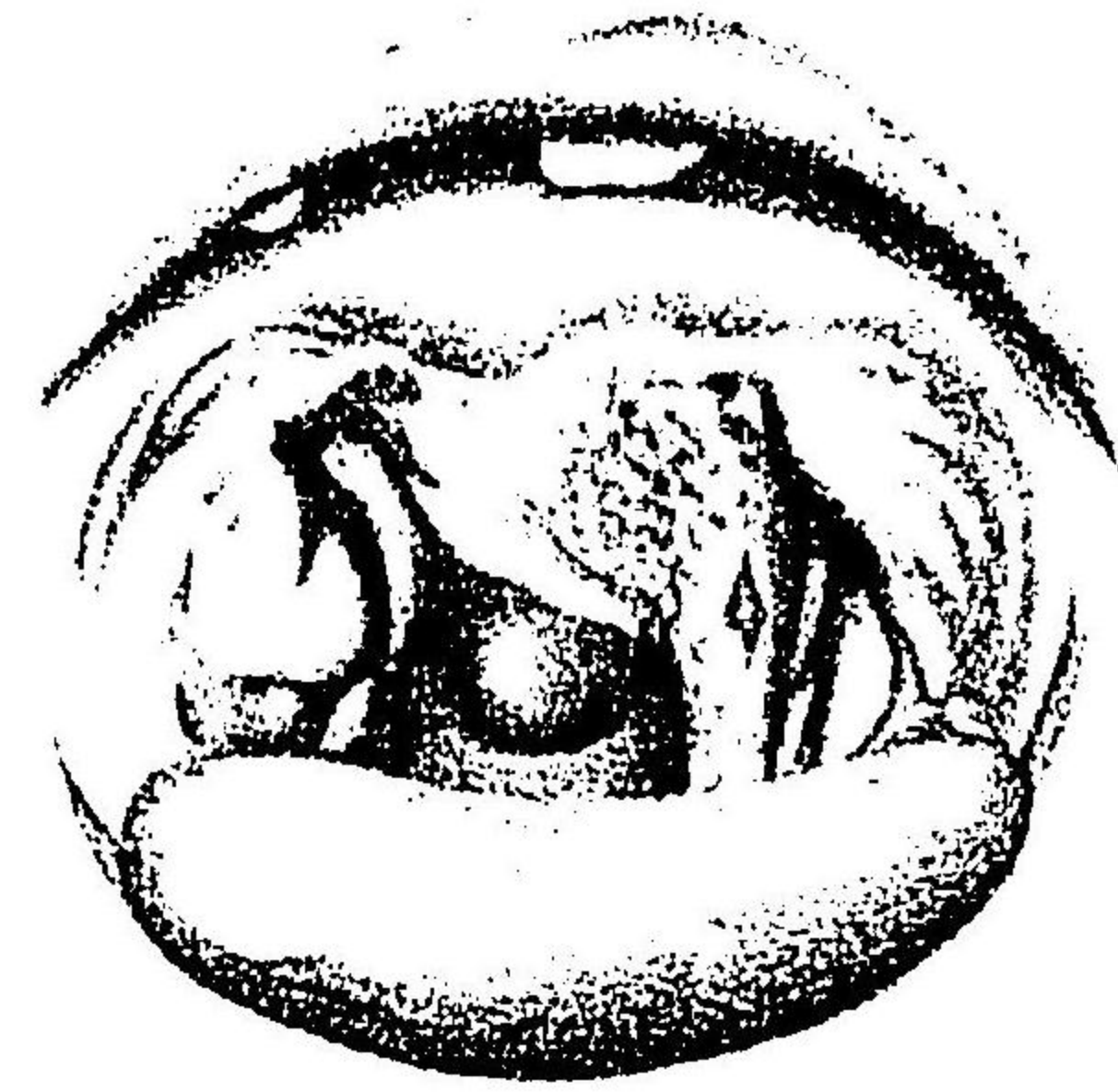


毒微期三第  
(ツルテ及ニ面舌ノ埃破腫膜被腺桃扁側右  
リテ滲性小ニ壁後頭咽セ及極上腺桃扁側左)

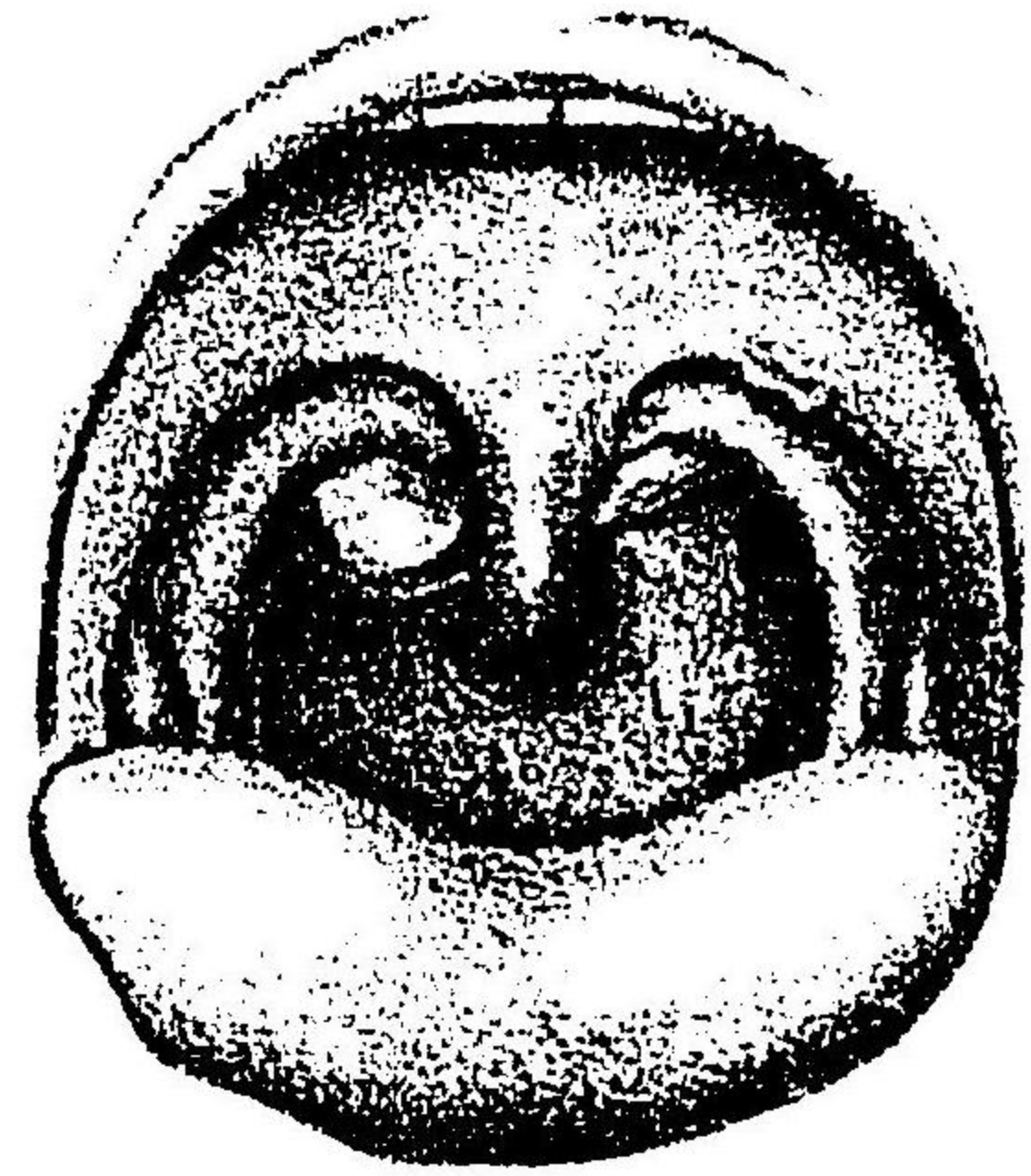
表 圖 色 著 四 第



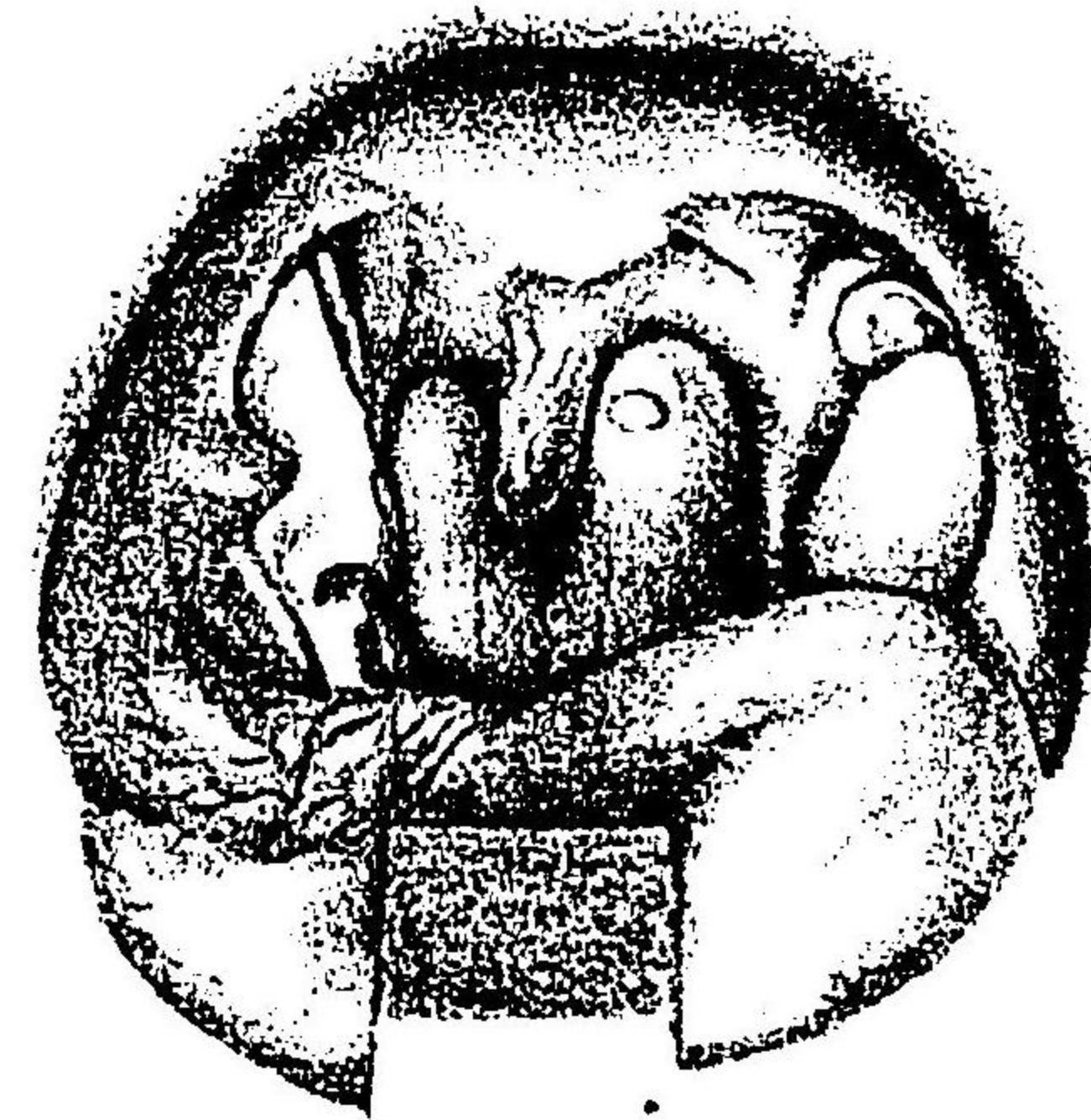
毒 疫 期 二 第  
(喉 賦 膈 平 偏)



結 硬 期 初 毒 疫 頭 咽  
(垂 下 様 リ テ フ ナ 腺 桃 偏 右)



毒 疫 期 三 第  
(= 腔 咽 部 日 リ ヲ 腔 咽 部 膜  
揚 散 往 腫 誤 誤 ヲ セ 及 彼)



毒 疫 期 三 第  
(ツ 且 ナ 及 = 面 舌 シ 埃 破 膜 誤 誤 腺 桃 偏 右)  
(リ ア 嚔 潰 小 = 壁 後 頭 咽 ビ 及 極 上 腺 桃 偏 左)

ス、著色圖参照而シテ其多クハ結節及浸淫ノ全部破壊スルヲ以テ、大ナル物質缺損ヲ招來シ、硬軟口蓋ノ缺損若クハ咽頭後壁ト癒著シテ、癩痕ヲ結成スルコト多シ。自覺症トシテ潰瘍ノ存スルトキハ、嚙下痛アリ、病竈ノ咽頭天蓋ニ存スルトキハ、疼痛ハ後頭及項部ニ放散シ、若シ其歐氏管咽頭皺襞ニ存スルトキハ、同側耳内ニ疼痛ヲ訴フ、然レドモ凡テ輕微ナリ、又硬軟口蓋ノ癒著又ハ穿孔アルトキハ、各其症候アリ（前章ヲ見ヨ）

診斷

凡テ前章鼻口腔篇ニ記セルモノニ準據シ、疑ハシキトキハワッセルマン反應ニ籍ルヲ可トス

療法

初期硬結ニハ口腔内清潔法ヲ行フト共ニ、沃度グリセリン、沃度丁幾等ノ塗布ヲ可トシ、若クハ五百倍乃至百倍昇汞水ヲ塗布ス、合嗽料トシテハ一萬倍過滿侘酸加里水ヲ好ム

第二期ニハ全身驅微法ニ兼テテ、局處療法トシテクローム酸腐蝕ヲ行ヒ、或ハ一乃至二%昇汞アルコホルヲ塗布スルモ可ナリ、合嗽料トシテ過滿侘酸加里、ミルラ丁幾等ヲ用フ

三期微毒ニ於テモ亦全身療法ヲ主トシ、沃剝ノ大量ヲ投ジ、傍ヲ水銀療法ヲ必要トス、局處ニハ二―十%硝酸銀ヲ塗布スルカ、若クハ強ルゴール液ヲ用ユルヲ可トス

處方

沃度

一〇

沃度加里

二・五

グリセリン

二五・〇

右爲咽頭塗布料

頑固ナル潰瘍面ハ「バクレン」ヲ以テ燒灼シ、其後メントール油ヲ塗布ス  
凡テ各期ヲ通シ有效ナルハ「サルプルサン」ニシテ殊ニ其靜脈内注射ノ可良ナル  
ハ鼻微毒條下ニ説ケルガ如シ

咽頭癩

五 癩 Lepra

咽頭癩ハ主トシテ結節ノ形態ヲ以テ發現シ、麻痺癩トシテ來ルコト尠キガ如シ、  
而シテ氣道粘膜ヲ侵襲スル順序トシテハ先ヅ鼻粘膜ヲ侵シ、次デ咽頭ニ現ハレ、其  
喉頭ニ來ルコト最モ遲シ

本症ハ初メ軟口蓋ニ赤色ノ小斑ヲ生ジ、其境界判然タリ、其經過ニ從ヒ肥厚シ、且  
ツ其色暗赤又ハ灰白ト成ル、然レドモ往々一二週ノ後ニ各斑ハ融合シテ、咽頭粘膜  
ノ瀰漫性腫脹及發赤ヲ呈シ、分泌機能ハ著シク亢進スルニ至ル、之ヲ炎期、Entzündungsperiode  
ト云フ、次デ暫時ノ後、黃赤色ニシテ鬆疎ナル粘膜面ニ無數ノ榛實大ナル結節ヲ形成ス、之レヲ結節形成期、Knotenbildungsperiodeト稱ス、其結節ハ一部ハ蒼白  
赤色ヲ、一部ハ暗赤色ニ又或ハ黃色ヲ呈シ、初メ稍々硬ナレドモ、漸々脆軟ト成リ、粘  
膜ハ全ク知覺ヲ失ヒ、之ト共ニ分泌モ歇止ス、斯ノ如クシテ結節ハ驚クベキ大サニ

炎症期  
結成期

達スルコトアリ、又ハ小ナル結節カ口蓋縫隙ニ密接シテ帶狀ヲ呈スルアリ、口蓋粘  
膜ハ如斯病的變狀ヲ蒙ムルニモ拘ハラズ、前口蓋弓、扁桃腺及咽頭後壁ニ些ノ病徵  
ヲ示サザルコトアリ

潰瘍ハ深キ物質缺損アリテ、其面ハ蒼白或ハ赤色ヲ示シ、硬軟種々ナレドモ、凡テ  
汚穢ナル被膜ヲ有シ、惡臭ヲ放チ、其邊緣ハ常ニ銳利ナリ、而シテ毎ニ深部ニ向ツテ  
進ミ、遂ニ骨質ヲ侵スニ至ル、幸ニシテ癩痕結成ヲ營ムモ、咽頭腔ノ著シキ醜形ト、從  
ツテ諸種ノ障礙トヲ貽スヲ免レズ

自覺症ハ第一期ニ於テハ分泌過多及頭痛ヲ訴ヘ、結節期ニ至リ口腔及咽頭ノ著  
シキ乾燥ヲ感ジ、之ト共ニ完全ナル知覺鈍麻ヲ覺エ、又往々激シキ嚥下痛アリ

疾患ノ鼻腔及咽頭ニ初マルトキハ診斷ハ極メテ難ク、急性口峽炎、梅毒、結核等ト  
誤マルコトアリ、然レドモ多クハ已ニ皮膚癩ヲ有スルト、結節並ビニ浸潤面ノ知覺  
鈍麻アルト、及ビ特異ノ暗赤色ヲ呈スルトヲ以テ之ヲ斷定スルヲ得ベシ、又細菌ヲ  
證明スレバ愈々確實ナルモ、鼻腔内分泌物ニ比シテ其陽性ナルコト尠シ

療法 トシテハ特異ナルモノ無ク、大嵐子油、サリチール酸曹達大量ノ内用ノ  
應用ハ、一般癩治療ニ於ケルト等シク、其他口腔ノ清淨及潰瘍面ノ燒灼法等ニ過ギ  
ズ、而シテ豫防隔離ハ之ヲ忘ル可ラズトス

診斷

療法

硬化症

六 硬化症 Skleroma

本邦ニ於テ未ダ其報告ヲ聞カズ、其發來スルヤ鼻腔ヨリ鼻咽腔ニ蔓延シ、豌豆大ヨリ棗實大ノ結節ヲ現ハス、軟口蓋咽頭側壁等ニハ廣キ浸潤面ヲ呈シ、遂ニハ固有ノ萎縮ヲ來シ、咽頭ノ變形ヲ招來ス、歐洲大陸ニテモ地方性疾患タリ

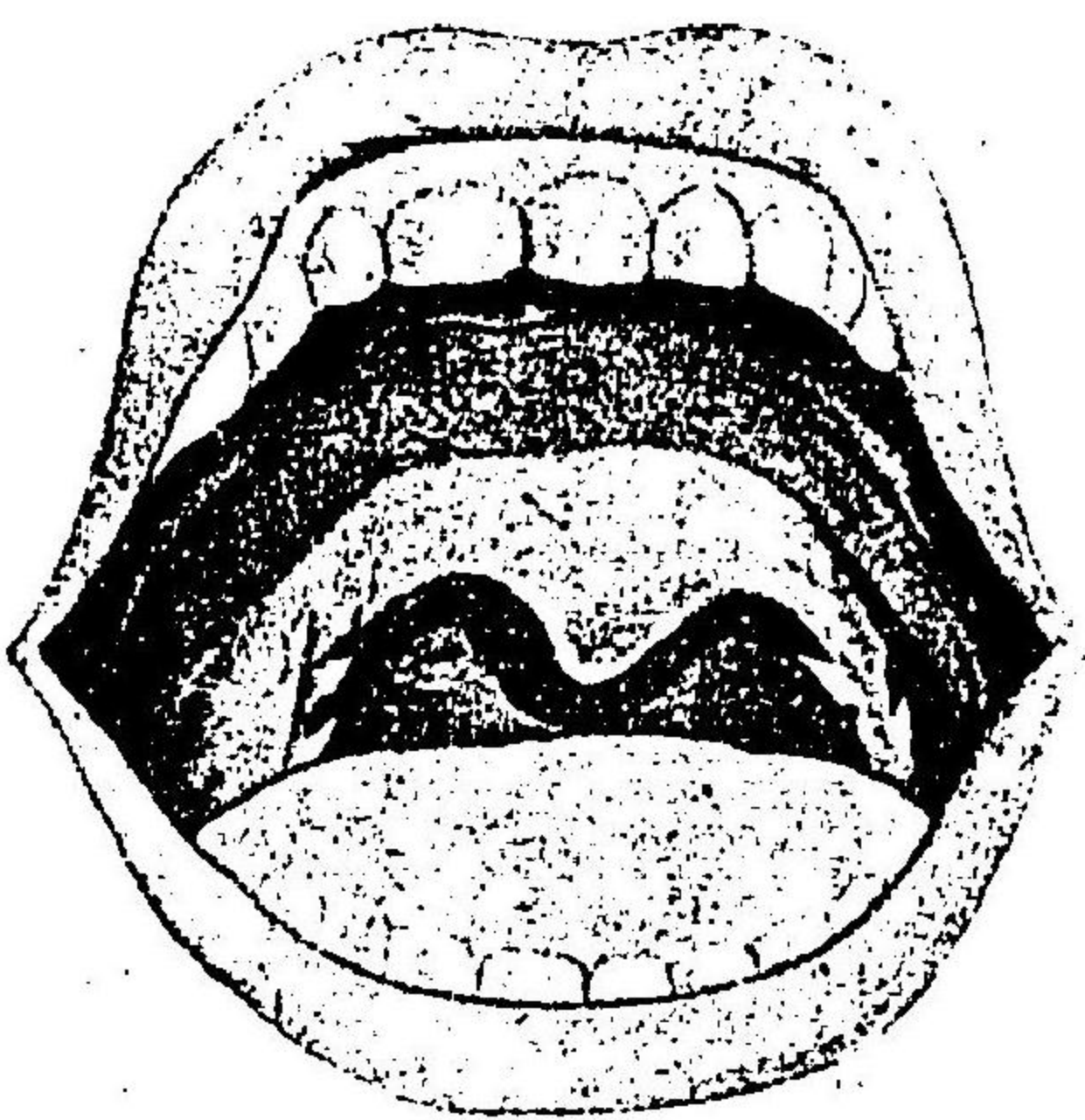
咽頭絲狀菌病

第六節 咽頭絲狀菌病 Pharyngomycosis leptothrica.

咽頭角化症

ベ、フレンケルニ依テ報告セラレタル寄生性咽頭疾患ニシテ、主ニ口蓋扁桃腺及舌根部ニ發シ、帶黃灰白色ノ角樣贅腫ヲ形成スルヲ以テ特異トス、故ニ咽頭角化症 Hyperkeratosis pharyngis ノ名アリ、ジ、レ、ブ、ト、トリ、キ、ス、説ヲ否定シ、其ハ異常角化セル扁桃腺窩上皮ニ寄生發育セルニ過ギズトシ、角化性咽頭炎ナル名稱ヲ附セリ、然レドモ上皮ノ異常角化ハ、レ、ブ、ト、トリ、キ、ス、ヲ證明スル所ナラザレバ、之ヲ認ムルコト能ハザルヲ以テ、予ハ、ベ、リ、ン、グ、ノ如ク、咽頭絲狀菌症ト稱スルヲ至當ナリト信ズ

第四百十四圖



咽頭絲狀菌病

本症ハ多ク幼年又ハ中年ノ女性ヲ侵シ、無熱ニシテ慢性ニ經過ス、自覺徵候ハ極メテ輕微ニシテ、痒痒乾

咽頭異物

第七節 異物 Fremdkörper.

燥等ノ感、或ハ咽頭ニ異物ヲ感ズルコトアリ、極メテ稀ニ食機不振及不眠等ノ神經症ヲ呈シ、其好發部位ハ既ニ述ベタルガ如ク、口蓋及舌根扁桃腺ニシテ、咽頭ノ孤立濾胞、咽頭扁桃腺等ニ現ハルルハ稀ナリ、即扁桃腺窩ニ一致シテ、白色又ハ灰白色棘狀ノ凝著物アリ、之ニ觸ルルニ角質ノ如シ、病症ハ極メテ頑固ナリ

療法

ハ防腐性合嗽料ヲ用ヒ、扁桃腺ノ肥大セルモノハ之ヲ切除シ、無水酒精ヲ塗布ス、ローゼンベルクニ從ヘバ、本病ノ男子ヨリモ婦人ニ發來スルコトノ多キハ其喫煙セザルガ爲メニ非ズヤト云ヘリ

爾他ノ寄生性疾患ニ就テハ口腔諸病條下ニ述ベタルヲ見ヨ

小兒ノ箸、鉛筆、玩具等ヲ銜ミテ倒ルレバ、殆ンド毎常軟口蓋ヲ損傷シ、殊ニ縫隙ヲ傷クルコト多シ、而シテ如斯物質ノ咽頭ニ刺入セルトキハ、之ヲ異物ト稱シテ可ナリ、日常吾人ノ最モ多ク遭遇スル咽頭異物ハ魚骨ニシテ、之ニ次デ針、義齒及菜莖等又往々咽頭内異物ト成ル

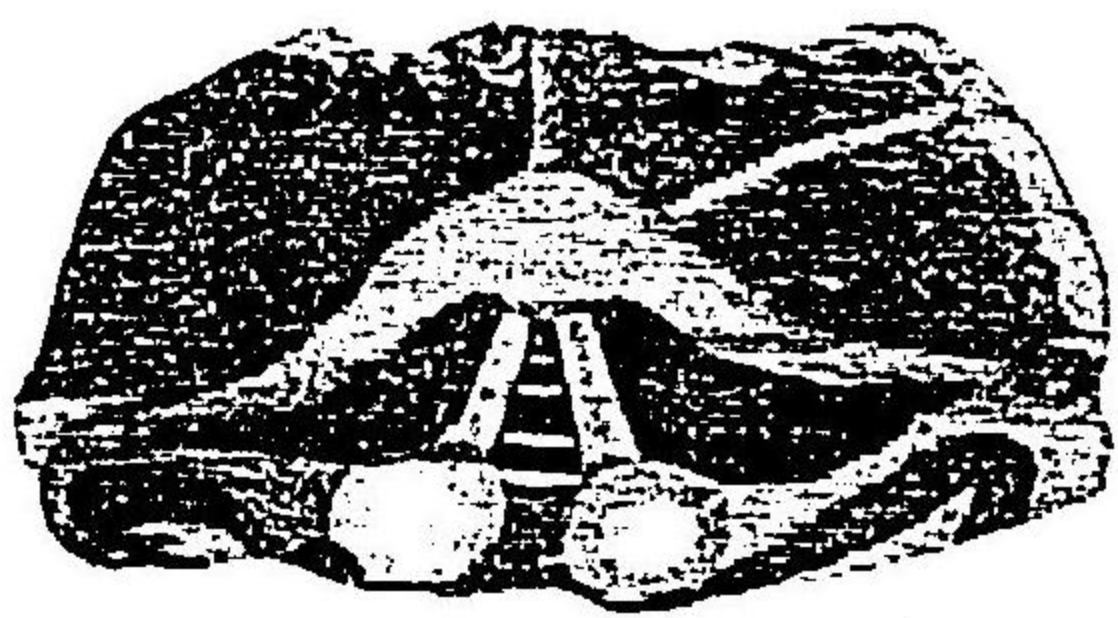
鼻内ニ進入セル異物ガ咽頭ニ達スルトキハ、甚ダ過敏ナル軟口蓋後面ニ觸レ、反射的ニ鼻部咽腔ハ口部咽腔ト一時其交通ヲ遮斷セラレ、爲メニ此物質ハ異物トシテ瞬間咽腔ニ抑留セラル、其多クハ直チニ咯出セラルルモ、時ニハ誤ツテ嚥下セラレテ、食道ノ異物ト成ル、又鼻内異物ガ睡眠中咽頭ニ下レバ、此時反射機ノ減退セル



ヲ以テ、深ク氣道ニ吸入セララルコト無キニ非ズ  
 咽頭扁桃腺ノ切除片モ咽頭異物トシテ止マルコトアリ、其他裁縫女工ノ針ヲ銜  
 ミ、大工ノ釘ヲ口ニシテ從業セルモノガ、突然驚愕等ノ爲メニ深吸氣ヲ營ミ、咽頭  
 ニ嵌入スルコトアリ、或ハ食片ノ舌會厭窩ニ、蠅蟲ノ嘔吐ニ依テ、咽頭ニ止マル等皆  
 ナ之レ咽頭ノ異物ト稱スルヲ得ベシ

異物ノ停留スル部位ハ、各物體ニ依リテ多少、異ナリテ、魚骨等ノ如キ尖銳ナル小  
 片ハ、扁桃腺及後口蓋弓ノ部ニ刺入シ、小ナル塊狀異物ハ主トシテ舌會厭窩及梨子  
 狀窩ニ嵌在シ、大ナルモノハ食道及喉頭入口ニ跨  
 リテ占位シ、窒息ヲ招クコトアリ、而シテ銳利ナル  
 異物ハ刺痛ヲ起スヲ常トスルモ、往々其占位ヲ錯  
 覺スルコトアルヲ以テ、之ニ依リ異物ノ存在ヲ定  
 ムルコト能ハズ、例之バ疼痛ノ訴フル所ハ鼻咽腔  
 ニ於テスルニ、遙ニ下方ニ異物ノ嵌在スルガ如キ  
 コトアリ、又異物ノ既ニ摘除セラレ得タルニモ拘  
 ハラズ、頻リニ疼痛ヲ訴フルコト屢々ナリ、之ヲ後  
 覺 Nachempfindung ト云フ、極メテ稀ニ咽頭ノ異物ニ依テ血管ヲ損傷シ、大出血ヲ來シ  
 又ハ創傷傳染ヲ起シテ蜂窩織炎ニ陥キルコトアリ  
 之ヲ診斷スルニハ視觸法ヲ兼行シ、細微ナル異物ハ舌會厭窩、梨子狀窩、喉頭入口

圖一十四百第



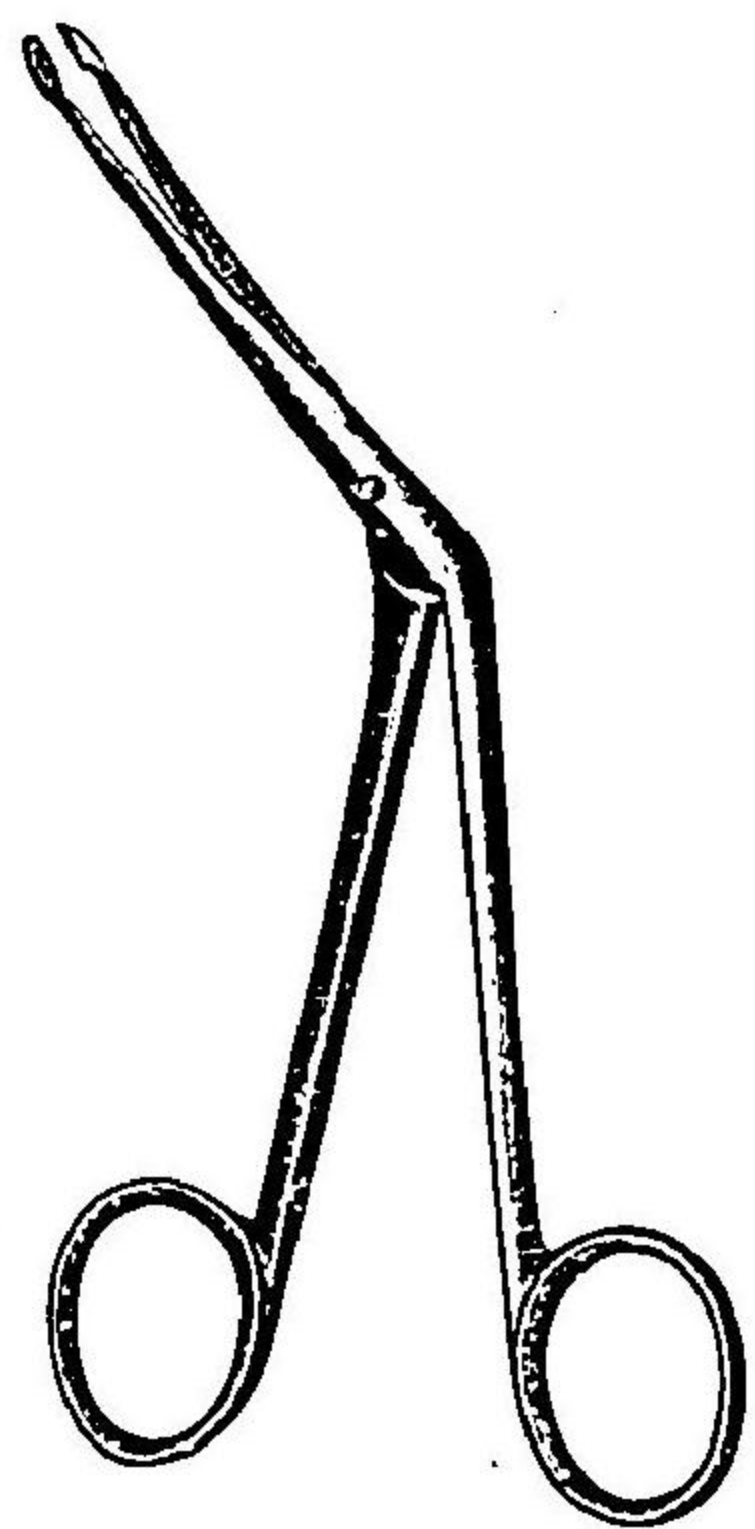
物異ノ窩厭舌左

鼻咽腔等ヲ精査シ、喉部咽頭ハアイケン法ニ由リテ之ヲ精査スルヲ可トス

治療法 ハ扁桃

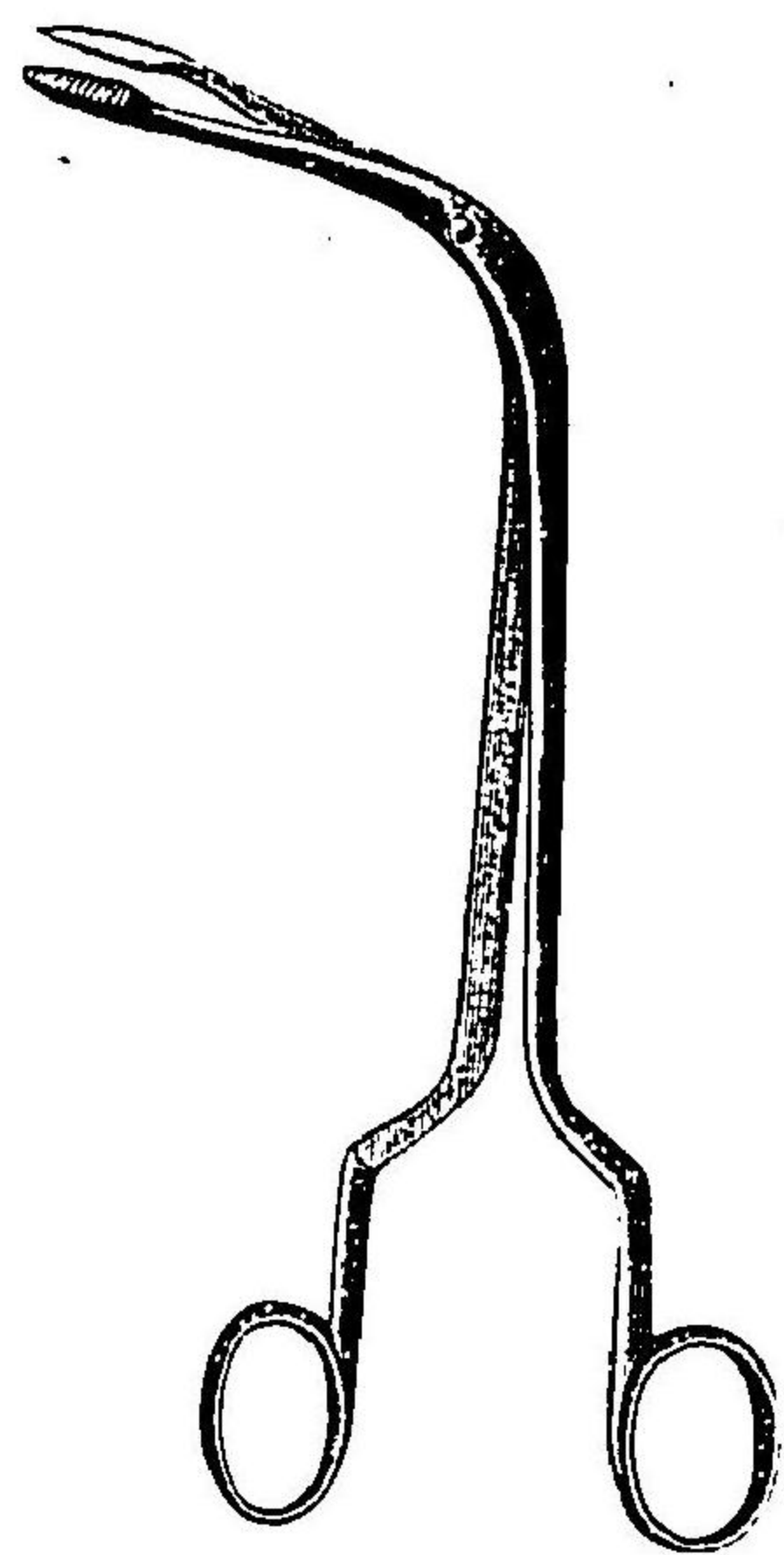
腺ニ刺入セル魚骨ハ  
 ハルトマンノ鉗子ヲ  
 用フレバ其摘除極メ  
 テ容易ナレドモ、ピン  
 セットニテハ却テ困  
 難ナリ、其他或ハ咽頭  
 頭鉗子ヲ用ユ、固ヨリ  
 異物ノ種類及固著ノ  
 程度等ヲ考ヘ、若シ窒  
 息ノ危険アレバ直チ  
 ニ氣管ヲ切開シ、咽頭  
 深部ニ固ク嵌入セル  
 モノハ、咽頭切開術若

圖二十四百第



子鉗物異式シマトルハ  
ノモルナ細微キ如ノ片骨魚  
(リナ便ニル提捕ヲ)

圖三十四百第



子鉗物異咽式ルルテス  
(ス適ニルフ提ヲノモルナ大)

クハ食道切開術ニヨリテ之ヲ除去ス、是等術法ハ後篇各其條下ニ詳記セリ、後療法  
 トシテハ氷水ノ嚥下、流動食等ヲ命ジ傍ラ含嗽劑ヲ投ズ

咽頭腫瘍

「定型性後鼻腔ポリープ」

第八節 腫瘍 Geschwülste

一 定型の後鼻竇「ポリープ」又鼻咽腔纖維腫

Typische Nasenrachenpolypen. s. Nasenrachenfibrome.

後頭骨ノ基礎タル纖維軟骨膜ニ生ジ、咽頭天蓋ノ前部ヨリ下方ニ向ツテ進ミ鼻腔及口部咽頭ニ増大スルニ至ル、即頭蓋底纖維腫ト稱スルモノニシテ、彼ノ鼻茸ニシテ後鼻腔ニ垂下セルモノトハ全然別種ニ屬ス

本症ハ主トシテ若年者ヲ犯シ、十五歳乃至二十歳ノ間ニ發スルコト多ク、其好占位ハ蝴蝶後頭縫隙及蝴蝶骨體ノ骨膜等ニ在リ、而シテ之ト多少其趣ヲ異ニセルハ上顎骨ノ後方翼狀口蓋窩ヨリ發生シテ、口蓋鉛直部ヲ侵蝕シ、進ンデ鼻腔ニ入り、遂ニ顎竇ニ達スルモノ、及ビ上顎骨ノ後部ヲ繞リテ、顴骨弓及顛額窩ノ下方ニ於テ外面ニ現ハルル纖維腫等ハ茲ニ之ヲ編入セズ

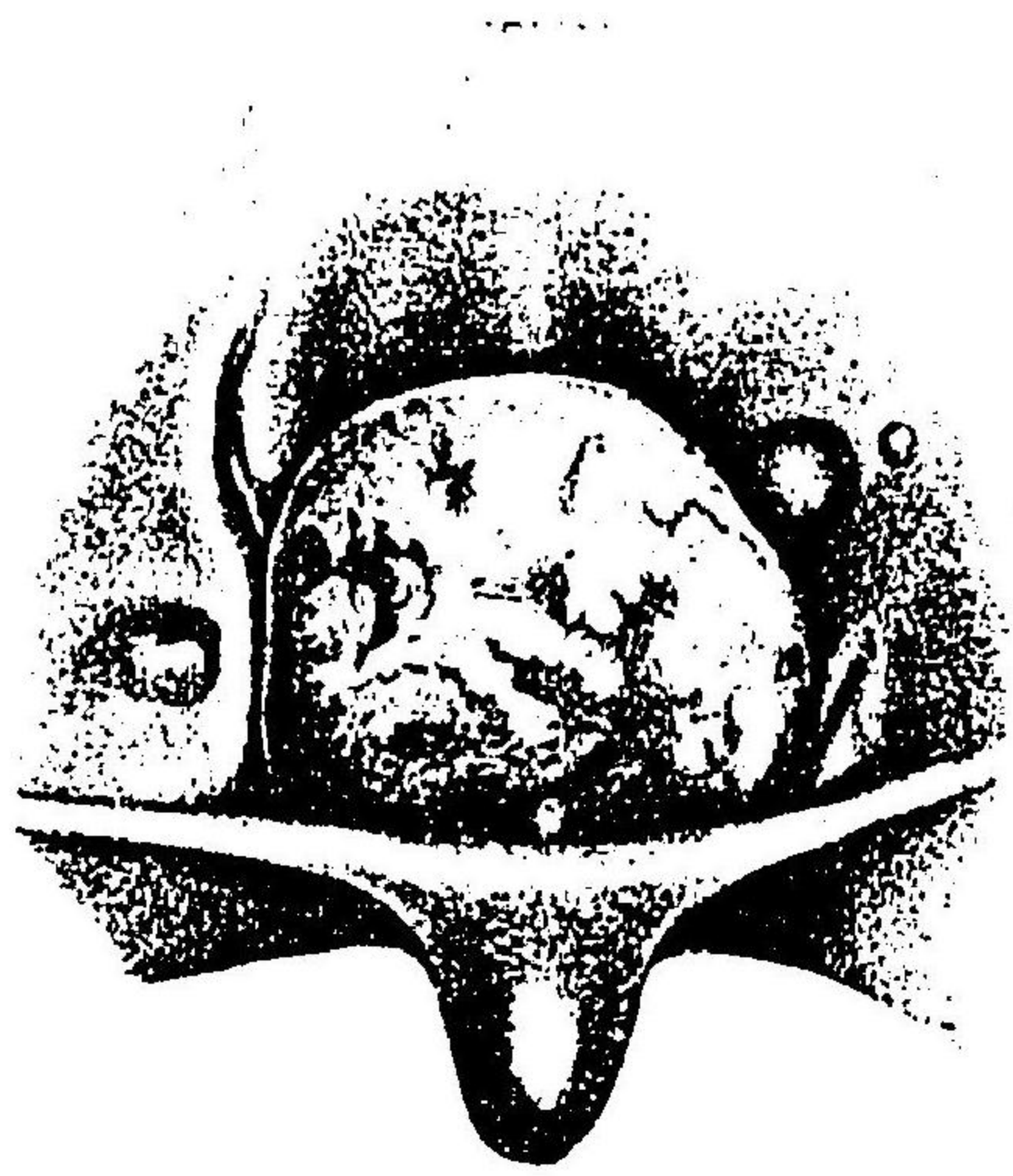
組織的ニハ緻密ナル結締織束、紡錘狀細胞及其間ニ散在セル圓形細胞等ヨリ成リ、而シテ此腫瘍ハ決シテ轉移セザルコトト、及ビ其組織ノ構造トヨリ論ズルトキハ、惡性腫瘍ト見做ス能ハザルモ、常ニ發育進行シテ止マザルト、又再發シ易ク、或ハ附近ノ組織ヲ破壞スルコト等ハ自カラ惡性ノモノト異ナル所ナシトス、然レドモ患者ノ二十五歳ヲ超ユルニ至ラハ本腫瘍ハ自カラ萎縮退行スルコト多シ

徵候及診斷

徵候及診斷

此腫瘍ハ初メ徐々ニ現ハレ、一定度ノ大サニ達スルマデハ何

第四百四十四圖



「定型性後鼻腔」腔

等ノ自發症ヲ呈ハサズ、稍ヤ發育セルモノハ先ヅ鼻呼吸障礙ヲ起シ、患者ハ專ラ口呼吸ノミヲ營ミ、壅塞性鼻聲ヲ放チ、咽頭ハ乾燥シ、鼻汁分泌ハ過多ト成ル、又聽器ノ方側ニハ歐氏管咽頭口ノ閉塞セララルヲ以テ難聽、耳鳴等ヲ來タシ、其強ク増大セルモノハ諸處ノ骨質ヲ破壞シテ進ミ、頰部、顛額部等ニ膨隆シ、又眼球突出ヲ起シ、腦症狀ニハ眩暈不眠及視力障礙等ヲ呈ス

前鼻鏡検査ニテハ之ヲ確定シ難キモ、後鼻検査ヲ行フトキハ、赤色圓形ナル腫瘍ヲ以テ充塞セラレ、而シテ其面ハ稍々平坦ニシテ處々糜爛セリ

此腫瘍ハ已ニ述ベタルガ如ク所謂假性後鼻腔茸腫 Pseudochonai polypen ト稱スルモノト嚴正ニ區別スルヲ必要トス、蓋シ其病理及ビ治術等ニ大ナル徑庭アルヲ以テナリ、即チ假性後鼻腔茸ハ其硬度極メテ柔軟膠樣ニシテ、純然タル粘液茸腫ノ本態ヲ示セルモ、眞性後鼻腔茸ハ之ニ反シテ、結締織及血管ノ増殖盛ナルヲ以テ硬ク、且ツ出血シ易シ、然レドモ肉腫

療法

トハ往々鑑別シ難キコトアルヲ以テ顯微鏡検査ニ俟タザルベカラズ  
療法 姑息法ナレドモ鼻口腔等ヨリ進ミテ腫瘍ノ一部ヲ切除スルヲ以テ安  
全ナリトス根治的ニ行ハント欲スレバ其準備手術トシテ上顎骨切除術ヲ行ヒテ  
腫瘍ニ達セザル可ラズト雖モ而モ腦底骨間ニ介在スル部分ハ之ヲ摘除スル能ハ  
ズ電氣療法ヲ推奨スルモノアレドモ效果無キガ如シ

其他良性ニ算スベキ咽頭腫瘍ニハ乳頭腫、血管腫、脂肪腫、囊腫、粘液腫等アリテ其  
發生ノ部位及擴延ノ狀況ニ依リテハ或ハ不良ノ轉歸ヲ取ルコト無キニ非ズ

肉腫及癌腫

二 肉腫及癌腫 Sarcom und Carcinom.

是等ノ惡性腫瘍ハ扁桃腺ニ好發シ稀ニハ深部咽頭即梨子狀囊及喉頭壁ニモ來  
ル又舌、舌骨、喉頭及頸部淋巴腺等ヨリ發セル惡性腫瘍ノ咽頭ニ現出スルコト亦尠  
シトセズ

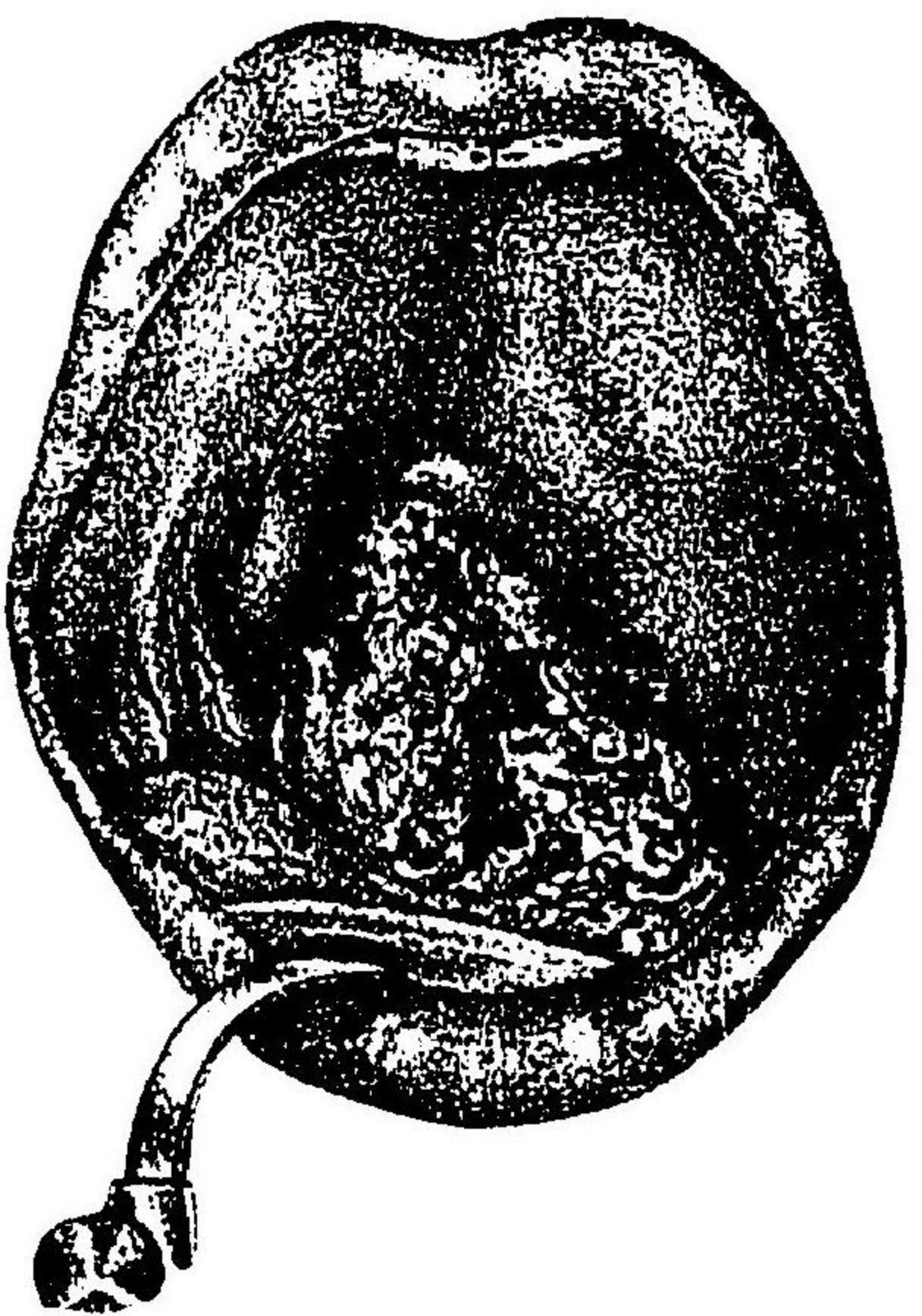
徵候及經過

徵候及經過 其初期ニ於テ何等自覺症ヲ呈セザルニ早ク已ニ頸腺ノ腫脹  
ヲ示スヲ例規トス時トシテハ言語及嚥下障礙ヲ惹起シ漸次増大シテ激シキ疼痛  
ヲ起スニ至ル又破壊ヲ始ムルニ及ンデハ口臭ヲ訴ヘ患者ハ腐敗性物質ヲ嚥下シ  
攝食ハ益々困難ト成リ遂ニ羸瘦シテ全身衰弱ノ爲メニ斃ル

診斷

診斷 肉腫ハ主トシテ腫瘤形狀ヲ保有スルモノナルニ癌腫ニ於テハ常ニ  
破壊ノ傾向ヲ示シ好ンデ深部ニ進ミ淋巴腺ハ早期ヨリ其浸淫ヲ蒙ルモ局處處

第四百五十五圖



左側扁桃腺癌腫

見ハ之ニ反シテ輕微ナル  
ヲ常トス肉腫ハ多少平坦  
ナル表面ヲ現ハシ之ニ觸  
ルルニ癌腫ニ比スレバ柔  
軟ナリ  
癌腫ノ已ニ潰瘍ヲ形成  
スルモノハ往々護膜腫若  
クハ結核ト誤マルコトア  
リ其他ノ鑑別ニ就テハ尙

ホ前章ヲ参照スベシ

療法

療法 内用トシテ砒石劑ヲ投ジ其初期ニ於テ腫瘍ノ全剔出ヲ行フヲ法トス  
ルモ豫後ハ多ク不良ニシテ再發ヲ免カレズ近時外山ハ京都臨牀ニ於テ扁桃腺肉  
腫ニX放射線ヲ應用シ著效ヲ收メ得タル一例ヲ報告セリ

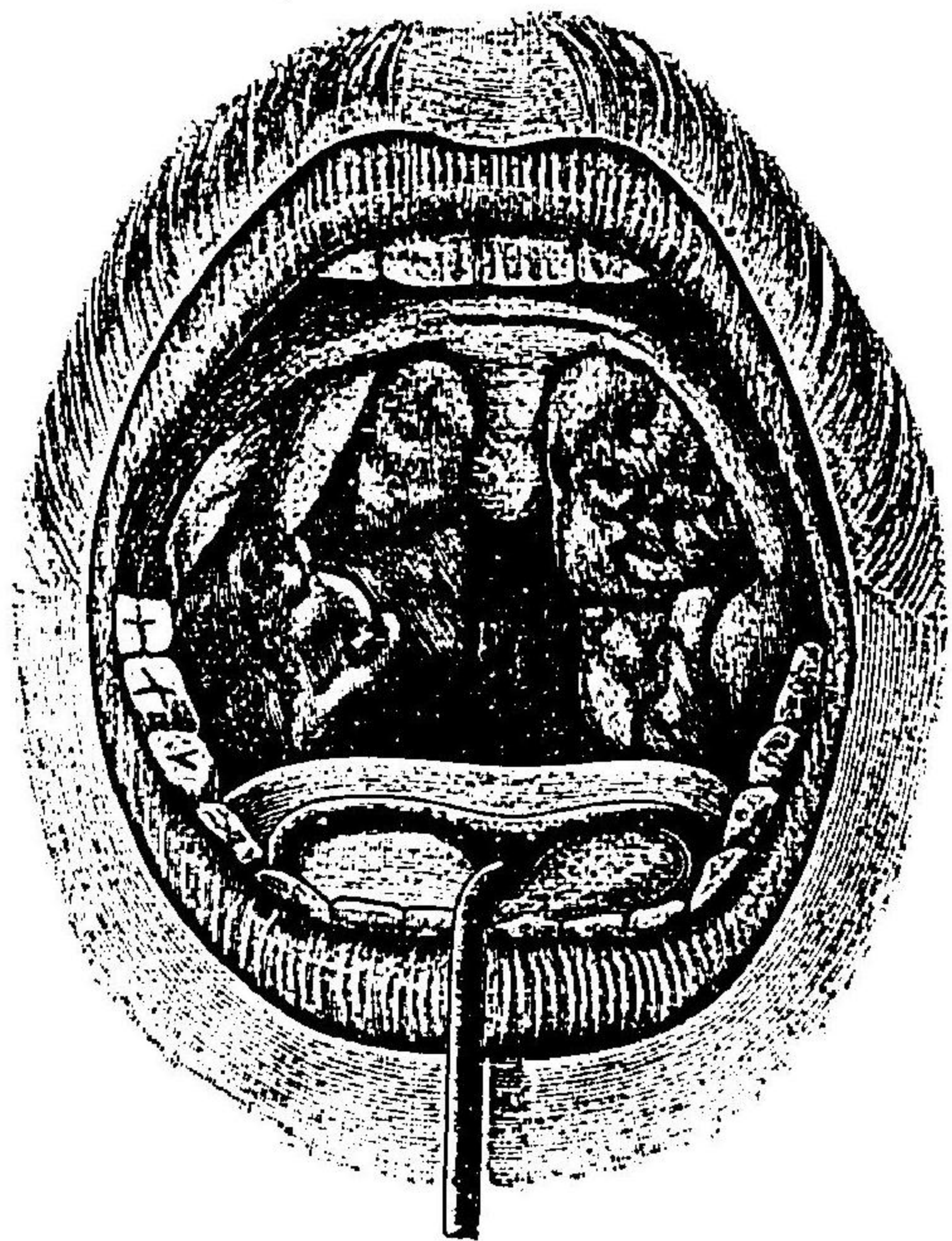
淋巴肉腫

三 淋巴肉腫又惡性淋巴腫 Lymphosarkom. s.

Malignes Lymphom.

淋巴肉腫ハ原發地ハ咽頭ノ淋巴裝置即扁桃腺及淋巴濾胞ナリ就中主トシテ咽  
頭扁桃腺ヨリ發システルクニ從ヘバ又懸壺垂、口蓋弓及會厭軟骨ヨリモ生ズト云

第四百六十六圖



扁桃腺淋巴肉腫

へリ、而シテ淋巴腺、腸脾等ノ淋巴器官ニ轉移スルヲ以テ特點トス、組織的ニハ微細ナル網様結締組織ニ包埋セララル小圓形細胞、即リンフocyteヲシヨリ成立シ、只淋巴濾胞ノ整然タラザルヲ以テ其徵ト爲ス、徵候トシテハ早期ヨリ巴ニ頸部淋巴腺ノ腫脹ヲ見、口蓋弓若クハ軟口蓋縁ニ硝子様色澤ヲ有スル浸潤ヲ起シ、周圍ニ蔓延ス

治療法ハ砒石劑ノ内用ヲ主トシ、又X光線及ラヂウムノ放射ヲ推奨シ、或ハ組織ヲ固定スベキ種々ノ藥劑ヲ注射スルモノアリ

第九節 神經性疾患 Nervöse Störungen.

一 知覺障礙 Störungen der Sensibilität.

一 知覺麻痺 Anästhesie.

咽頭神經性疾患 知覺障礙

知覺麻痺ハ「ヒステリ」ニ隨伴シ來リ、又爾他中樞性原因トシテハ皮質下ニ於ケル出血、腫瘍、護膜腫多發硬化症、及假性竝ニ眞性延髓球麻痺、脊髓空洞症等ヲ舉グベク、之ニ反シテ脊髓癆及實布埤里ノ際ニハ末梢型ニ於テ發現シ、其他コカイン等諸種麻痺藥ニ由ルモノハ極メテ一時性ノ知覺麻痺ヲ起ス、而シテ單ニ口蓋ノ知覺麻痺ナルトキハ患者ハ何等ノ苦痛ヲモ感ゼザレドモ、其喉頭入口ニ存スルトキハ、流動食物及小ナル固形食片ハ喉頭ニ迷入シテ咳嗽ヲ招致シ、其咯出セラレザルノ際ハ、爲ニ嚥下肺炎若クハ窒息ニ陥ルコトアリ

二 知覺過敏 Hyperästhesie.

原因トシテハ酒煙草ノ濫用過熱ノ飲食物及職業上強イテ食餌ヲ避シク攝取スル等ノ慣癖ヲ舉クベク、中樞性原因トシテハ「ヒステリ」及腦膜炎等ナリ、而シテ同時ニ皮膚ノ知覺過敏ヲモ伴フ、甚シキハ患者疼痛ヲ訴ヘ、之ヲ胸骨上部ノ後面ニ感ズルコト多ク、殊ニ空嚥下ニ於テ著シ

三 知覺異常 Parästhesie.

咽頭ノ知覺異常ハ吾人ノ臨牀上ニ最モ多ク遭遇スル病徵ニシテ、又最モ注意スベキモノナリ、主トシテ「ヒステリ」及癆病者ニ現ハレ、所謂「ヒステリ」球ト稱スルモノ是レナリ、又慢性咽頭加答兒及舌扁桃腺肥大等ニモ之ヲ見ル、又月經閉止期ニ發スルコト多キヲ忘ル可ラズ、而シテ往々患者ノ教育程度ト其職業トニ從ヒテ此異常ヲ種々ニ形容スルコトアリ例之ハ裁縫女工ハ頸部ニ糸又ハ針ノ存在セル

知覺過敏

知覺異常

感ヲ、獸皮職工ハ毛ノ存在セル感ヲ訴フルガ如シ、多クハ輕壓ノ感、刺スガ如キ感、灼熱ノ感等ヲ訴ヘ、不安ナル者又ハ憂鬱者ハ爲ニ非常ナル恐怖心ヲ起シ、其知己ニ若シ喉頭結核ノ患者アルトキハ、自己ノ此異常感ヲ以テ直チニ之ニ比シ、醫士ノ之ヲ否定スルモ容易ニ信ゼザルモノアリ又嘗テ生殖器傳染ヲ受ケシモノハ、常ニ茲ニ微毒疾患ノ占位セルモノナリト妄信スルモノモアリ

運動障礙

一 運動障礙 Störungen der Motilität

1. 咽頭麻痺 Die Schlundlähmung.

咽頭麻痺ハ實地上最モ必要ナル疾患ニシテ、之ニハ完、全、麻痺 Paralyse ト不、全、麻痺 Paresis アリ、又其一側カ或ハ兩側ヲ共ニ犯スモノ、等ノ差アリ

原因トシテハ其中樞性ニ屬スルモノハ腦出血、其腫瘍、延髓球麻痺、筋萎縮性側索硬化症等ヲ主トシ或ハ腦底微毒ガ副神經及舌咽神經ノ穿孔部ヲ侵セルトキノ如シ、又末梢性麻痺トシテハ實布埜里ニ因スルヲ最トシ、其他インフルエンザニモ來リ、又顔面神經麻痺ノ際、膝關節及其中樞端ニ傳達障礙ノ存スルトキハ、竝ニ軟口蓋ノ不全麻痺ヲ招來ス。ケルチルハ其著書ニ於テ、此顔面神經原因說ヲ否定セルモ、暫ク諸學者ノ見解ニ從ヒ此說ヲ採レリ(ケルチル耳喉科書參照)其他軟口蓋ノ炎性機轉及浮腫ノ爲ニ麻痺ヲ來スコトアリ、即扁桃腺周圍炎ニ於ケルガ如シ、是レ器械的障礙ト見做スヲ得ベシ

咽頭痙攣

徵候 ハ麻痺ノ程度ニ依リ異ナリテ、軟口蓋ノ全麻痺ニハ口腔ト鼻咽腔トノ閉鎖ヲ營爲スルコト能ハザルヲ以テ、音聲ハ著シク開放性鼻調ヲ帶ビ、嚥下運動ヲ營ムノ際液體ハ鼻内ニ逆流シ、從ツテ含嗽、吹笛及小兒ニハ哺乳等ヲ障礙ス、歐氏管咽頭端ニ分佈セル神經ノ麻痺ヲ起ストキハ歐氏管ハ閉塞シ、鼓室ニ於ケル空氣ハ稀釋ト成リ、中耳ニ漿液性滲漏ヲ起スコトハ、已ニ耳科學ニテ說ケルガ如シ、咽頭處見ニテ特有ナルハ、偏側ノ麻痺ニアリテハ軟口蓋ハ不齊對ニシテ、患側ハ深く下垂シ稍ヤ前方ニ出テ、從ツテ口蓋弓ハ屈曲セル線ヲ劃キ、發聲時ニ懸壘垂ハ健側ニ舉上セラル、又兩側ノ麻痺ニハ口蓋帆ハ弛緩シテ、垂シ、發聲時ニ舉上スルコト能ハズ、咽頭括約筋麻痺ニアリテハ食片ハ舌會厭窩ニ停留ス

豫後ハ末梢性及微毒性ヒ、ステリー性等ノモノハ治スルモ、中樞性原因ニ伴フモノハ不良ナリ

治療法 其腦微毒ニ因ルモノハ嚴正ナル驅微法ヲ施シ、實布埜里後ノモノハ全身營養療法ト共ニ接電ヲ行ヒ、陽極ヲ頂部ニ陰極ヲ局部ニ貼シ、内用トシテ沃剝ストリヒニン等ヲ應用スヘシ

一 咽頭痙攣 Schlundkrampf.

之ニ緊張性痙攣及間代性痙攣ノ二アリ、又一部整調的攣縮ヲ現ハシ屢々、總咽頭筋及近隣筋群ヲ侵ス

原因トシテハ歐氏管、カテーテルヲ使用シ、俄然之ヲ起スコトアリ、又急速ニ攝食

スルガ爲メ、咽頭及食道筋ノ痙攣ヲ起スコトアリ、或ハ側咽頭炎若クハ舌扁桃腺肥大等ノ病的粘膜炎ニ精神亢奮セルノ際之ヲ惹起シ、又中樞性ニハヒステリー及狂犬病等ニ來リ、殊ニ後者ニハ緊張性痙攣ハ嚙下ヲ試ミント欲スルトキニ反射性ニ發現ス、間代性痙攣ハ三叉神經刺戟ニ仍テ惹起セラレコト稀ナラズ

微候トシテハ緊張性痙攣状態ニアリテハ高度ノ嚙下困難ヲ起シ、食塊ハ咽頭竝ニ食道ニ停滞シ、爲メニ胸骨後方ニ疼痛ヲ感ズ、且ツ屢々食餌ヲ逆流セシム、軟口蓋ノ緊張性痙攣ニ際シテハ其咽頭後壁ニ固著シ、及ビ歐氏管ハ舉上セラレテ哆開シ爲ニ獨聽ヲ招來ス、此項ハ耳科學ニ於テ述ベタリ、間代性痙攣ニアリテハ軟口蓋ハ斷續的ニ攣縮シ、歐氏管ノ閉塞スルト及ビ鼓膜緊張筋ノ痙攣トニヨリ、耳内ニ自他覺的雜音アリ、鼓膜ヲ視診スレバ整調的ニ其運動ヲ目撃ス

豫後ハ原因ノ如何ニ仍テ定マル  
治療法ハ原病ニ向ツテ其處置ヲ講ジ、痙攣ニハ臭素或ハ他ノ鎮痙劑ヲ投ズルノ外ナシ

### 鼻口腔咽腔科學 終

## 喉頭氣管病學

岡山醫學專門學校教授醫學士 田中文男 著

### 第一編 總論 Allgemeiner Teil.

歴史概畧 喉頭科學ガ一専門分科トシテ其獨立ヲ承認セララルルニ至リシハ、實ニ近代ノ事ニシテ殊ニチユルクチエルマーケノ喉頭鏡發明以來ノ事ニ屬ス。蓋シ其以前ニアリテモ既ニ多少ハ系統的ニ病理解剖上ヨリ研究セラレタリシモ、其診斷並ニ療法ニ關シテハ尙暗中ニ物ヲ探グルガ如キ觀アリシナリ、而シテ此際喉頭内景ヲ直チニ眼前ニ現ハシタラバトノ要求ハ何人ト雖モ痛切ニ感ゼシ所ニシテ此目的ニ向ツテ種々ノ法ヲ試ミタルモ其效無カリシニ、倫敦ノ聲樂家ガルシフ(千八百五十四年)ハ自己ノ咽頭中ニ一小反射鏡ヲ插入シ、之ヲ再ビ外方ノ鏡面ニ寫シタルニ其映像中ニ於テ甫メテ發聲ニ伴ヒテ運動スル聲唇ヲ視ルコトヲ得タリ、翌年ニ到リテ此事實ヲ公表ヒシニモ係ハラズ、遂ニ醫學者ノ注意スル所ト成ラズシテ止ミヌ。然ルニ其後貳年ヲ經テウキーンノ醫家チユルクハガルシアノ此事アリシヲ知ラズシテ、今日吾人ガ慣用セル喉頭鏡ヲ創意シ、之ヲ患者ノ咽頭ニ插入シ以テ其喉頭ヲ照寫スルコトヲ得タレドモ光源ハ日光ヲ用キシガ爲メ暗黒ナル維納ノ冬期ハ此検査ニ幸セズシテチユルクハ一先ヅ之ヲ中止セシニ其翌年ブタベスト大學教授チエルマーケハ此喉頭鏡ヲチユルクヨリ借用シ巧ミニ人工光線ヲ反射セシメ之

喉頭鏡發明

氣管枝鏡發明

ニ依リテ創メテ明カニ患者ノ喉頭内景ヲ視ルヲ得遂ニ前記ノ要求ヲ滿タシ得タリ茲ニ於テチエルマークハ翌年此喉頭裝置ヲ携エテ歐洲ヲ巡遊シ到ル處實習ヲ爲シ指示ヲ試ミ數年ニシテ其術忽チ全歐洲ニ廣ガリス。一方ニ於テチユルクハ之ヲ見テ發憤措ク能ハズチエルマークニ向ツテ其優先權ヲ爭ヒ世人ハ遂ニ兩氏ニ對シテ同等ノ偉績ヲ承認シタリシモ之ヨリ兩派各相拮抗切瑳シテ互ニ下ラズ遂ニ今日ノ喉頭科學ニ搖ギ無キ根底ヲ作ルニ至リス

食道鏡發明

斯クシテ喉頭科學ハ短日月中ニ診斷上竝ニ治療上ニ著シキ發達ヲ遂ゲシガ進步ハ之ニ止マラズシテ更ニ氣管深部ヲ直視スルノ要求ヲ産ミ曾テキルスタインノ直達鏡 (Milescope) ヲ創意セルアリ(千八百九十四年)今又キリアン(千八百九十八年)ノ氣管枝鏡ハ吾人ノ眼ト手ヲ氣管枝ニ送運川セシムルニ至リ斯學ハ更ラニ一大光輝ヲ添エヌ  
食道鏡ノ創意モ亦タ實ニ喉頭鏡ノ發明ニ負フモノニシテ創メテ一長管ヲ食道ニ插入シ以テ其内景ヲ直視セント試ミシハ實ニ喉頭學者ステコルク(千八百六十九年)ナリシナリ然レドモ之ヲ臨牀上ニ用ヒテ充分ナル效果ヲ得且一般醫家ニ於テモ其應用ノ敢テ困難ナラザルニ至ラシメシハ全クミクリツ(千八百八十年)ノ功績ニ歸セザル可ラズ(ゴットスタイン)ニヨレバステコルクハ長管ヲ插入セシモ尙反射鏡ヲ用ヒ間接的ニ食道ヲ檢セシモノニシテ創メテミクリツニヨリテ直接的ニ之ヲ試ミラレシナリトサレドブリーユニンクスニヨレバステコルクガ初メ直接的ノ檢査ヲ試ミ唯ダ間接的法ヲモ捨テザリシナリト然ルニ惜哉此善法モ今日尙未ダ外科殊ニ内科家ノ愛用スル所トナラザルガ如シサレバ須ラク此技ニ達シ以テ閑却セラレタル診斷上竝ニ治療上ノ一大缺陷ヲ補フコトハ亦吾人が任務ナルヲ知ラザル可ラス

第壹章 解剖 Anatomie.

第一節 喉頭ノ解剖 Anatomie des Kehlkopfs.

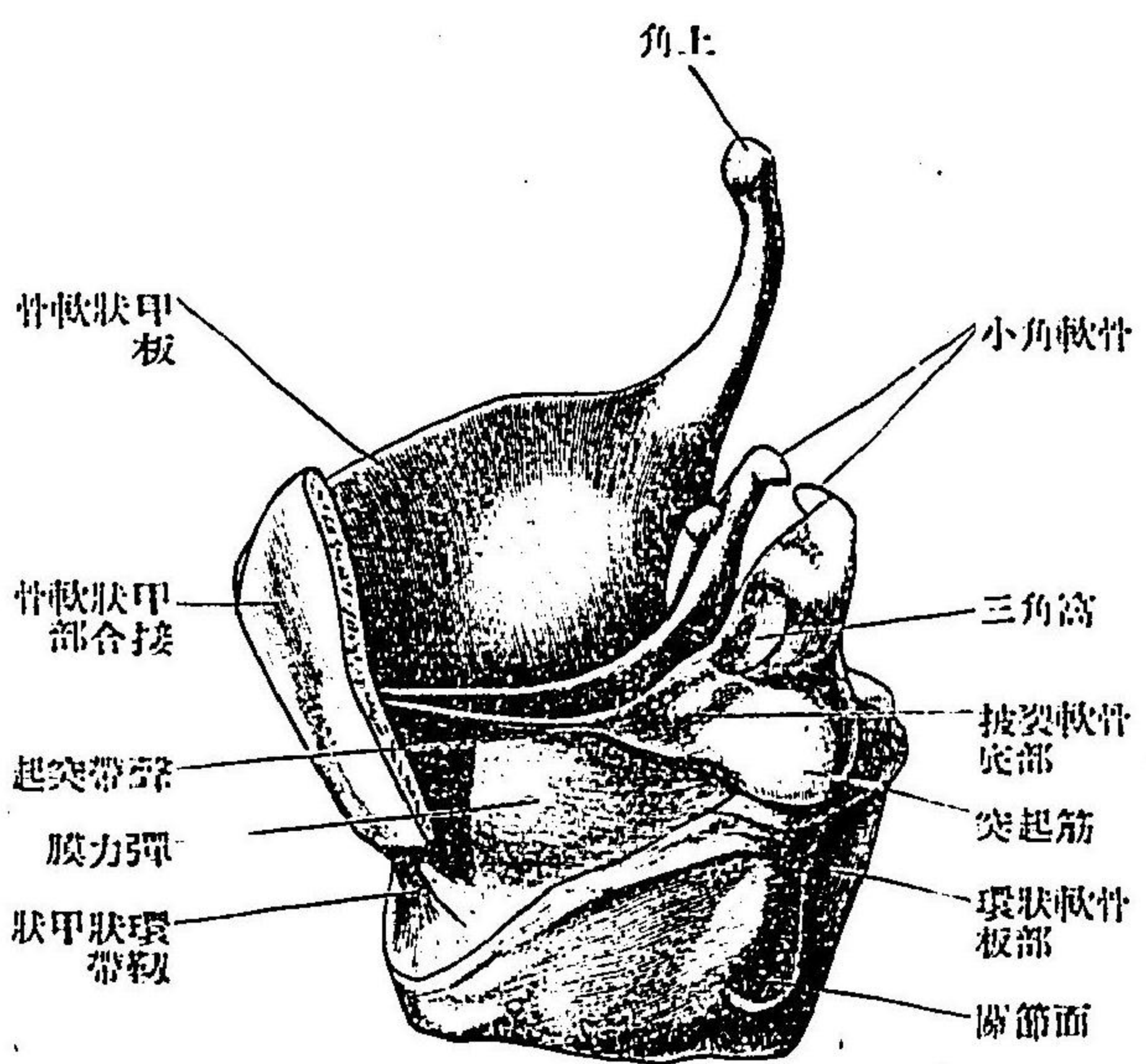
喉頭 Der Kehlkopf s. Larynx. ハ上氣道中ノ主要ナル器官ニシテ上ハ咽頭ト接シ下ハ氣管ニ連ナリ安靜ノ位置ニ於テ其上界ハ第三頸椎ノ上緣ニ其下界ハ第六頸椎ノ下緣ノ高サニ相當シ其側面ハ大部分外喉頭筋竝ニ甲状腺ヲ以テ蔽ハレ更ニ其外側ニハ頭部大血管及ビ神經幹ト相接シ唯ダ其正中部分ハ筋膜ヲ隔テテ直接ニ外皮ヲ被ムル而シテ其基梁ハ三個ノ不對軟骨竝ニ同數ノ有對軟骨ヨリ成リ是等ハ互ニ關節ヲ以テ或ハ又韌帶ニ依リテ相連結シ周圍ニ對シテモ可動性ナリトス

一 喉頭軟骨 Die Kehlkopfknorpeln.

喉頭軟骨ハ前述セルガ如ク三不對軟骨竝ニ三有對軟骨ヨリ成ル  
不對軟骨 Unpaarige Knorpeln 4  
1. 環狀軟骨 Cartilago cricoidea s. Der Ringknorpel.  
2. 甲狀軟骨 thyreoiden s. Der Schildknorpel.  
3. 會厭軟骨 epiglottica s. Der Kehildeckel.

環狀軟骨ハ其側面中央部ニ於ケル關節面ヲ以テ甲狀軟骨ノ下角ト關節シ其

圖七十四百第



帶韌其ニ並骨軟頭喉

上甲狀痕 *Incisura thyroidea*. 是ナリ、該部ハ男子ニテ殊ニ麻瘦セル者ニ在ツテハ著シク突出シ、前頭部ニ於テ一定ノ隆起ヲ作ル之ヲ喉頭隆起一名アダム林橋 *Prominentia laryngis s. Adams-pfel* ト稱ス

會厭軟骨 ハ其細長キ莖 *Petiolus* ヲ以テ上甲狀痕ノ内面直下ニ附著ス、其部ハ少シク隆起シ之ヲ會厭結節 *Tuberculum epiglotticum* ト云ヒ中ニ多數ノ粘液腺ヲ有ス之ヨリ上後方ニ位スル遊離線ハ其外形ニ種々ノ變態ヲ示シ喉頭鏡検査ノ際其視

會厭軟骨

甲狀軟骨

野ヲ妨グルモノ尠ナカラズ  
有對軟骨 *Paritige Knorpeln* トハ

1. 披裂軟骨 *Cartilago arytaenoides s. der Aryknorpel*
2. サントロニー軟骨又ハ小角軟骨 *Cartilago Santorini s. corniculata*
3. ウリスベルグ軟骨又ハ楔狀軟骨 *Cartilago Wisbergi s. cuneiformis*

披裂軟骨

ヲ總稱ス

披裂軟骨

ハ喉頭ノ官能上最モ必要ナルモノニシテ其ノ運動ニ因リテ聲門ヲ

圖八十四百第



(リヨ方後)帶韌頭喉

開閉セシム其形ハ畧ホ上部ニ尖端ヲ有スル三稜錐體ニシテ其一面ヲ内方ニ向ケ、他ノ二面ヲ側方ニ後方ニ有ス、而シテ其底部ニハ環狀軟骨ニ對スル關



筋突起

サントリニー軟骨  
ワリスベルグ軟骨

種子軟骨

披裂間軟骨

軟骨組成

喉頭靱帶

舌骨甲状靱帶

節面在リ尖端ハ上後方ニ向ヒサントリニー軟骨ト連結セリ、尙ホ此底部ニハ二個ノ突起アリ、其前内方ニ向フモノヲ聲帶突起 *Processus vocalis* ト名ケ聲帶筋並ニ聲帶ハ之ニ附著シ又後外方ニ向ヘルモノヲ筋突起 *Processus muscularis* ト稱シ後並ニ側環狀披裂筋ノ附著點ト成ル(第四百四十七圖)

サントリニー軟骨一名小角軟骨 ハ披裂軟骨ノ尖端ニ附著シ、其外側ニ於ケルワリスベルグ軟骨一名楔狀軟骨 ト共ニ喉門(喉頭入口)ノ外縁ヲ作ル披裂會脈皺襞ノ粘膜炎中ニ包裹セラレ此皺襞ノ後端ニ二個ノ小隆起ト成リテ存スルヲ見ル以上ノ軟骨ノ他ニ其存否不定ナル小軟骨アリ、一ハ披裂軟骨ノ外縁ニ或ハ又聲帶ニ現ハルルモノニシテ之ヲ

種子軟骨 *Cartilago sesamoidea*. ト稱シ他ハ兩披裂軟骨ノ間ニ來ルモノニシテ之ヲ

披裂間軟骨 *Cartilago interarytenoidea* ト名ケ

以上ノ軟骨中ニ在リテ甲状軟骨環狀軟骨及ヒ聲帶突起ヲ除キタル披裂軟骨ハ硝子様軟骨ヨリ成リ其他ハ披裂軟骨ノ聲帶突起ト共ニ網狀軟骨ナリ

### 二 喉頭靱帶 Die Kehlkopfbandern.

1. 舌骨甲状靱帶 *Ligamentum hyothyroideum*

舌骨甲状膜  
環狀甲状靱帶

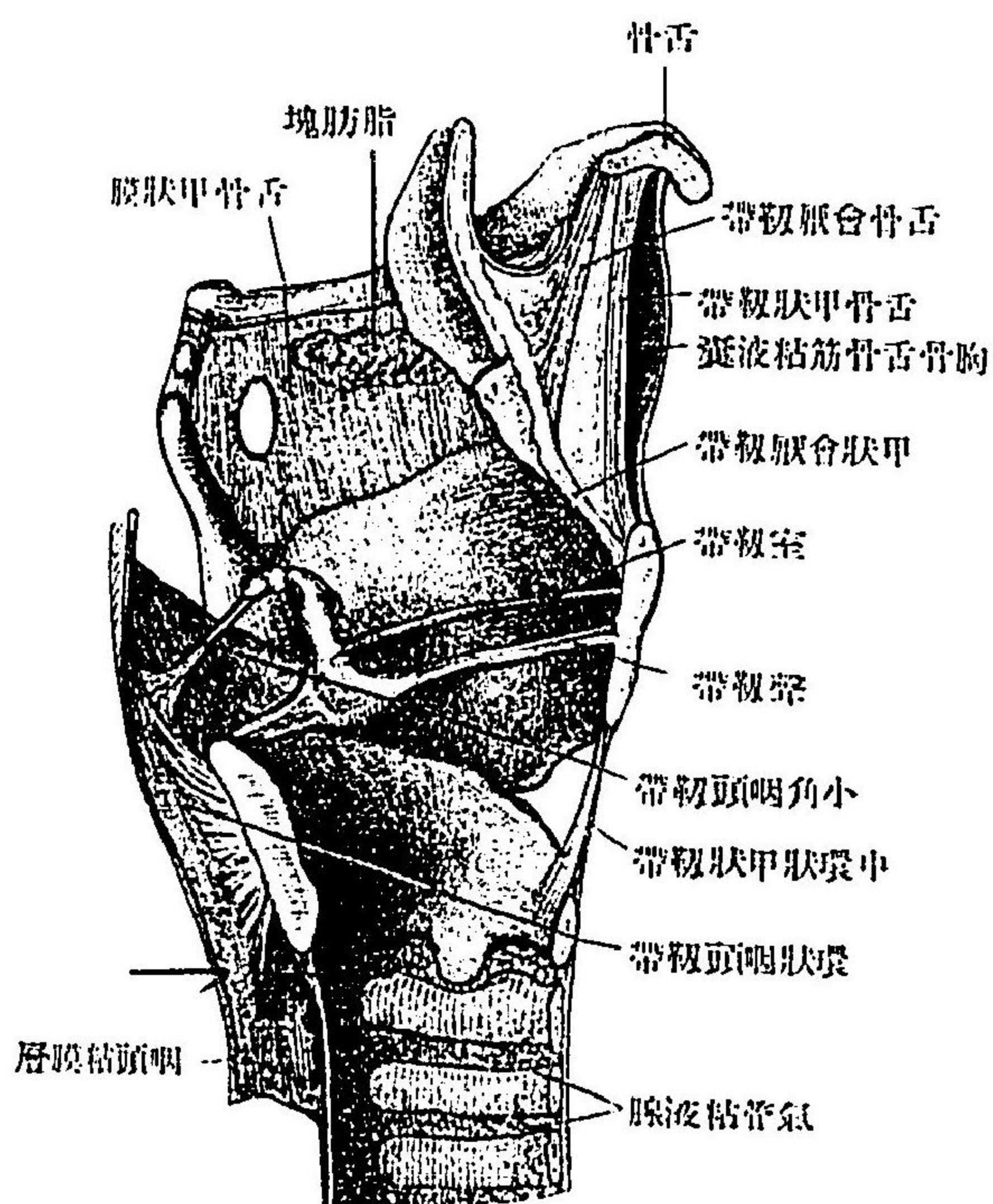
舌骨ト甲状軟骨トノ間ヲ連結スルモノニシテ其中央部ト兩端ハ特ニ強固ナルドモ中間ハ菲薄ナル膜ヲ作スニ過ギズ之ヲ舌骨甲状膜 *Membrana hyothyroidea* ト稱シ此部ハ上喉頭動脈並ニ上喉頭神經内枝ノ穿通スル處タリ

2. 環狀甲状靱帶 *Lig. cricothyroideum*.

環狀軟骨ノ前上縁ヨリ甲状軟骨ノ前下縁ニ緊張セルモノニシテ此前面ヲ横ニ

環狀氣管靱帶

第百四十九圖



(部半左ルタ見リヨ側内)帶靱頭喉

環狀甲状動脈ノ通過スルアリ、尙ホ茲ニハ殆ンド常ニ小淋巴腺ノ存在ヲ認メ且時トシテ甲状腺中葉ノ存スルコトアリ、是等ノ關係ハ、氣管切開ニ際シテ、注意ヲ要スベキ點ナリトス

3. 環狀氣管靱帶 *Lig. cricotracheale*

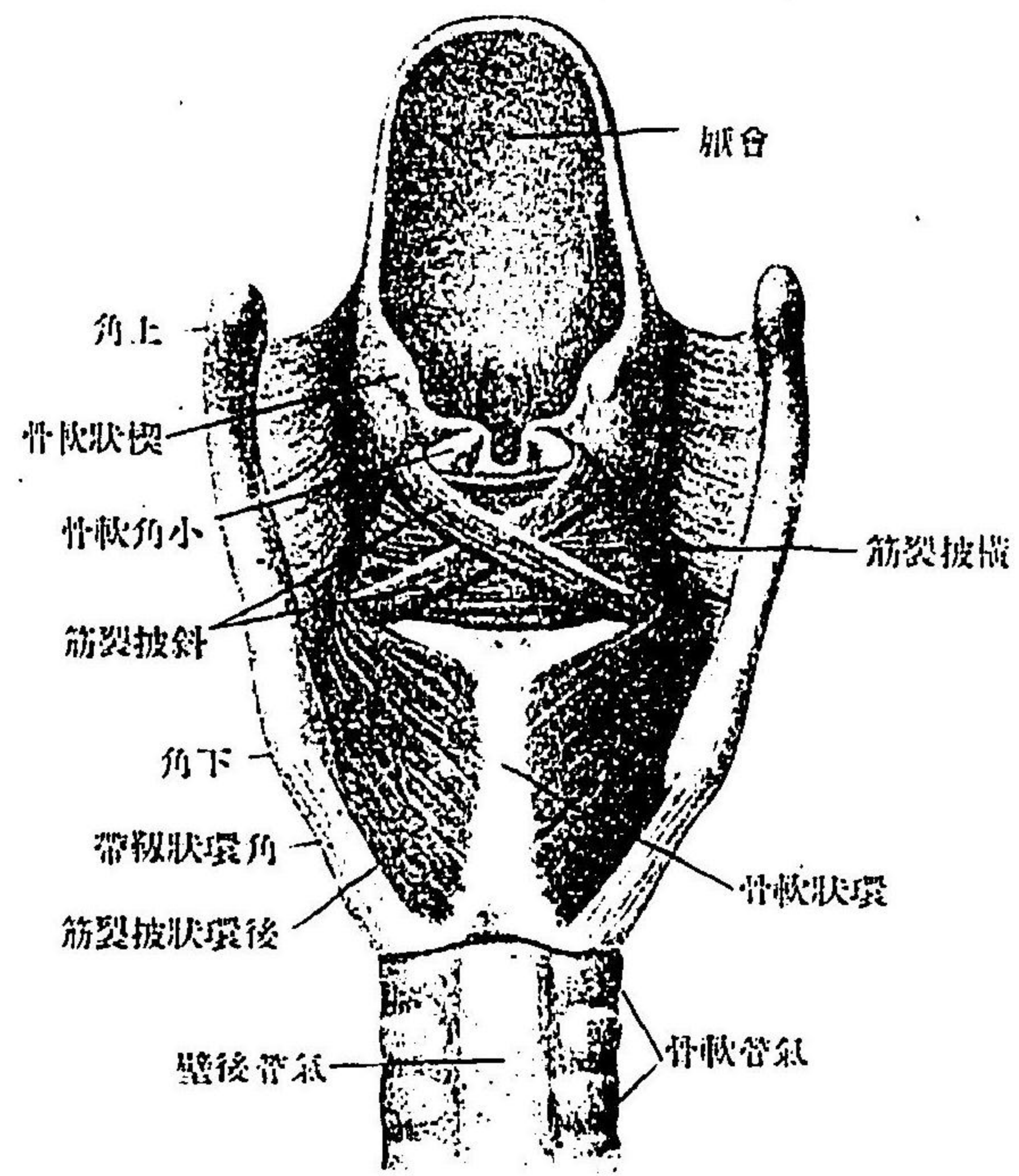
環狀軟骨ノ下縁ト第一氣管輪トヲ連結スルモノナリ、其他會脈軟骨ヨリ出デ後

披裂會厭靱帶	方披裂軟骨ニ向ツテ走レルモノヲ
咽頭會厭靱帶	4. 披裂會厭靱帶 Lig. aryepiglotticum トナス又會厭軟骨莖部ヨリ咽頭側壁ニ向ヘルヲ
舌會厭靱帶	5. 咽頭會厭靱帶 Lig. pharyngoepiglotticum. トシ會厭軟骨前面ヨリ舌根ニ向ヘルヲ
舌骨會厭靱帶	6. 舌會厭靱帶 Lig. hyoepiglotticum 等ト稱スレドモ是等ハ眞ノ靱帶ニ非ズシテ重複粘膜ニ依リテ生ジタル皺襞 Plica. ニ外ナラザルナリ
甲狀會厭靱帶	7. 舌骨會厭靱帶 Lig. hyoepiglotticum 會厭軟骨莖部ヨリ甲狀軟骨ニ至レル
小角咽頭靱帶	8. 甲狀會厭靱帶 Lig. thyroepiglotticum サントリニ軟骨竝ニ環狀軟骨ヨリ咽頭壁ニ至ル
環狀咽頭靱帶	9. 小角咽頭靱帶 Lig. corniculopharyngeum
關節靱帶	10. 環狀咽頭靱帶 Lig. cricopharyngeum 等ノ外ニ喉頭軟骨關節ヲ強固ナラシムルヲ
聲帶	11. 諸關節靱帶アレドモ必要ナラザルガ故ニ之ヲ詳述セズ最後ニ喉頭内ニ在ツテ特ニ緊要ナル二個ノ靱帶アリ即チ
	12. 聲帶 Lig. vocale s. Das Stimmband 竝ニ
	13. 室蓋靱帶 Lig. ventriculare s. Das Taschenband 是ナリ

聲帶ハ又後者ニ對シテ眞聲帶 wahre Stimmbander トモ稱セラレ披裂軟骨ノ聲帶突起ヨリ發シテ矢狀方向ニ走リ甲狀軟骨ノ内面ニ於テ會厭軟骨突起ノ下ニ附

聲帶皺襞	著ス而シテ此靱帶ノ表面ハ重複粘膜ニテ被覆セラレ之ヲ聲帶皺襞 Plica vocalis ト稱エ其内部ヲ走レル聲帶筋 Musculus vocalis ト共ニ喉頭腔内ニ向ヒテ銳線ヲ出シ
聲母	横断面ニテハ三稜形ヲ作ル之ヲ總稱シテ聲唇 Labium vocale s. Die Stimmlippe ト云ヒ
室蓋帶	(第百四十九百五十四圖)特ニ發聲竝ニ呼吸ニ必要ナル官能ヲ營ムモノナリ、
室蓋皺	室蓋靱帶モ亦前者ノ直上ニ於テ之ト同方向ニ走リ前者ニ對シテ又假聲帶 falsche Stimmbander ノ名アリ其遊離縁ハ粘膜ノ被覆ヲ受ク之ヲ室蓋皺 Plica ventricularis ト稱ス
喉頭筋	三 喉頭筋 Die Kehlkopfmuskeln
	喉頭軟骨間ニ附著スル筋ニシテ之ヲ
	1. 後環狀被裂筋 Musculus cricoarytenoideus posterior..... 聲門開大筋
	2. 側環狀被裂筋 " " Lateralis
	3. 披裂筋 " " arytenoideus 聲門閉鎖筋
	4. 甲狀披裂筋 " " thyroarytenoideus 聲門閉鎖筋
	5. 環狀甲狀筋 " " cricothyreoideus ..... 聲唇緊張筋 ニ分ツ事ヲ得而シテ
	是等ハ其作用ニ據リテ聲門開大筋竝ニ聲門閉鎖筋ノ二種ニ大別ス
聲門開大筋	聲門開大筋 Stimmritzenweleter
後環狀被裂筋	後環狀被裂筋 或ハ又單ニ後筋トモ稱セラレ唯一ノ聲門開大筋ニシテ環狀軟

第五百五十一圖



骨ノ後面ヨリ發シテ  
披裂軟骨ノ筋突起ニ  
附着シ其作用ニ因リ  
テ筋突起ヲ後内方ニ  
牽引シ從ツテ聲帶突  
起ヲ外方ニ開避セシ  
メ爲メニ聲門ハ等邊  
三角形ニ開大セラレ  
テ其基底ハ後方ニ存  
ス(第五百五十一圖a)

聲門閉鎖筋 *Stimm-  
ritzenverenger*

聲門閉鎖筋  
側環狀披裂筋

披裂筋

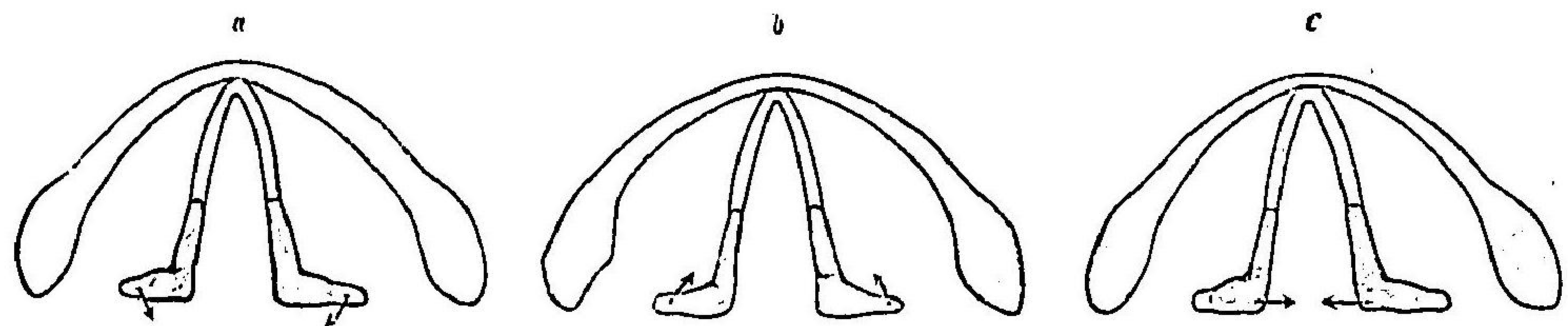
橫披裂筋

斜披裂筋

側環狀披裂筋 聲門閉鎖筋中最大ナルモノニシテ環狀軟骨弓ノ側上縁ヨリ發シテ後上方ニ向ヒ披裂軟骨ノ筋突起ニ附着シ其收縮ニ因リテ筋突起ヲ前方ニ牽引シ從ツテ聲門ヲ狭小ナラシメ又ハ之ヲ閉鎖スルニ至ル(第五百五十一圖b 第五百五十二圖) 披裂筋 之ニハ披裂軟骨間ヲ橫走スルモノト斜走スルモノトニアリテ一ヲ橫披裂筋 *Marylenoi. transversus* ト云ヒ一ヲ斜披裂筋 *obliquus* トス兩者共ニ其收縮ニ因リテ兩軟骨ヲ接近セシメ從ツテ聲門ヲ狭小ナラシム尙ホ斜披裂筋ノ纖維ハ

甲狀披裂筋  
聲帶筋  
外甲狀披裂筋

第五百五十二圖



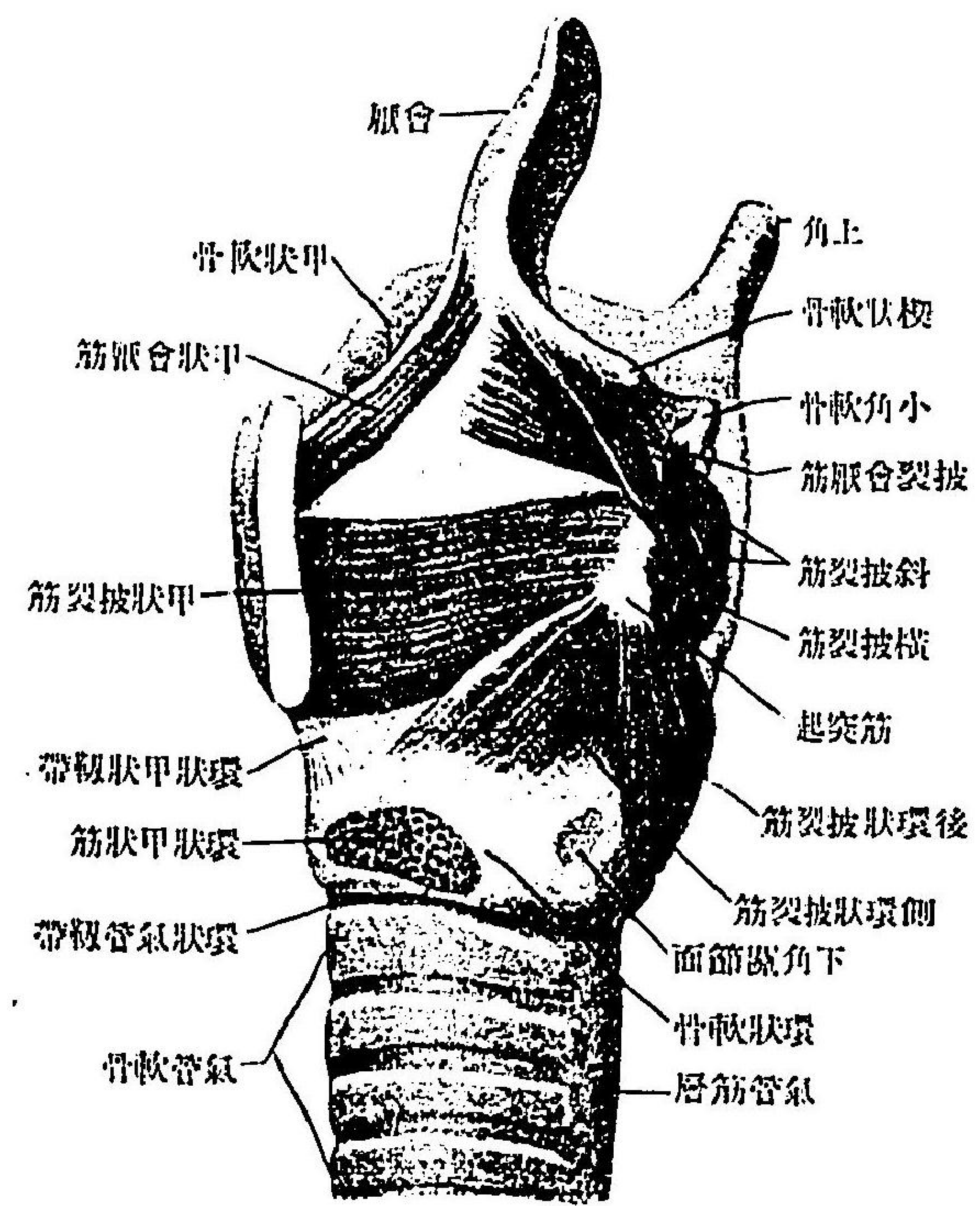
後環狀披裂筋作用

側環狀披裂筋作用

披裂筋作用

上リテ披裂會厭皺襞中ニ進メルガ披裂會厭筋 *M. aryepiglotticus* 爲メニ亦喉門ヲ縮小セシムル作用ヲ有ス 甲狀披裂筋 ハ之ヲ内甲狀披裂筋一名内筋或ハ聲帶筋 *M. thyroarytenoidicus internus* s. *Internus* s. *M. vocalis* 外甲狀披裂筋 *M. thyroarytenoidicus externus* ニ分ラドモ之ヲ實際上ニ於テ區別スル事困難ナリ而シテ前者ハ聲唇内ニ在リテ聲帶筋ノ外側ヲ之ト平行シテ走り後者ハ更ニ其外側ニ密接シテ存ス(第五百五十二圖 第五百五十四圖) 是等ノ作用ハ又等シク聲門ヲ狭小ナラシムル者ナレドモ特ニ内筋即チ聲帶筋ハ其際聲唇ヲ短縮シ其幅ヲ廣クシ且ツ左右ヲ密接セシム加之ナラズ其緊縮ノ度ヲ調節シテ以テ微妙ナル聲調ノ高低ヲ自由ナラシム外筋ハ又其纖維ノ一部ヲモルガンニ一資ノ外側ヲ超エテ室竇皺襞中ニ送り粘液腺ニ連結シ其收縮ニ因リテ粘液ヲ分泌セシム 環狀甲狀筋 ハ環狀軟骨弓ノ前縁ヨリ發シテ甲狀軟骨ノ前下縁ニ附着シ其作用ハ甲狀軟骨ヲ下方ニ牽引ス故ニ聲門閉鎖ト云フヨリモ寧ろ聲唇ヲ緊張セシ

圖 二 十 五 百 第



筋 頭 喉  
(去除板骨軟狀甲側左)

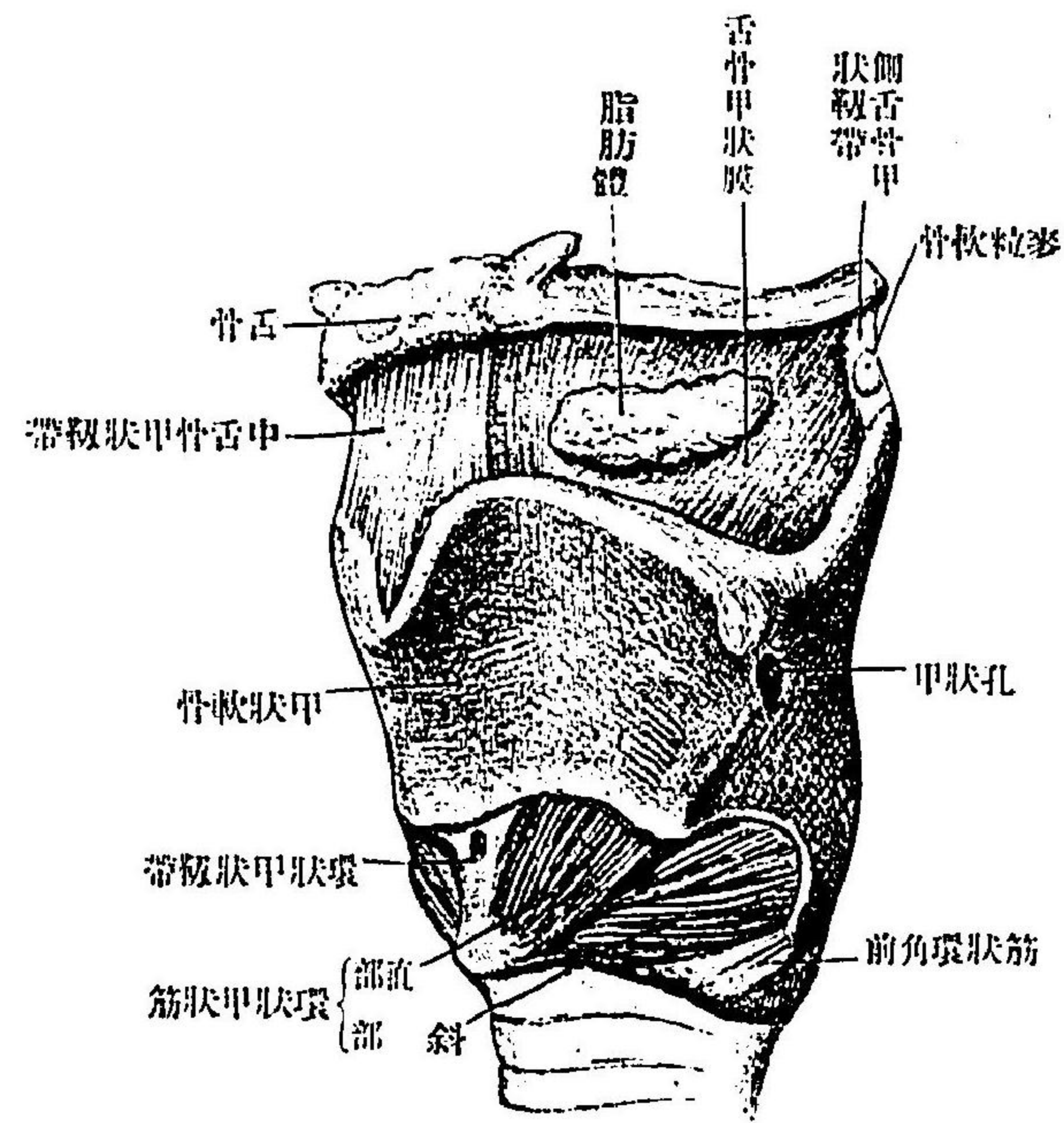
外喉頭筋  
甲狀舌骨筋  
胸骨甲狀筋  
下咽頭收縮筋

ムルモノナリ(第五百十三圖)。  
喉頭ニハ以上ノ固有筋ノ他ニ尙ホ外部ヨリ來リテ、此處ニ、附著スル  
甲狀舌骨筋 *M. thyrohyoideus*  
胸骨甲狀筋 *M. sternothyroideus*  
下咽頭收縮筋 *M. constrictor pharyngis inferior* 等アリ、皆等シク喉頭全體ヲ移動セシ  
ムルノ他ニ甲狀舌骨筋ハ高聲ヲ發スルノ際甲狀軟骨ヲ舉上シ以テ環狀甲狀筋ノ  
作用ヲ補助ス

喉頭粘膜

上皮

圖 三 十 五 百 第



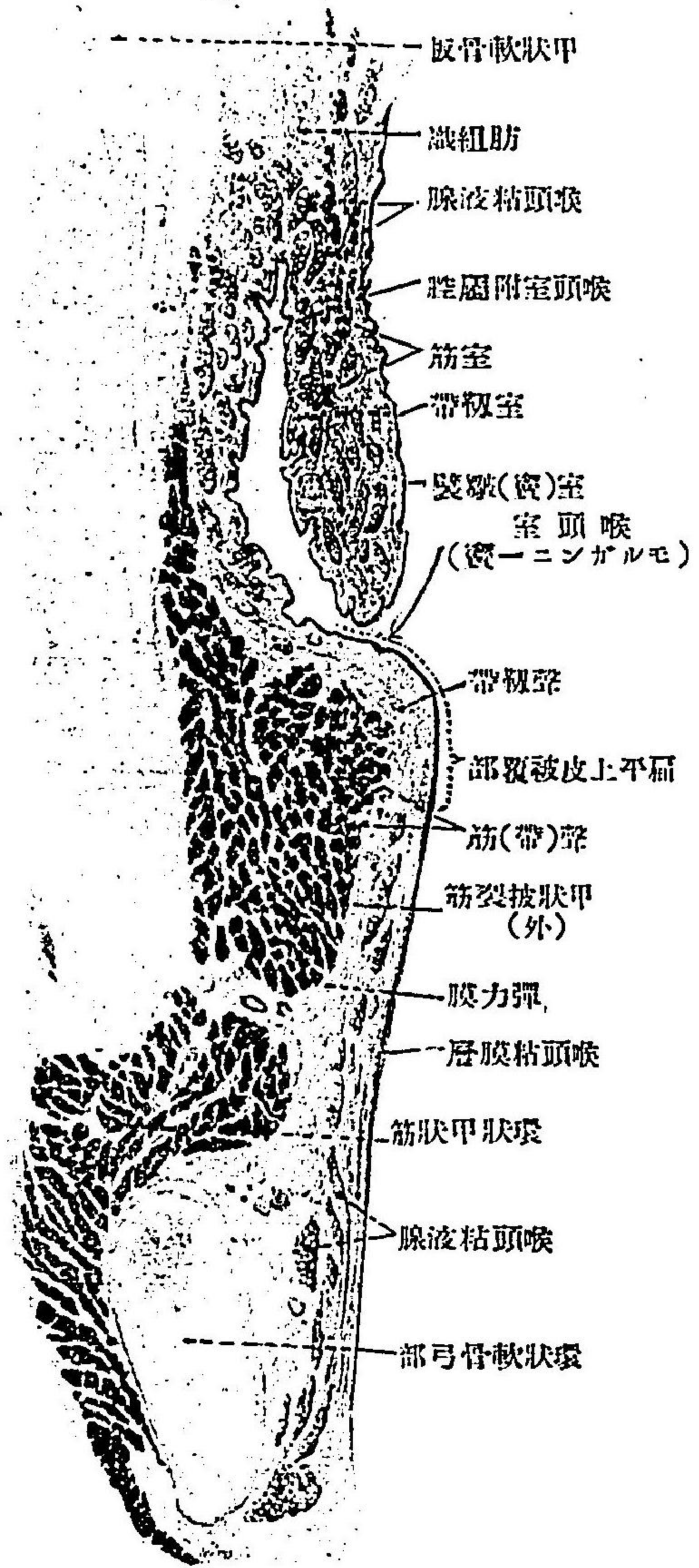
筋 頭 喉  
( ) = 壁 側 前

四 喉頭粘膜 Die Kehlkopfschleimhaut.

其。上。皮。ハ喉門喉頭入口ノ周圍披裂軟骨間部喉頭後壁及ヒ聲唇等ニテハ重層扁  
平ニシテ他ハ悉ク毳毛圓柱上皮ヲ以テ覆ハル只會厭軟骨ノ後面竝ニ室竇皺襞ニ  
於テ時トシテ島嶼狀ニ重層扁平上皮ノ現ハルルコトアリ又喉門ニ在リテモ此兩  
様上皮ノ境介ハ不規則ニシテ扁平上皮中ニ圓柱上皮ヲ混ジ或ハ之ニ反スルコト

第五百五十四圖

喉頭前部ノ額面斷



少ナカラズ之ヨリ薄キ基礎膜ヲ隔テテ粘液腺竝ニ弾力纖維ニ富メル固有層アリ殊ニ其弾力纖維ハ聲唇ノ部ニ於テ強ク發達シテ所謂彈力膜 Membran elastica (第四百七十五圖)ニ於テニ第百五十五圖ヲ作り就中其遊離縁ハ肥厚シテ聲唇帶ト成ル而シテ此粘膜ハ喉頭前壁會厭軟骨ノ後面竝ニ聲唇等ノ部ニ於テハ堅ク其基底ト附著スレドモ會厭軟骨ノ前面披裂會厭軟骨間部喉頭後壁及ビ室皺襞等ノ部ニアリテハ其粘膜下組織ハ稍鬆疎ナルガ爲メ是等ハ屢々炎症又ハ浮腫ノ占位スル所トナル。

基礎膜  
固有層  
彈力膜  
皮下組織

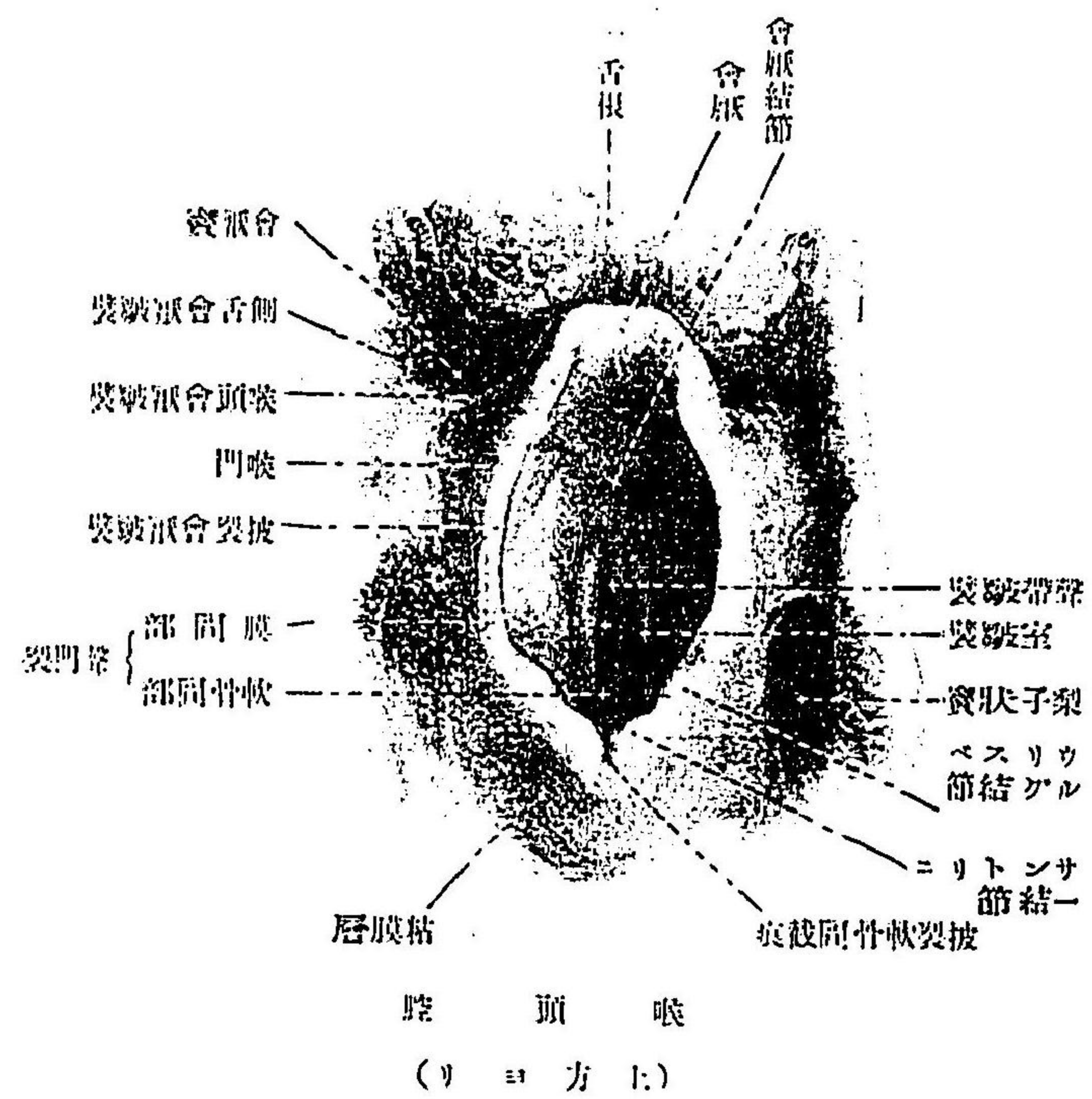
喉頭内腔

喉頭前庭  
喉門(喉頭入口)

五 喉頭内腔 Der Kehlkopfraum.

喉頭内腔ハ臨牀上室皺襞竝ニ聲帶皺襞ニ據リテ上中下ノ三腔ニ區分セラル一上喉頭腔又喉頭前庭 Vestibulum laryngis ハ上ハ喉門(喉頭入口) Aditus laryngisニ依リテ咽腔ト連ナリ下ハ室皺襞ニ依リテ中喉頭腔ト接ス喉門ハ前ハ會厭軟骨

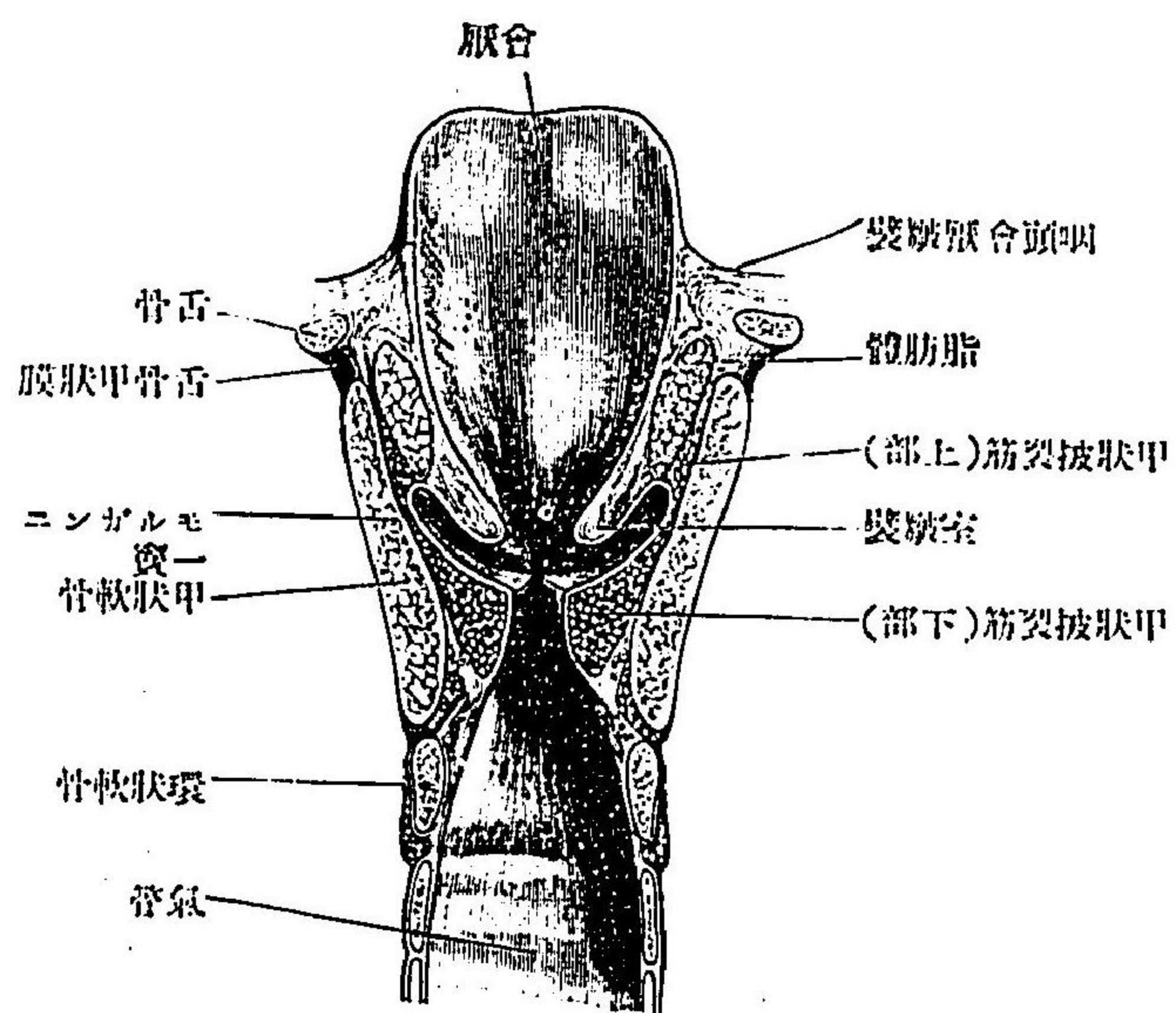
第五百五十五圖



左右ハ披裂會厭軟骨後下方ハ披裂軟骨截痕ニ依リテ圍繞セラレタル部ニシテ其披裂會厭軟骨ノ後方ニテ披裂軟骨截痕ニ近キ部ニ左右二個ノ粘膜隆起ヲ認メ上方ニ在ルヲウリホベル。結節 Tuberculum Wierbergi 後内方ナルヲサントリニ結節 Tuberculum Santoriniト稱エ中ニ同名軟骨ヲ包藏ス喉頭前庭

ウリスベルグ結節  
サントリニ結節

圖 六 十 五 百 第



喉頭前部 (前部) 断面

ノ前壁ハ會厭軟骨ノ後面ヨリ後壁ハ披裂軟骨間部 Regio interarytaenoida ヨリ側壁ハ披裂會厭軟骨ノ内面ヨリ成ル此披裂會厭軟骨ノ内面ハ下方ニ至ルニ從ヒ直接ニ室皺襞ニ移行ス此兩室皺襞ノ間ヲ前庭 Rima vestibuli ト稱シ之ヨリ中喉頭腔ニ移ル

二中喉頭腔 Der mittlere Kehlkopfraum

ハ上方ハ室皺襞

下方ハ聲帶皺襞ニ依リテ境

セララルル部ニシテ此兩皺襞

ト稱シ之ヲ越ユレハ内下

ノ間ニ狹長ナル間隙アリ之ヲ室裂口 Orificium ventriculare

ト稱シ之ヲ越ユレハ内下

方ヨリ外上方ニ擴ガレル竇腔ニ達ス即チモルガニニ

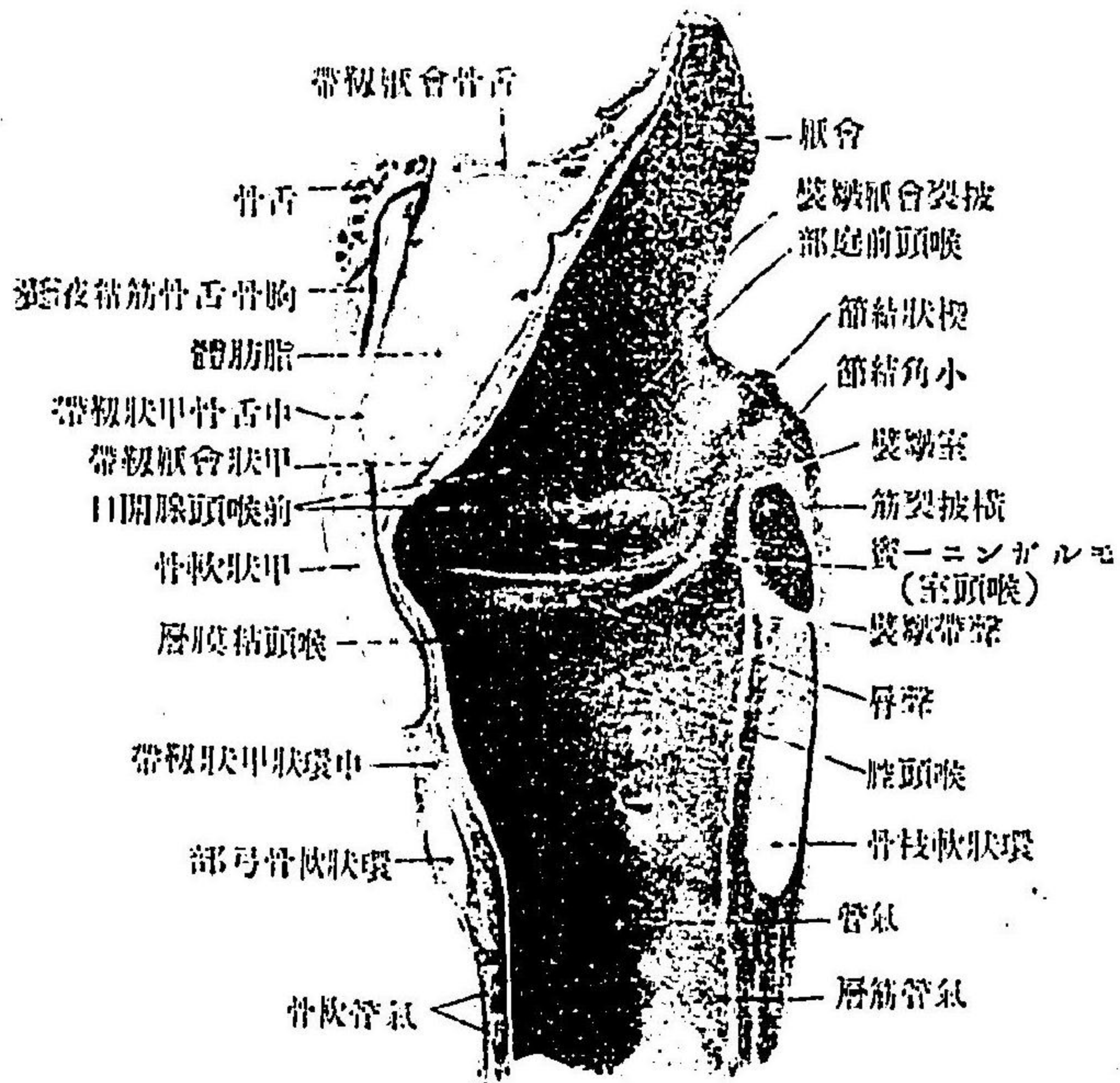
モルガニニ

ハ聲唇ノ振動ニ餘地ヲ與エ一ハ其粘膜炎中ニ多數ノ粘液腺ヲ藏シテ常ニ聲唇ヲ

室(竇)口  
モルガニニ

前庭裂  
中喉頭腔

圖 七 十 五 百 第



喉頭右半部 (左側)

シテ濕潤ナラシム室口ノ下縁ハ直チニ聲帶皺襞 Plica vocale ニ移行シ左右兩聲帶皺襞ノ間隙ヲ聲門裂 Rima glottidis ト稱シ聲門裂ニシテ披裂軟骨ノ聲帶突起間ニ相當セル部ヲ軟骨間部 Pars intercartilaginea ト名ケ之ヨリ前部ヲ膜間部 Pars intermembranacea ト云フ而シテ聲帶皺

聲帶皺襞  
聲門裂  
軟骨間部  
膜間部  
聲門下部  
前庭合  
聲唇

襞ハ其内部ノ聲帶筋ト共ニ銳線ヲ作りテ喉頭腔内ニ突出ス之ヲ總稱シテ聲唇 Labium vocale ト云フコトハ既述セルガ如ク尙ホ其左右聲唇前部ノ相結合スル部ヲ前庭合 Vorderer Commissur ト云フ

三下喉頭腔又ハ聲門下部 Der unterer Kehlkopfraum s. Regio subglottica 聲唇ノ下面ヨリ環狀軟骨下縁迄ノ間ヲ云ヒ直接ニ氣管ニ連接ス此部ノ粘膜炎亦炎症ニ陥キ

解剖 喉頭ノ解剖

ルコト妙ナカラズ

### 六 喉頭血管 Die Kehlkopfgefäße.

一動脈 Die Arterien ハ上甲狀腺動脈 A. thyroideen superior ヨリ分岐スル

(一) 上喉頭動脈 A. laryngea superior

(二) 甲狀環狀動脈 A. cricothyroidea 竝ニ下甲狀腺動脈 A. thyroideen inferior ヨリ分岐スル

上喉頭動脈

(三) 下喉頭動脈 A. laryngea inferior ノニナリトス

甲狀環狀動脈

テ喉頭内ニ入り其分枝ハ下喉頭動脈ト吻合ス

下喉頭動脈

他側ノ同名動脈ト吻合スルガ故ニ氣管切開ニ當リテ注意ヲ要ス

靜脈

下喉頭動脈 ハ下甲狀腺動脈ヨリセル一小分枝ニシテ下喉頭神經ト共ニ上走

淋巴管

シテ喉頭内ニ向ヒ遂ニ上喉頭動脈ト吻合ヲ營ム

靜脈

二靜脈 Die Venen モ亦其配置ハ動脈ト同様ニシテ是等ノ靜脈血ハ上下ノ甲狀腺

靜脈

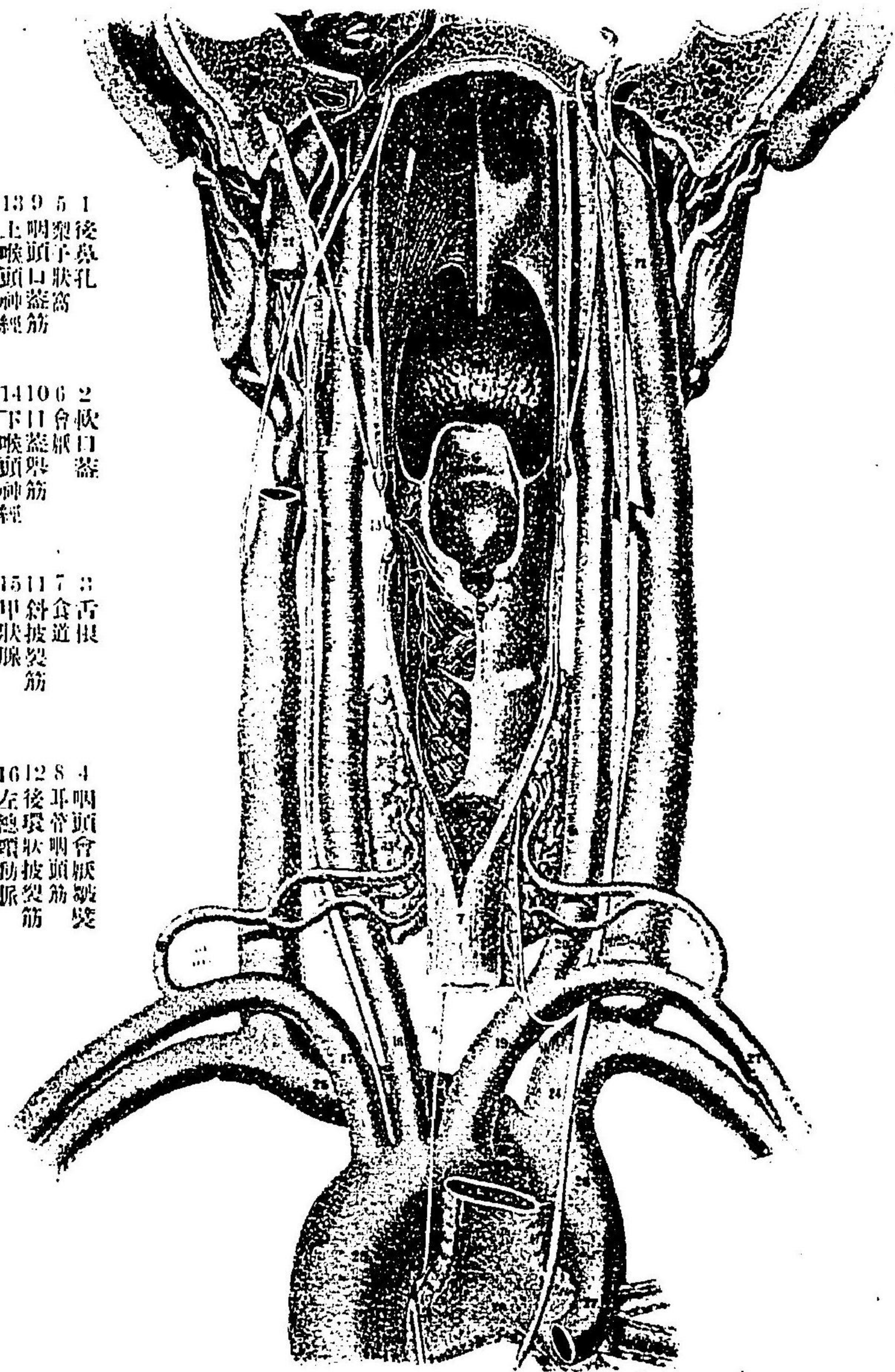
靜脈ヲ經テ内頸靜脈中ニ入ル

淋巴管

三淋巴管 Die Lymphgefäße 喉頭上部ニ於ケル淋巴管ハ集マリテ舌骨甲狀膜ヲ

穿通シ此處ニ存スル淋巴腺内ニ入り中竝ニ下部ノモノハ環狀軟骨ノ下部ニ於テ

第五百五十八圖



氣管側部ニ位スル腺内ニ入ル

- 1 後鼻孔
- 2 軟口蓋
- 3 舌根
- 4 咽頭會厭皺襞
- 5 梨狀窩
- 6 喉頭蓋筋
- 7 斜披裂筋
- 8 咽頭會厭皺襞
- 9 咽頭蓋筋
- 10 下喉頭動脈
- 11 甲狀腺動脈
- 12 左總頸動脈
- 13 右總頸動脈
- 14 上喉頭動脈
- 15 甲狀腺動脈
- 16 左總頸動脈
- 17 右總頸動脈
- 18 下喉頭動脈
- 19 甲狀腺動脈
- 20 右總頸動脈
- 21 左總頸動脈
- 22 上喉頭動脈
- 23 甲狀腺動脈
- 24 右總頸動脈
- 25 左總頸動脈
- 26 下喉頭動脈
- 27 甲狀腺動脈
- 28 右總頸動脈
- 29 左總頸動脈
- 30 下喉頭動脈
- 31 甲狀腺動脈
- 32 右總頸動脈

喉頭神經

七 喉頭神經 Die Kehlkopfnerven.

一上喉頭神經 Nervus laryngae superior

二下喉頭神經 N. laryngae inferior s. Recurrens ノニニシテ共ニ迷走神經 N. Vagus

リ分岐シ就中

上喉頭神經

ハ主トシテ知覺纖維ニシテ節狀節 Ganglion nodosumノ下部ニ於テ本

幹ヨリ出テ舌骨大角ノ高サニ於テ内外兩枝ニ分ル

内枝

ニ中喉頭腔ノ粘膜炎ニ分佈シテ其知覺ヲ司ドル尙ホ此内枝ハ下喉頭神經ニ向ツテ

一小知覺吻合枝ヲ出ダシ是ハ下喉頭部竝ニ上部氣管粘膜炎ニ終レリ

外枝

Ramus externus ハ弱キ運動枝ニシテ之ヨリ下リテ喉頭筋中唯ダ甲状環狀筋

回歸神經

ハミニ分佈ス

下喉頭神經ハ又回歸神經ト稱セラレ專ラ運動枝ニシテ左右其經過ヲ異ニセリ

回歸神經

即チ右側ハ胸腔上口部 Apertura thoracis superior ヲ經過セル鎖骨下動脈 A. subclavia

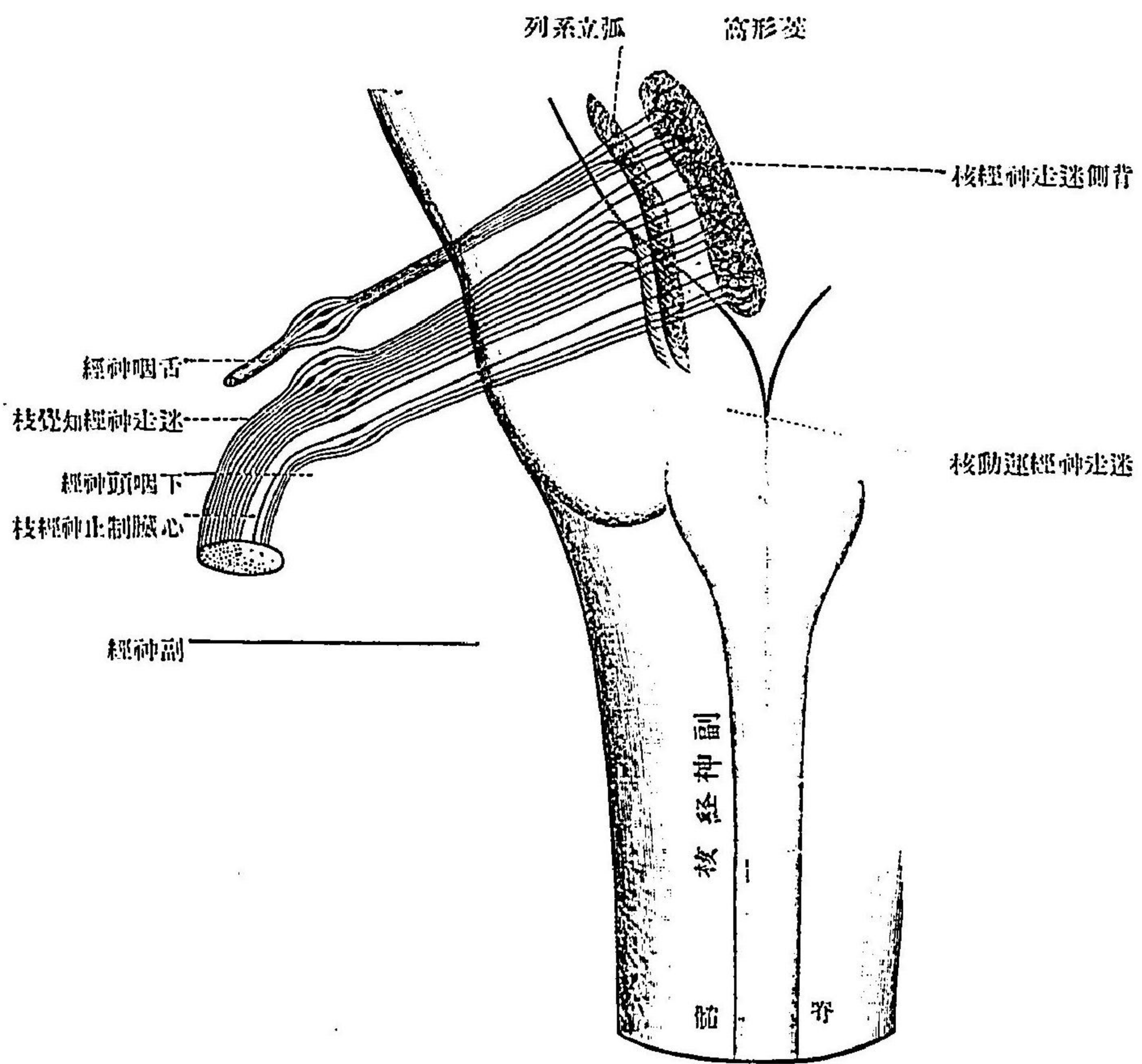
ノ前方ニ於テ迷走幹ヨリ岐レ直チニ同動脈ヲ後上方ニ纏絡シ氣管ト食道トノ間

ニ返回シテ喉頭ノ後面ニ達シ、甲状環狀筋ヲ除クノ他諸喉頭筋ニ分佈ス、左側ハ前

者ニ比スレバ深ク胸廓内ニ於テ大動脈弓 Arcus aortaeノ前面ニテ迷走神經ヨリ分

レ直チニ後上方ニ大動脈弓ヲ纏絡シテ上行シ氣管ト食道トノ間ヲ廻リテ同ジク

第五百九十九圖



根經神副 = 枝經神走迷ルケ於 = 髓延



喉頭運動神經ノ根

左側ノ甲狀環狀筋ヲ除キ他ノ諸筋ニ分佈ス即チ此經過ニ依リテ明ナル如ク左側廻歸神經ハ右側ニ比シテ胸部諸臟器ハ疾患ニ際シ屢亦共ニ犯サル者ナリ、迷走神經中ヲ走レル運動纖維即チ廻歸神經ガ果シテ迷走神經ヨリ由來セシモハナリヤ或ハ又副神經ヨリ來レル者ナリヤニ就テハ種々ノ説アリ然レドモ初メウキリジユースガ副神經ナリト爲セシハ只脊髄中ヨリ出ヅル纖維ノミニシテ後來ニ至リ學者ハ此神經ト全ク知覺神經ナリト思惟セル迷走神經トノ間ニ尙ホ運動纖維束ノ頭蓋腔ヨリ出デ之ガ喉頭筋ニ分佈スルモノナルヲ知リ之ヲ屢々副神經ノ内枝ト稱シタルナリ即チ詮ジ來レバ之ハ元來ハ迷走神經或ハ副神經ノ何レニモ屬セザルナリ然レドモ之ヲ副神經ニ數ヘンヨリモ寧ログラボーウセルノ説ニ從ツテ下迷走神經根纖維 *intere Vaguswurzelbündel* ト爲スノ當ヲ得タル者ナル可ク臨牀上ニ於テモ脊髄癆ニ因リテ屢喉頭筋麻痺ノ來ルニ拘ハラズ同時ニ副神經麻痺ノ甚ダ稀ナル事實ハ又此説ヲ助クルモノナル可シ

第貳節 氣管竝ニ氣管枝ノ解剖 *Anatomie der Trachea u. der Bronchien.*

氣管

氣管 *Die Luftröhre s. Trachea.* ハ環狀軟骨ノ下縁ヨリ始マリ食道ノ前ニシテ少シク其右方ヲ脊柱ノ彎曲ニ沿ヒテ下リ無名動脈左側無名靜脈及ビ上行大動脈等ノ後面ヲ過ギ肺動脈ノ後上面ニ接シ第四又ハ第五胸椎ノ高サニ於テ左右ノ氣管

長サ  
輪狀軟骨  
氣管軟骨  
膜樣壁  
直徑  
氣管枝  
左氣管枝  
右氣管枝

枝ニ分岐ス其長サ九乃至十二仙迷門齒列ヨリ氣管分岐部ニ至ル平均二十二仙迷突ヲ算シ互ニ輪狀軟骨 *Ligg. Annularia* ヲ以テ連結セル其數不定ナレドモ通例十四乃至二十個ノ軟骨輪氣管軟骨 *(Cartilages tracheales)* ニ依リ強直ニシテ著シク彈力性ヲ有スル一長管ヲ作ス但シ其彎曲ハ著シカラズシテ喉頭鏡検査ノ際直チニ其分岐ヲ視ルヲ得ルコトアリ尙ホ此軟骨ハ完全ナル輪ヲ作ル者ニ非ズシテ弓狀ニ氣管ノ前竝ニ兩側壁ヲ圍繞シ其缺損セル後面ハ筋纖維ヲ混ズル彈力膜 *(膜樣壁 Paries membranacea)* ヲ以テ補ハル故ニ其管腔ノ前壁ハ半圓ヲ作セドモ後壁ハ扁平ニシテ其直徑ハ平均大人男子ニ於テ十八密迷突女子十四初生兒五五歳ニ於テ七成熟期十一密迷突等ナリトス是等ノ軟骨ハ高年者ニ在リテ化骨スルコトアリ

氣管枝 *Die Bronchien* ハ前述セルガ如ク第四又ハ第五胸椎ノ高サニ於テ肺動脈 *A. pulmonalis* ノ後上面ニ接シ氣管ヨリ分レテ左右ノ二枝トナル此部ヲ氣管分岐部 *Bifurcatio tracheae* ト云フ氣管分岐部ニ於テハ肺動脈ヨリ傳達スル搏動ヲ視ルヲ得可シ

一左氣管枝 *Bronchus sinister.* 九乃至十二軟骨輪ヨリ成リ右枝ニ比シ細長ニシテ大動脈弓下ヲ肺動脈左枝ノ後方ニ沿ヒテ強ク斜外方ニ走り再ビ二個ノ氣管枝 *Rami bronchiales* ニ分岐ス  
二右氣管枝 *Bronchus dexter.* 六乃至八軟骨輪ヨリ成リ左枝ニ比スレハ短太ニシテ奇靜脈下ヲ肺動脈右枝ノ後面ニ接シテ少シク斜外方ニ走り等シク三個ノ氣管



粘膜

氣管龍骨

血管

神經

甲狀腺

枝梢ニ分岐ス其太キト且ツ傾斜ノ少ナキトニヨリテ右枝ハ恰モ氣管ノ連續ノ如キ觀アリ是レ蓋シ氣管枝内異物ガ左枝ヨリモ多ク右枝ニ陥キル所以ナリ、  
 粘膜 Die Schleimhaut. ハ氣管竝ニ氣管枝共ニ喉頭粘膜ト同ジク毳毛圓柱上皮ヲ有シ中ニ多數ノ粘液腺ヲ藏ス尙ホ氣管分岐部ニ於テ其粘膜ハ矢狀方向ニ半月狀ノ隆起ヲ作ル之ヲ氣管龍骨 Carina tracheae ト云フ、  
 動脈 Die Arterien ハ下。甲。狀。動。脈。 A. thyroidea inferior. ヨリノ分枝ナレトモ時ニ亦直接ニ鎖骨下動脈 A. subclavia ヨリ一小枝ヲ出スコトアリ靜脈 Die Venen ハ之ニ伴ヒ淋巴管 Die Lymphgefäße ハ氣管壁ヲ繞リテ其側壁ニ存セル淋巴腺ニ入ル特ニ氣管分岐部ノ下縁ニ存スル者ハ大ニシテ且屢縱隔竝ニ肺疾患ノ際ニ共ニ罹患スル者ナリ神經 Die Nerven ハ一部ハ回歸神經ヨリ一部ハ迷走神經幹ヨリ分枝シテ來ル

附 甲狀腺解剖 Anatomie der Schilddrüse.

甲狀腺 Glandula thyroidea s. Schilddrüse ハ左右兩葉 Lobus sinister, u. dexter. ト之ヲ連結スル腺峡 Isthmus トヨリ成リ腺峡ハ氣管前面ニ密接シテ其第二ヨリ第四軟骨輪ニ亘リ左右兩葉ハ單ニ氣管ノ兩側ヲ蔽フノミナラズ更ラニ後方ニ進ミテ食道ノ外側ニ及ベリ故ニ甲狀腺ノ肥大ニ因リテ呼吸障礙ハ勿論時ニハ嚥下作用ヲモ妨グルコトアルハ自カラ明カナル可シ尙ホ兩葉ハ上リテ喉頭ノ後側方ヲ蔽ヒ時ニ舌骨迄モ達スルコトアレドモ甲狀軟骨ハ其後下部ニ於テ僅ニ之ト相接スルニ止



粘膜

氣管龍骨

血管

神經

甲狀腺

枝梢ニ分岐ス其太キト且ツ傾斜ノ少ナキトニヨリテ右枝ハ恰モ氣管ノ連續ノ如キ觀アリ是レ蓋シ氣管枝内異物ガ左枝ヨリモ多ク右枝ニ陥ル所以ナリ

粘膜 Die Schleimhaut ハ氣管並ニ氣管枝共ニ喉頭粘膜ト同ジク毳毛圓柱上皮ヲ有シ中ニ多數ノ粘液腺ヲ藏ス尙ホ氣管分岐部ニ於テ其粘膜ハ矢狀方向ニ半月狀ノ隆起ヲ作ル之ヲ氣管龍骨 Carina tracheae ト云フ

直接ニ鎖骨下動脈 A. subclavia ヨリ一小枝ヲ出スコトアリ靜脈 Die Venen ハ之ニ伴ヒ淋巴管 Die Lymphgefäße ハ氣管壁ヲ繞リテ其側壁ニ存セル淋巴腺ニ入ル特ニ氣管分岐部ハ下線ニ存スル者ハ大ニシテ且屢縱隔竇並ニ肺疾患ノ際ニ共ニ罹患スル者ナリ神經 Die Nerven ハ一部ハ回歸神經ヨリ一部ハ迷走神經幹ヨリ分枝シテ來ル

附 甲狀腺解剖 Anatomie der Schilddrüse.

甲狀腺 Glandula thyreoides s. Schilddrüse ハ左右兩葉 Lobus sinister, 右 Lobus dexter. ト之ヲ連結スル腺峡 Isthmus トヨリ成リ腺峡ハ氣管前面ニ密接シテ其第二ヨリ第四軟骨輪ニ亘リ左右兩葉ハ單ニ氣管ノ兩側ヲ蔽フノミナラズ更ラニ後方ニ進ミテ食道ノ外側ニ及ベリ故ニ甲狀腺ノ肥大ニ因リテ呼吸障礙ハ勿論時ニハ嚥下作用ヲモ妨グルコトアルハ自カラ明カナル可シ尙ホ兩葉ハ上リテ喉頭ノ後側方ヲ蔽ヒ時ニ舌骨迄モ達スルコトアレドモ甲狀軟骨ハ其後下部ニ於テ僅ニ之ト相接スルニ止

尚ホ尾關著  
狀腺形學ヲ  
見ヨ

マル此甲狀腺ハ靱帶ニ依リテ喉頭軟骨ト連結シ筋膜ニ依リテ周圍ニ固定セラル  
レドモ移動シ易ク且容易ニ周圍ヨリ剝離シ得可シ而シテ其側葉前面ハ胸骨甲狀  
筋ニテ蔽ハレ其内側ハ回歸神經ニ接シ其後側面ニハ總頸動脈下甲狀腺動脈及ビ  
内頸靜脈等ノ存スル在リ尚ホ多數ノ者ニ在リテ腺峽ヨリ上方舌骨ニ達スル錐體  
葉。Lobus pyramidalis ヲ有ス是等ノ關係ヲ知ルコトハ該部ノ手術ニ際シテ必要ナル  
可シ

### 第三節 食道ノ解剖 Anatomie der Speiseröhre.

食道

食道 Die Speiseröhre s. Oesophagus ハ咽頭 Pharynx ノ連續トシテ環狀軟骨下縁ノ高  
サヨリ始マリ(頸部 Pars cervicalis) 脊柱ノ前ヲ少シク其左方ニ偏シテ胸腔ニ下リ(胸  
部 Pars thoracalis) 之ヨリ又却ツテ少シク右方ニ偏シテ胸部大動脈ノ右側ニ沿フテ  
進ミ尚ホ下リテ更ラニ左前方ニ向ヒ右後方ニ向ヘル大動脈ノ前面ニ出テ橫隔膜  
ノ食道孔 Hiatus oesophagus ヲ通ジテ腹腔ニ入り(腹部 Pars abdominalis) 胃ノ噴門ニ連  
接シ平均二十五仙迷突ノ長サ。門齒列ヨリ食道起始部ニ至ル平均長サ十五仙迷突  
ヲ有スル筋肉性長管ニシテ其管腔ハ管ヲ考ヘラレタルガ如ク空虚時ニ於テ閉鎖  
スル者ニ非ズシテ胸部ヲ除ケル他ハ常ニ廣ク開通セリ但シ是等ノ屈曲ハ死後變  
化ニシテ元來ハ眞直ナリト稱スル人アリ(第百六十圖最近橫山學士ハ京大病理教  
室ニ於テ日本人食道ノ長サヲ研究シ左ノ結論ヲ擧ゲタリ

長サ  
内腔

- 一 十七歳以上ノ日本人ニ就キテ上門齒ヨリ噴門迄ノ距離ハ平均三十七仙迷ニシテ西洋人ニ比シテ三仙迷短シ
- 二 同上ノ日本人ニ於テ上門齒ヨリ食道起始部迄ノ距離ハ平均一三・六仙迷
- 三 同上ノ日本人ニ就テ上門齒ヨリ左氣管支トノ交叉部迄ノ距離ハ平均二二・三仙迷
- 四 同上日本人ノ食道全長ハ平均二三・四仙迷
- 五 同上日本人ノ食道ノ左氣管支トノ交叉部ヨリ噴門迄ノ距離ハ平均一四・七仙迷

但シ以上ハ男女共之ヲ平均セルモノニシテ女子ハ男子ニ比シテ凡テノ距離測定法ニヨルモ短キモノナリ横山氏ハ之ニ就テ詳述セルモ冗長ニ亘ルノ嫌アルヲ以テ之ヲ省略セン(中外醫事第七五六號参照)

而シテ其起始部氣管分岐後部及ビ噴門ニ近キ處等ハ特ニ狭小ナレバ屢々癌腫ノ發生竝ニ異物ノ介在スルヲ認メ殊ニ分岐部ニ最モ多シトス

食道壁 粘膜層 Tunica mucosa 粘膜下織層 Tela submucosa 及ビ筋層 Tunica muscularis ノ三層ヨリ成ル粘膜ハ重層扁平上皮ヲ有シ其色ハ帶赤蒼白ニシテ表面ハ平滑ナリ從來稱セラレタルガ如ク深キ縱走皺襞ヲ有スル者ニ非ズ粘膜下組織中ニハ粘液腺ヲ藏シ筋層ハ内環狀纖維層ト外縱走纖維層トニ分レ皆ナ下方胃外壁ノ筋層ニ移行スルモノナリ血管中食道下部ヨリ集マレル靜脈ガ脾靜脈 Vena lienalis

ト交通スルハ臨牀上必要ナルコトナリ。  
 神經 ハ上部ハ迷走神經舌咽神經及ビ交感神經等ヨリ成レル咽頭神經叢 Plexus pharyngeus ヨリ下部ハ左右迷走神經ヨリ成レル食道神經叢 Plexus oesophagus ノ分佈ヲ受ク

### 第貳章 喉頭ノ生理 Physiologie des Kehlkopfs.

喉頭ハ發聲器トシテ又深部氣道ニ對スル保護器トシテ及ビ呼吸器トシテ重要ナル生理的官能ヲ有スルモノナリ

#### 一 發聲器トシテノ喉頭 Der Kehlkopf als Stimmorgan

喉頭ハ二重ノ膜舌ヲ有スル一種ノ吹笛ニ比較シ得ベク其膜舌タル聲唇ハ呼吸ノ壓力ニ因リテ振動シ之ヨリ發生シタル聲音 die Stimme ハ咽腔鼻腔口腔等ノ共鳴ニヨリ上音ヲ附加セラレテ強大ト成リ且此處ニテ始メテ言語 die Sprache ヲ作スモノニシテ即チ氣管枝竝ニ氣管ハ吹笛ノ吹管ニ匹敵シ咽腔口腔鼻腔等ハ其共鳴管ニ相當スルモノナリ、

- 一 此聲音發生上ニ必要ナル條件トシテハ(1)聲唇ハ一定ノ緊張ヲ有シ(2)且ツ

發聲器トシテノ喉頭

聲音發生上ノ條件

左右全ク或ハ殆ンド相接スルヲ要シ(3)之ヲ振動セシムル呼吸流ハ一定ノ強度ヲ有セザル可カラザル事等是レナリ既ニ聲唇ガ二密突以上相離隔スル時ハ腹聲ヲ來シ尙ホ其以上離ルレバ聲音ヲ生セズ此際ハ之ヲ失聲ト云フ而シテ吾人ハ如何ニ聲唇ヲ緊張セシメ竝ニ聲門裂ヲ閉鎖スルカハ畧ホ解剖ノ條下ニ於テ述ベタレバ茲ニ之ヲ再ビセザルベシ唯ダ注意ス可キハ凡テ或ル喉頭筋ガ作用スル際ニハ同時ニ其反對筋モ亦活動スルノ一事ナリトス呼吸流ノ強度ハ吹管即チ氣管竝ニ氣管枝ノ構造呼吸筋就中橫隔膜ノ力竝ニ聲門裂ノ廣狹等ニ大ナル關係ヲ有ス共鳴管トシテノ咽口竝ニ鼻腔等ノ作用ニ就テハ前編ヲ參照スベシ

聲音ヲ發生セシムルモノハ唯ダ聲唇ノミナルコトハ若シ呼吸流ガ聲門裂以下ニ於テ外部ニ逸竄スルトキハ直チニ發聲ノ沮止セララルヲ見テモ明カナリ但シ強ク相接シタル室皺襞ノ振動ニヨリ粗糙ナル音ヲ發スルコトアレドモ生理的ノモノナラズ

聲音ノ性質 吾人ハ尙ホ斯クシテ發生セラレタル聲音ニ就キ其強弱音色及高低等三種ノ性質ヲ區別ス

聲音ノ強弱

一 聲音ノ強弱 Die Tonstärke 人聲ノ強弱ハ呼吸流ノ強度竝ニ聲唇ノ振幅ニ正比例スルモノニシテ從ツテ前述セルガ如ク胸廓竝ニ腹筋ノ強ク發育セル者ハ聲音モ亦強盛ナル可シ

音色

二 音色 Die Klangfarbe 聲音ニ個人的特性ノ存スルハ其有スル音色ヲ異ニスル

聲音ノ高低

ガ爲メニシテ主トシテ共鳴管ニヨリテ附與セラレタル上音ノ異ナルニ職由ス。サレバ主ニ咽腔、口腔、鼻腔ノ解剖的造構ニ關係スル者ナレドモ尙ホ聲唇、唇振動ノ種類竝ニ其聲唇ノ厚サ及ビ合脈軟骨ノ位置等モ亦之ニ影響ヲ與フ、サレドシユミットニ從ヘバ聲唇ノ長サ竝ニ喉頭ノ大サハ必ズシモ之ヲ左右スルモノニ非ザルガ如シ

三聲音ノ高低 Die Tonhöhe 聲音ノ高低ハ聲唇ノ長サ竝ニ其緊張度及ビ呼氣流ハ強度等ニ關係スルモノニシテ、即チ聲唇ハ短カクシテ能ク緊張シ及ビ呼氣流ノ強盛ナルトキハ聲音ハ其度ニ從ツテ愈々高調ナリトス。成年女子ニ於ケル聲帶ハ長サハ平均十二・六乃至十三・五密突ニシテ男子ニハ十七・五乃至十八・二密突ナレバ女子ノ聲音ガ男子ニ比シ概シテ高調ナルベキハ自カラ明ナリ、尙ホ聲唇ノ厚サ、竝ニ其彈力性モ亦此高低ニ影響スル所アル可シ。

小兒ニ在リテ聲唇ノ短小ナルガ爲メ、聲音モ亦從ツテ高調ナレドモ、年齢ト共ニ聲唇ハ其長サヲ加ヘ、聲音ハ低調ト成リ、青春期ニ至リテ殊ニ男子ニ於テ急劇ナル喉頭ノ發育ニ因リ、且ツ之ニ伴ヘル多少ノ粘膜ノ充血ト相俟ツテ一生理的發聲障礙ヲ來ス、是レ即チ

聲音變換

三 聲音變換 der Stimmwechsel s. Mulieren ノ時期ニシテ急ニ粗烈ナル低調ト成リ通例一年間持續ス時ニハ亦二乃至三年間ニ亘ルモノ無シトセス

然レドモ青春前期ニ於テ去勢術ヲ行フ時ハ喉頭ノ發育ハ沮止セラレ從ツテ聲音變換ヲ來サズシテ常ニ高調ニ止マル之ヲ

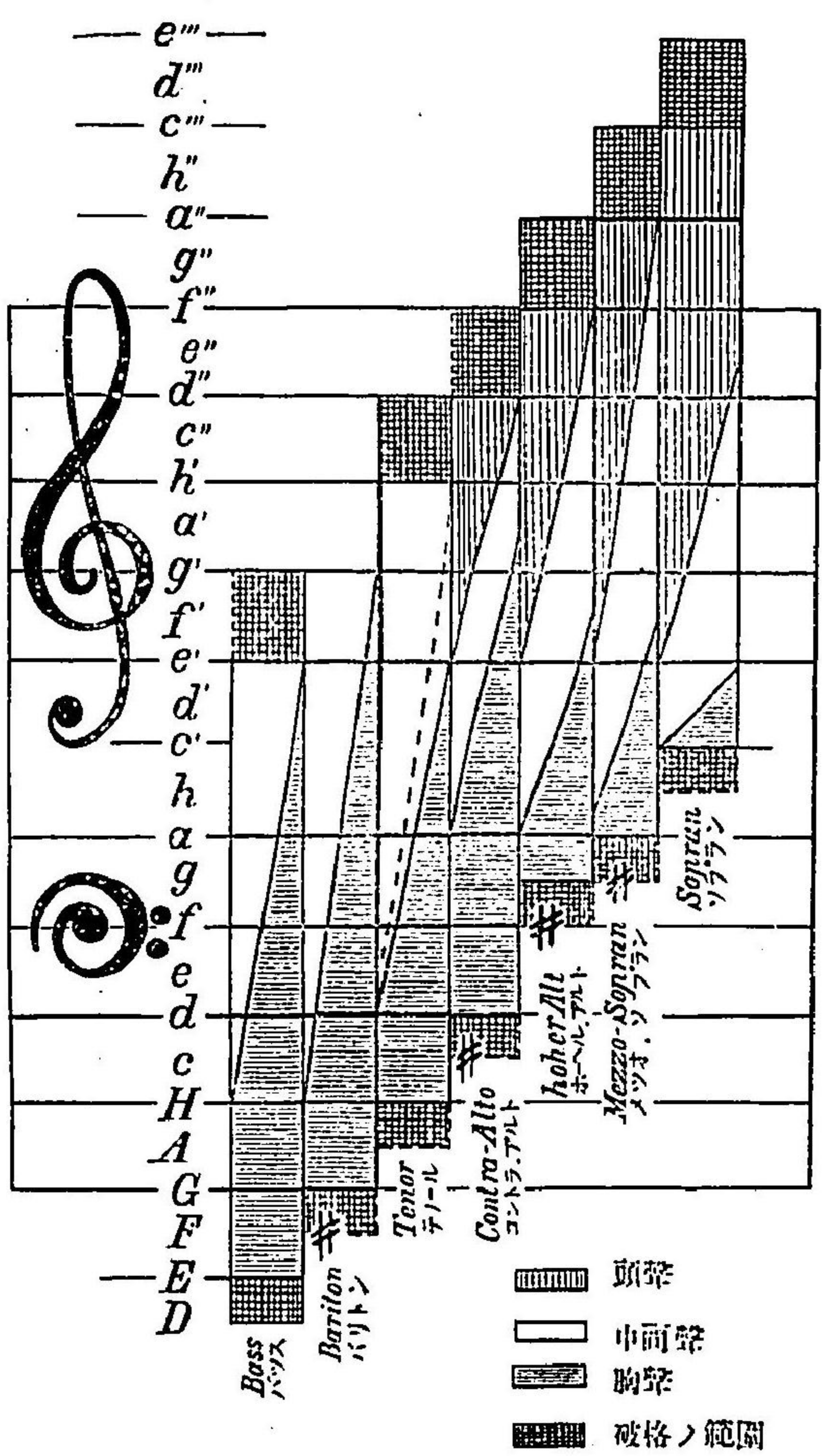
去勢聲音

四 去勢聲音 Die Kastrationsstimme ト稱ス、但シ女子ニ在リテ若シ之ニ卵巢剔出術ヲ施コストキハ却ツテ其聲音ハ低調ト成ルト云ヘリ

聲音分類

五 聲音分類 人聲ヲ其高低ニ因リテ男子ニ於テソプラノ、テノール、Tenor 女子ニ於テソプラ、Alt、メソソプラ、Mezzosopran 及ビソプラノ、Sopran ノ聲音類 Stimmgattungen. ニ區別ス、是等ハ圖ニ示スガ如ク畧ホ一定ノ範圍ヲ有シ且各人ニ固有ノ者ナレドモ練習ニ據リテ或程度迄ハ其範圍ヲ變ジ且他ノ

圖一十六百第



胸聲

聲音類ヲ摸倣シ得、是ニ由リテ觀レバ同一ノ音階ヲ種々ノ聲音ヲ以テ謠ヒ得可ク (c)ラテノールニテ又ハ「ソブラン」ニテ發音シ得ルガ如シ是等ハ其有スル音色ニヨリテ區別シ得ルコト恰モ「ツハイオリン」竝ニ「セロ」ノ同一音ヲ其上音ニ因ツテ各之ヲ區別シ得ルガ如シ尙ホ是等ノ聲音類ニ

胸聲 Regarderヲ區別シ其主ナルヲ胸聲竝ニ頭聲ナリトス胸聲 Die Bruststimmeニ在

リテハ喉頭ハ下降シ聲門裂ハ狭小ナル間隙ヲ作り聲唇ハ其全幅ヲ以テ振動シ聲

音ハ頭聲ニ比シテ低調ナレドモ強盛ニシテ充實シ其發聲ニ際シテ胸壁ニ振動ヲ

觸知シ得、恰モ其聲音ノ胸廓内ヨリ發生スルガ如キ觀アルヲ云フ頭聲 Die Kopf-

stimmeニ於テハ喉頭ハ舉上セラレ聲唇ハ其内遊離縁ノミヲ以テ振動シ、聲音ハ高

調ナレドモ軟弱ニシテ此際共鳴管ノ共鳴著シク爲メニ頭蓋骨ニ於テ其振動ヲ觸

知シ得、一二ノ學者ニ從ヘバ此際聲唇ハ前方ニ於テ離開シ唯ダ後方ノミ振動スル

者ナリト云ヘリ

六 言語 Die Sprache 既述セルガ如ク聲音ハ聲唇ノミニ依リテ發セラルレドモ

未ダ言語ヲ作サズ言語ハ之ニ對シテ各一定ノ形態ヲ備フル共鳴管即チ咽腔、口腔

鼻腔ノ共鳴ニヨリテ始メテ形成セラルル者ナリ其音調ノ高サハ凡ソ一線トヨリ

二線トニ到ルノ間ニ在リトス之ニ就テハ尙ホ前編ヲ參照ス可シ故ニ共鳴管ノミ

ニテ喉頭ヲ缺如セル者ニ在リテモ無聲ノ言語ヲ發シ得可シ即チ

七 喉語 Die Hintersprache 是ナリ之ハ聲唇ヲシテ發聲セシムルコト無クシテ單

喉語

言語

頭聲

保護器トシテ  
ノ喉頭

ニ呼出セラレタル氣流ガ共鳴管中ニテ作りタル言語ヲ云フモノナリ  
モルガニ一資ノ生理ハ既ニ解剖條下ニ記セルガ如ク發聲ニ際シテ一ハ聲  
唇振動ノ餘地ト爲リ他ハ其有スル粘液腺ヨリ粘液ヲ分泌シテ以テ發聲スル聲唇  
ヲ濕ホスニ在リ

### 二 保護器トシテノ喉頭 Der Kehlkopf als Schutzorgan.

喉頭ハ又呼吸及ビ嚥下作用ニ際シ諸種ノ害物ニ向ツテ深部氣道ノ保護機關ト  
成ル者ナリ即チ嚥下運動ニハ喉頭腔ハ室皺襞竝ニ聲唇ノ接著ニ依リテ閉鎖セラ  
レ以テ嚥下物ガ氣道中ニ迷入スルヲ防グ此際會厭軟骨ガ亦果シテ此喉頭入口閉  
鎖ニ重要ナル任務ヲ致ス者ナリヤハ疑問ニシテ時ニ全ク之ヲ缺如セルモノニモ  
空モ失嚥ヲ起スコト無キヨリ見レバ蓋シ之ニ向ツテ必須ナルニ非ズシテ寧ロ食  
物塊ヲ側方梨子狀竇ニ轉向セシムル作用ヲ有スルナル可シ又若シ誤ツテ喉頭内  
ニ異物ノ侵入スル際又ハ其内腔ニ分泌物ノ附著スル時ハ鋭敏ナル喉頭粘膜ハ直  
チニ反射的咳嗽ヲ發シテ之ヲ咯出ス但シ是等ノ作用ハ喉頭ニ運動竝ニ知覺障  
アル場合ニ於テ大ニ妨ゲラルベキハ勿論ナリ

### 三 呼吸器トシテノ喉頭 Der Kehlkopf als Respirationsorgan.

呼吸器トシテ  
ノ喉頭

發聲並ニ呼吸中樞

呼吸ニ際シテ喉頭ハ専ラ呼吸氣流ノ出入管トシテ作用スル者ニシテ安靜呼吸ニ在リテハ聲門裂ハ喉頭後壁ニ其底ヲ有スル三角形ヲ作り其底線甚ク大ナラザルモ深呼吸ノ際ニハ極度ニ開大シ爲メニ氣管分岐部ヲモ視得ルコト少ナカラズ但シ凡テ喉頭筋ノ運動ニ際シテハ其反對筋モ亦共ニ作用スルモノナルハ前述セラルガ如シ呼吸ノ際モ亦同様ニシテ安靜呼吸タルト深呼吸タルトニ論ナク凡テノ喉頭筋即チ聲門開大筋ト共ニ閉鎖筋モ同時ニ且持續的ニ作用スル者ニシテ唯ダ吸氣ニ際シテハ開大筋ノ力ヲ増シ呼吸ニ當ツテ閉鎖筋ノ作用ヲ加フルノミナリ茲ニ尙ホ發聲並ニ呼吸神經中樞 Phonnations- und Respirationscentrumニ就テ一言セン但シ是等ノ中樞ニ關シテハ實驗ノ困難ナルガ爲メ其研究成績モ種々ニシテ未ダ之ヲ確定スル能ハザレドモ先ヅ大體ニ就テ述ブレバ安靜呼吸ハ全ク反射的ニ營マルルモノニシテ延髓室底ニ其中樞ヲ有ス然レドモ吾人ハ又意識的ニ呼吸ヲ一時停止シ或ハ之ヲ遲速セシメ得ルヨリ考フレバ腦皮質中ニ亦其中樞ヲ有セザル可カラズ是レ恐ラク上眼窩溝 Sulcus supraorbitalisノ前方ニ存スルナランモ延髓中樞ハ全ク之ト無關係ニ活動スル者ナリ發聲ハ之ニ反シテ主トシテ意識的ニ起ル者ナレバ腦中樞ハ延髓中樞ヨリモ強ク發達シ是等ハ何レモ呼吸中樞ノ附近ニ存シ殊ニ猿ニ於テハ中心前溝 Sulcus praecentralisノ下端後方ニ位スルヨリ見レバ蓋シ人類ニ於テモ亦中心溝 Sulcus centralisノ下端附近ナル可シ而シテ是等腦中樞ヨリ出ヅル纖維ハ深部ニ走リ放線狀冠ヲ經テ内囊ニ至リ遂ニ延髓核ニ達ス此中樞

甲狀腺生理

附 甲狀腺生理 Physiologie der Schilddrüse.

性、神經分佈ニ特別ナルハ一側ニ於ケル中樞性刺激ハ常ニ兩側のニ作用スルモノニシテ從ツテ一側ノ腦中樞ヲ遮斷スルトモ喉頭ニ於テ何等ノ運動障礙ヲ來スモノニ非ザルノ一事ナリトス蓋シ此際ニハ他側ノ中樞ガ作用スルモノナル可シ

甲狀腺ヲ切除スル時ニ或ハ又病的ニ其腺質ノ破壊セララル時ハ暫時ニシテ全身ノ營養障礙ヲ起シ脱毛、皮膚乾燥、皮下組織ノ粘性浸潤等恰モ粘液水腫ノ際ニ見ルガ如キ症狀ヲ呈スルヲ見ル而シテ此際甲狀腺越幾斯或ハ其有效成分ヲ與フル時ハ是等症狀ノ輕快スルヨリ見レバ甲狀腺ハ是等ヲ防止ス可キ物質ノ内分泌ヲ營ム者ナリト云ヒ或ハ又消化器管内ニテ作ラレタル毒素ガ此腺内ニ於テ中和セララル者ナリトモ稱セラル其何レニスルモ有效成分ハ有機性沃度化合物ニシテ著シク蛋白質ヲ分解シ且脂肪ヲ燃燒セシムルノ性質ヲ有スルモノナリ

第參章 検査法 Untersuchungsmethoden.

第壹節 喉頭検査法 Untersuchungsmethoden des Kehlkopfes.

喉頭検査法

喉頭内腔ノ検査ハ喉頭鏡ヲ用キテ其映像ニヨリ間接ニ或ハ又キルスタインノ直達鏡 Antioscop. 創意ニ基キ鏡子ヲ用ヒテ舌根ヲ壓抵シ直接ニ之ヲ視診スルノニ



法アリ、逼テク用ヒラルルハ前法ニシテ、單ニ喉頭鏡検査法ト稱セラレ又後者ニ對シテ間接喉頭検査法ト名クルモ可ナラン

一 喉頭鏡検査法又ハ間接喉頭検査法

Laryngoskopie (s. Laryngoskopia indirecta)

此法ハ吾人ノ日常應用スルモノニシテ患者ノ咽喉ニ於テ懸壺垂下ニ斜メニ前下方ニ向ヘル一小圓形平面鏡ヲ挿入シ其面ニ光源ヨリ來レル光線ヲ反射鏡ニ依リテ集注セシメ更ラニ之ヲ鏡面ヨリ喉頭内ニ送り茲ニ鏡面ニ生ズル映像ヲ視診シテ喉頭ノ内景ヲ知ルニ在リ

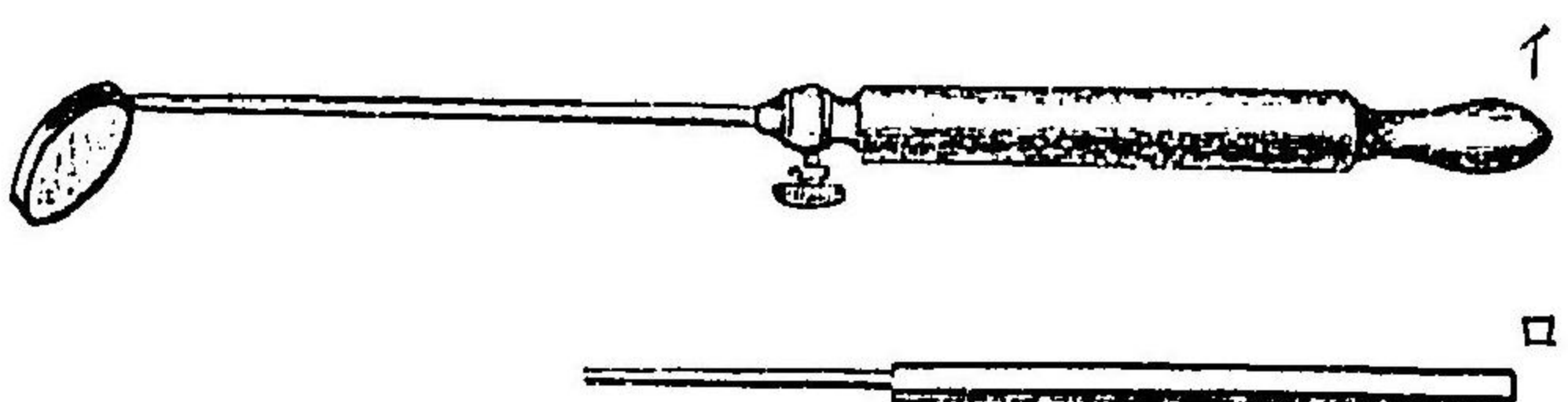
光源竝ニ反射鏡ニ就テハ鼻腔検査法ノ條下ニ譲ル

一 喉頭鏡 Der Kehlkopfspiegel ハ大凡百二十度ノ角度ヲ以テ細長ナル金屬莖ニ固著セラレタル硝子製小圓形平面鏡ニシテ大小種々アリ、此長莖ハ更ラニ金屬製ノ把柄ニ固定セラレ(第百六十二圖ロ)又ハ螺旋ニ依リテ伸縮自在ニ把柄中ニ挿入セラルル者(第百六十二圖イ)トノ二種アレドモ前者ヲ以テ取扱上便利ナリトス何レノ場合ニ於テモ必要ナル器械ノ消毒ハ又々喉頭鏡ニ於テモ同様ナレドモ善良

喉頭鏡検査法  
(間接喉頭鏡検査法)

喉頭鏡

圖 二 十 六 百 第

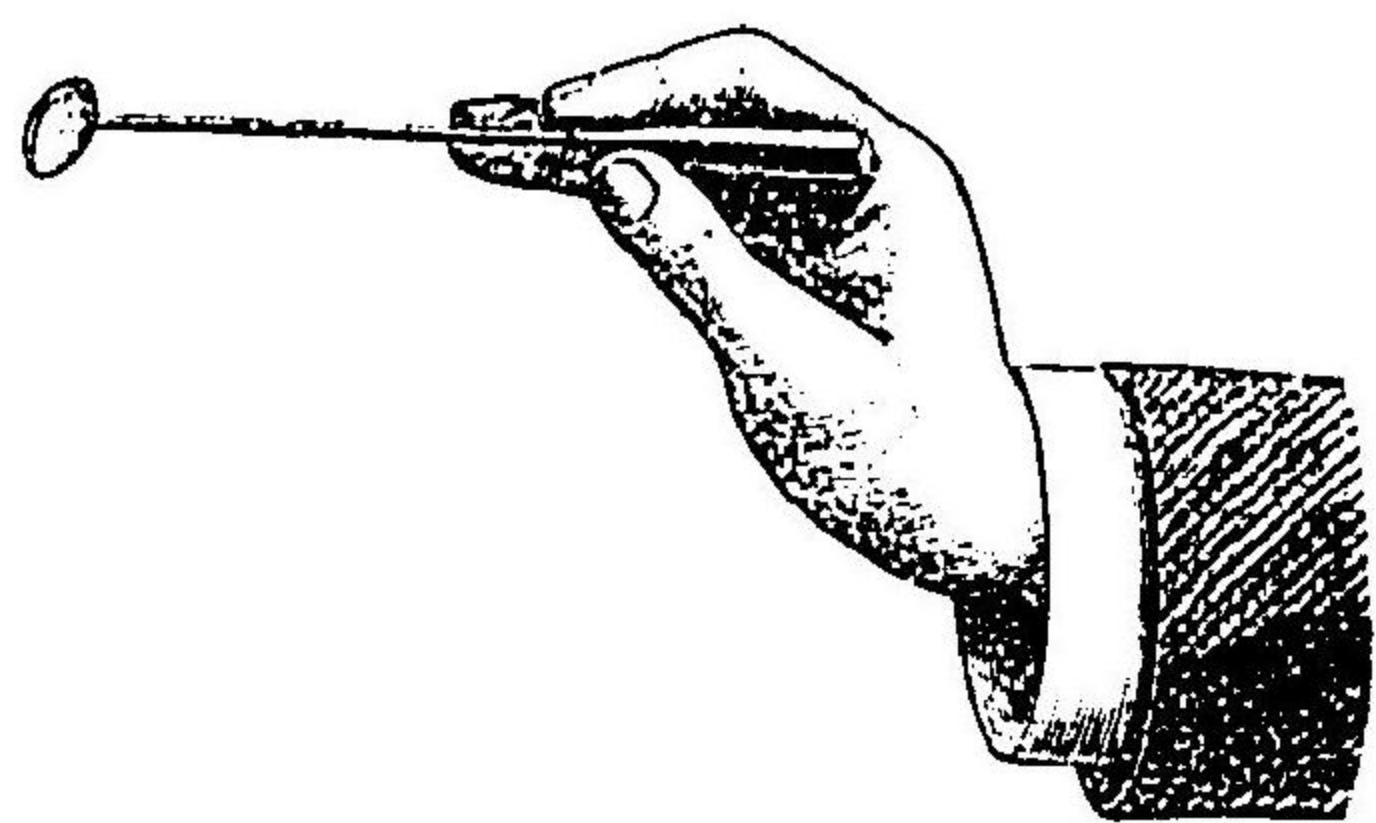


検査法

ナル者ニ在リテモ久シク煮沸ニ耐エズ、サレバ通例ハ石炭酸水或ハリゾール液中ニ數分間放置スルヲ以テ足レリトセザル可ラス、但シ傳染病患者就中結核竝ニ微毒患者ニ對シテハ別ニ嚴正ニ消毒ス可シ

二 検査法 Die Untersuchungs-methode. 患者、竝ニ、檢者ノ、位、置、ハ後鼻鏡検査法ノ場合ト同様ナリ、此際亦タ檢者ノ視線ト患者ノ口腔長徑トハ同一ノ高サニ在ルヲ要シ光源モ亦タ同一ノ高サニ於テ患者ノ右側ヨリ來ルヲ便トス、蓋シ光線ガ患者ノ左側ヨリ來ル時ニハ喉頭鏡ノ把柄ニ或ハ他器械ノ運用ニ際シテ吾人ノ右手ハ時ニ此照射光線ヲ遮斷スレバナリ、尙ホ檢者ノ額ニ裝置セル反射鏡ハ、患者ノ口唇ヲ去ルコト凡ソ十五仙迷ハ前方ニ在ルヲ、良シトス、即チ口唇ヨリ懸壺垂迄凡ソ七乃至八

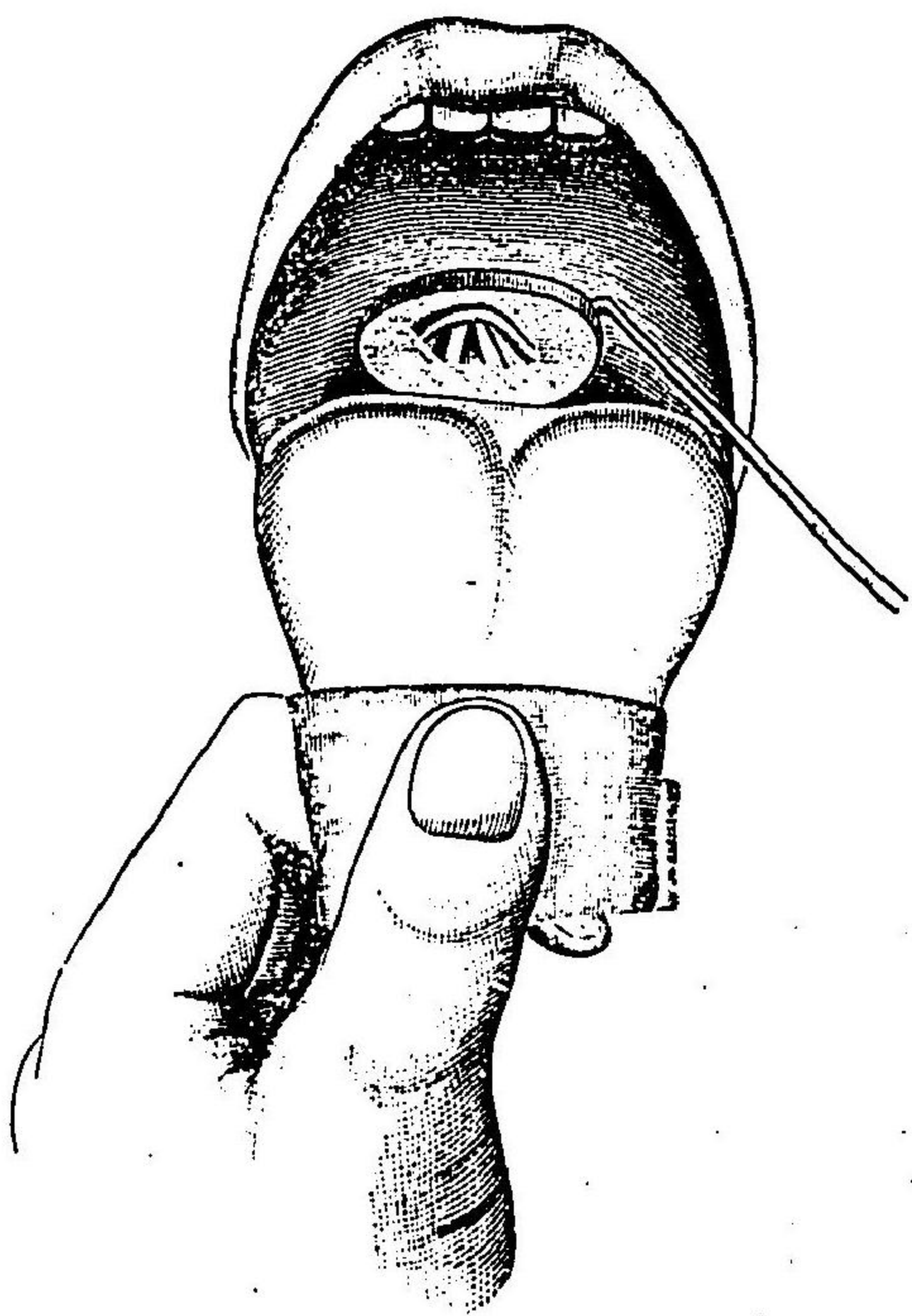
圖 三 十 六 百 第



法 持 保 鏡 頭 喉

仙迷ニテ懸壺垂ヨリ聲唇迄更ニ七乃至八仙迷ヲ算スルガ故ニ反射鏡ヨリ聲唇迄ノ距離約三十仙迷ハ吾人ガ明視ノ距離ナリ、次デ患者ハ其上半身ヲ眞直ニシテ少シク頤部ヲ前下方ニ提シテ強ク開口シ檢者ハ先ヅ反射鏡ヲ額帶又ハ口保ニテ裝ヒ反射光線ヲ明カニ懸壺垂上ニ投ジテ後チ豫ジメ此目的ニ向ツテ製シタル一小布片ヲ以テ舌端ヲ纏絡シ之ヲ患者ノ右手ニテ拇指ト示指トノ間ニ把握シ強ク外下方ニ牽出

第百六十四圖



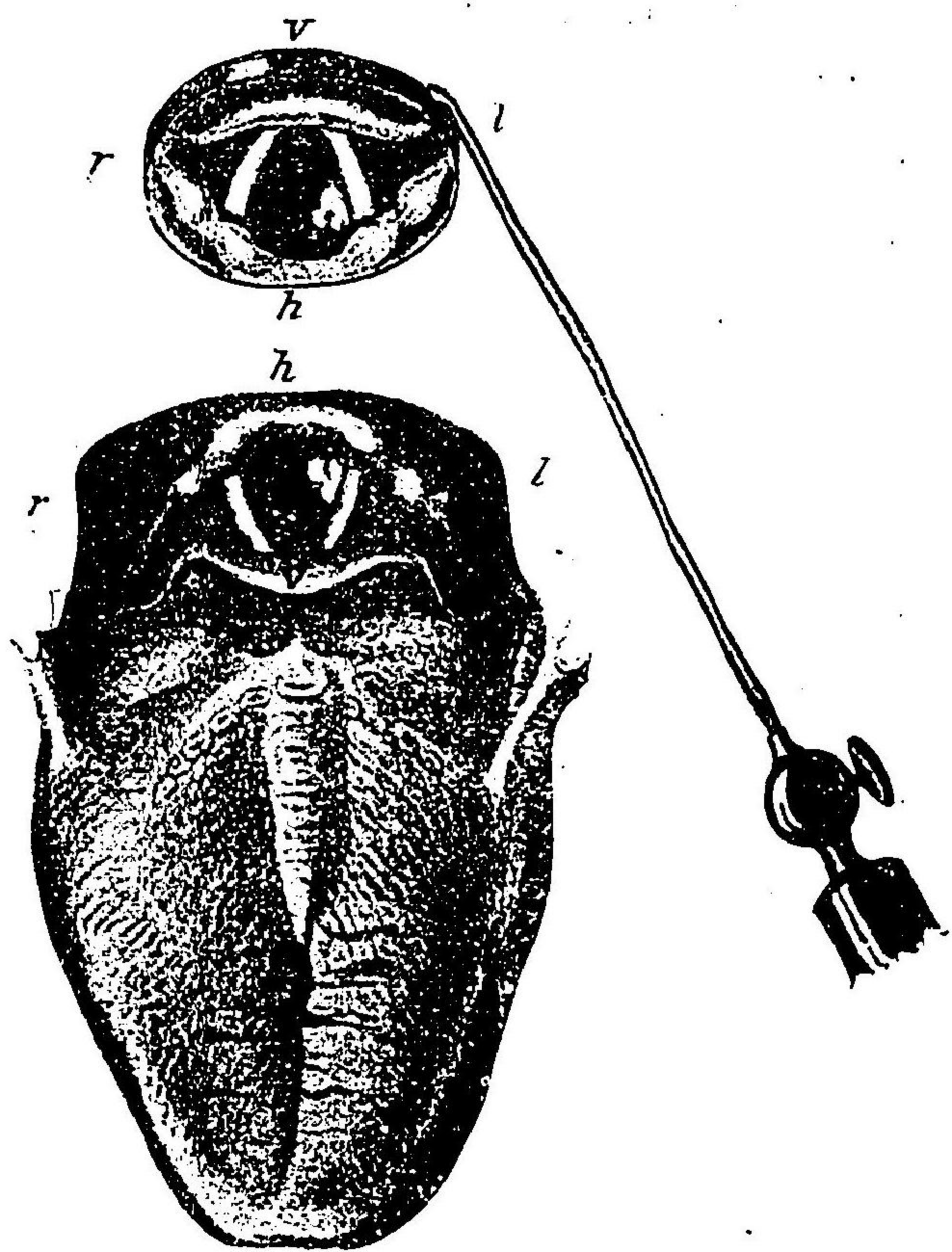
喉頭鏡検査法

セシム(但シ初診ノ患者ニ在リテハ却ツテ検査自身ノ左手ヲ以テ拇指ヲ上ニシテ之ヲ牽出スルヲ善シトス(第百六十四圖)只此際暴力ヲ用ユル時ハ舌下面ヲ損傷スルコトアレバ注意ス可シ、之ヨリ検査ハ右拇示

兩指間ニ輕ク把筆狀ニ喉頭鏡ヲ探リ其鏡面ヲ下ニシテ患者ノ左口角ヨリ口腔ニ挿入シ舌背竝ニ口蓋ノ間ヲ之ニ觸ルルコト無クシテ咽頭ニ至ラシメ鏡背ヲ以テ懸垂垂ヲ後上方ニ排擠シ同時ニ少シク把柄ヲ左上方ニ運用シテ鏡面ヲ垂直ニ近カラシメツツ患者ヲシテ高調ナルニ、イ、ア、等ノ音ヲ發セシムルトキハ會厭軟骨ハ舉上シテ喉頭内景ハ玆ニ鏡面ニ映ズ可シ此際把柄ヲ保持セル手ノ中指又ハ小指ヲ輕ク患者ノ頰部ニ接觸セシメテ検査者トヲ連結スルトキハ不意ノ動搖ニ由リテ鏡端ノ咽頭壁ニ衝觸スルヲ防ギ得ルノミナラズ尙ホ其運用ヲシテ益自在ナラシムベシ鏡檢中ハ力メテ鏡縁ノ咽頭壁ニ接觸スルヲ避ケ且ツ患者ノ將ニ

喉頭ノ映像

第百六十五圖



喉頭ノ映像

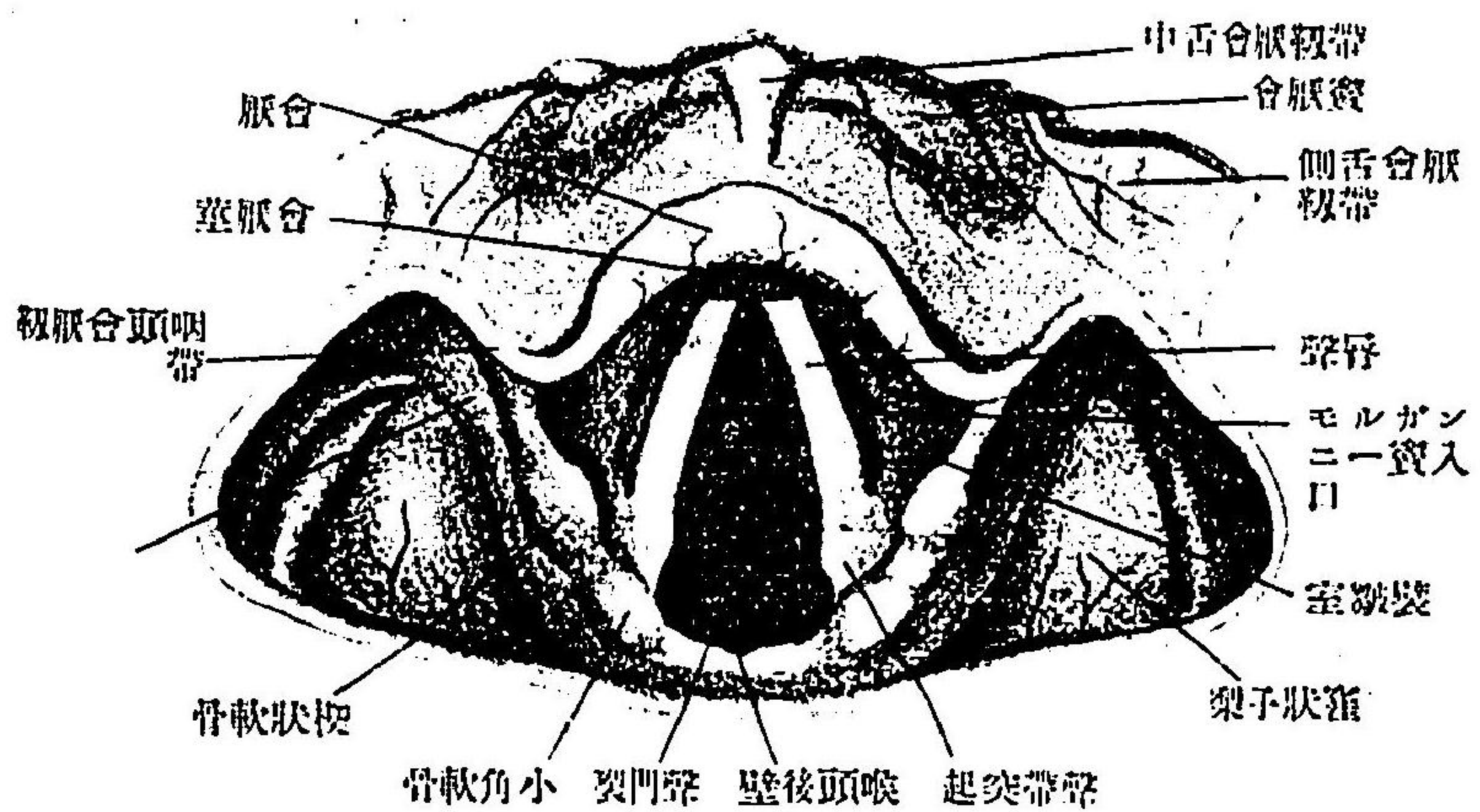
絞扼運動ヲ起サントスルトキハ直チニ之ヲ口腔ヨリ去ラシム可シ又鏡面ノ呼吸ニ因スル曇翳ヲ防グニハ豫ジメ鏡ヲ温ムルカ或ハ1%リゾール液、5%曹達水等ニテ之ヲ濕ホスヲ要ス予ハ好ンデリゾール液ヲ用ユ

三 喉頭ノ映像 Das laryngoskopische Bild.

喉頭鏡ハ平面ナルガ故ニ之ニ映ズルハ眞像ニシテ喉頭ノ前方ハ鏡ノ上方ニ後方ハ下方ニ映ジ且ツ喉頭ノ左右側ハ亦各鏡

第百六十六圖

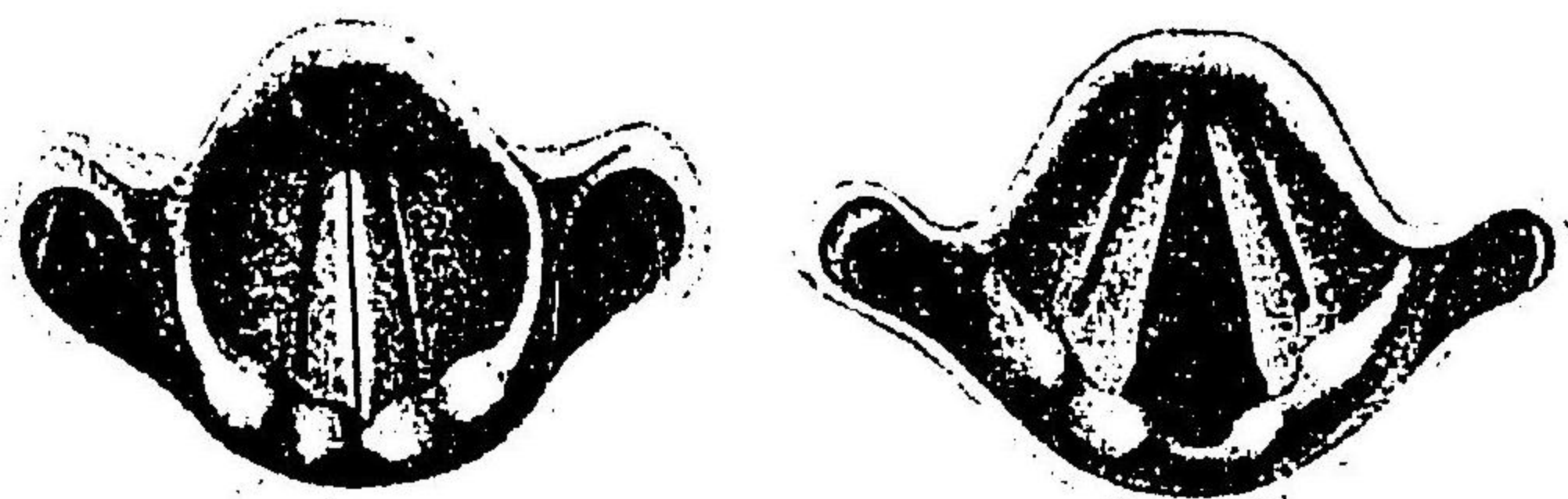
喉頭鏡映像



カニ狭小ナル裂隙ヲ作セドモ呼吸ニ際シテハ三角形ノ聲門裂ヲ形成シ深呼吸ニハ更ラニ開大シテ時ニ氣管竝ニ氣管分岐部ヲモ見得ルコト尠カラズ尙ホ聲唇ノ後端ハ聲帶突起ニ因リテ少シク内方ニ隆起ヲ作り該部竝ニ會脈軟骨ノ尖端ハ稍

面ノ左右側ニ其像ヲ見ルハ當然ナレドモ初學者ニ在リテハ往々此關係ヲ誤マ  
ルコト多シ故ニ常ニ其左右ハ患者ノ位  
置ヨリ見ルコトニ注意ス可シ(第百六十  
五圖)  
其映像ハ(第百六十六圖)ニ示スガ如シ  
ト雖モ先ツ鏡面ニ映ズルハ舌根竝ニ會  
脈軟骨ノ尖端ニシテ次ニ披裂會脈皺襞  
ヲ見更ラニ會脈軟骨ノ舉上スルヤ發聲  
呼吸ニツレテ運動スル聲唇ノ現ハルル  
ト共ニ凡テノ喉頭内腔ヲ視ルヲ得可シ  
此際又鏡面ヲ少シク水平ナラシムルト  
キハ主トシテ喉頭後壁ヲ照ラシ垂直ニ  
近カラシムルトキハ其前壁ヲ視診シ得  
聲唇ハ發聲ニ際シテハ左右相接シテ僅

第百六十七圖



像映頭喉ノ時聲發

像映頭喉ノ時吸呼靜安

ヤ黄色ヲ帶ブルコトアリ是レ軟骨ノ透視スルガ爲メ  
ニシテ敢テ病的ノモノニ非ズ  
喉頭粘膜ハ一般ニ淡紅色ヲ呈シ此中ニ在リテ腫様  
白色ヲ呈スル聲唇ハ直チニ之ヲ識別シ得レドモ喉頭  
鏡插入ノ瞬時ハ少シク發赤シ又喫烟者竝ニ飲酒家及  
ビ過度ニ聲音ヲ使用スル者ハ常ニ汚穢白色又ハ淡紅  
灰色ヲ呈シ其表面ニ屢纖弱ナル血管ノ走行セルヲ見  
ル

四 喉頭鏡検査ニ於ケル困難 Schwierigkeiten bei der

Laryngoskopie. 喉頭鏡検査ニ際シテ種々ノ困難ニ遭遇

スルコト尠カラズ勿論検査ノ未熟ナル場合ニハ喉頭  
内ハ措テ間ハス單ニ反射光線ヲ咽頭ニ射入スルコト  
スラ已ニ時ト力トヲ費サザル可ラズ検査者ハ須ラク先  
ヅ反射鏡使用ニ慣レ而シテ甫メテ喉頭鏡検査ヲ行フベシ又此検査モ反復練習ニ  
依ツテ自得スルモノナルコトハ眼鏡鏡使用法ニ於ケルガ如シ

通例此検査ノ障礙ト爲ル者ハ

(一) 過敏ナル精神状態 神經過敏症ハ患者又ハ飲酒家ニ在リテハ屢器械ニ對ス

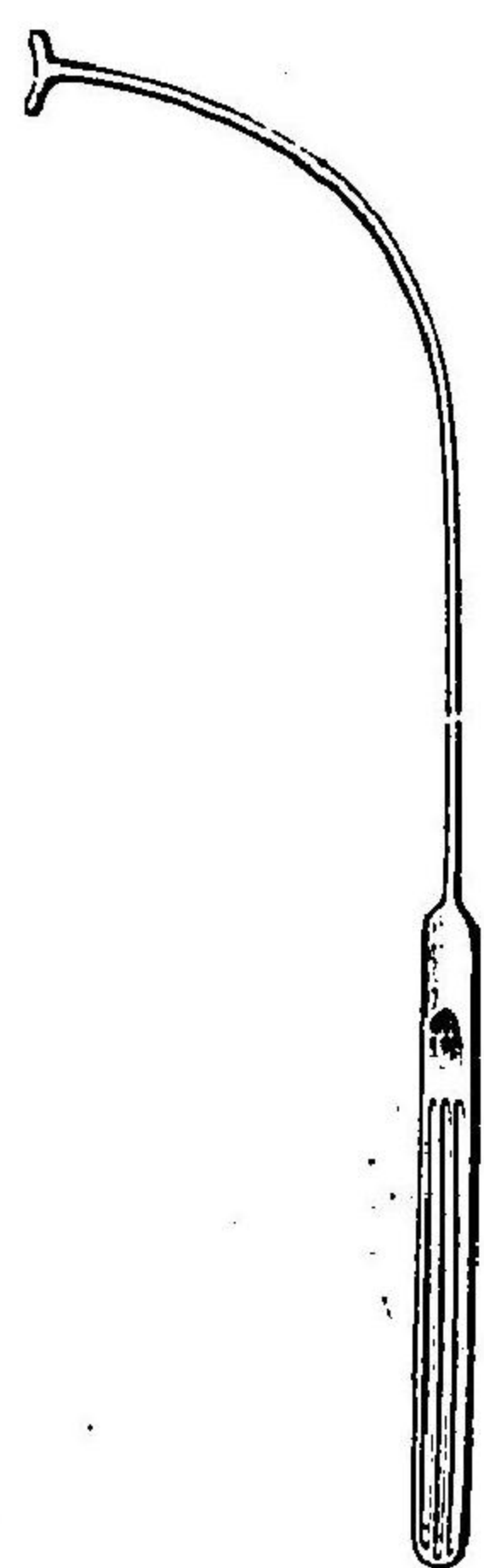
ル恐怖又ハ充進セル咽頭粘膜ノ反射機能ニ因ツテ喉頭鏡検査ノ困難ナルコトア

リ。斯カル際ニハ患者ニ精神的慰安ヲ與フ可キ種々ノ方法ヲ講ズルハ勿論ナレドモ、通例患者ハ喉頭鏡挿入ト共ニ呼吸ヲ停止シ直チニ絞扼運動ヲ始ムル者ナルガ故ニ患者ヲシテ先ヅ高調ナル發音ト短カキ吸氣運動ノ續行ヲ豫習セシメシ後チ徐ロニ喉頭鏡ヲ咽頭ニ挿入シ迅速ニ其全内景ヲ檢視シ終ル可シ。唯ダ止ムヲ得ザル場合ニハ十乃至二十%コカイン溶液ヲ用ヒテ咽頭壁竝ニ舌根ヲ麻痺セシム。尚ホ凡テ喉頭ノ検査ハ食後ヨリモ食前ヲ撰ブヲ可トス。

(二)病的竝ニ異常ナル解剖的關係 癍痕或ハ下顎關節ノ強直又ハ其附近ノ炎性疾患就中扁桃腺周圍炎等ニ因リテ開口困難ナル際ニ或ハ又タ舌ガ筋肉ニ富ミ高ク口蓋ニ向ツテ隆起スル際ニハ亦検査ノ障礙ヲ爲スコト尠ナカラズ。此際ニハ舌ヲ牽出スルヲ斷念シ、寧ロ之ヲ舌鈞ヲ以テ壓抵シ小喉頭鏡ヲ用キテ之ヲ試ミ或ハ次ニ述ブル直達喉頭検査法ヲ試ムルモ可ナリ。

口蓋扁桃腺肥大モ亦タ時トシテ此検査ヲ困難ナラシムレドモ大喉頭鏡ヲ用キテ之ヲ壓擠スルカ又ハ小鏡ヲ此間ヨリ挿入シテ以テ其目的ヲ達シ得可シ。最も屢々遭遇スル困難ハ會厭軟骨ハ擧上不全及ビ其異常ノ形態即チU字狀彎曲ニ因ツテ來ルモノナリ。通例會厭軟骨ハ舌ヲ強ク牽出シ高調ナル頭聲ヲ以テ發音セシムルトキハ著シク擧上スルモノナレドモ尙其目的ヲ達シ得ザル時ハルブリンスキーノ會厭舉上器(第六十七圖)ヲ左手ニ把持セル喉頭鏡監視ノ下ニ舌根部ニ挿入シ中舌會厭韌帶ヲ強ク下前方ニ壓抵スルトキハ會厭軟骨ハ起立シテ容

第三百六十八圖



氏一キスリブル 器上舉厭會

易ニ且ツ廣ク其内景ヲ精視シ得可クU字狀ヲ爲スモノニ於テモ亦此法ニテ其目的ヲ達シ得小兒ニハ軟骨ハ通例此形ヲ爲スヲ

以テ之ヲ兒型ト云ヒ又洋州ニテハオメガガ狀(希臘ノO字形)トモ云ヘリ。

(三)小兒ニ於ケル検査 小兒ノ喉頭鏡検査ハ著シク困難ニシテ百方之ヲ愚論スルモ既ニ小兒ガ醫師ノ手ニセル器械ノ光ニ恐怖ノ念ヲ生ジタル以上ハ到底尋常ノ手段ニテ此目的ヲ遂グルコト難シ。通例強力ヲ以テ患者ヲ固定シ舌ヲ牽出セズシテ之ヲ舌壓子ニテ壓抵シ小喉頭鏡ヲ用ヒテ小兒ガ啼泣中深く吸氣ヲ爲スノ際ニ其検査ヲ試ム然レドモ所謂兒型會厭軟骨ハ既ニ上述ノ彎曲ヲ爲スガ故ニ容易ニ其目的ヲ達セザルコトモ尠カラズ。此際ハ寧ロ次ニ述ベントスル直達検査法ヲ撰ブノ可ナルコトアリ。

喉頭鏡検査法

キリアン法

五 喉頭鏡検査法ノ變法 Abarten der Laryngoskopie

(一)喉頭後壁視診法 一般ニキリアン法トシテ知ラレタルモノニテ其法ハ患者ヲ直立ノ姿勢ニ於テ頭部ヲ強ク前屈セシメ検査ハ坐位又ハ跪坐位ニ於テ反射鏡ヨリ或ハキルスタイン額燈ニ依リ光線ヲ下方ヨリ患者ノ咽頭中ニ送り、大喉頭鏡ノ背面ヲ以テ軟口蓋ヲ後上方ニ排擠シ同時ニ鏡面ヲ少シク水平ニ近カラシムル

側壁視診法

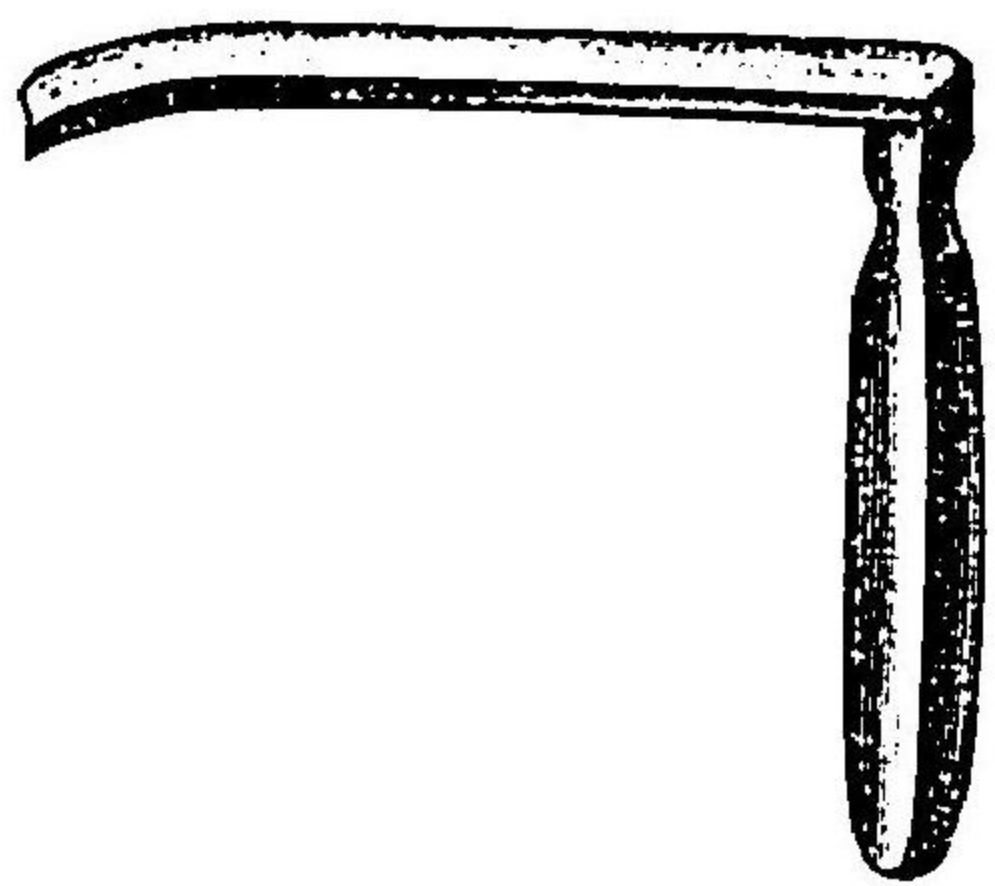
時ハ普通ノ場合ニ於テ不明瞭ナリシ喉頭後壁ハ開展セラレ尙ホ深ク氣管分岐部迄モ檢視シ得故ニ之ヲ亦上。間達氣管検査法 Tracheoskopia indirecta superior トモ云フ之ニ對シテ若シ氣管切開口ヨリ小鏡ヲ氣管内ニ挿入シ其映像ニ依リテ氣管ヲ檢スルトキハ之ヲ下。間達氣管検査法 Tracheoskopia indirecta inferior トモ云フ得ベシ  
(二)喉頭側壁ノ視診法 所謂アベリス法ニシテ普通ノ喉頭鏡検査ニ際シ患者ノ頭部ヲ少シク側方ニ傾斜セシメ喉頭鏡ヲ其傾斜側ニ偏シテ挿入スル時ハ特ニ反對側ノ聲門竇皺襞及ビモルガンニ一資等ヲ精査シ得可シ

直達喉頭検査法

二 直達喉頭検査法 Laryngoskopia directa s. Autoskopia laryngis.

前章ニ於テ述ベタル諸法ハ凡テ喉頭鏡ヲ用ヒテ其映像ニ依リ間接ニ内腔ヲ視

診スルモノナレドモ本法ハ之ニ異ナリテキル。ス。タインノ創意ニ基キ莨子ヲ用ヒテ舌背ヲ壓抵シ直接ニ喉頭内ヲ檢視スル法ニシテ縦令之ヲ普通ノ喉頭鏡検査法ニ代フル能ハザルモ亦以テ必要ナル一方法タルヲ失ハズ其法タル先ヅ患者ヲシテ坐位ヲ取り頭部ヲ強ク後屈シテ開口セシメキルスタイン莨子ヲ舌根ヲ超エテ其後端ヲ舌會厭



第九百六十九圖

キルスタイン直達鏡

鏡キルスタイン直達

第七百十七圖



子莨鏡直スゲンニユリア

皺襞ニ達セシメ強力ヲ用ヒテ之ヲ下前方ニ壓抵スル時ハ會厭軟骨ノ舉上ト共ニ喉頭腔ハ口腔ト一直管ヲ爲シテ吾人ガ視線上ニ來リ特ニ其後壁ハ氣管分岐點迄モ視診シ得可シ但シ此際光源トシテキルスタイン額燈或ハカスベル電燈ヲ用ユルモ可ナレドモ亦普通ノ反射鏡光線ヲ以テモ足レリトス。近時ブリュニングスハ特別ノ電燈ヲ附セル莨子第七百七十圖ヲ局處麻痺ノ下ニ咽喉ニ挿入シ更ラニ其末端ヲ會厭軟骨ノ喉頭面ニ達セシメ之ヲ壓定シテ直視スルノ前者ニ優レルヲ説ケリ(第四〇三頁參照)

本法ノ利害

本法ヲ行フニハ個人ニヨリ著シク難易ノ差アリテ且ツ患者ニモ大ニ不快ヲ感ゼシムルガ故ニ逼テ用ヒラルル者ニ非ザレドモ一ハ小兒ニ殊ニ迷朦法ノ下ニ之ヲ試ミテ其目的ヲ達シ易キト二ハ普通ノ場合ヨリモ喉頭後壁ヲ精査シ得ルノ利アリトス尙ホ喉頭内手術ニ際シテ廣ク之ヲ用ヒ得ルニ至ラバ便利多カル可シ。

氣管竝ニ氣管枝検査法

第二節 氣管竝ニ氣管枝検査法 Untersuchungs-

methoden der Trachea u. der Bronchien.

喉頭鏡検査法ニ據リテ間達的ニ喉頭ト共ニ氣管ノ一部モ亦タ視診シ得レドモ未ダ以テ吾人ノ意ヲ滿タシ能ハザリシニキルスタインガ直達喉頭検査法ヲ公ニ

検査法 氣管竝ニ氣管枝検査法

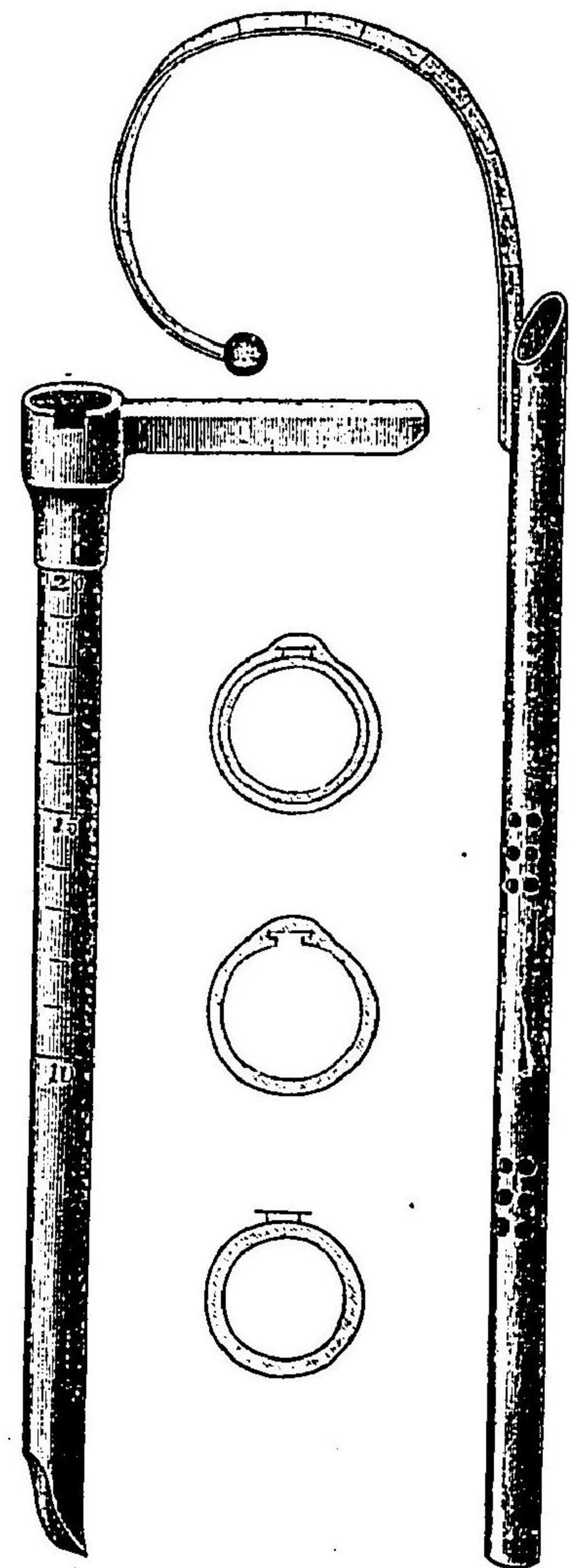
セル後三年ヲ徑テ一八九七年ニキリアンハ一強直管ヲ口腔ヲ經テ氣管内ニ挿入シ尙ホ氣管及氣管枝ノ著シク伸展移動スル性質ヲ利用シテ再ビ深ク之ヲ左右ノ氣管枝ニ迄達セシメ以テ氣管竝ニ氣管枝ノ内部ヲ精査シ得テ遂ニ之ヲ治療上ニ應用シテ卓越セル效果ヲ收ムルニ至リス即チ次ニ述ベントスル氣管氣管枝鏡検査法是レナリ

氣管竝ニ氣管枝鏡検査法

氣管、氣管枝鏡検査法 Die Tracheo-Bronchoskopie.

キリアンノ氣管枝鏡ハ其管ノ直徑七及ビ九密迷ノ二種ニシテ十三乃至四十一仙迷迄種々ノ長サヲ有スル金屬製直管ナリ之ヲ氣管切開口ヨリ挿入シ又ハキルスタイン薙子ヲ少シク變形セル導管ヲ以テ喉頭ヲ直視シツツ口腔ヲ經テ深ク氣

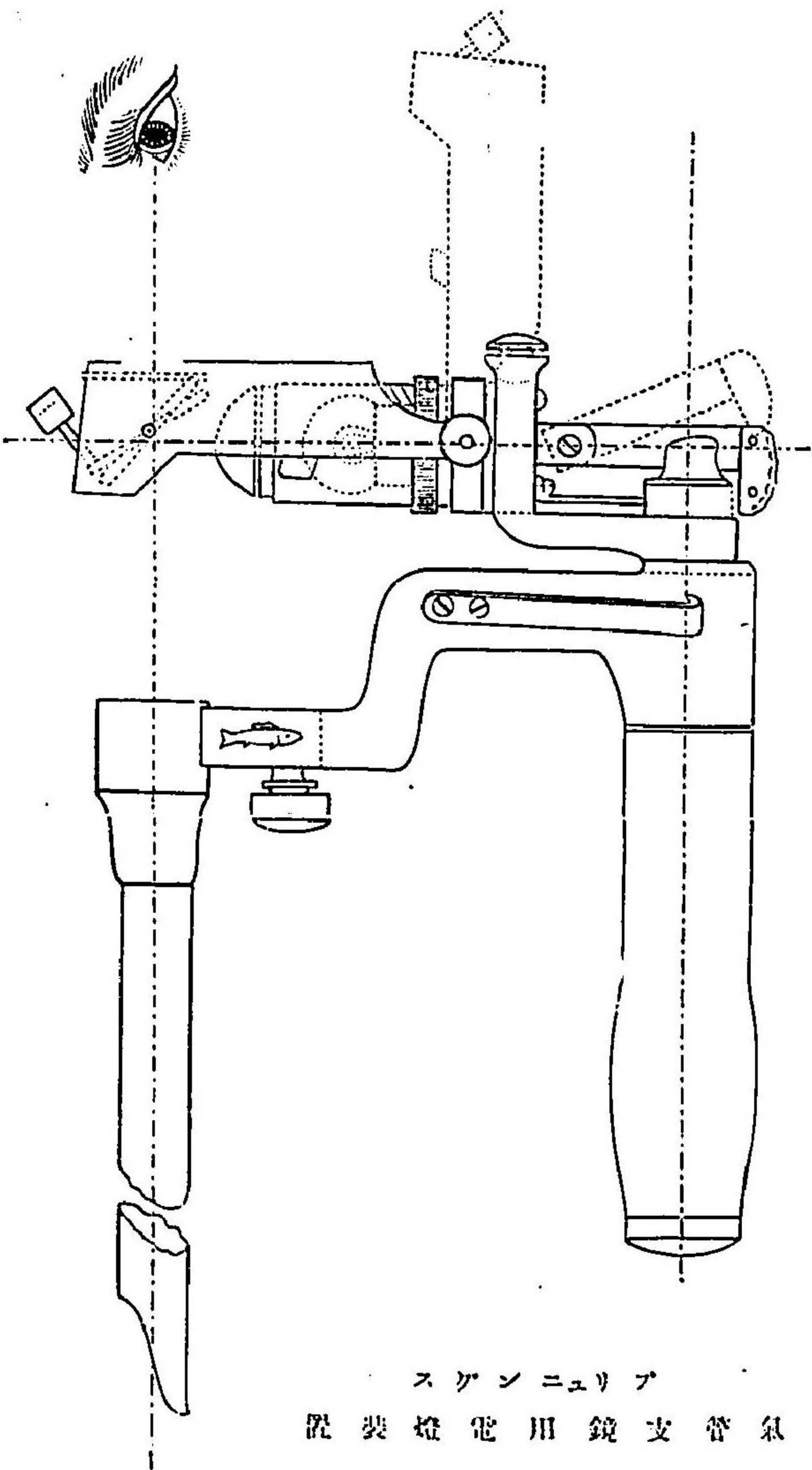
圖一十七百第



鏡枝管氣竝重性延可スゲンニユリア

管内ニ挿入シ額燈或ハカスベル電燈ノ照射ニ依リ管腔ヲ通ジテ氣管又ハ氣管枝ヲ直視スルニ在リ近時ブリュニングスノ改良セル者ハ(第百七十一百七十二圖)ニ示ス如ク之ヲ導管竝ニ移動管ニ分チ一條ノ管鏡ニシテ隨意ニ其長サヲ變更シ得

圖二十七百第



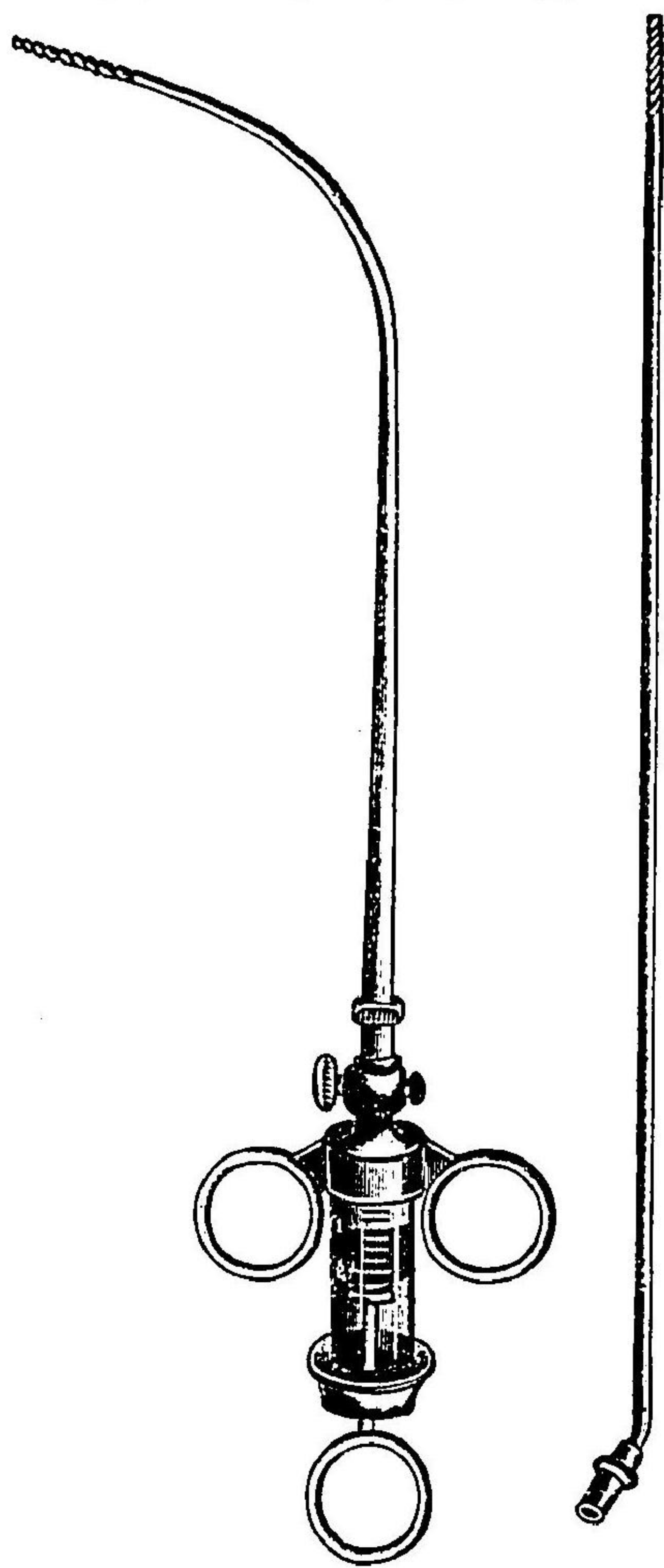
スゲンニユリア 置裝燈電用鏡支管氣

及ビ其管系ヲ大小種々トナシ且ツ其照射ニハ特別ノ電燈裝置ヲ導管ノ把柄ニ附セリ而シテ此氣管支鏡ヲ口腔ヨリ氣管竝ニ氣管枝ニ挿入スルヲ上氣管插鏡検査法ト稱シ氣管切開口ヨリスルヲ下検査法ト云フ

上氣管氣管枝  
鏡検査法

一、上氣管氣管枝鏡検査法 Die obere Tracheo-Bronchoskopie  
 患者ノ位置ハ通例坐位ヲ取ラシムルヲ便トスレドモ全身麻酔ヲ施ス時又ハ不安ナル患者ノ固定ヲ要スル際及ビ検査時間ノ長キニ亘ル者ハ仰臥セシメ懸垂頭位ニテ之ヲ行フ  
 麻酔ハ全身若クハ局部處トモ應用シ得レドモ呼吸困難ヲ有スルモノニハ全身麻酔ハ大ニ注意ヲ要ス局處麻酔劑トシテハ二〇%コカイン水ニアドレナリンヲ十ト一ノ比例ニテ混ジタル溶液ヲ用ヒ咽頭壁ヨリ氣管分岐部ニ至ル迄之ヲ塗布シ以テ全ク其反射機能ヲ消失セシム此目的ニ向ツテハグリユニンクスノ注入塗布器(第七十三圖)ヲ用ヒ或ハ又先ヅ喉頭ヲ麻痺セシメシ後チ氣管鏡ヲ插入シ視診シ

圖 三 十 七 百 第



器入注管氣ニ鏡頭喉スゲンニユリア

ツツ漸次深部ヲ麻痺セシムルモ可ナリ但シ此際コカインノ全量ハ極量ノ十倍以上ニ達スルコト屢々ナレドモ注射ノ場合ト異ナリテ常ニ危険ナル者ニ非ラズ唯ダ患者ヲシテ其唾液ヲ嚥下セズシテ嚔出セシムルヲ必要トス

管鏡插入法 茲ニハ坐位ニ於ケル患者ニ就テ述ブレドモ其臥位ニ在ルモ同致ナリ先ヅ患者ヲシテ其頭部ヲ少シク後屈シ左手ヲ以テ舌ヲ牽出セシメ検査者ハ其右手ニ把持セル導管ヲ以テ患者ノ舌背ヲ壓下シツツ會厭軟骨ノ先端ヲ見得ル迄大凡五乃至七仙迷突挿入ス但シ此際術者ノ左手ハ導管ニ對シテ患者ノ上唇竝ニ門齒ヲ保護スルト同時ニ其拇指竝ニ示指ハ又管ノ挿入ニ際シテ之ヲ導クベシ而シテ管ノ大小ハ豫ジメ患者ノ年齢ニ相當セル者ヲ撰ビ且ツ煮沸消毒ヲ爲ス可キハ勿論ナレドモ使用ニ先ツテ適宜加温シ以テ呼吸ニヨリテ生ズル管腔ノ曇翳ヲ防ギ尙ホ外面ニ塗油シテ其挿入ヲ粘滑ナラシムベシ斯クシテ會厭軟骨ノ現ハルルヤ少シク其把柄ヲ運用シ管ヲシテ會厭軟骨端ノ内側ニ入ルコト略ボ式仙迷ナラシメ同時ニ患者ヲシテ舌牽出ヲ止メ且ツ強ク頭部ヲ後屈セシメ管鏡ヲ以テ舌根ヲ壓定スルトキハ茲ニ喉頭内腔ヲ直視シ得可シ(直達喉頭検査法)次デ吸氣ニ際シ聲門ノ開大スルト共ニ直チニ管ヲ進メテ氣管内ニ入ル時ハ其壁及ビ分岐部ヲ明ラカニ視ルヲ得次デ此導管内ニ再ビ移動管ヲ裝ヒ其長サヲ加減シテ以テ任意ノ個所ニ達セシメ之ヲ左又ハ右側氣管枝ニ插入シ其氣管枝梢ヲ檢視ス可シ此際移動管壁ニ設ケタル孔ヲ插入セザル方側ノ氣管枝ニ向ハシメ以テ其呼吸ヲ便ニ

直達喉頭検査法

禁忌症

ス  
 小兒ニ於テハ通例全身麻醉ヲ行ヒ尙ホ其管腔ノ小ナルト且ツ抵抗力ノ弱キ等ノ爲メ上法ヨリモ下法ヲ撰ブヲ善シトス  
 禁忌症 Contraindication. 上法ニ於ケル絶對的禁忌症トシテハ高度ノ呼吸困難、大動脈瘤、失調性心臟病、高度ノ動脈硬化症及ビ既ニ腦出血ニ罹リシ者等ニシテ尙ホ如何ナル場合ニ下法ヲ撰ブ可キ乎ニ就テハ下法ノ條下ニ述ブル所アル可シ但シ既ニ危険症ヲ伴ヘル氣管又ハ氣管枝内異物ニ際シテ何等ハ禁忌症無キハ勿論ナリトス。

下氣管氣管枝鏡検査法

二下氣管氣管枝鏡検査法 Die untere Tracheo-Bronchoskopie  
 前法ト同ジク管鏡ヲ以テ氣管竝ニ氣管枝ヲ直視スルノ方法ナレドモ其異ナル所ハ之ヲ氣管切開口ヨリ挿入スルニ在リトス

此際患者ノ位置ハ前法ト同ジク座位ヲ便トスレドモ臥位ナルモ更ニ妨無ク麻醉モ亦全身ニテモ可ナレドモ凡テノ場合ニ局處麻醉ニテ行ヒ得ルヲ以テ本法ノ長處トス之ニ向ツテハ十%コカイン水小兒ニハ五%ヲ用ヒ殊ニ能ク創口、氣管後壁竝ニ其分岐部等ノ敏感ナル粘膜ヲ麻痺セシム次デ之ニ氣管鏡ヲ挿入スルコトハ極メテ容易ナリ

上下兩法ノ適應症

氣管枝鏡検査ヲ行フニ當リ先ヅ此上下兩法ノ孰レヲ撰擇ス可キ乎ニ就テハ豫カシメ嚴正ナル考慮ヲ要ス故ニ茲ニ先ヅ如何ナル場合ニ特ニ下法ヲ撰バザル可

ラザルカヲ述ブレバ其上法ノ應用範圍モ亦自カラ明カナル可シ。

下法ニ於ケル適應症 Indicationen der unteren Methode 下法ノ絶對的適應症ハ

- (一) 患者ガ既ニ氣管瘻孔ヲ有スルトモ、
- (二) 高度ノ呼吸困難ヲ有シ同時ニ全身麻醉ヲ要スル時、
- (三) 氣管氣管枝内異物ニシテ假令上法ヲ行ヒ得ルモ其異物が喉頭ヲ通過スルハ困難ナルベキ時、
- (四) 小兒ニ於テ既ニ試ミラレシ上法ハ少シニテモ困難ヲ感ゼシ時等ニシテ

其他患者ガ喉頭性呼吸困難ヲ有スル場合或ハ又タ異物が既ニ久シク氣管又ハ氣管枝内ニ介在シ周圍粘膜ハ著シク腫脹セルガ如キ場合ニハ上法ヨリモ寧ロ安全ナル下法ヲ撰ブノ當ヲ得タル者ナル可シ蓋シ下法ハ上法ニ比シテ頗ル容易ナル而已ナラズ上法ノ如ク時間ヲ要セズ又苦痛ヲ患者ニ強ユルモノニ非ズ尙ホ呼吸障礙ヲ増悪セシムル全身麻醉ヲ何レノ場合ニ於テモ避クル事ヲ得且ツ氣管切開術ハ毫モ危険ナル者ニ非ズシテ其創口モ亦直チニ第一期癒合ニテ治スレバナリ。

### 第四章 一般診斷症候論

Allgemeine Diagnostik u. Symptomatologie.

喉頭及ビ氣管諸病ノ診斷モ亦一般診斷學ノ順序ニ從ツテ行ハル可キモノナレ



病歴

一 病歴 Anamnese

ドモ特ニ是等ニ就テ必要ナル條項ヲ列舉シ同時ニ亦必須ナル微病的症狀ヲ併記セムトス。

一般症狀

遺傳生活狀態既往症現病既往症及自覺症狀等ニ就テ診斷上注意ス可キ症狀ハ一一般症狀 Allgemeine Erscheinungen ノ急ニ犯サルルハ主トシテ蜂窩織炎並ニ急性傳染性疾患ニシテ慢性症ニハ結核癰腫等ニ見ルコト多シ。

疼痛

二疼痛 Schmerzen 談話咳嗽嚔下等ニ際シテ訴フル疼痛ハ患者ハ自ラ之ヲ喉頭ニ歸スルモノ多キモ却ツテ咽頭ニ其原因ヲ有スルコト屢ナリ然レドモ喉頭入口部ノ病變又ハ咽頭後壁ハ潰瘍性疾患等ニ因リテ高度ノ疼痛就中嚔下痛ヲ來スコト稀ナラズ此際ハ疼痛ガ又迷走神經ヲ經テ耳内ニ放散ス

異常感

三異常ノ感覺 Abnorme Sensation 喉頭疾患ニ際シテハ疼痛ヨリモ却ツテ異常ノ感覺ヲ訴フルモノ多シ即癢痒灼熱乾燥及ビ異物等ノ感ニシテ炎症ノ初期又ハ慢性疾患或ハ「ヒステリ」等ニ多ク見ル所ナリ

嚔下困難

四嚔下困難 Schluckbeschwerde 嚔下痛ト同時ニ咽頭疾患ニ因リテ來ルコト多ケレドモ喉頭ノ病變ニモ亦之ヲ見ル殊ニ喉頭結核ニ於テハ屢々高度ニ現ハル其他知覺或ハ運動障礙ノ存スル時ニハ失嚔ヲ來スコトアリ則チ球麻痺實扶埤里及ビ回歸神經麻痺等ニ見ルガ如シ

呼吸困難

五呼吸困難 Atemnot 「ヒステリ」患者ニテ何等ノ病變ヲ有セズシテ呼吸困難ヲ訴フルコトアレドモ本症候ハ主トシテ氣道ノ狹窄ニ因テ起リ而シテ喉頭ノ狹窄ハ聲門痙攣症脊髓癆性發作急性炎症性疾患殊ニ蜂窩織炎並ニ實扶埤里等ニハ俄然トシテ來リ腫瘍及ビ兩側後筋麻痺等ニハ徐々ニ成立ス氣管狹窄ハ頸部並ニ胸部ノ腫瘍即チ甲状腺腫動脈瘤縱隔質腫瘍及ビ食道腫瘍等ノ壓迫ニ因シ又ハ管腔内ニ於ケル病變例之バ異物癍痕或ハ護謨腫等モ之ヲ由來ス

聲音ノ變化

六聲音ノ變化 Veränderung der Stimme 聲音ハ呼氣ノ壓力ニ依リ聲帯ノ振動ヲ起シテ發生スル者ナルガ故ニ上氣道ノ疾患ニ際シテ容易ニ其變化ヲ來ス可キハ明カナリ聲音嘶啞 Heiserkeit トハ聲音不純ニシテ粗烈ナル音ヲ發スルヲ云ヒ全ク音調ヲ失ヘルヲ失聲 Stimmlosigkeit s. Aphonie ト稱ス其他同時ニ種々ノ音ノ重複セルヲ重復音 Doppelstimme トシ其薄弱ニシテ無響性ナルヲ聲音薄弱症 Stimmchwäche s. Phonasthenie トス是等諸徵ノ診斷的價値ニ就テハ尙ホ後章ニ述ブル所アルヘシ

咳嗽

七咳嗽 Husten 咳嗽ハ既述セルガ如ク異物ノ進入又ハ分泌物ニ依リテ主トシテ喉頭粘膜ヨリ反射的ニ招來セラルル者ナリ殊ニ其粘膜ノ加答兒ニ陥キリ過敏ト成レルトキハ僅少ナル刺激モ已ニ能ク著シキ咳嗽發作ヲ起サシム通例斯カル場合ニ起ル咳嗽ヲ乾咳 Trockener Husten ト云ヒ之ニ反シテ肺炎肺結核等ニテ其咳嗽ガ多量ナル分泌物ヲ伴ヒ其響モ前者ノ如ク粗烈ナラズシテ充實セルトキハ之ヲ濕咳 feuchter Husten ト稱ス咳嗽ハ喉頭殊ニ聲帯ノ狀態ニ關係スル者ニシ

テ聲ヲニシテ尋常ナル時ハ其咳嗽ノ音モ亦充實スレドモ此部ニ病的變化ヲ有スル時ハ嘶啞性犬吠性或ハ失聲性等ト爲ル殊ニ犬吠聲咳嗽ハ喉頭下腔粘膜炎腫脹セル場合ニ多シ又何等ノ病變ヲ認ムル無クシテ發スル神經性咳嗽 *nervöser Husten* ハ頑固ナレドモ患者ノ注意ヲ轉換スル時ハ輕減シ又ハ睡眠時ニハ全ク停止スル者トス咳嗽ハ又時間或ハ患者ノ位置變換等ニヨリ其發作ニ異同ヲ生ズルコトアリ是レ蓋シ各其ノ場合ニ於ケル分泌物ノ状態ニ因スル者ナリ。

咳嗽刺激ニ向テ鋭敏ナル場所ハ喉頭竝ニ氣管ノ後壁及ビ氣管分岐部等ナレドモ亦凡テ上氣道ノ粘膜炎之ヲ招來シ得可ク又鼻腔咽喉等ノ粘膜炎ヨリモ起ルコトアリ其他尙ホ外聽道ノ刺激ニヨリ或ハ時トシテハ外皮視器肝臟膽囊子宮竝ニ其附屬器腸胃等ヨリ反射的ニ咳嗽發作ヲ誘起スルコトアルガ如シ

咯出物

尙ホ咳嗽ハ單ニ反射的而已ナラズシテ意識的ニモ之ヲ發セシムルヲ得又時トシテ腦疾患ニ際シ中樞性咳嗽發作ヲ見ルコトアリ

八、咯出物 *Auswurf* 尋常ノ場合ニ在ツテハ少量ニシテ粘液様ナレドモ病的ニハ其量ヲ増加シ且ツ粘液様純膿様或ハ血液性膿様ナリ膿様ノ分泌物ハ主トシテ微毒結核癌腫軟骨膜炎等ノ潰瘍性破壞ニ因リテ來リ出血ノ少量ナルハ劇シキ咳嗽ニ際シテ喉頭粘膜炎ニ於ケル小血管ノ破裂ニ因ツテ來レドモ其大量ナルハ潰瘍性變化殊ニ喉頭痛或ハ出血性喉頭炎竝ニ手術ニ因ルモノノ外ハ概テ肺臟ヨリ來ル者トス時トシテ鼻及ビ鼻咽腔ヨリ流下セル血液ヲ咯出シタルヲ誤ツテ其源

現症

一般ノ診査

ヲ肺臟ニ歸スルガ如キ無シトセズ注意セザル可ラザルナリ是等ノ咯出物ハ時ニ惡臭ヲ放ツコトアリ之ハ通例壞敗セル膿瘍或ハ肺壞疽等ニ因スルヲ多シトス又是等ノ咯出物ニハ屢組織的竝ニ細菌的検査ヲ行ハザル可ラザルハ論ヲ俟タズ

二 現症 *Status praesens*

一 一般診査 *Allgemeine Untersuchung*

局處診査ト共ニ一般診察ハ亦診斷上缺ク可ラザルモノナリ即チ吾人ハ診察ニ際シ患者ノ體格體質營養狀態精神狀態皮膚體溫脈搏等ニ對シテ正確ニシテ且ツ迅速ナル觀察ヲ下サザル可カラズ其然ルニ拘ハラズ世ノ所謂專門家中ニハ局處以外ノ事ニ就テハ其注意ヲ缺ケルノミナラズ却テ他ヲ知ラザルヲ以テ其專門ヲ誇ラントスルガ如キモノ無シトセズ誤レルノ甚ダシキモノト云ハザル可ラズ吾人ハ此點ニ於テ深ク初學者ヲ戒シムルモノナリ

體位

尙ホ喉頭ノ疾患ニ際シテ特ニ注意ス可キハ  
一 患者ノ體位 *Körperlage des Patienten* 高度ノ呼吸困難ヲ有スル患者ハ概テ坐位ヲ執リ又此際狭窄ガ喉頭内ニ存スル時ハ其頭部ヲ少シク後屈スレドモ若シ狭窄ガ深ク氣管ニ占位スル時ハ之ニ反シテ頭部及ビ胸部ヲ前屈スルヲ多シトス是等

ノ患者ニ在リテハ全身ニチアノーゼヲ呈シ副呼吸筋ト共ニ鼻翼ノ強ク呼吸運動

鼻腔、鼻咽腔、口腔ノ疾患

胸部臓器ノ疾患

神経系統ノ疾患

局所診査

外部診査

視診

ヲ營ムヲ見ルノ他ニ喉頭狹窄ニ際シテ吸氣時ニ氣管狹窄ニ於テハ呼氣時ニ喘鳴ヲ聞クコト多シ

二鼻腔、鼻咽腔、及口腔等ノ疾患 Krankheiten der Nase, des Nasenröhrens u. der Mundhöhle. 喉頭ノ疾患トハ殊ニ密接ノ關係ヲ有ス若シ是等ヲ檢セズシテハ未ダ喉頭ニ就テ何ヲモ語ル能ハザルナリ

三胸部臓器ノ疾患 Krankheiten der Brustorgane. 肺臓竝ニ心臟ノ疾患ハ又喉頭氣管諸病ノ原誘因ヲ爲スコト多キガ故ニ喉頭氣管等ニ病變ノ存在スル場合ニハ必ラズ是等ノ臓器ヲ精査シテ以テ正確ナル診斷ヲ下スベシ

四神經系統ノ疾患 Krankheiten des Nervensystems. 喉頭ニ於ケル神經性疾患ハ屢々腦延髓脊髓等ノ疾患ニ因スルモノ多キガ故ニ是等神經系統ノ疾患ニ就テ精密ニ診察スルコトヲ忘ル可ラズ

一 局處診査 Locale Untersuchung.

一 外部診査 Äussere Untersuchung.

(一) 視診 Inspection. 喉頭竝ニ甲状腺ノ位置形狀左右ノ異同外皮膚ノ變化嚙下竝ニ呼吸ニ際スル移動等ニ就テ注意ヲ要ス若シ喉頭障礙ニテ呼吸困難アル場合ニハ前述セル頭部ノ後屈ト共ニ喉頭ハ吸氣ニ際シテ強ク下方ニ沈降シ呼氣時ニハ再ビ上方ニ移動スルヲ見レドモ氣管内ニ存スル狹窄ニハ此移動ヲ認ムル能ハザ

觸診

聲音ノ検査

内腔ノ診査

視診

ツルカ或ハ甚ダ僅微ナル可シ

(二) 觸診 Palpation. ハ更ラニ精シク視診ヲ補フ而已ナラズ其他動抵抗、壓痛等ヲ檢シ及ビ淋巴腺腫脹ヲモ知ルヲ得又發聲ニ際シテ喉頭ノ外部ヨリ其左右各半部ノ聲音振頭ヲ觸レテ之ヲ比較スベシ即若シ一側ノ聲屑麻痺又ハ腫瘍等ノ存在スル時ハ同側ノ聲音振頭ハ他側ニ比シテ薄弱ナリ其他喘鳴的振頭ヲ觸知シテ狹窄部ノ位置ヲ知り得ルコトアリ

(三) 聲音ノ検査 Prüfung der Stimme. 談話ニ際シ或ハ患者ヲシテ特ニ聲音ヲ發セシメテ其性質ヲ檢スルハ喉頭振頭ノ觸診ト共ニ亦必要ナリ。通例聲音嘶哑ハ加答兒性或ハ神經性疾患ニ多ク失聲症ハ兩側聲屑ノ著シキ破壞ニ因リ或ハ兩側回歸神經麻痺又ハヒステリー等ニ來リ重複音ハ聲屑上ノ新生物アルトキニ現ハレ聲音薄弱症ハ一般衰弱胸腹腔内疾患、氣管狹窄及ビ回歸神經麻痺等ニ多シ

二 喉頭、氣管、氣管枝内腔ノ診査 Innere Untersuchung des Kehlkopfs, der Trachea u. der Bronchien.

(一) 視診 Inspection. 通例ノ場合ニ在ツテハ喉頭鏡ヲ以テ喉頭内腔ヲ檢シテ其診斷ノ目的ヲ達シ得ル者ナレドモ時トシテ尙ホ喉頭、氣管、氣管枝ノ直達的檢査ヲ必要トスル事アリ。是等ノ方法ニ就テハ既ニ前章ニ於テ詳述セル所ナレバ茲ニハ唯ダ診斷時ノ注意ニ就テ記述ス可シ

喉頭鏡檢査ニ際シ單ニ聲屑而已ヲ視得テ以テ終レリト爲ス可ラズ却ツテ聲屑

以外ノ部ニ著シキ病變ヲ認ムルコト屢ナリ、即此際聲、唇、ノ、色、竝ニ運動等ニ注意ス  
 ルト共ニ又資敏、賤、竇、口、喉頭後壁、喉頭下腔、氣管、喉頭入口部、會厭軟骨及ビ食道入口  
 部等ニ就テ其粘、膜、ノ、色、腫、脹、ノ、有、無、或ハ腫、瘍、潰、瘍、等ノ存在スルアラバ其性質、分、泌  
 物、ノ有無等ニ就テ精細ニ檢視ス可シ、通例粘、膜、ノ著シク蒼白ナルカ或ハ喉頭後壁  
 ノ浸潤又ハ潰瘍等ハ結核症ノ疑アリ、聲、唇、ノ不動ハ主トシテ披裂軟骨或ハ其關節  
 ノ病變又ハ神經性麻痺若クハ喉頭後壁ニ於ケル強度ノ浸潤等ニ基ヅクヲ常トス。  
 尙ホ喉頭後壁ニ就テ精査ヲ要スル時ハキ、リ、ア、ン、法、又ハ直、達、鏡、檢、査、ヲ施コスベシ  
 直、達、鏡ニ就テハ前述セルガ如ク之ヲ以テ直チニ喉頭鏡檢査法ニ代フル能ハザ  
 レドモ小兒又ハ喉頭鏡檢査不能ノ際ニ之ヲ用キテ目的ヲ達シ得ルコトアリ  
 氣管、枝、鏡、檢、査、法、ハ主トシテ氣管枝内異物、其炎症、狹窄等ニ診斷竝ニ治療的ニ  
 應用セラレドモ漸次此法ノ熟練ト經驗トヲ得ルニ從ツテ其應用ノ範圍モ亦々  
 擴張セラレルニ至ル可シ

(二) 觸診。 Palpation 喉頭氣管ノ粘、膜、又ハ病的產物ニ就テ知覺或ハ抵抗等ヲ知ラ  
 ンガ爲メニ喉頭鏡又ハ氣管枝鏡ニヨリ各適宜ノ消息子ヲ用ヒテ之ヲ檢ス、或ハ時  
 トシテ直チニ指頭ヲ插入シテ喉頭入口部附近ヲ觸診スルモ可ナリ殊ニ小兒ニ於  
 テ然リトス

觸診

### 第五章 一般病因論 Allgemeine Aetiologie.

喉頭及ビ氣管ハ鼻腔、咽腔等ト相連續スル上氣道ノ一系ナルガ故ニ鼻、及ビ咽頭  
 疾、患、ノ諸原因ハ亦悉ク直接或ハ間接ニ喉頭疾患ノ原因ト爲ルモノナレバ茲ニ特  
 ニ喉頭竝ニ氣管ノ疾患ト密接ナル關係ヲ有スルモノニ就テ述ベントス、元來喉頭  
 氣管諸病ノ原因ハ之ヲ外部ヨリ作用セルモノト附近又ハ離隔セル疾患ヨリ波及  
 セルモノハ即チ内外ノ兩因ニ分ツテ得可シ。

#### 一 外因 Aeusere Ursache.

外因  
 感冒  
 煙草、アルコール

過熱性過刺戟性食  
 物

感冒ガ喉頭及ビ氣管諸病ノ原因トシテ重要ナルコトハ恰モ其鼻咽頭ノ疾患ニ  
 於ケルト同様ナリ。  
 煙草、竝ニアルコールモ、特ニ喉頭及ビ氣管ニ對シテ其害毒ヲ逞シクスルモノニ  
 シテ、喫烟家ニシテ多少ノ氣管枝加答兒ヲ有セザルハ稀ナリ、アルコールモ單ニ直  
 接ニ粘、膜、ヲ刺戟スル而已ナラズ、消化機能ニ影響ヲ及ボシ、爲メニ生ズル鬱血ニ因  
 リテ、喉頭氣管ノ疾患ヲ誘起シ、又ハ之ヲ増悪セシム。故ニ止ムヲ得ザル場合ノ外是  
 等ノ患者ニハ禁酒禁煙セシム可シ。  
 過熱性又ハ過刺戟性食物モ亦此原因中ニ數ヘザル可ラズ。

外傷  
 物理學的刺戟  
 發聲器ノ過勞  
 狭小ナル襟  
 聲音變換  
 內因  
 鼻竇ニ咽頭疾患  
 微毒、結核、癆瘵  
 頸部竝ニ胸部腫瘍

其他喉頭ハ其位置的關係ヨリシテ、打撲衝突等ノ外傷 Acussere Verletzungenヲ受クルコトアリ或ハ生理的關係ヨリ大氣ノ溫度塵埃等ニヨル理化學的刺戟ニ因リテ罹患スル事モ多シ例之バ氣候ノ急變塵埃多キ場所ニ於ケル勞働、有毒瓦斯ノ吸入等ノ如キ是ナリ

發聲器ノ過勞モ亦タ直接ニ作用スル原因ニシテ之ニ飲酒、喫烟ノ加ハルニ於テハ其害毒ノ著シキハ明ニシテ持續性咳嗽モ亦然リトス

狭小ナル襟モ爲メニ頸部ノ循環障礙ヲ來シ喉頭疾患ヲ補助スルコトアリ

聲音變換 Stimmswechsel ハ吾人ガ生理的身體發育ノ一機轉ナリト雖モ若シ之ニ他ノ刺戟ノ加ハルアラバ一定ノ疾病ト成ルコトアリ

二 內因 Innere Ursache.

身體内ニ於ケル原因ニ就テハ細心精査セザレバ或ハ其疾患ノ性質ヲ誤ル事アリ今其主要ナルモノヲ擧グレバ

鼻及ビ咽頭疾患 是等ハ連續的ニ喉頭ニ波及シ、又ハ間接ニ鼻呼吸ノ障礙ニヨリ不潔ニシテ寒冷ナル空氣ノ喉頭竝ニ氣管ヲ刺戟スルニ因ル

微毒、結核、癆瘵等モ亦屢々續發的ニ喉頭ヲ犯スモノニシテ殊ニ結核ハ殆ンド常ニ肺結核ニ繼發スルモノナリ

頸部竝ニ胸部腫瘍ノ壓迫ニ因リ喉頭竝ニ氣管ハ狹窄或ハ鬱血症狀ヲ呈シ、又ハ

動脈瘤  
 心臟竝ニ肺臟疾患  
 神經系統  
 生殖器  
 急性傳染病  
 貧血、新陳代謝病、中毒

喉頭神經ノ傳達機能ヲ遮斷スルコトアリ例之バ甲狀腺腫、食道癌、縱隔竇腫瘍、氣管竝ニ氣管枝、淋巴腺結核、膿腫及ビ癌腫等ニ於テ之ヲ見ル

胸部竝ニ頸部ニ於ケル動脈瘤ニ際シテモ亦同ジ

心肺臟疾患ニ因リテ亦神經麻痺ヲ來スコトアル而已ナラズ鬱血症狀ヲ呈シ且ツ既ニ成立セル喉頭疾患ヲシテ慢性ニ傾カシム例之バ心囊炎、肺炎、肺尖肋膜炎、癆瘵等ニヨリ麻痺ヲ肺氣腫、心臟瓣膜病ニ因リテ慢性加答兒ヲ見ルガ如キ皆然リ肺結核ニ際シ屢々喉頭ヲ犯ス事アルハ既ニ述ベタリ

神經系統ノ器質的竝ニ官能的障礙ニ現ハルル喉頭症ハ殊ニ鈔カラズ例之バ脊髓癆、球麻痺、多發性硬化症、腦微毒、腦軟化症、腦腫瘍、其他ヒステリー「ノイラステニー」等ノ際ニ喉頭麻痺、痙攣等ノ諸症狀竝ニ知覺障礙ヲ來スガ如シ

生殖器モ亦喉頭ニ影響ヲ及ボスコトアリテ月經ニ際シ喉頭粘膜炎ヨリ代償的出血ヲ來シ、又ハ月經時或ハ妊娠ニ際シテ喉頭病變ノ増悪シ、或ハ結核、癌腫等ニテハ著シク浮腫ヲ起ス

其他諸種ノ急性傳染病ニ際シテ喉頭竝ニ氣管ハ共ニ罹患シ及ビ

貧血、新陳代謝病、中毒等モ之ガ原因ヲ爲ス事アリ皆逐次其各論中述ブル所アル可シ

### 第六章 治療汎論 Allgemeine Therapie.

#### 第一節 一般療法 Allgemeine Behandlung.

一般療法  
鐵鼻療法、空氣療法、水治法

飲食物

禁烟

聲音衛生

内服藥

局處療法

頸部療法

喉頭竝ニ氣管ノ疾患ハ亦諸他ノ局處疾患ニ於ケルガ如ク、一般療法ノ必要ナルノミナラズ或ル場合ニハ單ニ之ニ由テノミ治療スベキモノアリ  
一般療法中、常ニ宜シキハ空氣療法 Luftkur 鐵泉療法 Brunnenkur 水治法 Wasserkur 等ナリトス而シテ是等ノ效果トスベキハ寧ロ其外來ノ刺激ヲ避ケテ喉頭ヲ改善セラレタル生活状態ニ置クノ故ニ歸スベキモノナリ

飲食物ハ嚥下ニ際シ廣ク喉頭粘膜ト接觸スルモノナルガ故ニ凡テ刺激性ノモノヲ禁ジ、且ツ止ムヲ得ザル場合ノ他ハアルコール及ビ喫烟ヲ禁ズ可シ  
尚ホ、凡テ聲音ノ衛生ハ必要ニシテ、ヒステリー性官能的障礙ニ因セルモノノ外ハ、發聲ヲ節制セシム可シ

内服藥モ亦屢々鎮咳、鎮痛、鎮痙等ノ目的ニ必要ニシテ主トシテモルフィン、コデイン等ノ麻醉劑ヲ用ユレドモ、粘液溶解劑トシテ沃度加里ヲ撰ブ

#### 第二節 局處療法 Locale Behandlung.

局處療法トシテ喉頭ノ急性炎症ニ際シ、咽頭ニ於ケルガ如ク、頸部療法 Halsansch

藥劑的療法

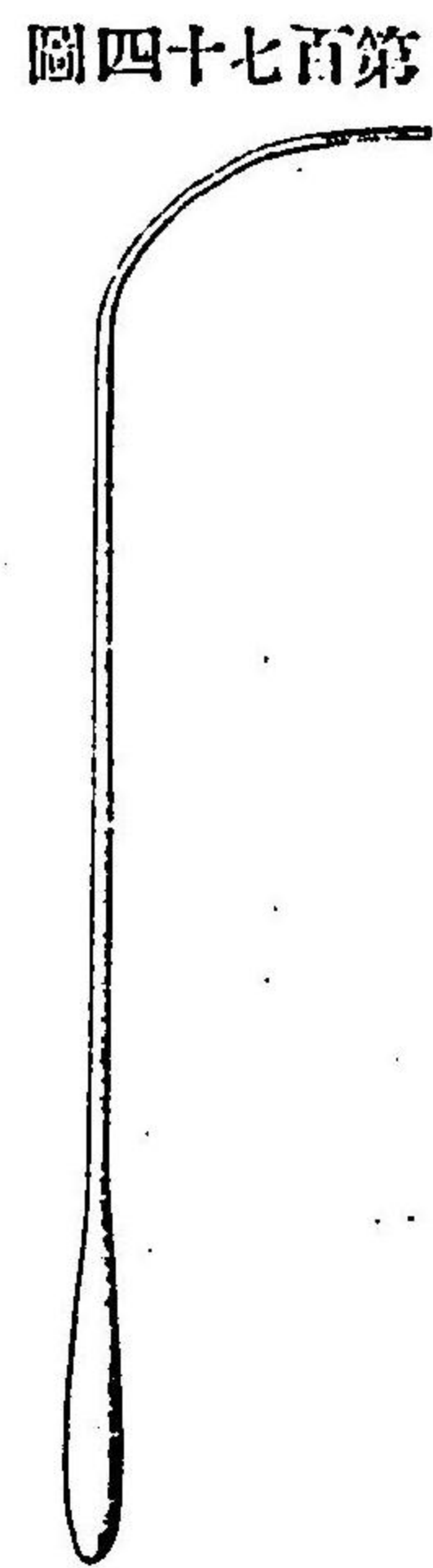
塗布又ハ注入

即チ冷若クハ温フリースニツツ、卷法ヲ稱用ス其他ノ局處處置ハ之ヲ藥劑電氣及ビ手術的ノ三種ニ別テテ説述セン

#### 一 藥劑的療法 Medicamentöse Behandlung.

直接喉頭内ニ貼スベキ藥劑ハ液、體、粉、末、瓦、斯、或ハ蒸氣等ノ種々ナル形態ニ於テ使用セラレルモノニシテ、殊ニ喉頭ノ全表面ニ作用セシメントスルニハ「スプレー」又ハ吸入器ニ依リテ瓦斯又ハ蒸氣トシテ用キ局部ニ向ツテハ、粉劑ヲ吹撒シ、又ハ藥液ヲ塗布或ハ注入ス

#### 一 藥液塗布竝ニ注入 Insehung u. Einspritzung

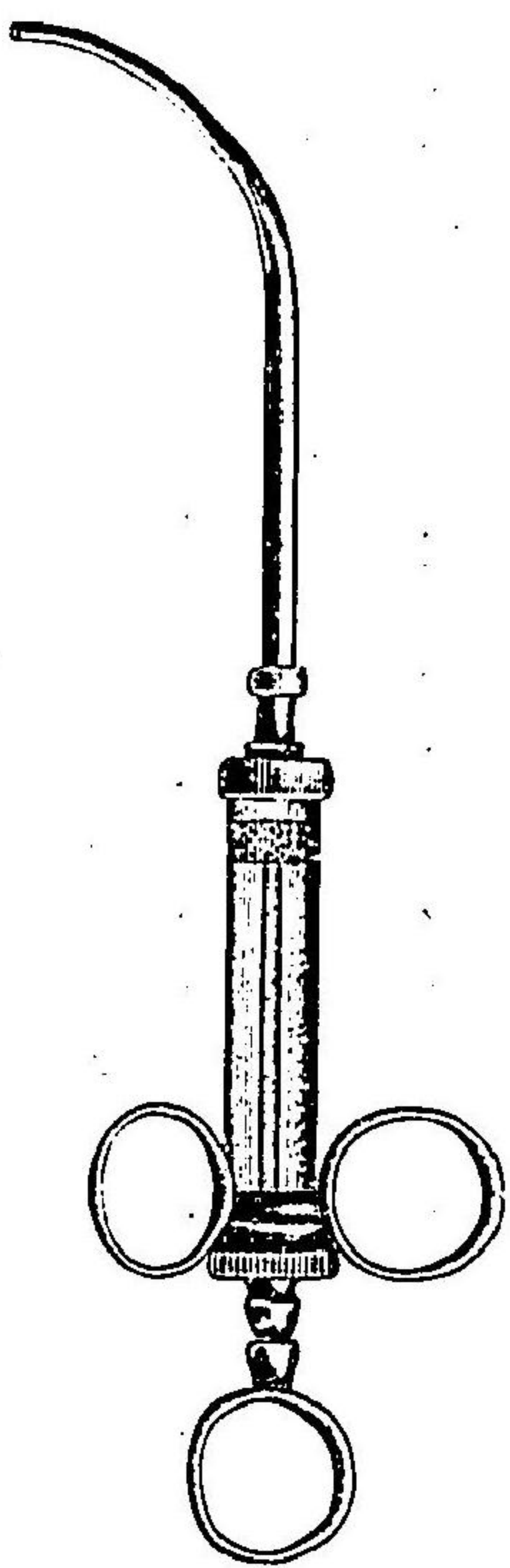


圖四十七百第

卷、綿、子、Watteträgerノ尖端ニ棉花ヲ壓ク卷キ之ニ藥液ヲ浸シテ、左手ニ把持セル喉頭鏡ノ映像ニヨリ之ヲ插入シテ會厭軟骨ノ上縁ヲ超ユルヤ、柄端ヲ舉上シ

テ其棉花端ヲ喉頭内ニ達セシメ、任意ノ個處ニ藥液ヲ塗布シ及ビ數回局部ヲ摩擦ス尚ホ此際ハ豫メ患者ニ發聲ヲ命ジ置クコトヲ忘ルベカラズ  
藥液ヲ汎ク喉頭ニ送ルニハ注入器 Die Kehlkopfspritze. ヲ使用スベシ此注入ヲ爲スニハ等シク喉頭鏡ヲ導子トシテ先端ヲ喉頭内ニ達セシメ之ヨリ藥液ヲ滴下シ又ハ注入ス、而シテ器械ノ運用ハ卷綿子ニ於ケルト同致ナリ但シ藥液ヲ深ク喉

圖五十七百第



喉頭噴霧器

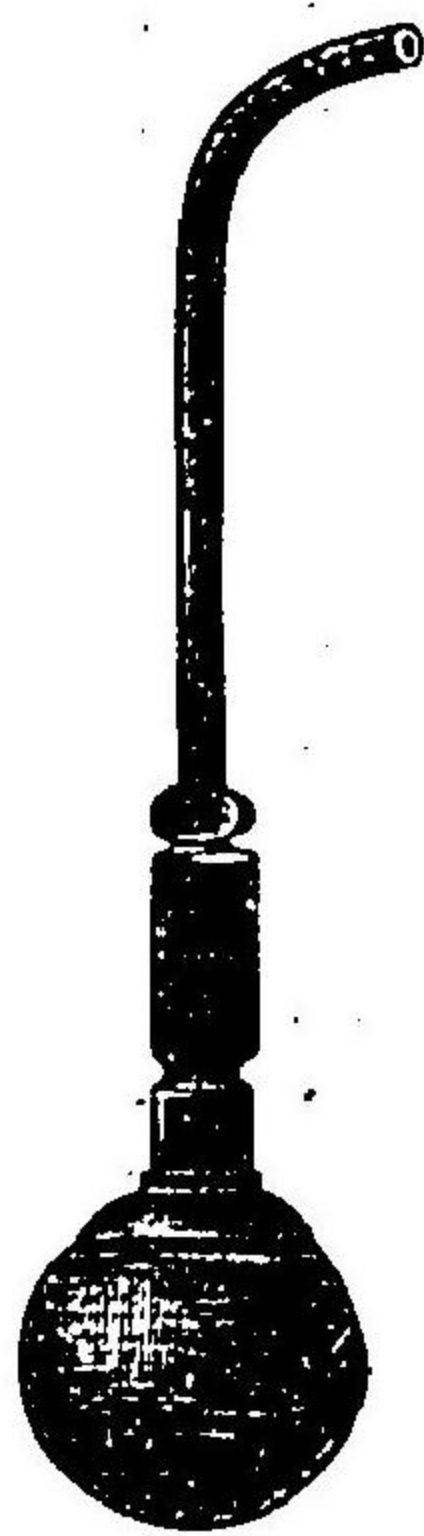
頭下腔或ハ氣管内ニ送セシムルニハ患者ガ吸氣ヲ營ム際ニ之ヲ注入ス可シ此目的ニ使用スル藥劑ハ局處麻酔藥トシテコカ

イン溶液ヲ又收劍劑トシテ一—五%クロール亞鉛一—一〇%硝酸銀水五—二〇%單寧グリセリン溶液竝ニ沃度グリセリン液第四百三十四頁等ナレドモ種々ノ疾患ニ際シ各其藥劑ヲ撰ブガ故ニ是等ハ各論中ニ述ブル所アル可シ

粉末吹撒

二、粉末吹撒 *Impulverung*。藥劑ヲ永ク作用セシメント欲スレバ粉末ヲ吹撒スベ

圖六十七百第



喉頭噴霧器

シ而シテ等シク喉頭鏡ヲ導子トシ嘴端ヲ喉頭内ニ送り其瞬間ニ吹粉ス其作用ハ一局部ニ止マラズシテ汎ク全腔ニ及ブモノナリ藥劑ハ主トシテコ

カイン、硼酸、ヨードホルム、テルマトール、明礬等ヲ應用ス予ハ

- 明礬 二〇〇
- 硼酸 一〇〇
- コカイン 〇・五

滑石

一〇〇

右研和シテ潰瘍性疾患ニ用ユ。

是等ノ藥劑ガ喉頭内ニ送スルハ患者ハ概チ直チニ反射的咳嗽ヲ發スルニヨリ之ヲ知ルヲ得又時トシテ特ニ塗布ニ際シテ劇烈ナル咳嗽發作ト共ニ瘧疾、灼熱ノ感ヲ覺エ又ター一時聲門痙攣ヲ來スコトアレドモ暫時ニシテ回復スルモノナリ。

三、吸入 *die Inhalation* ハ揮發瓦斯ノ吸入ト噴霧ノ吸入トノ二法アリ揮發瓦斯ニ

吸入

ハ帝列竝油、松子油、百露拔爾撒謨等ヲ用ヒ是等ノ藥劑ノ五—二〇滴ヲ半リ—テルノ熱湯上ニ注加シ之レヨリ發スル瓦斯體ヲ紙製漏斗又ハ特別ノ裝置ヲ以テ一日三—四回、五—十五分間吸入ス噴霧ノ吸入ニハ器械ヲ用キテ藥液ヲ喉頭氣管内ニ撒霧シ又ハ通例用ヒラルルハ蒸氣吸入器ニ依リテ水蒸氣ト共ニ藥液ヲ吸入セシム此際患者ヲシテ頭部ヲ少シク後方ニ屈シ強ク開口シ及ビ舌ヲ前方ニ提出セシメ可及的藥劑ノ深ク喉頭内ニ達スルニ便ス可シ通例之ニ用ユルハ粘液溶解劑トシテ食鹽、重碳酸曹達、サルミアツク等ヲ收斂劑トシテ明礬單寧、プロタルゴール等ヲ撰ブ最近迄ハ尙ホ殺菌劑トシテ石炭酸及其他ヲ使用シタレドモ中毒ノ危險アルガ故ニ今ハ殆ンド之ヲ廢セリ而シテ蒸氣吸入ニ於ケル效果ハ是等藥液ノ作用ト云フヨリモ寧ろ蒸氣ト其溫度ガ器械的ニ働クモノナレバ從ツテ吸入藥液ニ種々複雜ナル處方ヲ施コスモ概チ無意味タルニ過ギズトス。

四、腐蝕 *Aetzung* 喉頭内ニハ硝酸銀、クローム酸、三鹽化醋酸、乳酸等ヲ以テ之ヲ行

腐蝕

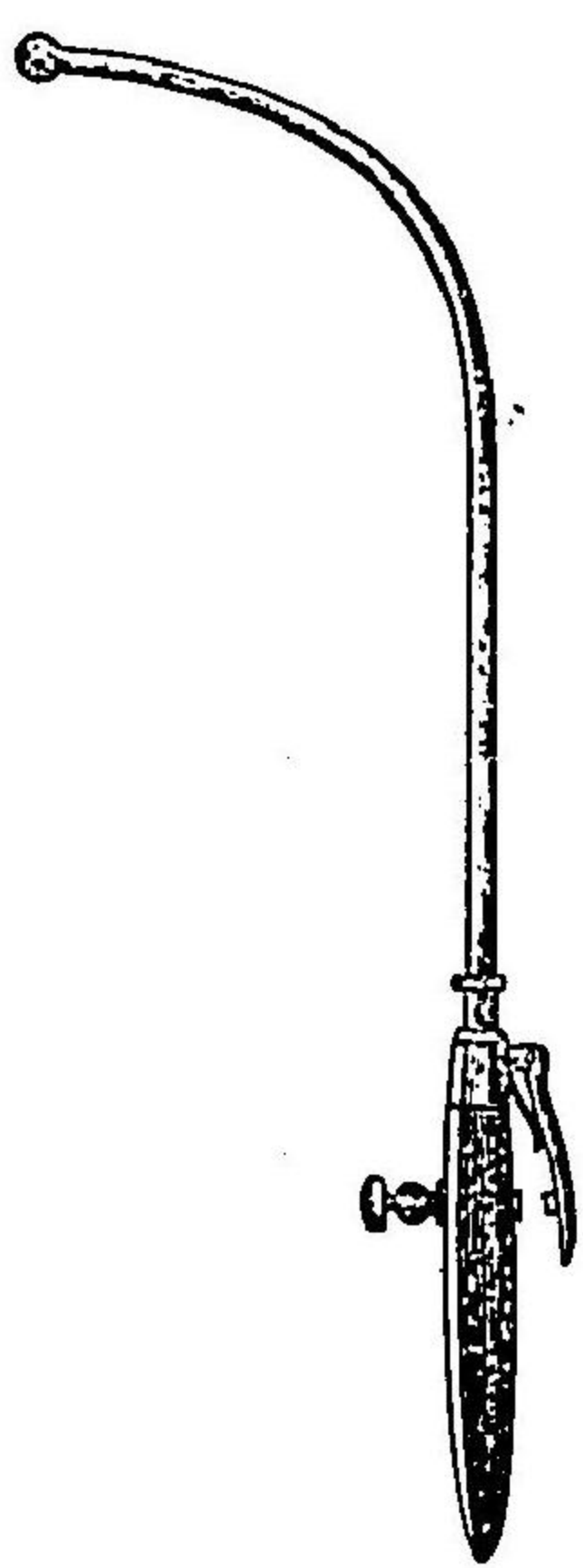
ヒ濃厚ナル溶液或ハ其實質ヲ使用ス、又特別ナル腐蝕器アレドモ、簡單ナルハ喉頭消息子ヲ應用スルニ在リ、其法ハ表面ノ腐蝕ニハ、硝酸銀實質ヲ熱シタル消息子ノ先端ニ溶著セシメ之ヲ以テ喉頭内ノ隨所ヲ直接ニ腐蝕スルニ在リ、此際硝酸銀ノ過剰アラバ食鹽水ヲ以テ中和スルコトハ論ヲ俟タズ、深部迄モ腐蝕セントスルニハ、クローム酸ヲ使用シ其法ハ前記ト同ジク消息子頭ニ融著セシムルヲ良トス、但シ之ヲ火焰中ニテ急ニ熱スル時ハ、クローム酸ハ酸化シテ其作用ヲ失フモノナリ、腐蝕セル後ハ炭酸曹達ノ稀薄ナル溶液ヲ以テ之ヲ中和ス、三、鹽化醋酸モ亦同様ニシテ消息子頭ニ固著セシムルヲ得、又濃厚溶液ヲ用ユルトキハ小綿花ヲ卷子ニ施コシ之ニ藥液ヲ僅カニ浸漬スベシ

電氣療法

二 電氣療法 Elektrische Behandlung.

主トシテ感傳ヲ用ユレドモ、平流電氣モ亦必要ナリ、通例喉頭ノ外側ニテ、兩甲状軟骨ニ貼シ、或ハ一極ヲ喉頭外側又ハ胸骨上ニ貼シ、他極ハ喉頭ニ於ケル所定ノ粘

圖七十七百第



子導電頭喉

膜上ニ接著セシム、而シテ喉頭内導子ノ把柄ニハ電流開閉裝置ヲ有シ其先端ガ粘膜ニ接スル時ハ之ヲ鎖サシ直チニ又之ヲ開キ、漸次患者ノ慣ルルニ從ヒ其持續時

手術的療法

間ヲ長クスルモノトス、此際喉頭鏡監視ノ下ニ行フモノナルハ勿論ナリ

三 手術的療法 Operative Behandlung.

凡テ喉頭ノ手術ハ外部ヨリ之ヲ切開シテ術野ヲ設クベキ喉頭外手術 Extralaryngeal Operationen ト自然道ヨリスル喉頭内手術 Endolaryngeale Operationen トノ二アリ、而シテ多數ノ場合ニ於テハ自然道ヨリス可キ適應症ヲ示スモノナレバ、専門家ハ特ニ此手術ニ習熟セザル可ラズ。

喉頭内手術

麻酔

喉頭内手術 Endolaryngeale Operationen 麻酔法ハ殆ンド常ニ局處ニシテ特ニ粘膜ノ反射ヲ抑壓スルニハ缺ク可ラザル者ナリ

之ニ用ユル藥劑ハコカインヲ最良トシ、オイカイン、アリピリン、ノボカインノ補等充藥アレドモ之ニ優ル能ハズ、即チ一〇乃至二〇%コカイン溶液一〇〇ニ千倍アドレナリン一〇〇ヲ混シタルモノヲ卷綿子ニテ粘膜ニ塗布シ、又ハ注入器ニテ滴下シ、二三分時ノ後消息子ニテ尙ホ感覺ノ存スルヤヲ檢シ、未ダ麻酔ノ不充分ナル時ハ、更ニ藥液ヲ應用ス可シ、又咽頭後壁舌根軟口蓋等ノ粘膜ヲモ麻酔セシムルノ要アリ、コカインハ其極量〇〇五ヲ超ユル無カルベキハ勿論ナレドモ、此際患者ニ唾液ヲ嚙下セズシテ、盡ク之ヲ咯出セシムレバ、唯ダ塗布ノミニテハ頗ル大量ニ堪フルモノナリ、又タ止ムヲ得ズシテ大量ヲ用ユル事アルハ、已ニ氣管枝鏡検査ノ條下



消毒

ニ於テ述ベタルガ如シ、然レドモ時ニハ極メテ少量ノコカインニ因リテ著シキ中毒症ヲ呈スルモノアレバ注意セザル可ラス  
喉頭内手術ニ際シテ全身麻醉ハ唯ダ小兒ニ之ヲ用ユルニ過ギズトス  
消毒 凡テ診斷竝ニ手術ニ際シテ必要ナル諸器械及ビ術者ノ手指ハ一般外科的法则ニ從ツテ無菌 Aseptic ナル可シ而シテ喉頭内術野ノ消毒ハ不可能ナレバ單ニ之ヲ清拭スルノミニ止マレドモ幸ニ粘膜ハ微菌ニ對シテ自家防禦力ヲ有スルガ故ニ術後傳染ヲ起ス事ハ稀ナリ

手術

手術 喉頭粘膜ガ知覺脱失セルヲ認メバ恰モ喉頭鏡検査ニ於ケル姿勢ニテ患者ハ其左手ヲ以テ自カラ舌ヲ牽出シ、術者ハ左手ニ把持セル喉頭鏡ヲ導子ト爲シ先ヅ、消息子ヲ送リテ、罹患部ヲ觸診ス、可シ蓋シ之ニ據リ全ク麻醉セル喉頭内ニテ更ラニ其病變ノ性質ヲ自由ニ検査シ得ルノミナラズ之レガ爲メニ患者ハ已ニ多少器械ニ慣ルルヲ得ルナリ、斯クシテ患者ノ全ク安靜ナルヲ見バ茲ニ甫メテ必要ナル器械ヲ挿入スルナリ、此際術者ハ能ク忍ビテ平靜ナルベク縱令第一回施術ノ不成功ニ終ルモ決シテ失望ノ態度ヲ示スベカラズ、是レ徒ラニ患者ヲシテ不安ノ心ヲ起サシメ、手術ハ益々困難トナルノ懼アレバナリ。

後療法

後療法 Nachbehandlung トシテハ、敢テ格別ノ處置ヲ要セザルモ時ニ或ハ沃度仿謨ヨドール等ヲ吹撒スルモ可ナリ、勿論喉頭ヲシテ安靜ナラシメ、且ツ諸種ノ刺戟ヲ避クルハ必要ナリ

器械

器械 喉頭内手術ニハ電氣燒灼器、電氣分解器、刀、鉗子、鉗子、キユレ、ハ、テ、蹄係等種々ノ器械ヲ用キ皆細長ニシテ彎曲セル把柄ヲ有シ、喉頭鏡映像ニヨリテ之ヲ運用ス是等ノ器械竝ニ應用ニ就テハ其各論中ニ詳述スベケレドモ唯ダ電氣燒灼器竝ニ分解器ハ近時ハ喉頭ニモ之ヲ用キル事尠ナシトス

氣管内手術

氣管内手術 Endotracheale Eingriffe

上記ノ方法ニヨリ單ニ喉頭内ノミナラズ、亦之ニ接セル氣管部ノ病變ヲモ施術シタル事アリシモ、素ヨリ甚ダ困難ナリシニ、キリアンノ氣管枝鏡應用以來ハ氣管内手術ハ一新領域ヲ開拓スルニ至リス、其方法等ニ就テハ検査法竝ニ各論ヲ參照ス可シ

# 第二編 各論 Spezieller Teil.

## 第壹章 發育異常 Wachstumsanomalien.

喉頭竝ニ氣管ノ畸形 Missbildungen u. Formveränderungen ハ先天性ニハ發育異常トシテ來リ、後天性ニハ主トシテ狹窄ヲ見ル而シテ後者ハ別ニ章ヲ分チテ之ヲ述ベシ

喉頭氣管ノ全缺損

一 喉頭竝ニ氣管ノ全缺損 Vollständiges Fehlen des Kehlkopfes u. der Luftöhre ハ必ズシモ稀ナルモノニ非ザル可ケレドモ、吾人ノ臨牀ニ來ルコト尠シ

喉頭軟骨ノ缺損ニ分裂

二 喉頭軟骨ノ缺損又ハ分裂 Defecte einzelner Kehlkopfknorpel od. Spaltbildung

ハ往々吾人ノ見ル所ニシテ、殊ニ會厭軟骨ニ此分裂アリテ、式個ト成リ又ハ四瓣ニ分レタルヲ報告セシモノアリ。尙ホ此軟骨ハ種々ノ變形ヲ呈シ、喉頭鏡検査ノ障礙ヲ爲スコトアルハ既述セルガ如シ

甲狀軟骨板ノ不相對的發達

三 甲狀軟骨板ノ不對的發達 Ungleiche Entwicklung der Schilddrüsenplatten

ニ因ツテ喉頭内腔ノ不對的形態ヲ來シ、聲門ハ多少ノ斜位ヲ取り、時トシテ回歸神經麻痺ト誤認セララルコトアリ

去勢者喉頭

四 去勢術ヲ受ケシ者ノ喉頭 Kehlkopf beim Kastrirten 去勢セラレタルカ或ハ睾丸ノ發育不全ナル者ノ喉頭ハ、亦タ凡テ幼年期ノ状態ニ止マリ、從ツテ聲

喉頭隔膜

音ノ高調ナルコトハ既述セルガ如シ、又タ女子ニテモ、時トシテ男子ノ如キ大ナル喉頭ヲ有シ、且ツ低音ヲ發スル者アリ

### 五 喉頭隔膜 Diaphragma des Kehlkopfes.

屢々遭遇スル畸形ニシテ、概テ前

連合部ニ存シ、且ツ通例喉頭下腔ニ緊張シ、後方ニ半月狀線ヲ以テ終ルヲ常トス、第百七十八圖時ニ又二個處ニ之ヲ見ル事アリ、一ハ兩披裂會厭皺襞間ニ、他ハ聲門間ニ緊張ス、尙此隔膜ノ成立ニ就テハ之ニ遺傳的關係ヲ證シ得ル事アリ、而シテ通

例何等ノ障礙ヲ呈セザルコト多キモ、時ニ發聲竝ニ呼吸困難ヲ伴フコトアリ

皺襞形成

### 六 梨子狀竇、喉頭後壁、竇皺襞等ニ於ケル皺襞形成 Faltenbildung

ハ稀ニ見ルモノナレドモ亦タ畸形ノ一種タリ

喉頭竇囊狀脫

### 七 喉頭竇(室)囊狀脫 Laryngocel: ventricularis

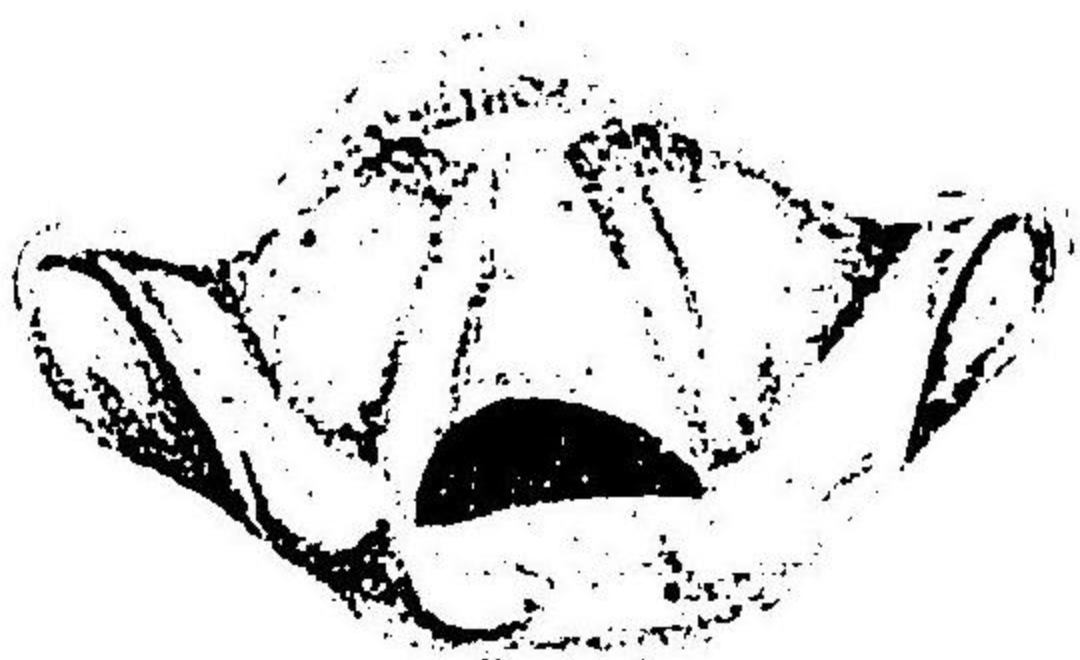
恰カモ類人猿族ニ於ケルカ如ク、モルガンニ一竇ガ囊狀ニ擴大シ、喉頭内腔ニ、或ハ其外方ニ、ヘルニヤ狀ヲ爲シテ膨隆スル者ヲ云ヒ、時ニハ會厭軟骨ノ側部ニ、或ハ梨子狀竇内ニ、又ハ外頭部ニ之ヲ認ムルコトアリ

第三竇

尙ホ時トシテモルガンニ一竇ノ他ニ前喉頭壁ニ於テ第三竇 Ventriculus tertius

ヲ發見スルコトアリ

第百七十八圖



喉頭隔膜

氣管囊狀脫

八 氣管囊狀脫 Tracheocele ハ氣管軟骨間ノ粘膜ガヘルニヤ狀ニ外方ニ翻轉スルニ因リ、又ハ發育不全ナル氣管枝形成ニ因スルモノニシテ後天性ニハ刺傷ニヨリ或ハ慢性氣管枝炎ノ際ニ粘液腺ノ囊狀ニ擴大スルニヨリテ生ズ、是等ハ時トシテ甲狀腺腫ニ似タルコトアレドモ恰モ護謨球ノ如ク軟ニシテ且ツ壓ヲ加フレバ直チニ飛箭様音ヲ放チテ縮少シ、努責又ハ啼泣ニ際シテ更ラニ膨大スルニ據リテ之ト區別スルヲ得

頸肋骨

九 頸肋骨 Halsrippe モ亦タ此處ニ附記スルヲ便トス、其短キモノハ僅ニ横突起ノ上ニ出ヅルニ過ギザレドモ、長キハ普通ノ肋骨ト同様ニ胸骨柄ニ終リ、時ニハ膈神經叢又ハ鎖骨下動脈ヲ壓迫シ爲メニ種々ノ病症ヲ起スコトアリ

甲狀腺ノ異常

十 甲狀腺ノ先天的異常 Angeborene Anomalien der Schilddrüse トシテハ副腺ノ存在、發育不全、先天性甲狀腺腫等ナリトス

療法

療法 以上述べタル諸畸形ハ、通例何等ノ症狀ヲ呈セズシテ死後剖檢的ニ之ヲ證明スルノミナルヲ多シトス、只氣管囊狀脫ハ時トシテ高度ノ呼吸困難ヲ呈シ、爲メニ外科的療法ヲ要スルコトアリ、喉頭隔膜モ亦タ其大ナルトキハ喉頭内ヨリ之ヲ切開シ後療法トシテ尙ホシユレットル、ブジ―又ハオードワイエル管ヲ以テ擴大セザル可ラス是等ノ方法ニ就テハ後述スル氣管狭窄ノ條下ヲ参照セラル可シ、其他頸椎肋骨モ亦タ觀血的手術ヲ要スル事アル可ク、甲狀腺亦同ジ

急性喉頭炎  
急性加答兒性  
喉頭炎

原因

第二章 急性喉頭炎 竝ニ氣管炎 Laryngitis  
u. Tracheitis acuta.  
第一節 急性喉頭炎 Laryngitis acuta  
一 急性加答兒性喉頭炎 Laryngitis acuta  
cathartialis.  
原因 急性鼻炎竝ニ咽頭炎ノ原因ト略ボ同様ナリ、即チ感冒ニ因リテ病原的么微有機體ノ侵入ニ基クノ他、喉頭粘膜ノ化學的器械的及ビ温熱的刺戟、有毒瓦斯塵埃及ビ寒又ハ熱空氣ノ吸入、沃度水銀砒素劑等ノ内服或ハ吸入、刺戟性竝ニ過熱性飲食物ノ攝取、飲酒喫烟等ニ因ツテ來リ、其他急性及ビ慢性傳染諸病ニ隨伴シテ現ハレ又ハ鼻咽喉疾患ニ續發ス、尙ホ喉頭ニ固有ニシテ且ツ重要ナル原因ハ過度ノ發聲ナリトス、一般ニ女子ヨリモ男子ニ多ク、初冬竝ニ初春ニ多シ。  
原因ノ既ニ相等シキ鼻炎ガ漸次進入シテ所謂下降性加答兒 Descenderender Katarth ヲ呈スルコト屢ナリ、尙又タ多數ノ場合ニハ氣管モ共ニ罹患シ喉頭氣管炎 Laryngo-Tracheitis ト成ル

病理解剖

病理解剖 輕度ナルトキハ粘膜ノ充血ト少量ノ粘液樣分泌アルニ過ギザレドモ重症ニハ著明ナル充血ト共ニ粘膜組織ハ淋巴竝ニ圓形細胞ノ浸潤ニヨリテ腫脹シ上皮ハ混濁弛緩シテ時ニ剝離スルアリ、分泌ハ粘液膿樣膿樣又ハ膿樣血

症候  
自覺症

他覺症

性ニシテ多量ナレドモ容易ニ粘膜ノ表面ニテ痂皮ヲ作ルコトアリ

症候並ニ經過

自覺症 輕症ニハ喉頭内乾燥ノ感、癢ノ感等アリテ、咳、竝ニ咳嗽ヲ伴ヒ、聲音ノ粗糙又ハ嘶、嘔ヲ訴フ。分泌物ハ缺如セルカ又ハ少量ニシテ粘液様ナリ。一般症狀モ亦タ多クハ犯サルルコト無ク、數日ニシテ治癒スルヲ例トス。  
重症ニテハ著シク一般症狀ヲ呈シ、中等度ノ發熱アリ、喉頭内ニ灼熱異物等ノ感強ク、遂ニ疼痛ニ移行シ、特ニ談話並ニ嚥下運動ニ際シテ著シク頑固ナル乾燥、咳、モ亦タ之ニ加ハル。分泌物ハ初メハ少量ナレドモ直チニ増加シ、粘液膿様ニシテ時ニ少量ノ血液ヲ混ジ、聲音ハ嘔、聲ヨリ無聲ニ至リ、數週ニシテ上記諸症狀ノ減退スルニ拘ハラズ、聲音障礙ノミハ尙ホ長ク持續スルコトアリ。

以上兩症ノ間ニハ種々ノ移行アリ、從ツテ其症狀モ亦タ種々多様ナルハ勿論ニシテ、尙ホ炎症ハ喉頭下腔ニ占位スル時ハ、屢々呼吸困難、聲門痙攣、犬吠様咳嗽等ヲ來セドモ、之ハ多ク小兒ニ見ルモノニシテ、之ニ就テハ別ニ項ヲ分チテ記述ス可シ。他覺症 外部ヨリ喉頭ヲ壓スルニ重症ニ在リテハ時ニ輕度ノ疼痛ヲ訴エ、聲音ヲ檢スルニ粗糙嘶、或ハ失聲ニシテ、聲帶ノ振顫モ亦タ之ヲ觸ルルニ大ニ減弱セルコトアリ。

鏡檢的處見 ハ症例ニ依リテ種々ナレドモ、其主ナルハ、喉頭粘膜ノ發赤、竝ニ腫脹ノ二ナリトス、唯ダ是等ガ稍ヤ限局シテ來リ、或ハ汎發性ニ現ハレ、且ツ各其程度

限局性炎

聲門炎

聲門下喉頭炎

會厭炎

聲門下喉頭炎

ヲ異ニシ、尙ホ之ニ分泌物ノ附著スルトキハ多様ナル内景ヲ呈スベシ、次ニ便宜上之ヲ限局性及ビ汎發性ノ兩症ニ分チ、其主ナル所見ヲ述ブレバ

限局性 Circumskripte Formen ノモノニハ

聲門ガ斑狀ニ又ハ其遊離縁ノミ、或ハ又一一般ニ發赤シ、肥厚スルアリ(聲門炎、Chorditis)

室皺襞(聲門)ガ發赤腫脹シ、時ニ全ク聲門ヲ蔽ヒ、或ハ又此腫脹ハ左右不同ニシテ、爲メニ鏡見上聲門ハ左右其幅ヲ異ニスルガ如キコトアリ(聲門炎、Laryngis ventriculis)

會厭ニ占位スル時ハ該部粘膜ノ腫脹ニ據リテ會厭軟骨ハ固有ノ形態ヲ變ジ、運動鈍ニシテ、其遊離縁ハ鈍圓ト成リ、灰白又ハ黃白色ノ濾胞ヲ透視シ得可シ(會厭炎、Epiglottitis)

第七百九十圖



聲門下喉頭炎

炎症ガ主トシテ聲門ノ下面ニ存スル時ハ、聲門下ニ於テ發赤セル粘膜ハ内腔内ニ腫脹シ、一見聲門ガ二段ニ分レタルガ如キ觀ヲ呈ス、之ヲ聲門下喉頭炎、Laryngitis hypoglotticaト云フ。之ハ大人ニ於テハ強度ナル急性喉頭炎ノ一分象トシテ來リ、又タ慢性ニハ慢性疾患即チ結核、梅毒、多發硬化症、白血病等ニ際シ合併症トシテ現ハルルモノナレドモ、特ニ小兒ノ急性喉頭炎ニ屢々見

汎發性炎

ル所ニシテ且ツ其症狀ハ大人ノモノニ比シテ稍々特別ナルモノアルガ故ニ別ニ項ヲ分チテ述ブ可シ

汎發性 Diffuse Formen ノモノニ在リテハ

喉頭粘膜炎一般ニ發赤腫脹シ殊ニ聲唇ニ著明ニシテ其遊離線ハ鈍圓ト成リ汎ク肥厚セルヲ見ル尙ホ喉頭後壁粘膜炎腫脹ガ著明ナルトキハ發聲ニ際シテ聲唇ハ左右全ク接著セズ爲メニ發聲障礙ヲ來タス或ハ發聲障礙ハ同時ニ合併シ來レル筋性麻痺ニ因スルコトアリ之ニ就テハ合併症ノ條下ヲ見ル可シ

尙ホ重症ニシテ殊ニインフルエンザニ繼發セルモノニハ發赤セル聲唇ノ前方ニ左右相對的ニ半月狀ヲ呈スル白色ノ隆起ヲ認ムルコトアリ之ヲシユミットハ壞死性上皮ノ堆積セルモノト爲シフレンケルハ纖維素性滲出物ナリト思惟セリ

分泌物

分泌物 Secret ハ通例初メ一二日ハ之ヲ缺如シ粘膜炎ハ却ツテ乾燥シテ見ユレドモ漸次其量ヲ増加シテ粘膜炎ノ表面ニ附著シ或ハ兩聲唇間ニ縷ヲ引クヲ見ル其性質ハ既述セル如ク輕症ノ者ハ粘液様ナレドモ重症ニハ粘液膿様或ハ膿様ニシテ時ニ多量ナルニ係ラズ容易ニ乾燥シ之ニ血液ヲ混ジテ赤褐色ノ痂皮ヲ形成ス之ヲ乾性出血性喉頭炎 Laryngitis haemorrhagica sicca ト云ヒ此際患者ハ喉頭乾燥ノ感ト共ニ頑固ナル咳嗽發作ヲ訴ヘ尙刺痛アリ或ハ呼吸不利ヲ呈シ粘膜炎ニ著明ナル發赤腫脹ヲ認ムルノ他時ニハ聲唇遊離線聲帶突起部喉頭後壁等ニ粘膜炎ノ剝脫セルヲ見ルコトアリ所謂加答兒性潰瘍ト稱セラルルモノ是ナリ

乾性出血性喉頭炎

加答兒性潰瘍

合併症

合併症

以上述べタル炎症ハ單ニ粘膜炎而已ナラズシテ喉頭筋又ハ筋屬ヲモ併セテ侵害スル事アリ此際ハ聲唇ハ筋性麻痺ニ因ツテ運動ヲ阻害セラレ爲メニ發聲障礙ヲ生ズルニ至ル最モ屢々犯サルルハ内甲狀披裂筋ニシテ單ニ内筋麻痺トモ稱セラル次デ橫披裂筋斜披裂筋モ亦犯サル或ハ是等ガ同時ニ罹患スル事アリ但シ是等ノ麻痺ハ重症ニノミ併發スルニ非ズシテ他覺的處見ノ著シカラザルモノニモ既ニ之ヲ來スコトアリ(筋性麻痺ノ條參照)

診斷

診斷

病歴ト自覺的症狀トニ據ツテ略ボ之ヲ推定シ得ルモ尙ホ喉頭鏡検査ニテ其位置竝ニ程度ヲ確カメザル可ラズ但シ自覺症狀ノ著シキニ係ラズ他覺症狀ノ輕度ナル場合或ハ之ニ反セルコトアリ然レドモ偏側的腫脹竝ニ深在性組織缺損ハ急性加答兒ヨリモ寧ロ特殊性疾患例之バ徵毒結核癰腫等ニ多キヲ以テ注意ヲ怠ル可ラズ

豫後

豫後

一般ニ良ナレドモ不攝生ナル生活或ハ又再發ニ因リテ慢性症ニ移行スルコトアリ

療法

療法

原因療法即チ前述セルガ如キ諸種ノ器械的化學的温熱的刺戟ヲ避ケ飲酒竝ニ喫煙ヲ禁ジ發聲ヲ節セシメ鼻及ビ鼻咽喉ノ炎症アラバ之ヲ治療スル等ノ他ニ重症ニハ外出ヲ禁ジ發熱アル者ニハ靜臥ヲ命ズ可シ  
其他頭部ニゾリースニツツ器法又ハアルコホル器法等ヲ施シ或ハ嚙下痛アラバ氷器法ヲ試ミテ可ナリ

内服薬ニハ發汗劑ヲ與ヘ、咳嗽又ハ強度ノ瘙癢感アル者ニハ之ニモルフィンヘ  
ロイン、コデイン等ヲ加ヘ又ハ祛痰劑ヲ處方ス  
吸入ハ何レノ場合ニモ無害ニシテ有效ナリ

處方

ゼネガ浸四〇―五〇〇

硼砂加荷香水 三〇〇

鹽酸モルフィン 〇〇―二

單舍利別 一〇〇

右溶和一日三四分服

處方

吐根浸〇―三

沃度加里 一・五

單舍利別 一〇〇

右溶和一日三四分服

熱發アリテ胃ノ障礙ヲ伴フモノニハ

處方

鹽酸アポモルフィン 〇〇―二五

鹽酸モルフィン 〇〇―一五

稀鹽酸 一〇

單舍利別 一〇〇

縮水 九〇

右溶和一日三四分服

吸入劑トシテハ主ニ一―二%重曹、食鹽水ヲ稱用ス、收斂或ハ鎮咳ノ目的ニハ一  
%單寧水、明礬水、或ハフローム劑其他種々ノ藥劑ヲ用ユレドモ是等ハ概テ吸入ノ  
器械的作用ノ上ニ出ヅル能ハザルモノナリ(總論第四一九頁參照)

處方

格魯兒那篤留散

重碳酸曹達 各一・五

縮水 一五〇

右溶和一日數回吸入

方

臭素加里 三〇―六〇

鹽酸コカイン 〇―一五

水 一五〇

右溶和吸入料

局處的療法、通例急性加答兒性喉頭炎ハ何等ノ局處的療法ヲ要セズシテ治癒  
スルノミナラズ、却ツテ之ガ刺戟ト成リテ病症ヲ増悪セシメ、經過ヲ緩慢ナラシム  
ルコト多シ。故ニ炎症ノ初期ニハ嚴ニ之ヲ避ケ、諸症狀ノ少シク減退セル頃、市メテ

收斂劑ノ塗布又ハ吹撒ヲ行フ(總論第四一七頁)塗布劑トシテ通例一—五%プロタルゴール、一—五%クロール亞鉛水ヲ吹撒劑ニハ單寧、カロメル、オルトフォルム等ヲ使用ス、尙ホ痲皮形成ノ傾向アルモノニハ沃度沃度加里液ヲ用キテ效アリ

處方

沃度

〇・五—一・〇

沃度加里

一・〇—二・〇

グリセリン

三〇〇(或ハグリセリン 各一五〇)

薄荷油

貳滴

右塗布料

小兒急性喉頭炎

二 小兒急性喉頭炎 Laryngitis acuta bei Kindern.

小兒ニハ急性喉頭炎ハ主トシテ前項中ニ述ベタル聲門下喉頭炎 Laryngitis subglottica ノ形ニ於テ來リ鏡檢的變化モ亦ク同一ナレドモ、其症狀ニ著シキ相違アリテ恰モ實扶埋里格魯布ニ類似セルヲ以テ又ク假性格魯布 Pseudokroup ノ名アリ

原因

假性格魯布

原因 急性加答兒性喉頭炎ニ於ケルト同様ナリ、唯ダ殊ニ虛弱ナル體質ヲ有スル者又ハ腺病質、腺性增殖症、佝僂病等ヲ有スル者ハ本症ニ犯サレ易シ

症候

症候 晝間ハ更ラニ異常ヲ呈セズシテ安眠セシ小兒ガ突然トシテ著シキ吸氣的喘鳴ト、犬吠様咳嗽トヲ起シ、又之ニ伴ヘル高度ノ呼吸困難ヲ以テ覺醒シ、顔貌

ハ不安ト成リ、チアノーゼヲ呈シ、頗ル危險ナルガ如キ症狀ヲ現スモ略一二時間許ノ後ニハ多量ノ發汗ト共ニ、是等ノ險惡ナル諸症狀ハ消散スルニ至リ、斯クシテ翌日ヲ無事ニ經過スレドモ、更ラニ又夜間ニ於テ此發作ヲ反復スルコト多シ  
他覺的ニハ前述セルガ如ク聲門下粘膜炎腫脹ヲ認ムレドモ、小兒ニ在リテハ他部ノ腫脹ニテモ如斯症狀ヲ起スコトアル可シ。  
是等ノ症狀ガ定期的發作ヲ來ス所以ハ、夜間ニ於ケル頭部ノ水平位ニヨリテ喉頭ニ鬱血ヲ來スノ他ニ、尙ホ分泌物ガ蓄積シテ器械的障礙ト成リ、又ハ遂ニ反射的ニ聲門痙攣ヲ起スモノナル可シ。

診斷

診斷 小兒ニハ元來喉頭鏡檢査ハ頗ル困難ナルニ、況ンヤ上述ノ如キ狹窄症狀ヲ呈セル際ハ殆ンド不可能ナルコト多シ、故ニ之ヲ實布埋里ト區別スルニハ、發作前後ニ格別ノ異常ナク或ハ前夜已ニ一ノ發作アリテ口腔咽頭粘膜炎ニ疑膜ヲ認メザレバ、之ヲ假性格魯布ニ歸スルヲ得可シ

豫後

豫後 單純ナル加答兒性炎ニ在リテハ殆ンド凡テ可良ナリ、時ニ窒息死ニ陥キルガ如キハ蜂窠織炎等ニ考ヘザルベラズ

療法

療法 原因療法ノ他患者ヲ濕潤ナル室中ニ靜臥セシメ、牛乳、茶、リモナーデ等ノ温飲料ヲ與ヘ、頭部ニブリースニツツ器法ヲ施コシ、又ハ温湯ヲ以テ浸セル海綿ニテ被覆スルハ特ニ發作時ニ有效ナリトス、其他胸骨部ニ芥子泥ヲ貼シ、吸入ヲ試ムルモ可ナリ、藥劑トシテハ祛痰劑或ハコデイン、阿片丁幾等ノ麻酔劑ヲ使用ス

挿管法或ハ氣管切開ヲ要スルガ如キハ稀有ノ事ニ屬ス

處方

吐根浸〇・一五—〇・三〇 一〇〇〇

礮砂加荷香水 〇・五—三〇〇

單舎 二〇〇

右毎貳時一小匙宛

處方

磷酸コデイン 〇〇一—〇〇二

餾水 五〇〇

右一日三回乃至四回一茶匙宛糖水ニ混ジテ内服セシム

蜂巢織性喉頭炎

三 蜂巢織性喉頭炎 Laryngitis phlegmonosa

喉頭蜂巢織炎トハ其炎症ガ單ニ粘膜ニ止マラズシテ却ツテ粘膜下織ニ著シキヲ云ヒ限局性ニ又ハ廣汎性ニ來リ原發或ハ續發性ナルアリ喉頭丹毒 Laryngosyphilis 並ニ急性傳染性蜂巢織炎 Acute infectiose Phlegmonose ト稱セラルルモ亦タ廣汎性蜂巢織炎ノ特殊症ニ外ナラザルナリ

原因

原因 ハ〇〇微有機體殊ニ連鎖狀並ニ葡萄狀球菌ノ侵入ニ基ヅクモノニシテ其侵入系路ハ

一 粘膜表面ノ缺損部ヨリスルモノ 例之バ結核、梅毒、室、扶、斯、實、布、埤、里等ニ因スル潰瘍又ハ腐蝕部或ハ異物其他外傷ニ因ル組織ノ缺損部等ヨリスレドモ亦タ喉頭鏡ニ山ツテ認知シ得ザル上皮ノ被害部ヨリ侵入スル事アリ

二 近傍ヨリ連鎖的ニハ 例之バ扁桃腺周圍炎、咽頭丹毒、舌炎、耳下腺炎、ル、ド、キ、ヒ、安、魏、那等ニ因ツテ來ル

三 循環系統ヲ經ルモノ ハ主ニ急性傳染病ニ續發シ此際其炎症ハ是等特殊ノ病原體ニ因レルカ又ハ混合傳染ニ因リテ起ル

尙ホ急性喉頭加答兒ノ原因ハ凡テ起炎物ノ侵入ヲ助長セシムルモノニシテ時ニ或ハ急性喉頭加答兒ガ不攝生ニ因リテ本症ニ移行スル事アリ

病理解剖

粘膜及ビ殊ニ粘膜下織ハ漿液膿樣或ハ純膿樣ノ滲出物ヲ以テ浸潤セラレ廣汎性又ハ限局性ニ現ハレ時ニ膿瘍ヲ形成スル事アリ限局性ニハ殊ニ粘膜下織ノ鬆粗ナル個處ニ好發ス即チ會厭ノ舌面ヲ第一トシ之ニ次デ披裂會厭皺襞喉頭後壁聲門下等ナリトス

而シテ是等ノ浸潤ニ因ツテ粘膜ハ暗赤色ニ腫脹シ且ツ常ニ浮腫ヲ伴フヲ以テ又タ浮腫性喉頭炎 Laryngitis oedematosa ナル名アリサレド蜂巢織炎丹毒又ハ浮腫性喉頭炎等ト稱セラルルモ病理解剖的ニハ共通ノ意義ヲ有スルモノニシテ概テ連鎖狀球菌ニ因シ唯ダ其毒力並ニ疾患部位ノ深淺ニ由ツテ病症ノ強弱ヲ異ニスルモノニシテ從ツテ臨牀上種々ノ移行症アルベキハ言ハズシテ明カナリ

浮腫性喉頭炎



症候並ニ經過

症候並ニ經過

自覺症 屢々耳内ニ放散スル嘯下痛其他聲音嘶啞熱感喉頭異物ノ感咳嗽等ヲ訴ヘ尙ホ多少ノ全身症狀ヲ呈シ進ンデハ呼吸困難ヲ來シ殊ニ病變ガ喉頭入口部聲門下部ニ占位セル際ニ著シ而シテ是等ノ症狀ハ炎症ノ限局セルトキハ輕度ナレドモ廣汎性ノモノ殊ニ丹毒並ニ急性傳染性蜂窠織炎ニ於テハ劇烈ナルヲ常トス

喉頭腫瘍

限局性炎

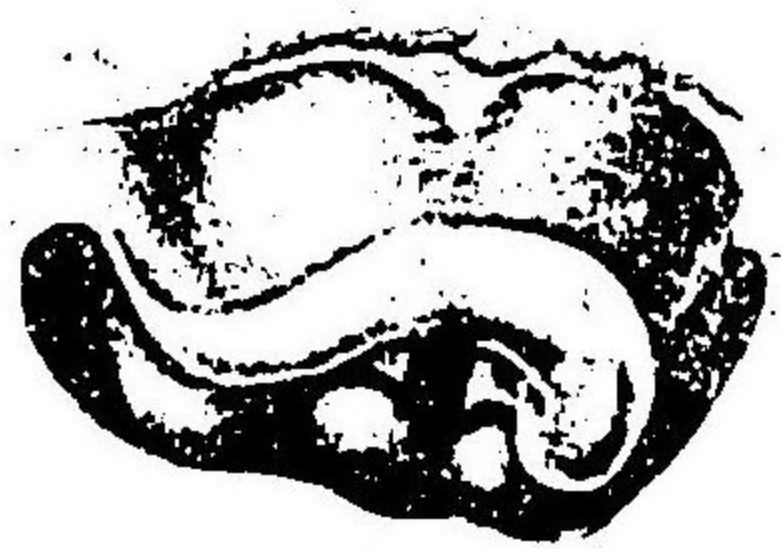
他覺症 喉頭ハ外部ヨリ壓痛ヲ有スルコト多ク鏡檢的處見ハ其炎症ノ限局性ナルト廣汎性ナルトニ從ツテ種々ナレドモ其主ナルハ發赤腫脹及ビ之ニ伴ヘル浮腫等ニシテ腫脹ハ迅速ニ増大シ且ツ遂ニ化膿シテ所謂喉頭膿瘍 Larynxabscessヲ形成スルコトアリ浮腫部ハ其色粘液鼻茸ノ如ク硝子様透明性ヲ帯ビ初メハ炎症部附近ニ著明ナレドモ其進行スルニ從ヒ遂ニ炎症部全體ニ及ブ

限局性炎

Circumskripte Formノ好發部位ハ前述セル

如ク會厭ノ舌面ニシテ其他披裂會厭皺襞聲門下部ニモ來レドモ室蓋皺襞並ニ聲唇ヲ犯スハ稀ナリ昔時屢々聲門浮腫 Glottisodemト稱セラレタルハ此喉頭入口部ニ於ケル浮腫ヲ誤稱セシモノナリ(第五章)而シテ是等ノ炎症性浸潤ハ自然ニ吸收セララルカ或ハ遂ニ膿瘍ヲ形成シテ治癒ス

圖十八百第



炎織窠蜂頭喉性局限 (癆膿腺合)

廣汎性炎

喉頭丹毒

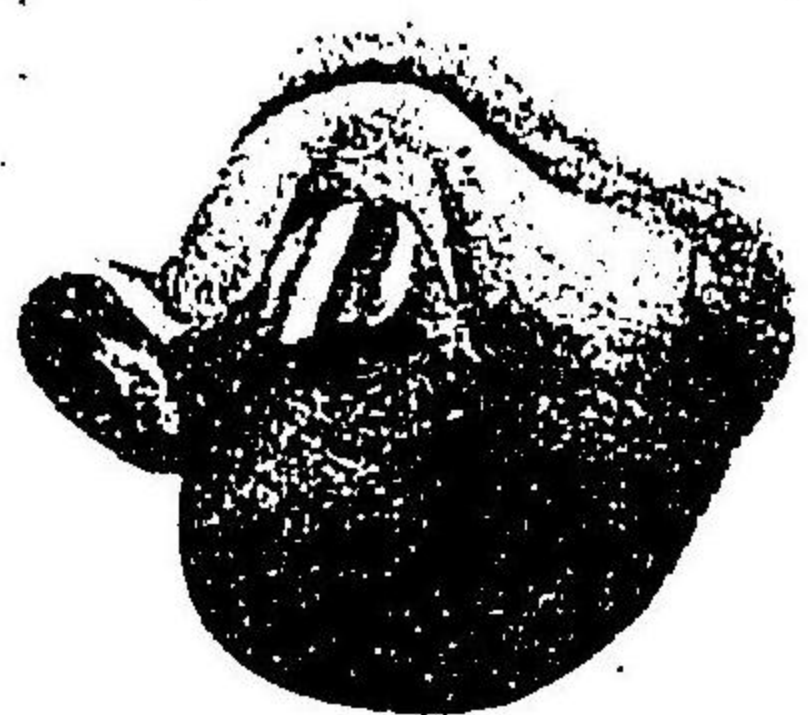
急性傳染性蜂窠織炎

廣汎性炎 Diffuse Formノ者ハ喉頭ノ片側又ハ兩側ヲ犯シ粘膜ハ浮腫ヲ伴ツテ發赤腫脹シ遂ニ潰瘍ヲ形成スルニ至ル此中ノ特殊症ヲ丹毒並ニ急性傳染性蜂窠織炎ト爲ス

喉頭丹毒 Das Larynxerysipelニ於テハ患者ハ高熱ヲ有シ且ツ其炎症ハ比較的淺在性ニシテ化膿スル事無ク單ニ浮腫狀腫脹ニ止マリ喉頭ニ原發スルハ稀ニシテ概テ咽頭ヨリ下降シ或ハ外皮ヨリノ連續トシテ現ハル然レドモ亦々反對ニ喉頭ヨリ外皮ニ蔓延スルモノアリ

急性傳染性蜂窠織炎 Akute infektiöse Phlegmoneニ在ツテハ粘膜ハ充溢腫脹シ膿性浸潤ヲ蒙リ且ツ中等度ノ發熱ナルニ係ハラズ患者ハ著シク無力狀態ニ陥キルヲ特徴トス

圖一十八百第



炎頭喉性織窠蜂

然レドモ臨牀的ニハ此兩者ハ容易ニ區別シ得ザル事多ク又々他ノ蜂窠織炎トノ區別モ困難ナリ唯ダ此際爾他ノ器官殊ニ外皮ニ丹毒ノ存セルヲ認メシ場合ニ於テハ喉頭丹毒ナル診斷ハ確實ナル可シ

診斷

診斷

喉頭鏡檢査ニ據リテ容易ナリ唯ダ浮腫ハ之ヲ非炎症(第五章)ト區別セザル可ラズ之ニ向ツテハ患者ノ自覺的症狀ヲ參照スルノ他ニ通例炎症ニハ假令ヒ其色硝子様透明性ヲ帯ブルトモ尙ホ何等カノ炎症症狀ヲ伴フヲ以テ之ヲ知ルモシ然レドモ尙ホ困難ナル場合ニハ附近ノ形器ハ勿論全身殊ニ心臟並ニ腎臟等

ニ就テ其原因の疾患ヲ求メ之ニ據リテ始メテ浮腫ノ性質ヲ明ニスル事アリ  
尚ホ軟骨膜炎ノ初期トノ鑑別ハ困難ナリ之ニ就テハ軟骨膜炎ノ條下(第四章)ヲ  
参照ス可シ

喉頭鏡検査ノ困難ナル場合ニ於テモ唯ダ會厭而已ヲ見テ既ニ其大體ヲ推察ス  
ルヲ得ベシ

豫後

豫後 ヲトスルニハ慎重ナルヲ要ス蓋シ其經過ハ頗ル迅速ニシテ窒息、心臓  
麻痺、繼爾肺炎、肋膜炎、敗血症等ヲ以テ不幸ニ轉歸スル事アレバナリ勿論  
限局性ノ者ハ廣汎性ニ比シ豫後善良ナレドモ既ニ蜂窠織炎ノ原因ガ不治ノ病症  
ナルトキニハ絶對ニ不良ナルベキハ言ヲ俟タズ

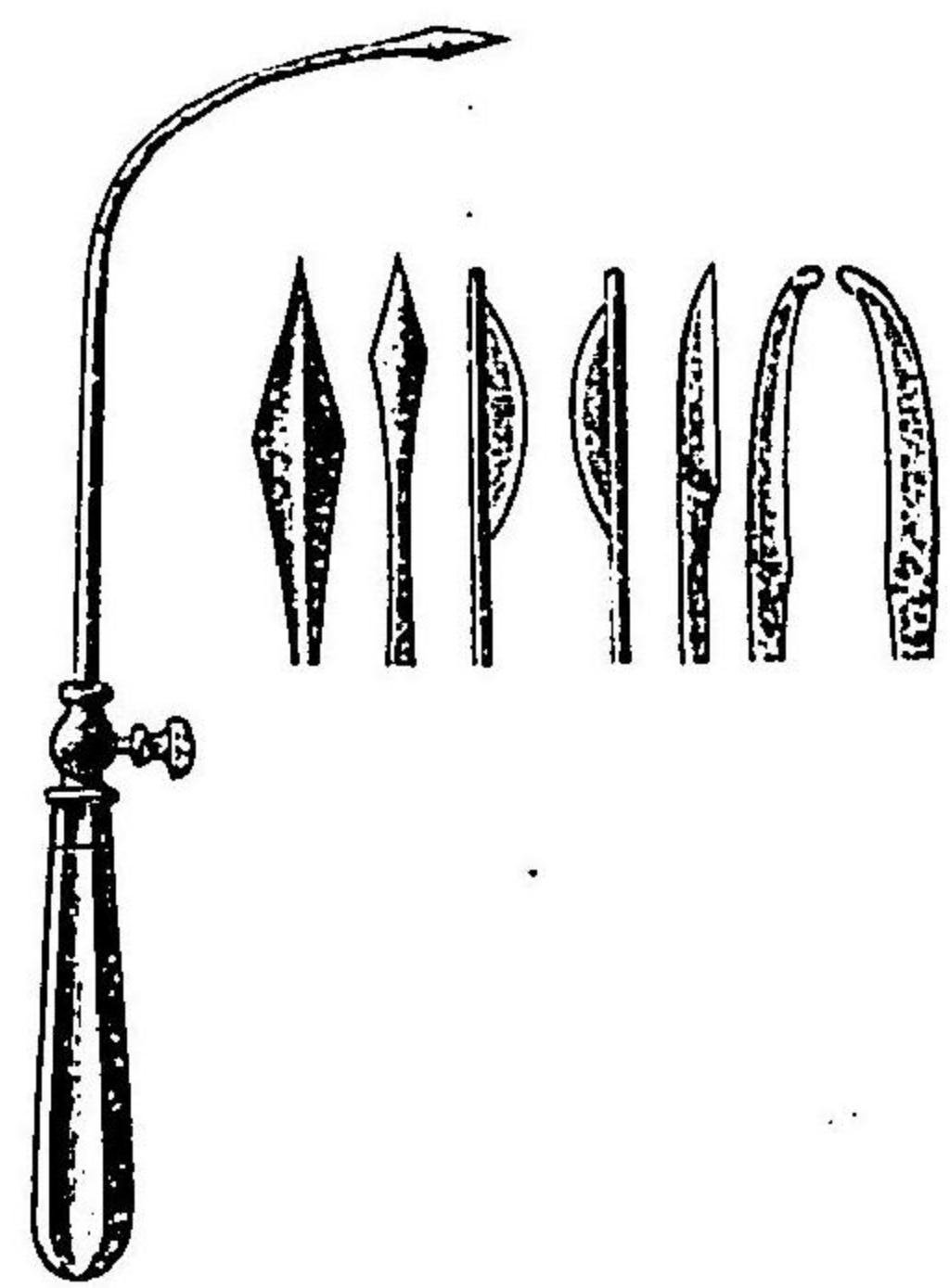
療法

療法

原因療法 原因ヲ索メテ之ヲ治スルコトハ最モ必要ナリ例之バ異物アラバ摘  
出シ附近ニ膿瘍アラバ其切開ヲ施ス

對症療法 患者ヲシテ絶對ニ發聲ヲ禁ゼシメ頭部ニ氷嚢ヲ貼シ(時トシテ温器  
法氷片ヲ與フル等)消炎療法ヲ試ミ喉頭浮腫部ニ對シテハ先ヅ亂切ヲ爲シ或ハ  
既ニ膿瘍ヲ形成セル時ハ刀(第百八十二圖)ヲ以テ截開ス可シ但シ其法ハ局處麻  
酔ヲ施コセシ後喉頭鏡下ニ之ヲ行ヒ膿瘍ノ會厭ニアルトキハ上部ヨリ下方ニ向  
ツテ截開シ、披裂軟骨ナラバ眞直ニ穿刺セル後更ラニ後方又ハ披裂會厭皺襞ノ方  
向ニ之ヲ擴大ス

圖二百八十二



喉頭切開刀

是等ノ療法ヲ施コスモ尚ホ進行ノ傾  
キアル者或ハ既ニ窒息症狀ヲ呈セル者  
ニハ直チニ氣管切開ヲ施スベシ但シ之  
ニ依ツテ凡テ善良ノ效果ヲ得ルモノニ  
非ズ

尚ホ對連鎖球菌血清ヲ用ヒテ效果ヲ  
得ル事尠ナカラズ其他強心劑、亢奮劑解

熱劑等ノ應用モ亦タ必要ナリ  
氣管ノ蜂窠織炎 ハ比較的稀有ニシテ之レアルモ概テ喉頭ヨリノ連續ナ  
リトス

四 滲出性喉頭炎 Laryngitis exsudativa

滲出性喉頭炎

滲出性喉頭炎トハ皮膚病ト關聯シテ喉頭粘膜上皮下ニ大小ノ水泡ヲ作り又ハ  
普汎性浸潤ノ形態ニ於テ多少滲出アル諸症ヲ稱スルモノニシテ是等ノ滲出物ハ  
主トシテ漿液ナレドモ稀ニ膿様、血性或ハ纖維素性ナルアリ此疾患ハ概テ口腔竝  
ニ咽頭粘膜ニ於ケル同様ノ病變ニ續發シ又ハ之ヲ外皮ニ證明シ得ルコト多ク稀  
ニ喉頭粘膜ニ原發ス

滲出性炎ニテ比較的的多キハ、**行疹**、**Herpes**、**天疱瘡**、**Pemphigus**、**蕁麻疹**、**Urticaria**等ニ

シテ、其他粟粒疹、Miliaria、水痘、並ニ痘疹、Varicellen、u. Variola、結節性、並ニ多形性紅斑、Erythema nodosum、u. multiforme、扁平紅色苔癬、Lichen ruber planus、匂行性膿疱疹、Impetigo herpeticiformis 等モ亦タ之ヲ見ル

**症候** 多少ノ一般症狀ノ他ニ其發生部位ニ從ツテ聲音嘶啞、嚥下困難、嚥下痛等ヲ存シ、又ハ喉頭内搔癢、灼熱、粗糙等ノ感ヲ訴ヘ、又呼吸困難ヲ呈スルコトアリ、食物ノ中毒ニ因リテ蕁麻疹ヲ生ジ爲メニ一時呼吸困難ノ狀ヲ呈スルハ、時ニ見ル所ナリトス

本症ノ好發部位ハ會厭竝ニ披裂軟骨部ナレドモ、時ニハ全喉頭粘膜ニ亘ル事アリ、而シテ直チニ破壊シテ上皮ノ剝脱ヲ來ス

**診斷** 症狀ノ急劇ニ起リシ際ニハ困難ニシテ屢々重症ナル加答兒性喉頭炎、蜂窠織炎、又ハ斑點或ハ義膜等ノ存スルトキハ實布埜里、微毒、其他腐蝕ニ基ケルモノ等ト誤マル事アレドモ、其經過ニ據リ、又ハ殊ニ同様ナル病變ヲ口腔、咽頭或ハ外皮ニ證明シ得レバ、其診斷ハ容易ナル可シ

**療法** 凡テ刺激性飲食物竝ニ發聲ヲ禁ジ、便通ヲ整正スルノ他ニ鹽剝硼酸過滿、飽酸加里等ヲ以テ含嗽セシメ、頑固ナルモノニハ一—二%硝酸銀水塗布ヲ試ミ、疼痛ノ甚シキ時ハ食前二—一〇%コカイン水或ハ一〇—二〇%メントール阿列布油ヲ塗布ス

尙ホ天疱瘡ニハ砒素劑即チ法列兒水ノ内服又ハ皮下注射ヲ試ミ、或ハアトキシ

急性氣管炎

第二節 急性氣管炎 Tracheitis akuta.

一ルサルバルサンノ應用モ亦タ可ナラン、然レドモ完全治療ハ困難ニシテ屢々再發シ漸次衰弱シテ不幸ノ轉歸ヲ取ルモノトス

蕁麻疹ニ因ツテ呼吸困難ヲ呈スル事アレドモ、殆ンド插管法又ハ氣管切開ノ必要ヲ見ズ、痘瘡ニ就テハ別ニ述ブル所アル可シ(第四百八十二頁)

急性氣管炎ハ多ク急性喉頭炎ニ伴ヒ、所謂喉頭氣管炎、Laryngo-Tracheitis トシテ來ル

**原因** 急性加答兒性喉頭炎ノ原因ト同様ナリ

**症候** 急性加答兒性喉頭炎ト同様ニ頸部灼熱、乾燥、搔癢等ノ感ヲ訴エ、殊ニ胸骨下ニ放散シ、之ニ咳嗽發作ヲ加エ時ニ發熱アリ、喀痰ハ初メ粘稠ニシテ帶綠膿樣ナレドモ、後ニ稀薄ト成リ、粘液膿樣ヲ呈シ、漸次減少シテ治癒スルニ至ル

他覺的ニ氣管粘膜ハ限局性ニ又ハ汎發性ニ發赤シ、之ニ分泌物ノ附著セルヲ認メ腫脹ハ通例甚シカラザレドモ、時ニ軟骨ヲ缺如セル後壁ニ著シキコトアリ

**豫後** 良ナレドモ慢性症ニ移行シ易シ

**療法** 急性加答兒性喉頭炎ト同様ニシテ發汗、祛痰、鎮咳ノ目的ニ向ツテ投藥ス、局處療法ハ必要ナラズ

慢性喉頭炎並ニ氣管炎

### 第參章 慢性喉頭炎 並ニ氣管炎

Laryngitis et Tracheitis chronica.

#### 第壹節 慢性喉頭炎 Laryngitis chronica.

慢性喉頭加答兒ハ概テ鼻及ビ咽頭ニ於ケル慢性加答兒ノ隨伴症トシテ現ハレ從テ之ニ亦タ

- 慢性單純性喉頭炎 Laryngitis chronica simplex
- 慢性肥厚性喉頭炎 hypertrophicus
- 慢性瘦削性喉頭炎 atrophicus

ノ種類ヲ分チ得レドモ、是等ハ各々共通セルモノ在ルガ故ニ以下之ヲ一括シテ述ベ唯タ相異ナレル他覺的症狀ニ就テハ其條下ニ於テ之ヲ別タン

原因

原因 凡テ慢性咽頭加答兒ノ原因ト同様ナリ

即チ屢々急性喉頭加答兒ヨリ移行スルノ他ニ、輕度ニシテ持續的ニ作用セル諸種ノ器械的化學的温熱的刺戟(四二七頁)ニ因リ尙ホ殊ニ聲音ノ職業的過勞アルコトノ煙草ノ濫用、聲音變換等ニ因リテ始メヨリ慢性症トシテ現ハレ、或ハ又是等ハ急性症ヲシテ慢性ニ移行ヒシム殊ニ聲音ノ職業的過勞ハ本症ニ於テ重要ナル原因ヲ爲スモノナリ其他鼻及ビ咽頭ノ疾患ヨリ連續的ニ又ハ之ヨリ流下スル膿汁ノ刺戟ニ因リ、或ハ爲メニ生ズル鼻呼吸ノ障礙ヨリ喉頭粘膜ノ慢性刺戟狀態ヲ惹起

スルアル可ク尙ホ慢性疾患殊ニ結核、微毒糖病等ニ因リ、或ハ心臟病、肺病、消化器病、等ニ於ケルガ如ク喉頭ノ鬱血狀態ニ在ル者ハ殊ニ本症ニ罹リ易シ  
本症ニ對シテハ遺傳的關係モ亦タ證明セララル事屢々ニシテ、一般ニ中年ノ男性ニ多シ

病理解剖

病理解剖 慢性喉頭炎ニ於テ特記ス可キハ組織ノ增殖ト血管ノ擴張トニツ

ナリトス。是等ハ汎發性ニ現ハレ又ハ限局性ニ來ル。血管ノ擴張ハ又タ靜脈怒張、Mucoclastic トシテ殊ニ之ヲ會厭ニ於テ見ルコトアリ。組織ノ肥厚ハ或ハ上皮ニ止マルコトアレドモ、又タ粘膜層或ハ粘膜下層ニ迄及ブ事アリ。是等ハ凡テ結締織ノ增殖ヲ有シ、且ツ多少ハ圓形細胞ノ浸潤ヲ認メ、或ハ廣ク或ハ限局シテ殊ニ能ク刺戟ヲ蒙ムルコト強キ聲門ノ附近ニ現ハル。而シテ是等ノ炎症增殖ハ其部位ト程度ヲ異ニスルニ從ヒ種々ノ處見ヲ呈シ、恰モ各個獨立セル疾患ノ如キ觀アレドモ、皆慢性喉頭炎ノ繼發狀態ニ外ナラズシテ、且ツ病理解剖的ニモ相移行セリ、其各個ノ處見竝ニ名稱ニ就テハ症候ノ條下ニ列記ス可シ

分泌物ノ性質竝ニ量ハ種々ナレドモ、通例少クシテ、粘液性又ハ粘液膿性ナリ。時ニハ著シク濃厚ニシテ且ツ直チニ粘膜表面ニ於テ痂皮ヲ形成シ、粘膜ハ却ツテ萎縮ヲ來スコト瘦削性喉頭炎ノ如キアリ、又タ若シ膿樣分泌物ニシテ著シク多量ナル時ハステヨルクニ從ツテ慢性膿漏症 Die chronische Memorrhoe ト爲ス可キモ、之ハ多分同時ニ喉頭硬腫 Scleroma laryngis ノ存在スルニ因スルモノナラン(第七章)

慢性膿漏症

慢性喉頭炎並ニ氣管炎

慢性喉頭炎

粘膜ノ剝離ハ比較的稀有ニシテ、著シキ潰瘍ノ形成ハ假令他ニ何等ノ據ナシトスルモ、常ニ微毒又ハ結核ニ就テ考フルヲ至當トス

症候並ニ經過

自覺的症狀

自覺症 自覺的症狀ハ分泌物ノ多量ナルモノ、ヨリモ、喉ノ乾性ハ、モ、ハ、於テ、著明ニシテ、一般ニ喉頭内粗糙、乾燥、癢、痒、壓迫等ノ感アリ、殊ニ長時間ノ談話又ハ唱歌ノ後ニ於テ著シク頻發ナル嚔咳、亦タ之ニ加ハル

聲ノ音障礙ハ通例慢性症ニ於テハ急性症ニ比シテ輕クシテ特ニ聲音ヲ使用スル者ノ外格別ノ障礙ヲ訴ヘザレドモ、長時間ノ談話後ニ之ヲ來シ、又ハ分泌物ノ甚シク粘稠ナルモノ、或ハ痲皮形成ニ傾ケルモノニ於テハ著シクシテ失聲スルコトアリ、一般ニ此障礙ハ早朝ニ於テ強クシテ咳嗽含嗽啞出等ノ後ニ輕快スルヲ常トス是レ夜間ニ於テ分泌物ガ聲門ニ蓄積凝固スルガ爲メナリ、尙ホ凡テ聲音障礙ハ其病變ガ聲門附近ニ存スル時ニ著明ニシテ、殊ニ聲唇ニ著シキ變化ノ存スル程大ナル可ク、且ツ喉頭筋、麻痺ニ因リテモ亦タ起リ得ルハ急性症ノ場合ト同様ナリ呼吸困難ハ通例之ヲ缺如スレドモ、特ニ聲門附近ニ於テ增殖性機轉ノ著シキトキ又ハ痲皮形成ノ盛ナル際ニ之ヲ認ムル事アリ

他覺的症狀

病理解剖ニ於テ述ベタルガ如ク慢性喉頭炎ハ其病變ノ位地、性質及ビ分泌物ヲ異ニスルニ從ヒ、其鏡檢的處見モ亦タ一樣ナラザレドモ、客ボ之ヲ單純性、肥厚性、瘦

慢性單純性喉頭炎

削性ノ三者ニ區別シ得可ク以下各其ノ處見ヲ列記ス可シ

一慢性單純性喉頭炎 Laryngitis chronica simplex.

喉頭粘膜ニ汎發性、又ハ限局性ニ輕度ノ發赤ヲ認メ、殊ニ屢々聲唇ガ紅色又ハ灰白赤色、或ハ帶黃赤色ヲ呈シ、擴張セル血管ガ其表面ヲ縱走セルヲ見ル、尙ホ發赤ハ會厭、披裂會厭皺襞、喉頭後壁、又ハ室(竇)皺襞等ニ限局セル事アリ、腫脹ハ著明ナラズ分泌物ハ白色粘液樣ニシテ、發聲ニ際シ振盪セル聲唇ノ連合部ニ泡沫狀ニ集合スルヲ見ル

慢性肥厚性喉頭炎

二慢性肥厚性喉頭炎 Laryngitis chronica hypertrophicans

特ニ細織、増殖ノ著明ナルモノヲ云ヒ、稀ニ汎發性ニ現ハルレドモ、概ネ現局性ニ來リ、之ニ或ハ發赤ヲ伴ヒ特別ナル鏡檢的處見ヲ呈ス

會厭ニ限局スル時ハ會厭ハ爲メニ肥厚變形シ、屢々喉頭内腔ノ視診ヲ妨ゲ、粘膜ハ潮紅シ且ツ怒脹セル血管ヲ見ル事アリ

披裂會厭皺襞モ亦タ肥厚シ、且ツ汚穢赤色ヲ呈ス

喉頭後壁粘膜ノ肥厚シ發聲ニ際シ接著セル兩聲唇間ニ皺襞ヲ形成シ、爲メニ恰モ息肉ノ如キ觀ヲ呈スル事アレドモ、深呼吸ニ當リテ是等皺襞ノ消失スルニ由リ之ト區別シ得

室(竇)皺襞モ亦タ其全長ニ亘リテ或ハ殊ニ前半部ニ於テ肥厚スルアリ、是等ノ腫脹ニ依ツテ聲唇ハ多少其蔽フ所ト爲リ、甚シキハ僅カニ發聲時ニ於テノミ之ヲ目

喉頭硬皮症

擊シ得又發聲障礙ヲ來シ且ツ發聲ニ際シテ腫脹セル左右室皺襞ノ接著振動シテ粗雜ナル所謂資、唇、聲ヲ發ス  
其他尙ホ病變ノ占位竝ニ性質ニ依リテ特別ノ處見ト名稱トヲ有スルモノヲ記述セン

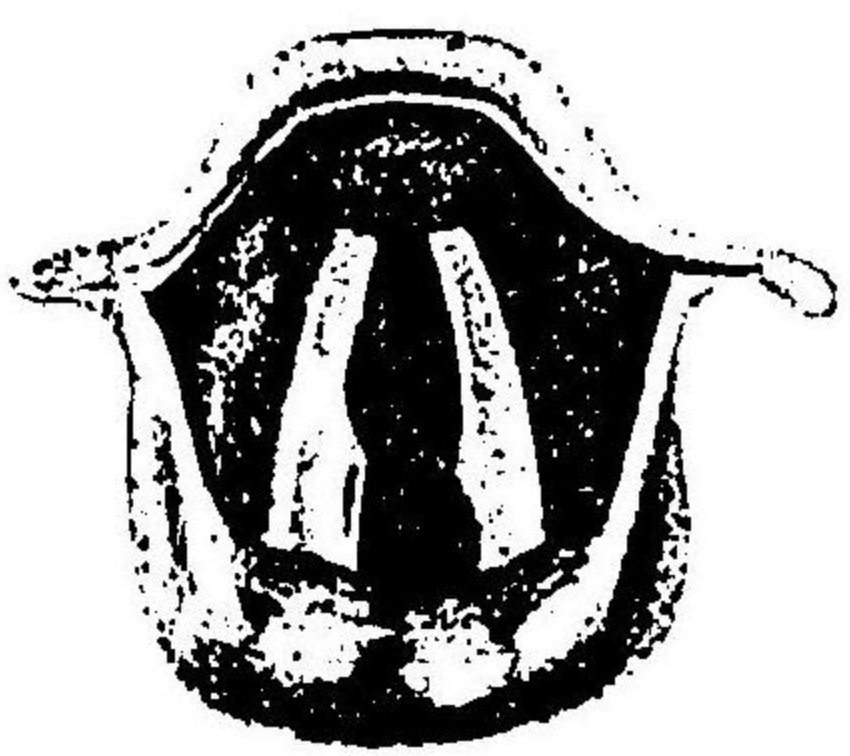
(一) 喉頭硬皮症 Pachydermia laryngis

喉頭硬皮症ニ汎發性 Pachydermia diffusa 竝ニ限局性硬皮症 P. circumscripta ノ名稱アレドモ後者ハ乳頭腫ヲ意味スルモノニシテ目下喉頭學者ノ硬皮症ト稱フルモノハ前ノ汎發性ナルヲ云フ

喉頭粘膜上皮ノ増殖シテ扁平ト成リ且ツ其上層ノ角化ヲ伴ヒ之ニ結締織ノ増殖竝ニ血管ノ擴張ヲ來スモノニシテ圓形疣狀隆起又ハ不規則ナル鋸齒狀増殖ト爲リテ現ハレ主トシテ喉頭粘膜ノ扁平上皮ヲ被レル部ニ好發スレドモ時ニハ毛上皮ヲ有セル部ガ扁平化シテ之ヲ生ズ多クハ聲唇竝ニ喉頭後壁ニ來ル

摸範的硬皮症

圖三十八百第



喉頭硬皮症 (Typische Pachydermie) 通例兩側相對的ニ圓形又ハ橢圓形ノ灰白色又ハ灰白赤色ノ疣狀隆起トシテ現ハレ其中央少シク臍窩狀ニ陷凹シ之ヲ以テ他側ノ隆起部ト互ニ相適合セリ通例右側ノ隆起ハ左側ヨリ大ナリ(上圖) 喉頭後壁ニ於ケルモノハ屢々前者ト合併シ其輕度ナ

摸範的硬皮症

小兒結節又ハ

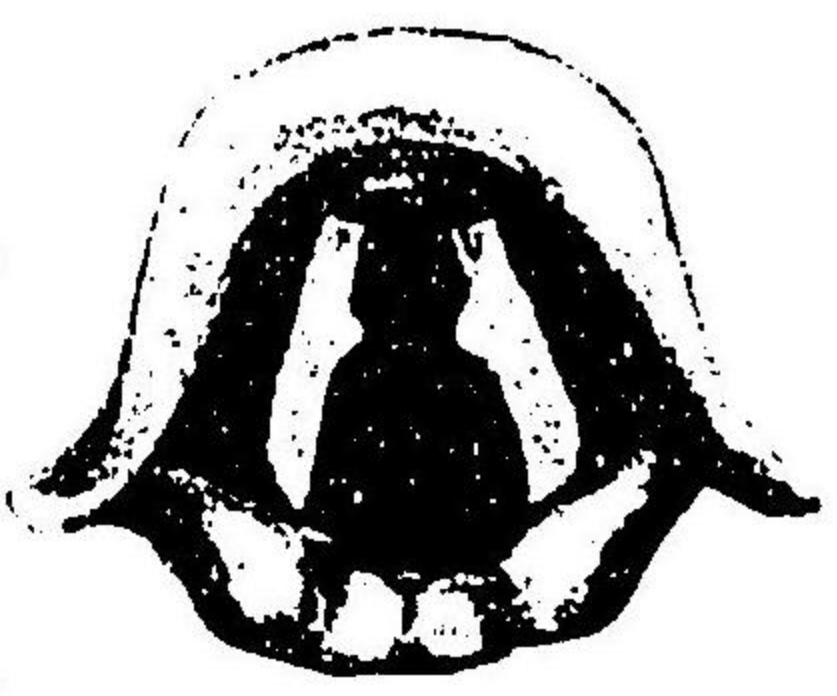
ルハ粘膜表面ニ薄キ灰白色ノ被覆ヲ有スルガ如キ觀ヲ呈シ僅カニ皺襞ヲ形成スルニ過ギザレドモ進行スルニ從ヒ著明ナル鋸齒狀隆起竝ニ皺襞ヲ作り且ツ容易ニ皸裂ヲ生ジ之ヨリ潰瘍ヲ形成スル事アリ  
本症ハ殊ニ職業的發聲過勞ニ因ツテ來リ發聲障礙ハ殊ニ後壁ニ於ケルモノニ著シ

尙ホ之ト同様ノ變化ハ喉頭ノ癌腫結核微毒或ハ狼瘡ニ際シテ其病竈ノ周圍ニ併發スルアリ之ヲ續發的硬皮症 Sekundäre Pachydermie ト稱シテ原發性 Primäre ト區別ス

(二) 謠人結節又ハ小兒結節 Die Sängerknötchen od. Kinderknötchen (結節性聲唇炎 Chorditis nodosa)

帽針頭大ノ圓形又ハ寧ロ三角形ノ隆起トシテ通例左右相對的ニ聲唇緣ノ前及ビ中三分之一部ノ境界ニ於テ現ハレ聲唇ト同様ノ色澤ヲ有セリ上圖フレンケルハ

圖四十八百第



節 結 人 謠

之ヲ以テ腺開口部ノ擴大セル者ト爲セドモヒアリハ如斯ハ畢竟増殖セル結締織ノ硝子樣變性ヲ來セシモノナリト云ヘリサレバ本症ハ又タ新生物トシテ認めラルルコトアリ本症ハ殊ニ能ク謠人又ハ小兒ニ見ル所ニシテ聲唇ハ發聲ニ際シ完全ニ接著ヒザルガ爲メ、聲音嘶啞ヲ起スニ至ルサレドモ小兒ニ於ケルモノハ

聲門トラホーム  
モルガンニ  
資翻脫症

肥厚性上聲唇炎

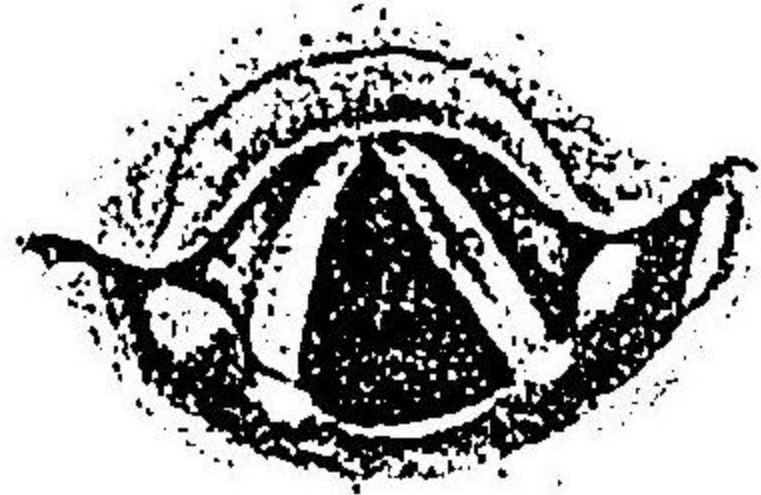
慢性聲門下喉  
炎頭

發育スルニ從ヒ其隆起ハ漸次相平均セラレ各微候モ亦タ自カラ消失ス

尙ホ時トシテ聲唇ノ上面ニ數多ノ密接セル小結節ヲ生ズル事アリ之ヲ聲唇ト  
ラホーム又ハ顆粒性聲唇炎 Chorditis granulosa (第百八十五圖)ト云フ

(三) モルガンニ一資翻脫症 Prolapsus ventriculi Morgagni

圖五十八百第

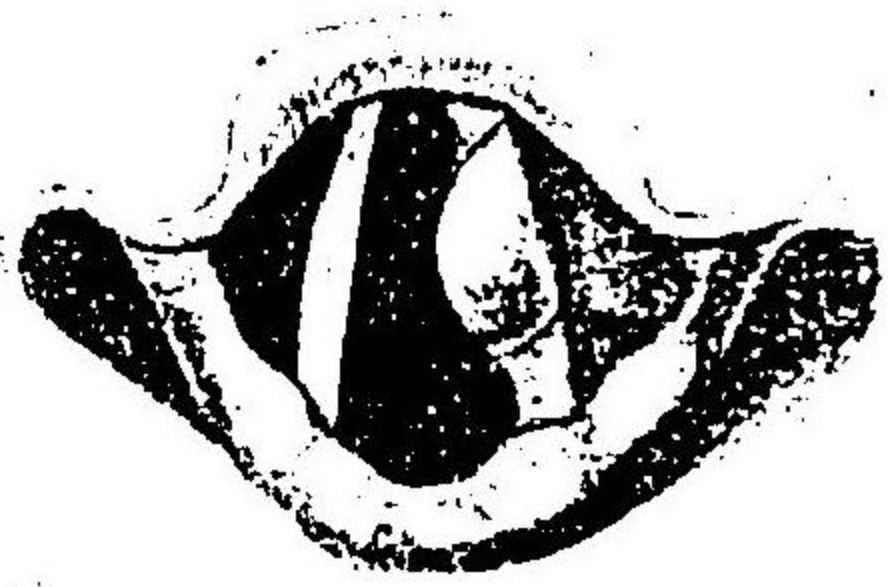


ムーホラト唇聲

灰白色ノ時ニ浮腫狀ヲ呈シテ廣蓋ナル腫瘤ノ喉頭腔内ニ膨出セルヲ認メ呼吸發  
聲ニ際シテ上下ニ移動シ尙ホ消息子ニヨリテ一時的ニ之ヲ資内ニ復セシムルヲ  
得可シ本症ハ又タ時ニ硬皮症ト併發シ尙ホ喉頭結核又ハ微毒ニ合併シテ現ハル

初メハ其名ノ如ク眞ニモルガンニ一資ガ翻脫セルモ  
ノト信ゼラレタリシモ其後資壁ガ肥厚シテ喉頭腔内ニ  
隆出セルモノニシテ病理的ニ肥厚性上聲唇炎 Chorditis  
hypertrophica superior ト稱ス可キ者ナル事ヲ明ラカニセリ  
鏡檢上一側或ハ兩側ノモルガンニ一資ヨリ紅色或ハ

圖六十八百第



症脫翻資一ニシガルモ

下聲唇炎 Chorditis hypertrophica inferior  
急性症ト略ボ同様ノ處見ヲ呈スレドモ聲門裂ノ狹窄ハ  
概テ之ノ如ク著シカラズ本症ハ殊ニ小兒ニ於テ慢性喉  
頭加答兒ニ併發シ大人ニハ硬腫結核微毒軟骨膜炎白血  
病等ニ因スルモノヲ多シトス

慢性乾性又ハ瘦削  
性喉頭炎

喉頭「オツエナ」

慢性乾性出血性喉  
頭炎

合併症

診斷

三、慢性乾性喉頭炎又ハ慢性瘦削性喉頭炎 Laryngitis chronica sicca s. atrophicans.

分泌物ガ著シク粘稠ニシテ容易ニ乾燥結痂スルモノヲ云ヒ概テ瘦削性鼻咽喉  
炎ニ續發スレドモ時ニ塵埃腐蝕劑或ハ溫熱等ノ刺激ニテ單獨ニ喉頭ニ現ハルル  
事アリ通例粘膜炎外見上萎縮スレドモ後者ニ於テハ却ツテ潮紅腫脹スルヲ以テ  
シユミットハ之ヲ鼻咽喉頭ノ其レニ併發スル瘦削性炎ト區別セリ而シテ此際痂皮  
ハ鼻咽喉頭ニ於ケルト等シク時ニ分解シテ惡臭ヲ放テ所謂喉頭「オツエナ」Orzena  
Laryngis ト成ル又タ粘膜炎ニ輝裂ヲ生ジ之ヨリ出血シテ分泌物ハ爲メニ赤褐色ニ乾  
燥ス之ヲ慢性乾性出血性喉頭炎 Laryngitis haemorrhagica sicca chronica ト云フ

合併症 屢々現ハルル合併症ハ急性症ト同様ニ聲門閉鎖筋ノ筋性麻痺ナリ  
トス即チ横披裂斜筋披裂筋並ニ内甲狀披裂筋等ノ麻痺ニシテ此際開大筋即チ後  
筋麻痺ヲ來スコト無シ唯ダ喉頭後壁ニ於ケル硬皮症ニ於テ器械的障礙ノ結果ト  
シテ聲門開大作用ノ減弱スルコトアリ尙ホ時トシテ淺在性ノ所謂加答兒性潰瘍  
ヲ生ジ又ハ後壁ニ裂傷ヲ來ス

其他硬皮症ニ於テ稀ニ軟骨膜炎ヲ伴フ是レ上皮剝離部ヨリ起炎物ノ傳染スル  
ニ因ル尙ホ硬皮症ニモルガンニ一資翻脫症或ハ聲門下喉頭炎ヲ併發シ又ハ稀ニ  
之ガ癌腫發生ノ基地ト成ルコト無シトセズ(シユミット)

診斷 自覺的症狀ノ不定ナルガ故ニ常ニ喉頭鏡檢査ニ賴ラザル可ラズ  
喉頭粘膜炎ノ輕度ナル色澤變化又ハ血管ノ擴張ハ之ヲ單純ナル充血ト區別スル

能ハザレドモ其ノ持續的ナルト且ツ患者ガ既往症ニ就テ訴フルモノニ鑑ミレバ之ヲ慢性喉頭炎ト診定シ得可シ唯ダ此際患者ノ指示スル占位ハ甚ダ不確實ニシテ且ツ屢々是等ノ障礙ハ喉頭附近ノ疾患ヨリ由來シ喉頭ハ却ツテ健康ナル事アルヲ注意ス可シ尙ホ假令喉頭加答兒ヲ診定シ得シトスルモ進ンデ患者ノ一般症ヲ考察シ果シテ其炎症ハ獨立的ナリヤ或ハ他ノ全身症又ハ結核微毒等ニ繼發セルモノナルヤヲ知ルハ殊ニ必要ナリトス

後壁ノ硬皮症ハ之ト結核性浸潤トノ鑑別困難ニシテ試験的切除ヲ要スル事アリ之ニ據リテ若シ巨大細胞又タハ結核菌ヲ證明シ得レバ診斷ハ確實ナリ又時トシテキリアン法ニ依リ甫メテ硬皮症ノ存セル後ロニ蔽ハレテ結核性潰瘍ノ潛在セルヲ知ル事アリ凡テ是等ノ際粘膜炎ニ高度ノ貧血ヲ有シ特ニ知覺異常ノ存スル時ハ疑ヲ結核ニ置クベシ尙ホ其他ニハ經過ニ注意スベシ

硬皮症ト癌腫トノ區別モ亦タ單ニ一小切除片ニテハ困難ナル事アリ蓋シ硬皮症ニテ上皮ノ増殖ハ單ニ表面ニ止マラズシテ深ク乳嘴ヲ結締織中ニ出ダシ之ヲ斜切片ニテ見ルトキハ恰モ癌樣組織ノ像ヲ呈スレバナリ然レドモ精査スル時ハ上皮ト結締織間ニ著明ナル境界ヲ有スルト且ツ此ハ表層上皮ト連結セルニ據リテ區別シ得可シ且ツ硬皮症ハ好ンデ聲帶突起部ニ發スレドモ癌腫ハ此部ニ原發スル事殆ンド無ク結核モ此部ニ來ルモノハ潰瘍性ナリ但シ結核微毒癌腫等ニ硬皮症ノ續發スル事アルハ既述セルガ如シ

豫後

要スルニ一側ノ聲唇ガ他側ヨリ強ク犯サレタルカ又ハ深在性潰瘍アルトキハ單純ナル疾病ニ非ザルコトヲ考フベシ

豫後 聲門下喉頭炎ノ小兒ニ發セルモノヲ除ケバ他ハ皆直接生命ニ關スル危險ナシ輕症ニシテ且ツ未ダ長時日ヲ經ザルモノハ適當ナル療法ニ依リテ治癒スレドモ亦容易ニ再發ス而シテ既ニ年餘ヲ經過セルモノ聲唇ノ肥厚又ハ萎縮アルモノ其他増殖性機轉ノ著シキモノ等ハ聲音ノ快復ヲ望ミ難シ殊ニ硬皮症及ビ筋麻痺ノ際ニ於テ然リトス

療法

一 一般療法 本症ノ治療ニ當リテハ凡テ本症ノ原誘因タルモノヲ除去セザル可ラズ即チ

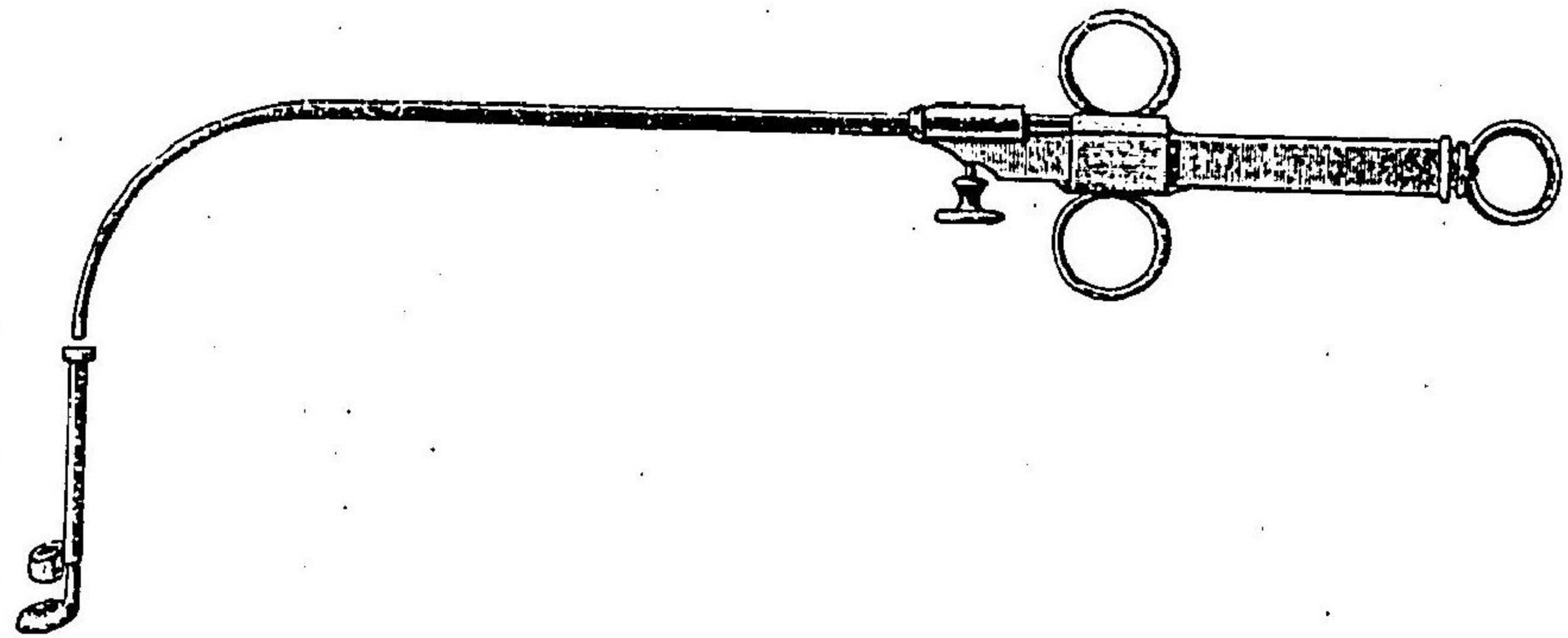
生活狀態ノ改善 殊ニ飲酒喫煙過度ノ發聲等ヲ禁ジ塵埃ノ吸入ヲ避ケシム然レドモ輕症者ニハ是等ハ命ジ易クシテ行ヒ難シ寧ロ此際醫師ハ徒ラニ嚴重ナル規定ノ下ニ患者ヲシテ却ツテ憂鬱セシメザルニ注意スベシ

鼻咽喉頭疾患ノ存スル時ハ固ヨリ之ガ治療ヲ怠ルベカラズ  
鬱血性ナル時ハ緩下劑ヲ用ヒテ誘導シ又ハ鑛泉療法ヲ撰ブ但シ之ヲ其源泉ニ於テスルノ效アルハ單ニ鑛泉其物ノ作用スル而已ニ非ズシテ改善セラレタル患者ノ生活狀態ノ亦タ大ニ影響スルモノナルハ總論(第六章)ニ於テ述ベタルガ如シ又其地勢ハ山間海岸皆ナ可ナルモ特ニ乾性症ニ對シテハ海邊ヲ適當トス鑛泉ノ種類ハアルカリ泉マグネシア泉食鹽泉硫酸泉等良シクシユミットハ此際特ニ冷



局處療法  
單純性炎

泉ノ竝用ヲ慾メ温泉ハ一旦冷却セル後之ヲ用ユ  
鎮咳竝ニ祛痰劑第四百三十二頁モ亦タ時ニ必要ナル可シ



「テツレユキ」複重フーラグドシラ

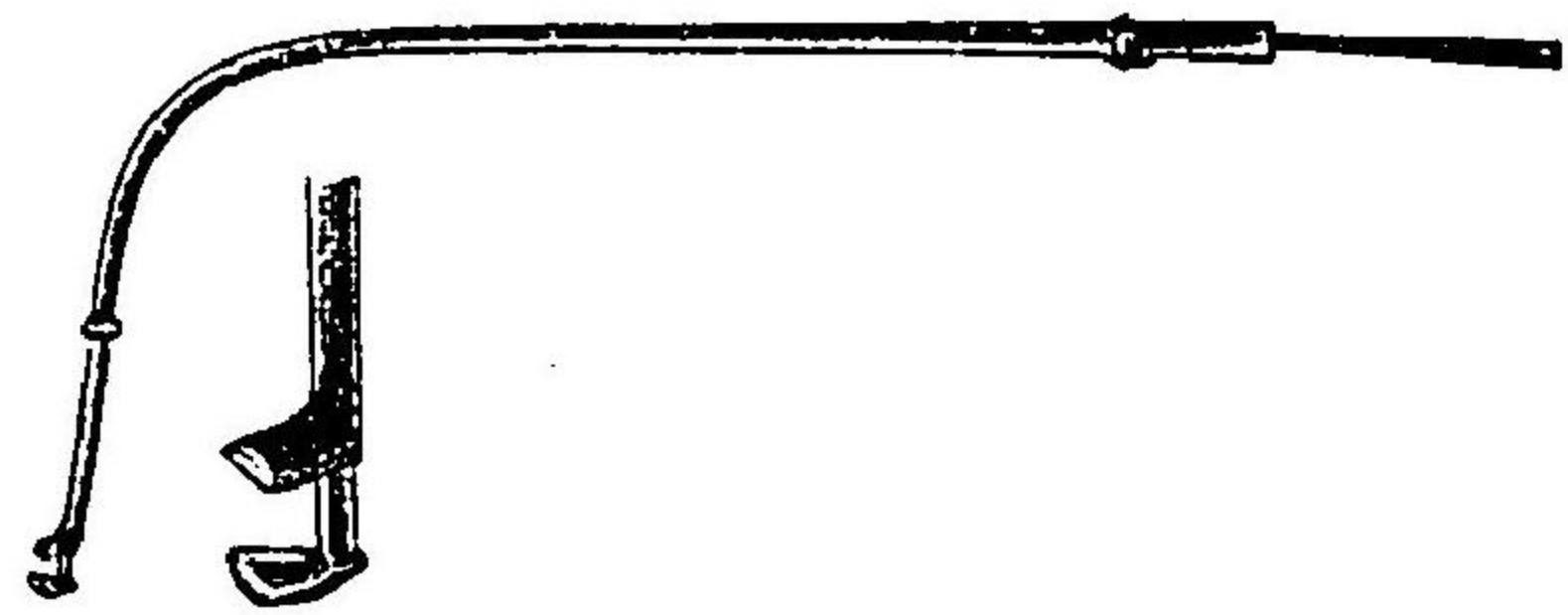
ト共ニ局處的療法ハ必要ナリ、  
單純性喉頭炎ニハ收斂劑ヲ撰ビ唯ダ  
此際藥劑ヲ液體又ハ粉劑ニテ用ユルハ各  
人ノ撰擇ト其症例トニヨルモノナレドモ  
吾人ハ殊ニ注入法ノ緩和ニシテ有效ナル  
ヲ稱ス藥劑トシテハ〇・五乃至一〇%硝酸  
銀〇・五―五%クロール亞鉛一―五%ブ  
タルゴール等ヲ當初ニハ毎日一回後ニ至  
リ數日ヲ隔テテ一回注入又ハ塗布ス或ハ  
一〇%タンニングリセリンノ塗布ヲ試ム  
ルモ可ナリ(總論第四百十七頁參照)  
乾性症ニハ先ヅ初メ吸入ヲ行ヒテ豫カ  
ジメ痲皮ヲ融解セシメ後チ是等ノ藥液又  
ハ殊ニ此際ルゴール液(第四三四頁塗布ハ  
有效ニシテ尙ホ沃度加里ヲ内服セシム

圖七十八百第

乾性症

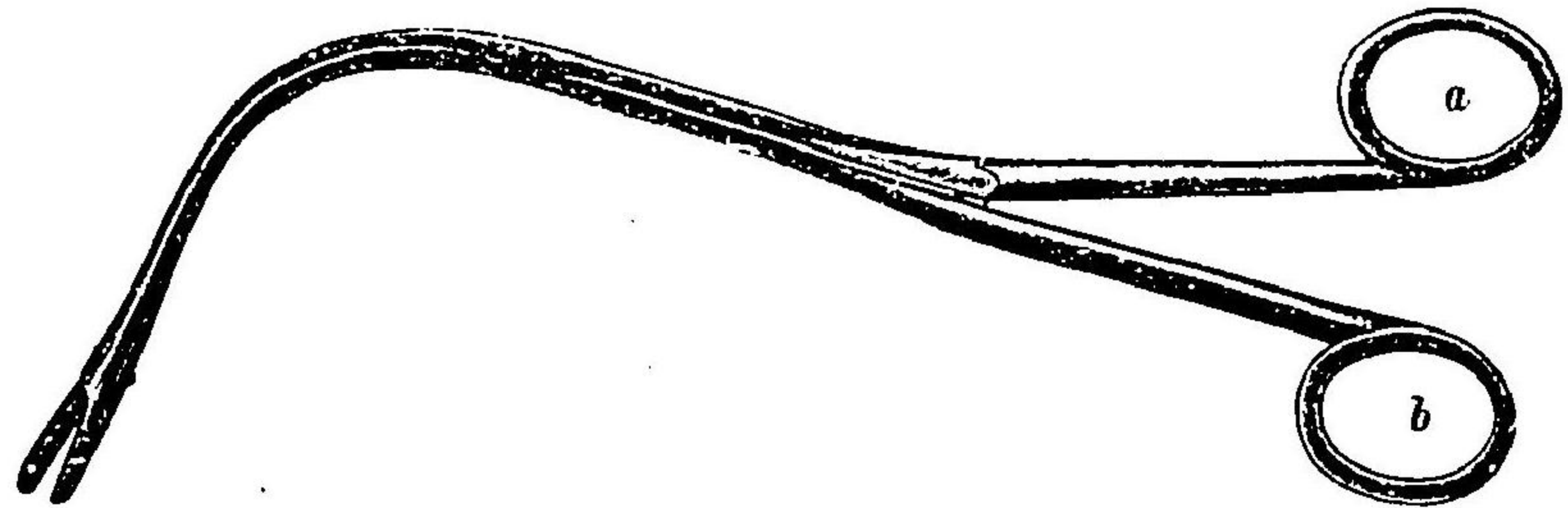
肥厚性炎

肥厚性ノモノハ輕症ニハ單純性加答兒ト同様ニ收斂劑ノ塗布ヲ施コシ尙ホ上  
皮剝離又ハ頑固ナル限局性肥厚等ノ存スルトキハ豫ジメ局處麻酔ヲ施コセル後  
チ硝酸銀、クロム酸、三



子鉗匙鏡セルペンヒーロ

圖八十八百第



子鉗匙鏡ルケンレフ

圖九十八百第

鹽化醋酸五〇%乳酸等  
ヲ以テ腐蝕ス其法ハ既  
述セルガ如シ(第四百十  
九頁)又ハ肥厚部ヲ鉗匙  
鉗子ヲ以テ除去シ後チ  
腐蝕スルモ可ナリ、  
硬皮症ニ於テモ輕症  
ナルハ單ニ沃度劑ノ内  
服竝ニ收斂劑ノ貼布ニ  
依リテ效アリ然レドモ  
其變化ノ高度ナルモノ  
ハ上述ノ如ク腐蝕ス此  
際腐蝕劑ハ患者ノ吸氣  
時ニ當リテ聲帶突起ガ  
互ニ相離隔シ且ツ後壁

ノ伸展セル時ニ之ヲ喉頭内ニ到達セシム可キヲ注意ス可シ、但シ腐蝕ハ數回之ヲ反復スルノ要アル事屢々ナリ、而モ尙ホ效果ナキトキハ垂直ニ切除シ得ル重複キユレツテヲ用ヒテ之ヲ摘除ス(第百八十七圖)  
凡テ是等腐蝕或ハ切除等ノ手術後數週間ハ絶対ニ發聲ヲ禁ゼシム、收斂劑ノ塗布ヲ連續ス

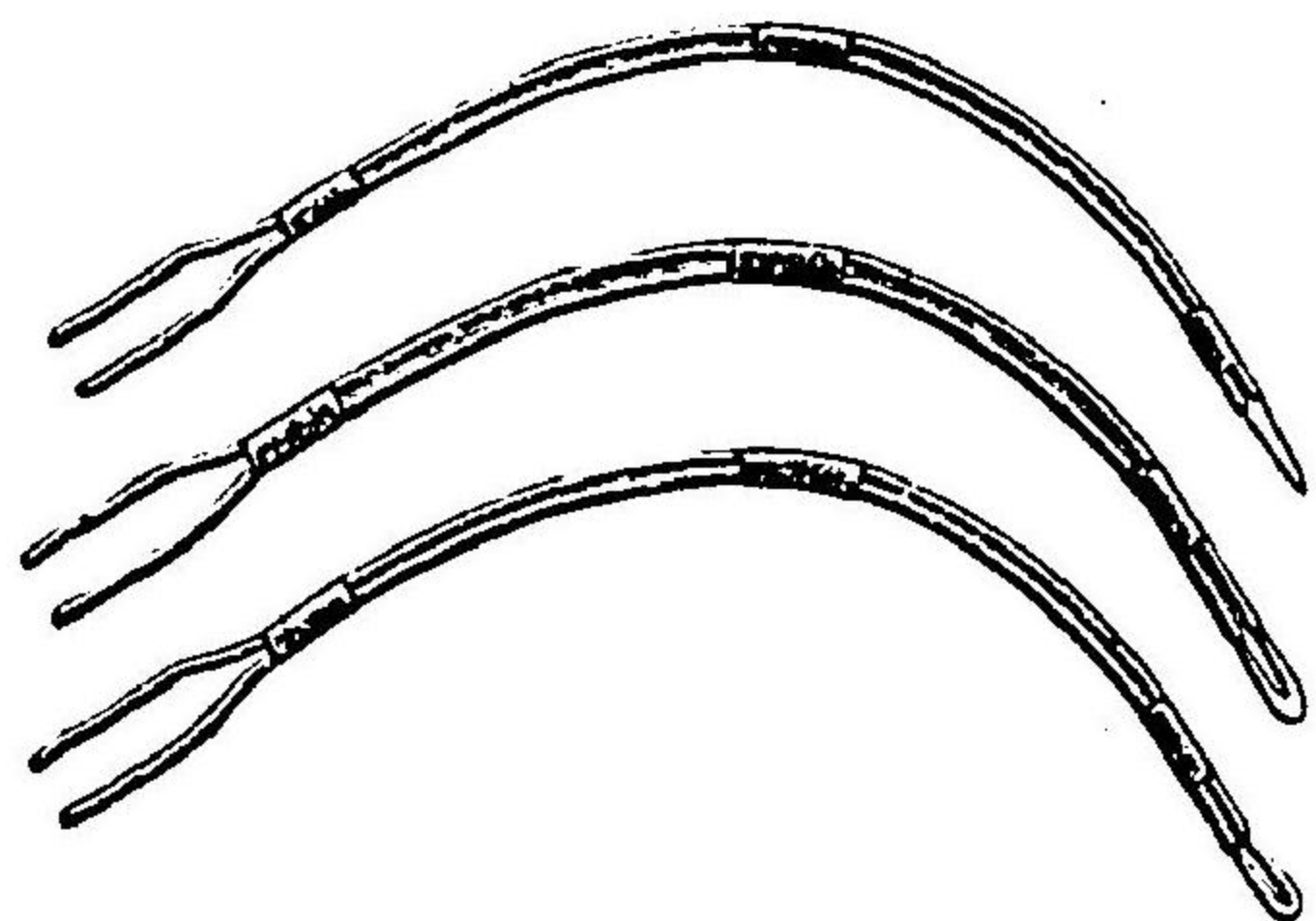
諸人結節 モ其著シク大ナルカ、又ハ俳優聲樂家等ニ於ケルガ如ク職業上ノ障礙ヲ爲ストキハ前同様ニ之ヲ腐蝕シ、又ハローゼンベルヒ銳匙鉗子、フレンケル銳匙鉗子等ヲ以テ之ヲ除去ス、但シ小兒結節ニ對シテ手術ノ必要ナキコトハ既述セラルガ如シ

第百九十九圖



喉頭電氣燒子析子

第百九十九圖



喉頭電氣燒子灼子

モルガンニ一資腫脫症並ニ聲門下喉頭炎ニ於テモ收斂腐蝕諸劑ヲ試ミ、其腫脹ノ頑固ニシテ且ツ障礙ノ著シキハ「キユレツテ」鉗子等ニテ摘除ス、尙ホ聲門下喉頭炎ニ於テ急ニ窒息症狀ヲ呈セルトキハ直チニ

插管法又ハ氣管切開ヲ施コスベシ  
筋性麻痺ニ向ツテハ電氣療法ヲ試ミ、又ハストリヒニン〇〇〇一ヲ一日一回―二回丸劑トシテ用キ、又ハ皮下注射ヲ施コス、猶ホ是等ノ手術ニ際シ電氣燒灼子ノ應用セラルル事アレドモ刺戟症狀ノ強キガ爲メ現今用ヒラルル事稀ナリ、電氣分析子モ亦タ殆ンド應用サルルコトナシ(第百九十並ニ百九十一圖)

第貳節 慢性氣管炎 Tracheitis chronica

慢性氣管炎

原因

原因 本症ハ常ニ慢性咽喉頭或ハ氣管枝加答兒ノ隨伴症トシテ來リ、又潰瘍狹窄異物新生物等ニ因スル事アリ

症狀

症狀 自覺的ニ多少強度ノ咳嗽刺戟アリ、稀ニ氣管部或ハ胸骨手柄ノ下ニ壓感、又ハ疼痛ヲ訴フ。

他覺的ニ氣管粘膜炎發赤、腫脹ハ粘膜炎下組織ノ發達弱キガ故ニ喉頭ニ於ケルモノノ如ク著シカラザレドモ、時ニ粘液腺ノ著明ニ腫大スルヲ見ル、但シ老人並ニ結核患者ノ加答兒ニ際シテハ粘膜炎却ツテ蒼白ナリ、分泌物ハ水様又ハ膿様ニシテ、稀ニハ他ノ上氣道ト同様ニ痲皮ヲ形成シ惡臭ヲ放ツ事アリ

豫後

豫後 良ナレドモ勿論原病ノ如何ニ關ス

療法

療法 諸種ノ害物ヲ避ケ、原因療法ヲ施コスノ他ニ時ニ祛痰或ハ鎮咳劑ヲ處方シ、且ツ喉頭加答兒ニ向ツテ治療スルトキハ慢性氣管炎ハ通例何等ノ局處的療

法ヲ要セズシテ治癒スルモノナリ、分泌物多量ナル時ニハ松子油、テレピン油、バルサム劑等ノ吸入ヲ行フ(四百十九頁參照)

處方

テレピン油

三〇・〇

朝夕或同半茶匙宛熱湯ニ點下シテ吸入料トス

第四章 喉頭軟骨膜炎 Perichondritis laryngis

原因

原因 蜂巢織炎ト同様ニ么微有機體ノ侵入ニ因スルモノニシテ稀ニ原發的ニ損傷即チ喉頭部ノ打撲衝突或ハ食道壁ノ外傷ヨリ、又ハ異物或ハ感冒ニ因リテ來レドモ、概テ續發的ニ慢性傳染病即チ結核、微毒、狼瘡等ニ或ハ急性傳染病就中實扶埋里、室扶斯ニ其他猩紅熱、アンギナ、インフルエンザ、敗血膿毒症、急性關節癱瘓質斯等ニ現ハレ、又ハ惡性腫瘍殊ニ癌腫ニ繼發ス、尙ホ時トシテ喉頭硬皮症ニ之ヲ伴フ事アリ、

而シテ是等ノ際ニハ概テ上記諸症ニ因リテ生ジタル粘膜炎ノ潰瘍或ハ損傷部ヨリ、球菌ノ侵入スルニ基ヅクモノナレドモ、時トシテ其病毒ハ血液傳染ノ徑路ヲ取ルコトアリ、或ハ微毒結核等ニハ又タ是等特殊病原體ノ傳染ニ因ル事アル可

病理解剖

尙ホ時トシテ之ガ原因タル可キ病變ヲ證明シ得ズシテ、一見特發的ナルガ如キ事アリト雖モ、仔細ニ検査スルトキハ却ツテ潜伏セル傳染性疾患殊ニ微毒或ハ結核等ニ續發セルモノナルヲ知ル事多シトス

病理解剖

通例壹個乃至隣接セル貳個ノ軟骨ガ犯サルルニ止マリ、殊ニ好發スルハ披裂軟骨ニシテ、次デ環狀軟骨ヲ犯シ、稀ニ甲狀軟骨ニ現ハル、就中環狀軟骨竝ニ甲狀軟骨ニ於ケルモノハ其内或ハ外膜ノ犯サルルニ從ツテ、内及ビ外軟骨膜炎 Perichondritis interna od. externa ヲ區別ス。

而シテ此際ニ於ケル病變ハ軟骨膜ノ炎症ニ依リテ滲出セラレタル膿液ハ之ト軟骨トノ間ニ滲溜シ、爲メニ軟骨膜ハ其基底ヨリ剝離膨隆シ、遂ニ軟骨ノ一部又ハ大部ヲ壞死セシムルニ至リ、周圍組織モ亦タ炎症性腫脹ヲ呈ス、而シテ此膿瘍ハ各部位ニ依リテ或ハ喉頭腔ニ、或ハ食道内ニ破壞シ、又ハ外皮ヲ穿通スル事アリ、但シ潰瘍ニ續發セル者ハ其濃汁ハ久シク滲溜スル事無クシテ直チニ喉頭内腔ニ流出スルヲ常トス、猶ホ外軟骨膜炎ニ在リテハ外皮ノ抵抗強キガ爲メニ時ニ膿瘍ノ下垂ヲ來ス事アリ、又タ若シ存在セル内及ビ外軟骨膜炎ガ各其方側ニ穿破スル時ハ所謂全喉頭瘻孔 Die totale Larynxfistel ヲ形成ス、尙ホ時トシテ内軟骨膜炎ガ外部ニ破壞シ又ハ外軟骨膜炎ガ内部ニ穿通シ、後者ニ在ツテハ咳嗽或ハ努責ニ因リテ氣腫ヲ生ズルニ至ル

其他軟骨膜ニ於テ稀ニ化膿ヲ來サズシテ治癒シ或ハ又タ結締織増殖ヲ伴ヘル所謂硬化性症 Sclerotische Form ヲ見ル事アリ

症候

自覺症

輕度ノ全身症即チ中等度ノ發熱頭痛等ト共ニ聲音嘶啞咳嗽嚥下痛及ビ呼吸困難ヲ訴フ

他覺的症候

聲音嘶啞ハ粘膜ノ腫脹ニ由リ又ハ聲唇ノ運動障礙ニ因シ或ハ喉頭筋ノ麻痺ニ基クモノニシテ外軟骨膜炎ニハ之ヲ缺如スルヲ例トス嚥下痛ハ屢々耳内ニ放散シ殊ニ病變ガ喉頭入口部ニ存スルトキ或ハ環狀軟骨ニ占位スルトキニ著シ時ニハ全ク之レ無キ事アリ呼吸困難ハ腫脹ノ強弱ニ從ヒテ其程度ヲ異ニシ猶ホ膿瘍ノ破壞又ハ壞死軟骨ノ排除ニ際シ或ハ聲唇ノ正中位ニ固定セラルルトキニハ往々窒息ノ危險ヲ呈ス但シ外軟骨膜炎ニ於テハ然ラズトス

披裂軟骨膜炎

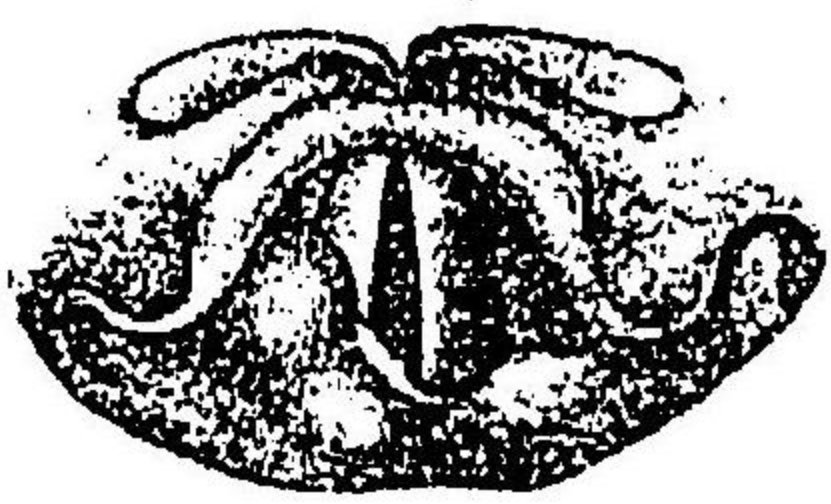
病變ノ部位ニ從ツテ其處見モ亦種々ナレドモ外頸部ニ於ケル限局性壓痛ハ常ニ著明ナリトス又各其處見ヲ列記スレバ  
一 披裂軟骨膜炎 Perichondritis arythenoidea 多クハ一側ヲ又稀ニハ兩側ヲ犯シ殊ニ結核潰瘍ニ續發スルコト多シ  
鏡檢的ニ披裂軟骨部ハ發赤シテ梨子狀ニ腫脹シ爲メニ聲唇ノ後部ハ其蔽ハル

環狀軟骨膜炎

内環狀軟骨膜炎

外環狀軟骨膜炎

圖二十九百第

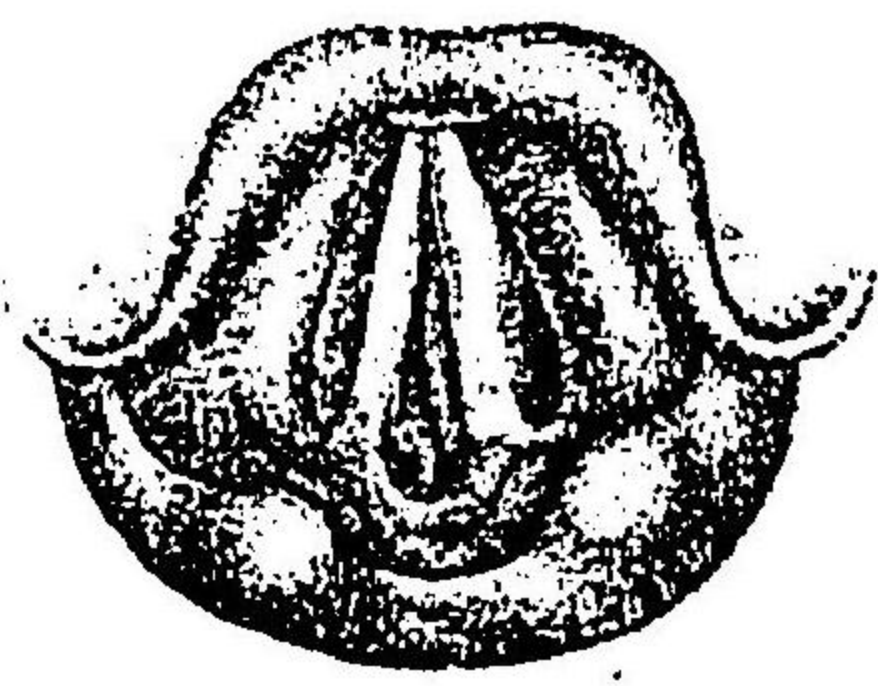


炎膜骨軟裂披側右

得ルハ既述セルガ如シ

(一) 内環狀軟骨膜炎

圖三十九百第



炎骨軟狀環内側左

死シ後筋ハ其附著點ヲ失フトキハ遂ニ聲門開大作用ヲ停止スルニ至ル

(二) 外環狀軟骨膜炎 Perichondritis cricoidea externa 其外側ヲ犯ストキハ腫脹ハ主ニ

梨子狀窩竇ニ現ハレ弓部ニ來ルトキハ前頸部ニ於テ彈力性ニシテ壓痛波動ヲ有スル隆起ヲ見ル而シ遂ニ内或ハ外方ニ破開ス

甲狀軟骨膜炎  
内甲狀軟骨膜炎

外甲狀軟骨膜炎

會厭軟骨膜炎

三、甲狀軟骨膜炎 Perichondritis thyroidea 前者ト等シク之ヲ内外二種ニ區別ス  
 (一)内甲狀軟骨膜炎 Perichondritis thyroidea interna 輕度ナルハ單ニ一側ノ聲唇運動  
 ガ少シク減弱スルニ止マレドモ病機ノ進ムニ從ヒ前連合又ハモルガンニ一實ニ  
 浮腫ヲ生ジ聲唇運動ハ著シク障礙セラレ甚シキハ正中位ニ固定セララルルニ至リ  
 室(竇)皺襞モ亦タ腫脹シテ遂ニハ其各部位ヲ識別スル能ハザルニ至ル  
 (二)外甲狀軟骨膜炎 Perichondritis thyroidea externa ニ於テハ外環狀軟骨膜炎ト同  
 様ニ側頸部ニ當ツテ同様に腫脹ヲ認メ前頸諸筋ハ其外表ニ在ツテ容易ニ移動ス  
 ルヲ見ル

四、會厭軟骨膜炎 Perichondritis epiglottica 會厭軟骨ニ在ツテハ其膜ハ堅ク之ト接  
 著スルガ故ニ炎症ニ當ツテ其膨隆ハ前記諸軟骨ニ於ケルガ如ク著シカラザレド  
 モ其數倍ノ大サニ達シ黄色或ハ紅色ヲ呈シテ浮腫シ恰モ結核性浸潤ニ似テ而カ  
 モ結核或ハ微毒ニ來レル潰瘍ニ續發スルコト多ク其底ニ於テ鋸齒狀ニ軟骨ノ露  
 出セルヲ見ル

經過 其經過ノ急速ナルハ外傷或ハ急性傳染病ニ續發セルモノニ多ク慢性  
 疾患ニ來ルモノハ亦タ緩慢ニ經過シ數月乃至數年ニ亘ル而シテ其何レヲ問ハズ  
 時ニハ高度ノ腫脹ニ因ツテ窒息ノ危險ニ瀕スルコトアリ或ハ壞死セル軟骨ガ遊  
 離シテ咯出セラレ後ニ癒痕治療ニ赴ムクト雖モ喉頭内癒痕ノ強ク收縮スルトキ  
 ハ却テ高度ノ狹窄症狀ヲ呈シ遂ニハ不幸ニ轉歸スルモ亦稀ナラズ尙ホ其經過中

診斷

ニ膿汁ヲ吸入シテ嚙下肺炎ヲ生ズルコトアルヲ以テ注意ヲ怠ル可ラズ  
 診斷 喉頭軟骨膜炎ノ初期ニハ之ヲ蜂窠織炎ト區別スルコト困難ナリ唯ダ  
 其腫脹ガ短時日ニシテ消失シ破裂軟骨部ハ再ビ原形ニ復シ且ツ其運動ヲ回復ス  
 ルガ如キハ殆ンド確實ニ軟骨膜炎ニ見ザル經過ナリトス  
 環狀破裂關節炎モ亦タ恰モ軟骨膜炎ノ如キ處見ヲ呈スレドモ之ハ殊ニ急性慢  
 麻質斯ニ來リ且ツ撒曹劑ニ反應ス  
 其外時トシテ結核性浸潤或ハ聲門下喉頭炎又ハ其浸潤ト誤マル事アリ  
 外喉頭軟骨膜炎ハ之ヲ前述セル症狀ニ據リ略ボ確實ニ診斷シ得可シト雖モ時  
 トシテ深部ノ蜂窠織炎膿腫淋巴腺膿液膿化膿先天性瘻孔等ト區別セザル  
 可ラズ

豫後

何レノ場合ニ在ツテモ之ヲ確實ニ診斷シ得ルハ壞死軟骨片ヲ視觸シタルトキ  
 或ハ之ヲ咯出セルトキ等ナリトス概シテ言ヘバ患者ハ喉頭内ニ潰瘍性變化ヲ有  
 シ之ニ次テ發熱疼痛及ビ呼吸困難ヲ呈シ而シテ鏡檢ニテ破裂軟骨部ノ腫脹セル  
 ト同時ニ聲唇ニ運動障礙ヲ認メ且ツ其局處或ハ之ニ相當セル外頸部ニ於テ著明  
 ナル腫痛アルトキハ已ニ本症ヲ推定シテ可ナリ  
 豫後 其原因ト病變ノ程度トニ依ツテ種々ナレドモ已ニ前述セルガ如ク危  
 險ナル狹窄症狀ハ一般ニ之ヲ起スモノナルガ故ニ豫後ヲトスルニハ慎重ナラン  
 コトヲ要ス尙ホ假令ヒ此危險症ヲ伴ハズトスルモ結核竝ニ癌腫ニ續發セルモノ

療法

ハ絶對ニ不良ニシテ微毒外傷又ハ急性傳染病ニ續發セル者ハ稍ヤ良ナリ然レドモ治癒後一定度ノ官能障礙ヲ胎サザルハ蓋シ稀有ニ屬ス

**療法** 一般ニ蜂窠織炎ノ療法ト畧ボ同様ナリ

**原因療法** 微毒ニ繼發セル者ニハ驅微法ヲ結核ニハ亦其療法ヲ施コシ

**對症療法** トシテハ先ヅ患者ニ發聲ヲ嚴禁シ以テ喉頭ノ安靜ヲ圖リ頸部ニ氷罌法時ニ溫罌等ヲ施コシ吸劑トシテ灰白軟膏ノ塗擦沃度劑ノ内服等ヲ試ミ殊ニ之ハ微毒性ノ疑アル時ニ必要ナレドモ時トシテ沃度ニ因ツテ更ラニ浮腫ヲ増加スルコトアルガ故ニ既ニ狭窄症狀ヲ呈セル者ニハ氣管切開ノ後ニ之ヲ行フヲ善シトス鎮咳劑ノ應用モ亦ク必要ナル可シ

其他局處ニコカイン、アドレナリン等ノ塗布ヲ試ミ又ハ腫脹部ヲ亂切シ已ニ膿瘍ヲ形成セルモノハ喉頭刀ヲ以テ之レヲ切開シ(蜂窠織炎參照)又タ若シ既ニ壞死軟骨ガ可動性ナル時ハ喉頭鉗子ヲ以テ之ヲ摘出ス可シ

何レノ場合ニ於テモ患者ノ呼吸ニ就テハ深キ注意ヲ拂ヒ狭窄症アルトキハ直チニ氣管ヲ切開ス此際ニ於ケル插管法ハ却ツテ炎症ヲ増悪セシムルノ懼アリ慎ムベシ

炎症ノ後胎症トシテ來ル喉頭狭窄ノ療法ニ就テハ後述ス可シ

附

氣管軟骨膜炎

氣管軟骨膜炎 Perichondritis tracheae.

氣管軟骨ニ在ツテモ時ニ軟骨膜炎ヲ發スル事アリ此際多クハ喉頭モ同様ニ罹患シ環狀軟骨膜炎ノ漸次下行シテ本症ヲ惹起シ又ハ喉頭ニ於ケルト等シク結核微毒或ハ他ノ潰瘍等ニ續發スルモノアレドモ時トシテ氣管套管又ハ腫瘍等ノ壓迫ニヨリテ之ヲ起ス

此際軟骨輪ハ壞死ニ陥キリテ析出セラレ或ハ融解シテ治癒スレドモ亦癥痕收縮ニ依リ氣管ニ多少ノ狭窄ヲ貽コス

尚ホ硬腫又ハ慢性氣管炎ノ刺戟ニ因リテ稀ニハ慢性軟骨膜炎ヲ來タシ爲メニ軟骨ノ増殖ヲ見ルコトアリト云フ

第五章 喉頭浮腫 Oedema laryngis

喉頭浮腫トハ喉頭粘膜炎ニ其下織ノ漿液性或ハ漿液纖維素性浸潤ヲ蒙ムリタルヲ云フモノニシテ稀ニ原發スレドモ概テ他疾患ハ一分症トシテ現ハル

原因

非炎症性浮腫

**原因** ニ依リテ之ヲ非炎症性ト炎症性浮腫トノ二種ニ區分ス

一 非炎症性浮腫 Die nichtentzündliche Oedeme.

凡テ炎症ヲ缺如シ組織ノ浸潤液ハ寧ろ漏出 Transsudat ヲ以テ論ズ可ク又是等ヲ

器血性浮腫

血管神經性浮腫

沃度浮腫

外傷性浮腫

各其原因ニ從ツテ列記スレバ

一 器血性浮腫 Stauungsödem 全身浮腫ハ一分症トシテ或ハ喉頭ハ器血ニ際シテ現ハルルモノニシテ其原因ハ心臟病腎臟炎高度ノ貧血及ビ惡液質或ハ頸部靜脈ノ環流ヲ妨グベキ諸疾患例之バ甲狀腺腫其他ノ頸部腫瘍大動脈瘤縱隔竇腫瘍等ニシテ尙ホ脚氣ニ於ケル喉頭浮腫モ亦タ此中ニ屬スルモノナリ

二 血管神經性浮腫 Angioneurotisches Ödem 血管運動神經ノ障礙ニ因ツテ來リ且ツ身體他部ニ於ケル眼局性浮腫ト交互ニ現ハルル事多シ尙ホレチーノ報告セル月經時ニ來リシ喉頭浮腫或ハバイエルノ喉頭結核ノ潰瘍ニ毎月發現セル例ノ如キモ恐ラク此種類ニ算入シ得ルモノナラン

三 沃度浮腫 Jodödem 沃度劑ノ内服ニ因ツテ來ルモノニシテ或ハ之ヲ既ニ罹患セル腎臟ガ本劑ヲ充分ニ排出シ得ザルニ歸シ又ハ神經性若クハ其個人ノ特異質ニ基ツクモノナリト唱フル人アレドモシエヒノ説クガ如ク恰モ沃度ニ由リテ鼻炎ヲ來スト等シク藥物刺戟ニヨリテ起レル炎症機轉ニ基ヅクモノナラン故ニ又タ炎症性浮腫トモ見做シ得可シ

四 外傷性浮腫 Traumatiches Ödem 僅微ナル外傷部ヨリ著シキ喉頭浮腫ヲ生ジ而カモ炎症性症狀ヲ缺如スル事アリ但シ之ハ非炎症ト炎症トノ移行ニシテシユミットハ麵包嚙下ノ際ニ生ジタル外傷ヨリ此浮腫ヲ起セルモノヲ見タリト云フ尙ホ是等ハ原因不明ナルモノトシテ後ニ述ブベキ特發性浮腫ニ算入セラルルモアル可シ

特發性浮腫

炎症性浮腫

病理解剖

症候

自覺症

シ  
五 特發性浮腫 Idiopathisches Ödem 凡テ原因不明ナルモノヲ總稱シテ特發ト云ヘドモ精査スル時ハ前記ノ孰レカニ屬スベキモノナル可シ

二 炎症性浮腫 Die entzündliche Oedeme.

之ハ喉頭内又ハ其附近ノ炎症機轉ニ隨伴スルモノニシテ其原因ハ喉頭或ハ其附近ノ潰瘍即チ強烈ナル加答兒蜂窠織炎軟骨膜炎關節炎結核微毒癌腫等ノ潰瘍ニ來リ外傷又ハ異物ニ續發シ又ハ急性傳染病例之バ痘瘡猩紅熱虎列刺麻疹室扶斯敗血膿毒症急性關節痲質斯急性心内膜炎等ノ經過中ニ之ヲ認ムルコトアリ此際病毒ハ血管又ハ淋巴管ヲ經テ此處ニ侵入セルモノト推定セザル可ラズ其他尙ホ化學的竝ニ温熱的刺戟即チ喉頭粘膜炎腐蝕又ハ火傷ニ因ツテ本症ヲ起ス

病理解剖

結核間ニ蓄積セル液體ハ非炎症ノ者ニ於テハ細胞分子ニ乏シキ濾出液ナレドモ炎症性ノ者ニ在ツテハ細胞ニ富メル滲出液ニシテ殊ニ粘膜炎下織ノ鬆疎ナル局處ニ於テ多量ニ滯溜ス即チ會厭ノ舌面披裂會厭皺襞披裂軟骨部ヲ主トシ其他室竇皺襞及ビ聲門下腔等ナリ

症候

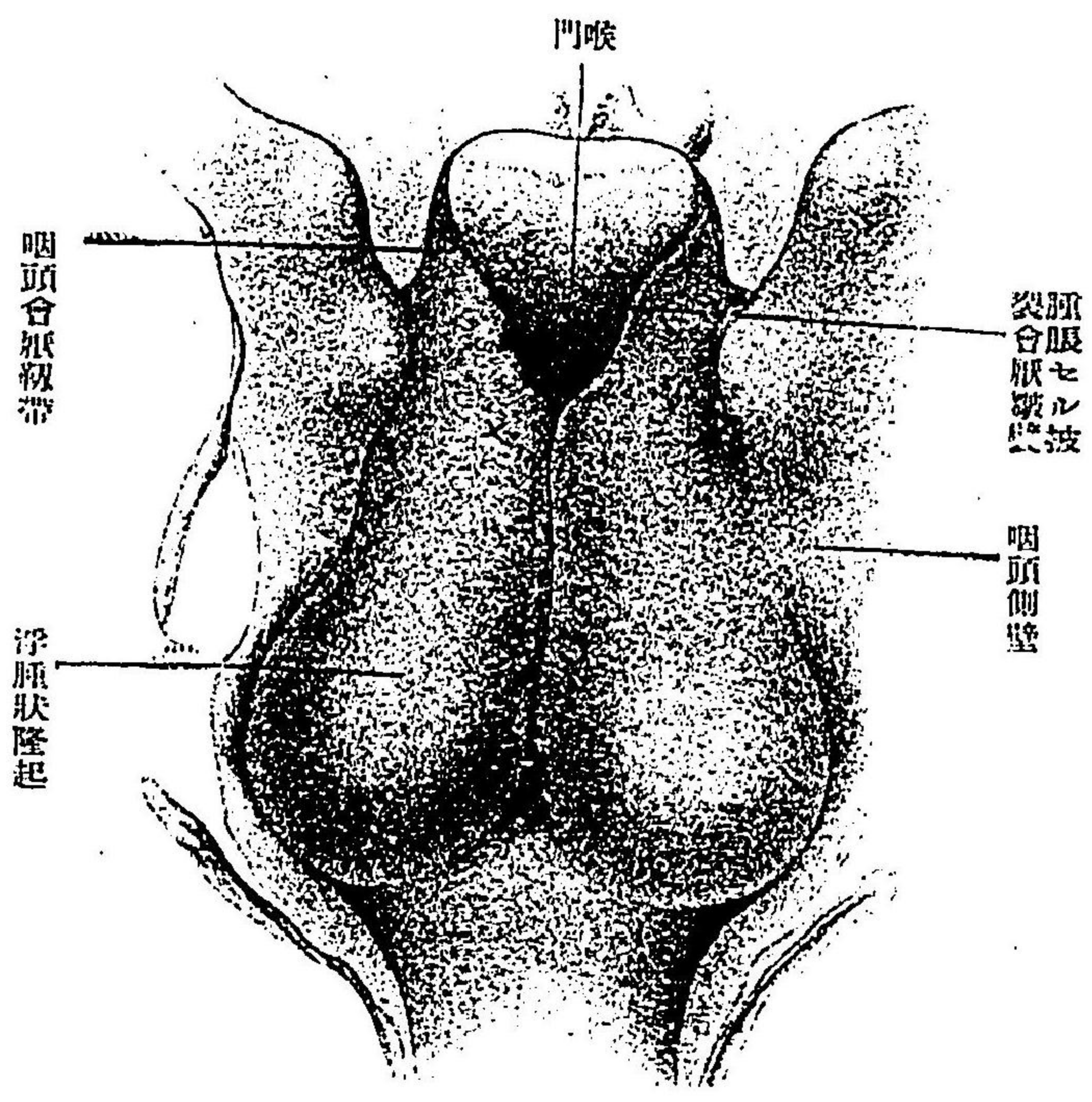
自覺症 輕度ナルハ何等ノ症候ヲ呈セザレドモ重キニ從ヒ喉頭ニ瘙癢又ハ異物ノ感アルト共ニ多少聲音ヲ障礙シ又嚙下痛ヲ伴ヒ尙ホ腫脹ノ程度ニ從ツテ多

他發的症候

少ノ呼吸困難アリテ殊ニ腫脹ガ喉頭入口、聲門下腔等ニ存スルトキハ高度ナリトス

他發的症候 喉頭鏡検査ニ據リ粘膜炎ニ於テ多少透明性水様白色或ハ帶黃白色ヲ呈スル腫脹ヲ認ム而シテ若シ其液中ニ圓形細胞ヲ含ムコト多ケレバ從ツテ其色愈濁濁シ又若シ粘膜炎ガ炎症ニ陷キレルトキハ鮮紅色ヲ呈ス今其各局處ニ

第百九十四圖



會厭襞裂開ニ被裂會厭襞浮腫

就テ別記スレバ

會厭ニ來ル時ハ該部ハ土耳其古帽樣ニ腫脹シ時トシテ殆ンド咽頭内ヲ充タセルノ觀アリ、尙其腫脹ハ咽頭會厭襞ニ或ハ梨子狀窪窪ニ及ビ第百九十四圖會厭遊離縁ハ爲メニ内轉スルヲ見ル

被裂會厭襞襞ヲ

聲門浮腫

犯ス時ハ會厭ノ下ニ於テ腫脹ヲ認メ兩側ヲ犯ス時ハ左右相並ンデ喉頭入口部ヲ狹カラシメ又此腫脹ノ甚シキ時ハ呼吸ニ從ツテ上下ニ翻轉スルヲ認ム往時此喉頭入口部ノ浮腫ヲ目シテ聲門浮腫 Glottisödem ト稱エタリシモ聲門トハ既ニ述ベタルガ如ク發聲裝置即チ兩聲唇部ヲ總稱スルモノナルガ故ニ此名ハ正シカラズ、聲門浮腫トハ却ツテ甲状披裂筋層浮腫ヲ云フ可キナリ

喉頭内腔ニテ犯サレ易キハ聲門下部並ニ後壁ナリトス聲唇ニモ來レドモ著シカラズ尙ホ竇ニ限局セルトキハ所謂竇、膿、脫、症トシテ現ハル

經過 慢性疾患ニ續發セルモノハ概テ慢性ノ經過ヲ取り、血管神經性浮腫及ビ其急性傳染病、外傷等ニ基因セル者ハ經過モ亦迅速ナリ、然レドモ時ニハ急慢性相移行シ或ハ相反スルコトアリ

診斷 喉頭鏡ニ據リテ前記ノ腫脹ヲ認ムルニ加カズト雖モ、亦尙ホ其原因ヲ求ムルニハ先ヅ喉頭及ビ其附近ヲ精査シテ若シ之ヲ證明シ得ザルトキハ更ニ全身ヲ視察シ殊ニ心臟、腎臟等ヲ検査スルハ特ニ浮腫ノ性質ヲ知ル上ニ於テ必要ナリトス

豫後 其原因ト浮腫ノ程度ト並ニ其蔓延ノ遲速トニ從ツテ種々各異ナル可シ、而モ時トシテ急ニ之ニ因リテ窒息ニ陷キル事アルガ故ニ豫後ヲ定ムルハ慎重ナルヲ要スレドモ多數ノ慢性症ニハ格別ノ危險ヲ呈セザルナリ

療法

療法

喉頭浮腫



原因の療法 先づ其原因タル疾患ヲ知ラバ之ニ對スル處置ハ固トヨリ必要ナリ之ニ就テハ一々此處ニ列舉セズ然レドモ既ニ危險ハ切迫セル者ニハ直チニ局處療法ヲ行フ可キハ論ヲ俟タズ

對症療法 未ダ進行セザル症例ニハ先づ頸部ノ水瘰ヲ施コシ又ハ氷水ヲ嚙下セシメ鎮咳劑ヲ用キココカイン、アドレナリン等ノ局處塗布ヲ試ミ或ハ外頸圍ニ濕布ヲ纏繞シ又ハ芥子或ハ水蛭ヲ貼用シ同時ニ發汗又ハ緩下劑ヲ處ス尙ホ非炎症ノ者ニ對シテピロカリンノ皮下注射ヲ行ヒテ著效アル事アリト但シ心臟疾患アル者ニハ禁忌ナリ其他喉頭刀ヲ以テ浮腫部ヲ亂切シ又ハ若シ既ニ病勢ノ進行シテ狭窄症狀ヲ呈セル際ニハ直チニ氣管切開ヲ行ハザル可ラズ此際插管法ハ無效ナルコト多シ蓋シオドワイアー管ノ上端ハ聲唇ノ上縁ニ固定スルモノナルニ浮腫部ハ却ツテ其上部ニ存スル事多キト又一方ニハ炎症ノ者ニハ却ツテ之ニ因リテ腫脹ヲ増悪セシムルコトアレバナリ故ニ寧ロシユレツテル管ヲ善シトスルモ其壓迫ノ却テ害アルハ前者ト同様ナリ

尙ホ急性性症ニ在ツテハ輕症ノ如ク見ユルモ急ニ増悪スルコトアルガ故ニ注意スベシ

附

氣管浮腫 Oedema tracheae.

氣管浮腫

氣管ニ於テハ其粘膜下織ノ發達弱キガ故ニ其浮腫モ亦タ著シカラズシテ且ツ通例聲門下腔ノ浮腫ニ連續シテ來レドモ或ハ又タ外部ヨリ氣管壁ヲ犯スベキ疾患ニ隨伴シ又ハ氣管内異物ニ因ツテ現ハル是等ハ殊ニ結締織ニ富メル氣管後壁ニ比較的著明ナレドモ之レノミニテハ著シキ狭窄症狀ヲ起スニ至ラズ

第六章

喉頭關節ノ疾患

Celenkrankheiten des

Kehlkopfes

喉頭關節ノ疾患ニ就テノ報告ハ甚ダ尠ナクシテ從ツテ之ヲ稀ナリト爲セドモ其然ル所以ハ患者ニ於テ之ヲ明カニ指定シ得可キ症候ノ乏シキト屍體ニ就テハ之ヲ精密ニ確證シ得ル機會ノ尠ナキトニ因スルモノナル可ク從ツテ世人ノ想像スルガ如ク爾ク稀ナル者ニ非ザル可シ而シテ喉頭關節中ニテ罹患スルハ殆ンド常ニ環狀披裂關節ニシテ以下之ニ就テ述ベントス

環狀披裂關節膜炎 Synovitis cricoarythnoidca.

原因 急性性ノ主ナル原因ハ急性癩麻質斯ニシテ時ニハ麻疹ノ轉移ヨリ起ルコトアリ

慢性性ハ諸種ノ傳染病例之バ室扶斯、實布埤里、痘疹、結核、微毒等ニ之ヲ見又ハ其附近ノ炎症殊ニ蜂窠織炎、軟骨膜炎等ガ關節ニ移行スルニ依リテ生ジ及ビ痛風ニ因ツテ來ルアリ

環狀披裂關節  
膜炎  
原因

病理解剖

病理解剖 關節内ニ漿液又ハ漿液膿様ノ滲出ヲ起シ、著シキ場合ニハ關節ノ周圍織ニ浸潤ヲ生ズ而シテ片側又ハ兩側ニ現ハレ慢性症ニテハ遂ニ關節強直ヲ來スニ至リ、之ガ關節膜内ニ變化アルヲ眞性、wahre Ankyloseト爲シ、周圍織ノ變化ニ因ツテ來ルヲ假性強直症、falsche Ankyloseト云フ

症候

症候 諸原因中最モ屢々急性僂麻質斯ニ因ツテ來ルガ故ニ概テ同時ニ身體他部ノ關節、炎ヲ認ムレドモ又時トシテ環狀披裂關節炎ガ其先驅ヲ爲ス事アリ、自覺的ニ急性症ノ輕度ナル者ニ在ツテハ患者ハ單ニ談話或ハ嚙下時ニ際シ喉頭部ニ輕キ壓迫ノ感ヲ有スルニ過ギザルモ重症ニハ殊ニ耳内ニ放散スル劇痛アリテ且ツ聲、音嘶、嘔ト多少ノ呼吸困難トヲ呈ス

慢性症ニテハ其原病ノ症候アルノ他ニ披裂軟骨ノ固定位置ニ從ツテ多少ノ發聲障礙又ハ呼吸不利ヲ呈スル事アル可シ

他覺的ニ輕症ニ於テハ鏡檢的ニ格別ノ病變ヲ認ムル能ハザレドモ、重キモノニハ既ニ外部ヨリ甲狀軟骨ノ後上部ヲ壓スルトキニ僅微ナル軋、機、握雪様音ヲ觸知シ又ハ聽取シ得ル事稀ナラズ、喉頭鏡ニ依リテ披裂軟骨部ニ炎性浮腫ヲ認メ、同時ニ同側聲、唇ニ運動障礙ヲ見ル時トシテ披裂軟骨ハ脱臼シテ異常ノ位置ヲ取レルコトアリ、或ハ慢性ニテハ關節ハ已ニ強直ニ陷キレルアリ

診斷

診斷 急性症ハ披裂軟骨膜炎ト同様ノ處見ヲ呈スレドモ、此際身體他部ノ關節ニ炎症

豫後

ヲ證明シ得ルトキハ殆ンド確實ニ之ヲ診斷シ得可ク、殊ニ僂麻質斯性ノ者ハ撒曹劑ニ反應アル事著明ナリ  
慢性症ニ在ツテハ神經性又ハ筋性麻痺トノ區別甚ダ困難ナルアリ、此際ハ病歴經過並ニ其局處の所見、癢痕、癢著等ヲ參照シテ決定ス可シ、神經性又ハ筋性麻痺ニハ其經過中ニ疼痛ヲ感ズルコト無キヲ通例トス  
豫後 急性僂麻質斯ニ因スル者ハ可良ナレドモ屢々再發シ且ツ慢性ニ移行シ易シ

療法

慢性症又ハ既ニ強直ヲ來セル者ニハ本症ノ豫後ハ疑ハシクシテ、尙ホ若シ兩側聲、唇ガ正中位ニ固定セララル際ハ窒息ノ危險アリ、其他ノ場合ニモ多少ノ狹窄ハ免カレザル可シ  
療法 原因療法 第一ニ原因的療法ヲ行ヒ、急性僂麻質斯ニハ撒曹劑又ハアスピリン等ヲ處方シ、微毒性ノ疑アル者ニハ驅微法ヲ行フ  
對症療法 急性症ニハ發聲ヲ嚴禁シ、頸部ニ氷巻法或ハ溫巻法ヲ施コシ、コカイ、ン、アドレナリン等ノ局處塗布ヲ試ム  
慢性症ニシテ肥厚又ハ癢痕等ノ存在スル時ハ時機ニ應ジテ之ニ外科的處置ヲ試ミ、狹窄ヲ有スル者ニハ其擴張法ヲ施ス  
凡テ窒息ノ危險アル者ニ對シテハ氣管切開ヲ行フ

### 第七章 急性並慢性傳染病 Akute u. chronische Infektionskrankheiten

#### 實扶埤里

##### 第一節 實扶埤里 Diphtherie.

#### 原因

原因 喉頭實扶埤里或ハ格魯布 Kehlkopfdiphtherie od. Croup ハ概テ喉頭實扶埤里ニ續發シ(下降性實扶埤里 Absteigende Diphtherie od. Croup) 其原發スルハ稀ナレドモ或ハ却ツテ喉頭ヨリ咽頭ニ移行スルコトアリ(上昇性實扶埤里 Aufsteigende Diphtherie od. Croup)

殊ニ咽頭實扶埤里ガ喉頭ニ移行シ易キハ一ハ其當流行ノ性質ニ由レドモ亦タ此傾向ヲ助長スルモノハ虛弱ナル體質或ハ衰弱者又ハ腺病結核等ニシテ尙ホ本症ハ主トシテ小兒ヲ犯セドモ時ニ大人ニモ之ヲ見ル然レドモ血清療法以來ハ下降性グループハ非常ニ減少セリト云フベシ

其病原體ナルクレープスリヨフレル菌ニ就テハ已ニ咽頭科篇ニ詳述セリ就テ見ルベシ

#### 格魯布

喉頭實扶埤里ハ屢々單ニ格魯布 Croup トシテ記載ヒラルル事アリ元來格魯布ナル語ハ單ニ臨牀的意義ヲ有シ之ニ依リテ主ニ粗糙ナル犬吠聲咳嗽又ハ喘鳴的呼吸等ノ著明ナル症候ヲ表ハスニ過ギザリシモウキルヒヨウ竝ニロキタンスキーニ依リテ病理解剖的意義

ヲ附與セラレ粘膜ノ表面ニ於ケル纖維素性滲出ヲ醸シ多少容易ニ剝離シ得ベキ義膜ヲ形成スル所ノ病理的機轉ヲ稱スルニ至リテ之ヲ格魯布性炎 Croupöse Laryngitis ト爲シ實扶埤里ニ於ケルガ如ク上皮内竝ニ深部粘膜層内ニ同ジク纖維素性滲出ヲ起シ組織壞死ヲ來ス所ノ實扶埤里性炎 Diphtherische Laryngitis ト區別スルニ至リヌ然レドモ精細ナル検査ニ據リテ斯カル區別ハ臨牀的竝ニ病理解剖的ニ行ハル可キニ非ズシテ却ツテ格魯布性竝ニ實扶埤里ナル者ハ同ジククレープスリヨフレル菌ニ因リテ起ルベキ同一疾患ニシテ唯ダ其程度ヲ異ニシ病理解剖的ニモ亦タ相共屬スルモノナルヲ明ニスルニ至レリ

#### 纖維素性喉頭炎

尙ホ器械的、化學的、溫熱的、等ノ刺激ニ因リテ粘膜ノ表面ニ義膜狀ノ纖維素性沈著物ヲ生ズル事アリ而シテ是等ノ場合ヲ除キ又纖維素性喉頭炎 Laryngitis fibrinosa ト稱シ時ニ球菌傳染ニ因リテ之ヲ來ス事アリ然レドモリヨフレル桿菌ヲ容易ニ發見セザル時ニ於テモ直チニ實扶埤里ヲ否定スル事ヲ得ズ蓋シ臨牀的ニ實扶埤里ト認ム可キ者ニ於テ實扶埤里菌ヲ證明シ得ザル事恰モ結核菌ヲ證明シ得ザルガ如キ場合ノ存スレバナリナレバ實地上ニハ直チニ血清反應ヲ視及ビ之ヲ實扶埤里疑似症トシテ等シク隔離スルノ當ヲ得タルモノト云フ可シ

#### 病理解剖

病理解剖 咽頭實扶埤里ニ等シク粘膜組織内ニ於ケル纖維素性炎症ニシテ上皮ノ壞死スルニ從ヒ汚穢灰白色ノ義膜ヲ生ズルニ至ル唯ダ喉頭ニテハ咽頭ニ於ケルカ如ク組織ノ深部ヲ犯スヨリモ寧ロ表面ニ蔓延スル傾向アリテ更ニ進ンデ氣管ヲ犯スコト多ク尙ホ聲門下腫脹或ハ粘膜下浸潤ノ之ニ加ハアラバ高

度ノ狭窄症狀ヲ呈ス又此纖維素性炎症ハ氣管枝梢ニ波及シ肺組織ノ浸潤ヲ來シ又ハ其閉塞ニ由リテ急性肺萎縮(アテレクトターセ)ヲ起シ之ヨリ一方ニハ肺氣腫ヲ由來スル事アリ

症候並ニ經過

自覺症

自覺症 通例咽頭ヨリ移行スルモノニシテ、此際體温上昇ノ他ニ聲音嘶啞犬吠樣咳嗽竝ニ呼吸困難等ノ症狀ヲ呈ス

聲音ハ無力ト成リ而シテ其理由ハ單ニ義膜ニ因ツテ而已起ルニ非ズシテ聲門下腫脹モ亦タ大ニ之ニ影響シテ茲ニ大吠樣咳嗽ヲ起スサレド聲門又ハ聲門下ニ病變ノ占位セザルトキハ是等ノ徵候無シ呼吸困難モ亦主トシテ粘膜炎下腫脹竝ニ義膜等ノ爲メ喉頭氣管腔ノ狭窄ヲ起スニ因リテ來タル唯ダ稀ニ疾病ノ末期ニ當リテハ聲門開大筋ノ麻痺ニ因スル事アリ

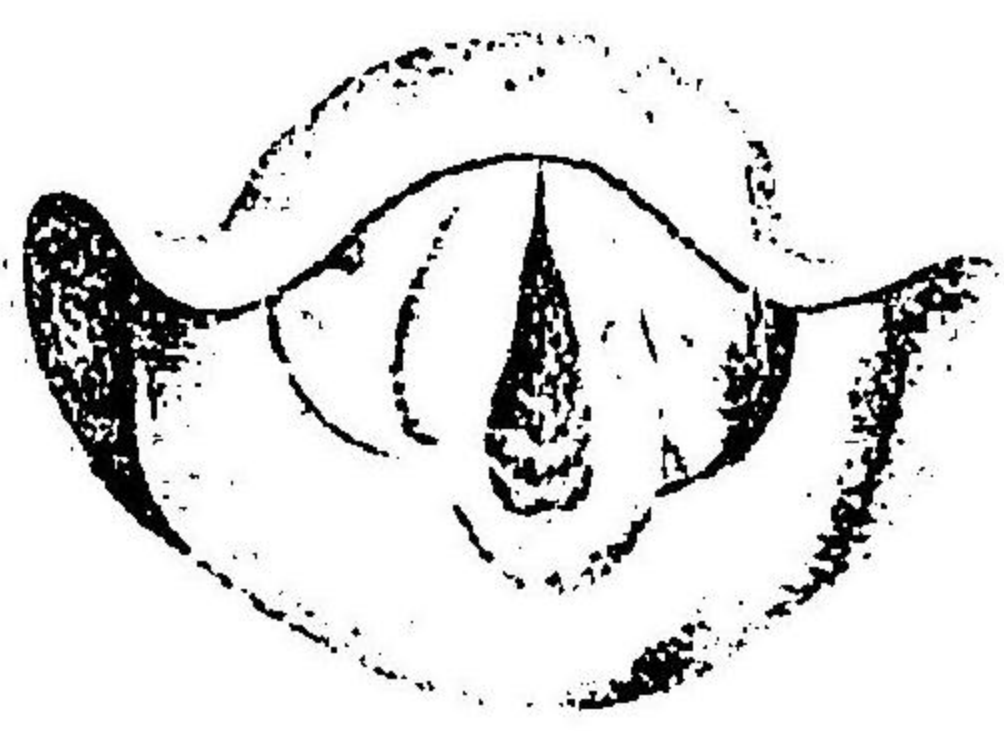
此狭窄、症狀ハ、通例初メハ殊ニ夜間ニ於テ發作性ニ來レドモ恰モ聲門下喉頭炎ノ如ク暫時ニシテ消散シ、一時其危險ヲ免レタルガ如キ觀アルモ患兒ハ再ビ増悪セル發作ノ襲フ所ト成リ漸次其度ヲ加エ、時ニ或ハ義膜片ヲ咯出シテ輕快スレドモ之レハ一時的ニシテ更ニ呼吸困難ハ遂ニ持續スルニ至リ副呼吸筋ハ盛ニ活働シ呼吸ハ延長シテ頗窩、心窩、肋間等諸部ニ吸氣的陷凹ヲ見、小兒ハ牀上ニ反轉シ咳嗽ハ漸次無響性ト爲リ次テ抵抗力ノ衰弱スルニ從ヒ呼吸ハ益々速淺ニ脈搏ハ小頻ニシテ時ニ結滯シチアノーゼハ漸々加ハリ茲ニ昏睡狀態ニ陥キリ、遂ニ初メヨ

他覺症

リ二三日或ハ一週ノ後ニ於テ窒息又ハ心臟麻痺ニ因ツテ鬼籍ニ昇ル原發性喉頭實扶埜里ノ症狀モ亦タ之ト同様ナリ稀レナレドモ若シ大人ヲ犯セルトキハ此狭窄症狀ハ氣管枝ノ共ニ罹患スルニ及ンデ甫メテ現ハルルヲ通例トス

他覺症 下顎竝ニ頸部淋巴腺ハ屢々腫脹シテ壓痛ヲ有ス

第五百九十五圖



喉頭(ア)テ(イ)

鏡檢的處見ハ種々ナレドモ初メニ會厭喉頭面或ハ其遊離縁ニ於テ、又ハ披裂軟骨部、室皺襞、聲唇等ニ斑狀ヲ爲セル汚穢灰白色ノ義膜ヲ認メ其進ムニ從ヒ是等ハ互ニ相融合シテ總テ喉頭內腔ヲ蔽ヒ時ニ或ル個處ニ於テハ其基底ヨリ剝離シテ翻轉スルヲ見ル尙ホ是等變化ノ氣管粘膜炎ニ蔓延シ吸氣時ニ當ツテ氣管壁ニ斑狀ナル或ハ連合セル義膜ノ形成ヲ見ル事屢々ナリ

既ニ義膜ノ排除セラレタル處ニ在リテハ強ク發赤シテ糜爛セル粘膜炎ヲ認ムレドモ是等ノ物質缺損ハ多クハ表在性ニシテ病變ノ退歩スル時ハ概テ癒痕ヲ形成スル事無クシテ治癒スルモノナリ只時ニ深キ潰瘍ヲ作り爲メニ後ニ多少ノ癒痕狭窄ヲ貽ス事アリ

合併症

合併症 實扶埜里症ノ經過若クハ其後ニ於ケル心臟腎臟或ハ神經系統ニ發スル合併症ニ就テハ咽頭實扶埜里ノ條下ヲ見ルベシ

診斷

診斷 確實ナル診斷ハ勿論細菌的検査ニ據ラザル可ラズ臨牀的ニハ小兒ニ在テハ假令其喉頭鏡検査ノ困難ナル場合ト雖モ同時ニ咽頭實扶里ヲ有セル時ハ其診斷ハ容易ナリ即チ咽頭實扶里ノ經過中ニ於テ聲音嘶啞犬吠樣咳嗽呼吸困難等ノ症狀ヲ加フル時ハ之ガ喉頭ニ移行セルモノナルハ殆ンド確實ナリ然レドモ咽頭ニ著變ヲ認メザル者或ハ原發喉頭實扶里ニシテ喉頭鏡検査ノ不能ナル場合ニハ之ヲ單純性加答兒又ハ所謂假性格魯布(第二章第二節)及ビ蜂窠織炎ト區別スルヲ要ス即チ假性格魯布ニ在リテハ其發作ハ突然發來スレドモ實扶里里ハ之ニ反シ發作ノ前ヨリ既ニ著明ナル病徵アルニヨリテ區別シ得可ク且ツ前者ニ在リテハ顎下竝ニ頸腺ノ腫脹ヲ見ズ蜂窠織炎トノ區別ハ時ニ困難ナレドモ此場合ニハ其當時ノ流行ヲ參照シ又ハ咯出セル義膜片ヲ檢シ若クハ直チニ血清療法ヲ施シテ其反應ヲ見ルベシ

大人ニ於ケルガ如ク喉頭鏡検査ノ容易ナル者ハ之ヲ診斷スルコト難カラズ尙ホ腐蝕或ハ火傷等ニ因ル纖維素性滲出ハ發熱ヲ伴ハザルヲ以テ區別シ他ノ細菌ニ因スル纖維素性喉頭炎ハ之ヲ細菌的検査ニ待タザル可ラズ

豫後

豫後 患者ノ幼年ナルト深部氣道ヲ犯シタルト體質ノ虛弱ナル等ハ皆其豫後危險ナリ尙ホ之ニ關シテハ咽頭實扶里ノ條下ヲ參照ス可シ

療法

療法 原因療法 最モ必要ナル血清療法ハ之ニ屬ス之ニ就テノ詳細ハ又タ咽頭條下ニ讓ル唯ダ可成高單位ノモノヲ注射スベキモノナルヲ一言セン

室扶斯

原因竝ニ病理解剖

第二節 室扶斯 Typhus

對症療法 トシテハ頭部ニ水瘻法ヲ施コシ又ハ水片ヲ與ヘ且ツ病室内ヲ濕潤ナラシメ咳嗽發作ニハ阿片丁幾(二三滴)コテイイン一%溶液五乃至八滴一日數回ヲ與ヘ或ハモルフィン皮下注射(〇〇〇一五乃至〇〇〇五)ヲ注意シテ行ヒ爲メニ元氣ヲ恢復スル事アリ其他ノ局處的療法ハ無用ナリ昔時義膜排出ノ目的ニ向ツテ好シク應用セラレタル吐劑モ其心臟ニ對スル作用ヨリシテ寧ロ有害ナルモノトス既ニ狹窄症狀ノ増惡シ胸部ノ吸氣的陷凹ヲ來スノ際ハ直チニ插管法又ハ氣管切開ヲ施サザル可ラズ但シ先ヅ插管法ヲ撰ブ可キナレドモ既ニ假死ニ陥キリ又ハ其病變ガ壞疽性ナルトキ或ハ既ニ氣管ニ連續セルモノ等ニハ氣管切開ヲ行フ可シ

插管法竝ニ氣管切開術ニ就テハ尙ホ後述ス可シ(第十一章)

特殊症

原因竝ニ病理解剖 腸室扶斯或ハ稀ニ發疹室扶斯ノ經過中ニ於テ喉頭氣管等ノ粘膜ニ種々ノ炎症變化ヲ生ズル事アリ喉頭室扶斯 Laryngotyphus 氣管室扶斯 Broncho-typhus 等ト稱セララルハ是等ノ病變ニ由來スル症狀ノ顯著ナル場合ヲ云フ

今其病變ヲ原因ニ從ツテ特殊症竝ニ非特殊症ノ二ニ區別シ得可シ

一特殊症 Specific Form 室扶斯菌ガ腸ノ濾胞ヲ犯スガ如ク喉頭ニ於ケル腺組

非特殊症  
 織ニ傳染ヲ來スヲ云フモノニシテ初メハ先ヅ此部ノ限局性又ハ汎發性浸潤ヲ起シ次デ壞疽ニ陥キリテ潰瘍ヲ作ルニ至ル故ニ此變化ハ腺組織ノ發達セル會厭室皺襞被裂軟骨ノ内面喉頭後壁等ニ於テ之ヲ見ル

二非特殊症 Nicht spezifische Form トハ毒素ノ作用ニ基ケル營養障礙ニ因シ或ハ又タ之ニ球菌ノ傳染スルニヨリテ起レル炎症ヲ云ヒ其輕キモノハ單ニ粘膜ノ限局性發赤ヲ見ルニ止マリ重キハ又タ粘膜上層ノ剝離ヲ來スニ至レドモ其潰瘍縁ハ特殊症ニ於ケルガ如ク隆起シテ穿掘セラレズ

是等ノ兩症ニ於ケル潰瘍ハ其ニ甚ダシキ瘡痕ヲ貽サズシテ治癒スレドモ時ニ球菌傳染ヲ受ケテ蜂窠織炎軟骨膜炎等ヲ併發スル事アリ

症候 輕症ニハ著シキ徵ナク亦タ患者ハ意識ヲ障礙セララルガ故ニ皆之ヲ看過シ其他ハ嚙下痛竝ニ聲音嘶啞ヲ主訴トシ又若シ已ニ蜂窠織炎軟骨膜炎等ヲ來セル時ハ各其重大ナル症狀ヲ呈ス可シ

喉頭粘膜ニ於ケル處見ハ既述セルガ如シ  
 一般ニ特殊症ハ恰モ腸ニ於テ其濾胞ガ犯サル時ト等シク喉頭粘膜ノ腺組織ヲ犯スハ發病後八乃至十日ニシテ非特殊症ハ六乃至十七日ノ後ニ現ハルルヲ通例トス

合併症 潰瘍ニ蜂窠織炎軟骨膜炎等ヲ併發スル事アルノ他ニ喉頭筋麻痺ヲ來スアリ此際麻痺ノ原因トシテ擧ゲラルルハ肋膜炎神經炎淋巴腺腫脹又ハ筋ノ

合併症

症候

非特殊症

室扶斯性疾患等ナリ  
 診斷 喉頭粘膜ニ於テ前記ノ潰瘍ヲ認メ同時ニ熱候ノ持續スル時ハ先ヅ室扶斯ニ考ヘザル可ラズト雖モ通例既ニ室扶斯ニ因スル一般症ヲ呈スルガ故ニ之ヲ知ルコト難カラズ其他ハ凡テ原病ノ診斷法ニ據ル

豫後 合併症ナキトキハ良ナリト雖モ其他ハ室扶斯ノ一般豫後ニ從フ

療法 局處的療法トシテハ膿瘍アラバ之ヲ切開シ室息症狀ヲ呈スル時ハ氣管切開ヲ施コシ他ハ一般的療法ヲ行フ

急性發疹症

麻疹

第三節 急性發疹症 Akute Exantheme

一 麻疹 Masern

麻疹ハ咽頭ニ於ケルガ如ク喉頭竝ニ氣管粘膜ニ於テモ發病後一二日ニ皮膚發疹ト同様ノ斑點狀發赤ヲ來ス事通例ナリ但シリヨリーニ從ヘバ軟硬口蓋ニ於ケルガ如ク喉頭粘膜ニ於テモ既ニ皮膚發疹前ニ於テ固有ハ麻疹斑ヲ生ズル事屢々ナリト

此發疹ニ由リテ小兒ハ喉頭加管兒ノ症狀ヲ呈シ聲音嘶啞竝ニ乾咳ヲ來シ或ハ時ニ聲門下腫脹又ハ分泌物ノ滯積ニ因リテ呼吸困難ヲ呈シ球菌ノ傳染ニ因リテ蜂窠織炎ヲ起ス等ノコトアリ或ハ同時ニ咽喉頭實扶埒里ヲ併發シ又ハ球菌傳染ニヨリテ義膜ヲ形成スルモノアリ

猩紅熱

二 猩紅熱 Scharlach.

喉頭竝ニ氣管ハ咽頭ニ反シテ猩紅熱ニ犯サル事甚ダ稀ナレドモ時ニ實扶堦里樣猩紅熱安魏那ガ此處ニ波及スルアリ尙ホ猩紅熱ニ因スル腎臟炎ヨリシテ喉頭ニ於ケル鬱血性浮腫ヲ來スアリ、

三 痘瘡 Pocken.

屢々加答兒性喉頭炎ヲ來スノ他ニ時トシテ其膿疱ヲ見ル事アリ會厭ノ遊離縁ニ於テ之ガ癩痕ヲ見又痘瘡ノ經過中ニ義膜樣滲出物或ハ蜂巢織炎軟骨膜炎等ヲ起シ危險ニ瀕スルコトアリ

水痘 Varicellen ニ於テモ屢々其水泡ヲ喉頭粘膜ニ於テ見ル

診斷 皮膚ノ發疹ニ據リ或ハ其他ノ病症ヲ參照スレバ容易ナリ、

療法 凡テ對症的ニシテ時ニ氣管切開ノ要アリ

第四節 百日咳 Keuchhusten.

原因

不明ナルモ其傳染性ナルハ疑フ可クモアラズ概テ貳年乃至五年ノ小兒ヲ犯シ稀ニ大人殊ニ女子ニ來リ喉頭竝ニ氣管粘膜ノ加答兒性變化ト共ニ痙攣性咳嗽ヲ招來スルヲ以テ本症ヲ呼吸器粘膜ヨリ起レル反射神經症ナリト爲ス人アリ、

症候

之ニ加答兒期及ビ痙攣期ヲ分チ初メ單純加答兒ノ症狀ヲ呈スルコト

療法

約一週日ノ後増悪シテ痙攣期ト爲リ殊ニ夜間ニ於ケル頑固ナル痙攣性咳嗽發作ヲ來ス此際咳嗽ハ笛聲樣ノ深吸氣ニ續イテ頻回ニ反復セラレ爲メニ患者ハ強度ノチアノーゼヲ呈シ或ハ之ニ因リテ結膜鼻粘膜喉頭粘膜等ヨリ出血ス然カモ喉頭鏡検査ニ依リテ單ニ粘膜ニ發赤ヲ見ルニ止マリ之ヲ以テ咳嗽發作ノ原因ト爲スヲ得ズ尙ホ吸氣的喘鳴ハ之ヲ聲門閉鎖筋ノ痙攣ニ歸ス可キモ其原因及ビ機轉ハ未ダ明カナラズ  
時ニハ之ニ喉頭實扶堦里ヲ續發シ或ハ真正ノ聲門痙攣症ニ移行スルアリ  
療法 局處療法ハ概テ無効ニ終ル反射作用ヲ抑制セントシテミハエルハ安息酸ヒニーン(三)一ヲ鼻粘膜ニ吹粉シタレドモ效アルモノニ非ズ其他用キラルルオルトホルムアテステジン等モ亦タ同ジ  
一般療法トシテハ鎮咳祛痰麻醉等ノ目的ニ投藥シ夜間ハ換氣ヲ利シ且ツ強壯療法ヲ施コスベシ

「インフルエンザ」

第五節 「インフルエンザ」 Influenza

「インフルエンザ」ハ殆ンド常ニ急性喉頭炎竝ニ氣管炎ヲ伴フモノニシテ此際單純性或ハ乾性喉頭加答兒トシテ現ハル、

單純性加答兒トシテ粘膜炎發赤ノ他屢々左右聲唇ノ前及中三分部ノ境界ニ於テ半月狀ノ白色ヲ呈スル限局性隆起ヲ認メ得ル事ハ既述セルガ如シ(第四三〇頁)

乾性加答兒ニ於テハ聲唇竝ニ粘膜ノ乾燥セル光澤ヲ示スノ他ニ其表面ニ痂皮ノ附著セルヲ認メ且ツ屢々之ニ血液ヲ混ジテ乾性出血性喉頭炎(第二章)ノ像ヲ呈ス

時トシテ炎症ハ深部ヲ犯シ粘膜炎下浸潤軟骨膜炎或ハ膿瘍等ヲ形成ス尚ホインフルエンザニ際シ回歸神經或ハ上喉頭神經又ハ喉頭筋等ノ麻痺ヲ來ス事アリ

症候 加答兒性變化ノ蔓延ニ由リテ種々ナレドモ一般ニ頑固ニシテ且ツ容易ニ再發シ易シ

療法 凡テ對症のナリ

### 第六節 丹毒 Erysipel

之ニ就テハ既ニ蜂窠織炎ノ條下ニ記述セリ(第二章)

### 第七節 結核 Tuberculose

原因 喉頭竝ニ氣管ノ結核ハ原發スルコト甚ダ稀ニシテ殆ンド常ニ肺結核ニ繼發ス統計ニヨレバ肺結核ノ畧三〇%ハ亦喉頭結核ヲ有ス其病原菌ニ就テハ已ニ前述セリ

其侵入系路ハ 粘液腺ノ開口ヨリシ(フエーリングシユミット)又ハ健康ナル上皮

症候 療法 丹毒 原因 結核 侵入系路

傳染方法

ヲ通ジテ(エフレンケル)或ハ既ニ存在セル物質缺損部ヨリ侵入シ時ニ血流竝ニ淋巴流ニ從ツテ蔓延スル事アリ

而シテ之ガ上氣道ニ於ケル傳染方法ハ外部ヨリ例之バ結核菌ガ器物飲食物吸氣等ニ存在シテ傳染シ或ハ内部ヨリ即チ肺結核淋巴腺結核等ヨリシテ咯痰ヲ介シ又ハ血流淋巴流ヲ經テ此處ニ至ルモノニシテ就中咯痰ガ皺襞ニ富メル喉頭後壁ニ停滯シテ其傳染ヲ來スヲ多シトス殊ニ肺結核患者ニ在リテハ喉頭加答兒ニ罹リ易ク之ニ因リテ多少上皮ノ變性ヲ來タシ其傳染ハ尙更ニ容易トナル可シ但シ肺結核ヨリ淋巴流ヲ經テ喉頭ニ來リ得トノ説(クリーグ)ハ喉頭ノ罹患側ガ肺ノ其レニ一致スル事多キニ基ヅクモノナレドモ之ガ淋巴流トノ關係アルヤハ未ダ全ク承認セラレザルナリ

一般ニ女子ヨリモ男子ニ多ク殊ニ二十乃至四十歳ノ間ヲ犯ス

病理解剖

病理解剖 結核菌ガ粘膜内ニ達スルヤ先ヅ其ノ上皮下ニ於テ結締織ノ増殖ト圓形細胞ノ浸潤トヲ伴ヒ是等ニ由リテ粘膜ハ肥厚シテ即チ粟粒結核又ハ結核性浸潤ト爲ル此際上皮モ亦タ肥厚シ厚皮性増殖ヲ營ム

更ラニ病變ノ進行スルヤ是等ノ結核ハ融合シテ汎發性浸潤ト爲リ或ハ又タ腫瘍狀ニ隆起シテ所謂結核腫ヲ作ルニ至ル

尙ホ是等結核性浸潤又ハ結核腫等ニ於テ其中央ハ脂肪變性或ハ乾酪變性ニ陥キリ遂ニ其表層ニ破壊スルニ至ルヤ茲ニ大小深淺種々ナル結核性潰瘍ヲ生ズ而

潰瘍ノ性質



シテ此際相融合シテ潰瘍縁ハ鋸齒狀ヲ呈シ且ツ穿堀セラレ及ビ之ニ薄弱ナル肉芽ヲ見ル其他屢々其周圍ニ於テ黃色或ハ白色ノ粟粒結核ヲ認め時トシテ肉芽ハ増殖シテ乳嘴狀ヲ呈スル事アリ周圍粘膜炎ハ常ニ多少ノ加答兒症アリ

又々潰瘍ヨリ球菌ノ傳染シテ軟骨膜炎ヲ續發スルアリ  
凡テ此變化ニ際シ組織内ノ血管竝ニ粘液腺ハ又々其壓迫或ハ破壞スル所ト爲リ筋織モ其浸潤ヲ蒙ムリ或ハ神經ノ犯ナルルニ因リテ聲門運動障礙ヲ來スアリ

氣管 亦ク喉頭ニ於ケルト同一ノ變化ヲ呈スレドモ唯ダ其粘膜炎下組織ノ菲薄ナルガ故ニ其肥厚ハ著シカラズシテ浸潤モ亦ク深部ニ及ブ事稀ナレドモ却ツテ崩壊性潰瘍ヲ形成ス

### 症候

#### 症候

喉頭結核ハ殆ンド常ニ肺炎ニ續發スルモノナルガ故ニ其症狀ニ蔽ハレテ久シク不明ニ止マル事アリ通例初メハ輕微ナル發聲障礙喉頭内ニ於ケル知覺異常等ヲ訴エ而カモ鏡檢的ニ喉頭粘膜炎ノ著シキ蒼白ト輕度ノ加答兒トノ外ニ何等ノ變化ヲ見ザルアリ是レ恐ラクハ結核毒素ニ因ル營養障礙及ビ殊ニ外來ノ刺激ニ對シテ直チニ加答兒ヲ起スモノナル可ク未ダ之ヲ以テ結核ト爲ス能ハザルモ更ニ進行シテ遂ニ著明ニ其症狀ヲ呈スルニ至ル

### 自覺症

#### 自覺症

其病變ノ程度ニ依リテ種々ナレドモ通例肺結核ノ症狀ノ他ニ聲音障礙嘔下痛下困難咳嗽等ニシテ進ンデハ呼吸困難ヲ呈スルニ至ル

聲音障礙ハ初メハ單ニ粗糙ト成リ遂ニ無聲症ニ陥キル是等ハ聲唇室皺襞披裂軟骨等ニ於ケル變化或ハ喉頭後壁ノ浸潤ニ基ヅキ又ハ筋ノ不全麻痺竝ニ其變性ニ因スルアリ又ハ淋巴腺ノ腫脹肺炎ノ變化等ニテ回歸神經麻痺ヲ招來スルニ因ルコトアリ尙ホ一般衰弱ノ結果トシテ呼吸壓力ノ減少ニ因リテ來ル聲音薄弱症モ玆ニ算入シ得可シ

嚔下痛竝ニ嚔下困難ハ殊ニ喉頭入口部ニ於ケル潰瘍浸潤又ハ軟骨膜炎等ニ因ツテ起リ甚シキニ至ツテハ麻醉劑ヲ塗布セズンバ流動物スラモ攝取シ得ザルニ至ル尙ホ此疼痛ハ屢々耳内ニ放散ス

咳嗽ハ通例肺炎患ヨリ來ルモノナレドモ稀ニ潰瘍中ニ露出セル神經ノ刺激ヨリ又ハ喉頭後壁ニ於ケル乳嘴狀増殖ガ聲門下部ヲ刺戟スルニ因リテ來ル

呼吸困難ハ殊ニ聲門下腫脹ニ際シテ著シケレドモ其他後壁ニ於ケル肉芽増殖聲唇ノ腫脹等ニモ來リ或ハ軟骨膜炎浮腫等ニ因リテ急ニ増劇スル事アル可シ  
時ニハ潰瘍ヨリ出血スルコトアレドモ少量ニシテ粘液ト混在スルヲ常トス

### 他覺症

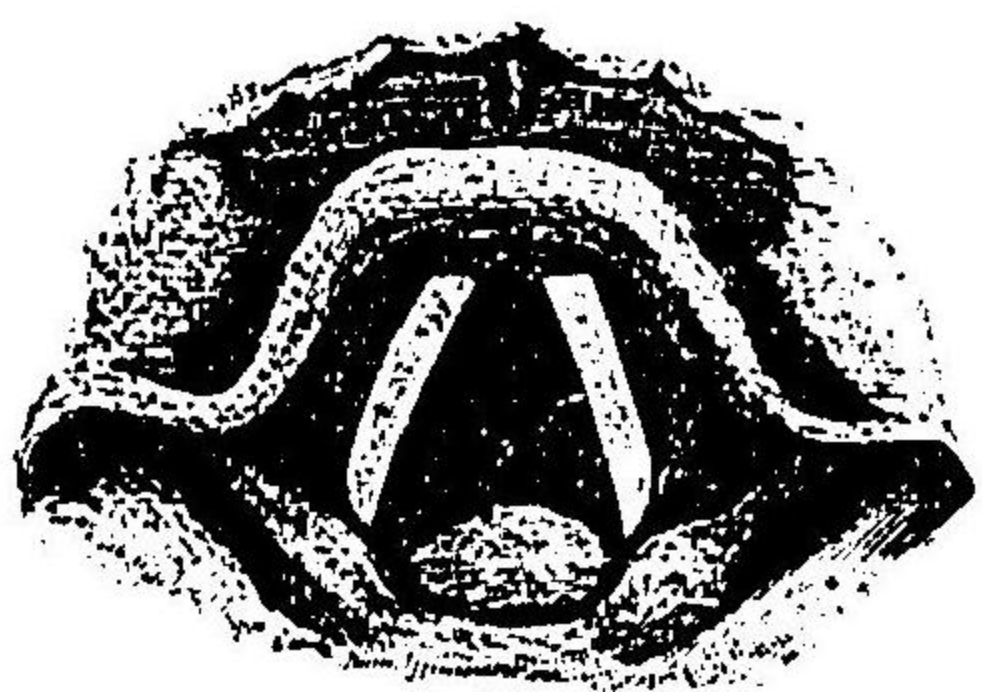
#### 他覺症

既述セルガ如ク喉頭結核ハ其病理ニ從ツテ浸潤潰瘍腫瘍粟粒結核及ビ續發軟骨膜炎等ノ諸症ヲ呈シ各別ナル他覺症狀ヲ呈ス可ク此中最モ屢現ハルルハ前二者ナレドモ勿論其移行像アルヲ忘ル可ラズ

### 結核性浸潤

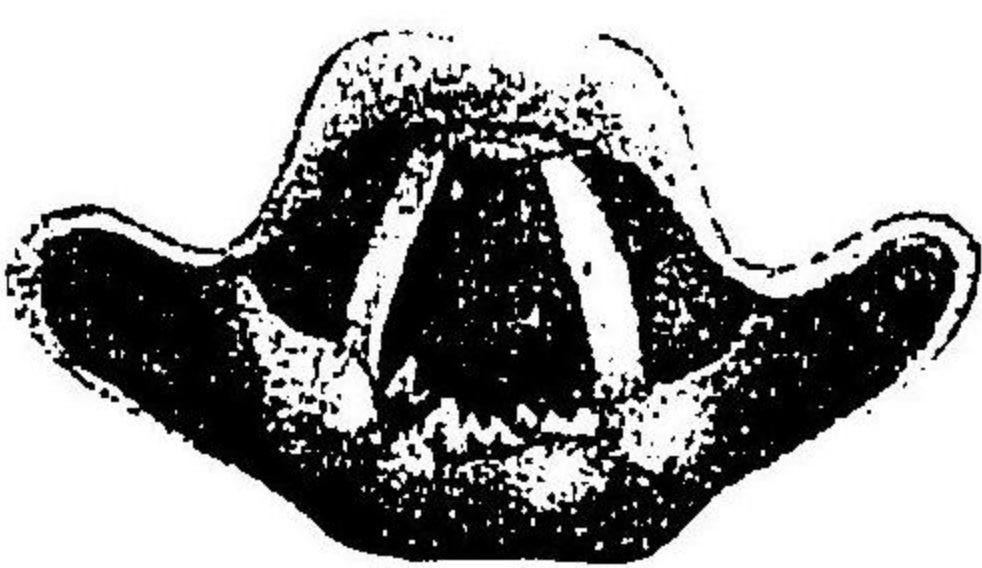
一 結核性浸潤 Das tuberculöse Infiltrat. 最モ多ク喉頭後壁竝ニ聲帶突起部ニ之ニ

圖六十九百第



喉頭結核 (後壁に於ルケル丘狀浸潤)

圖七十九百第



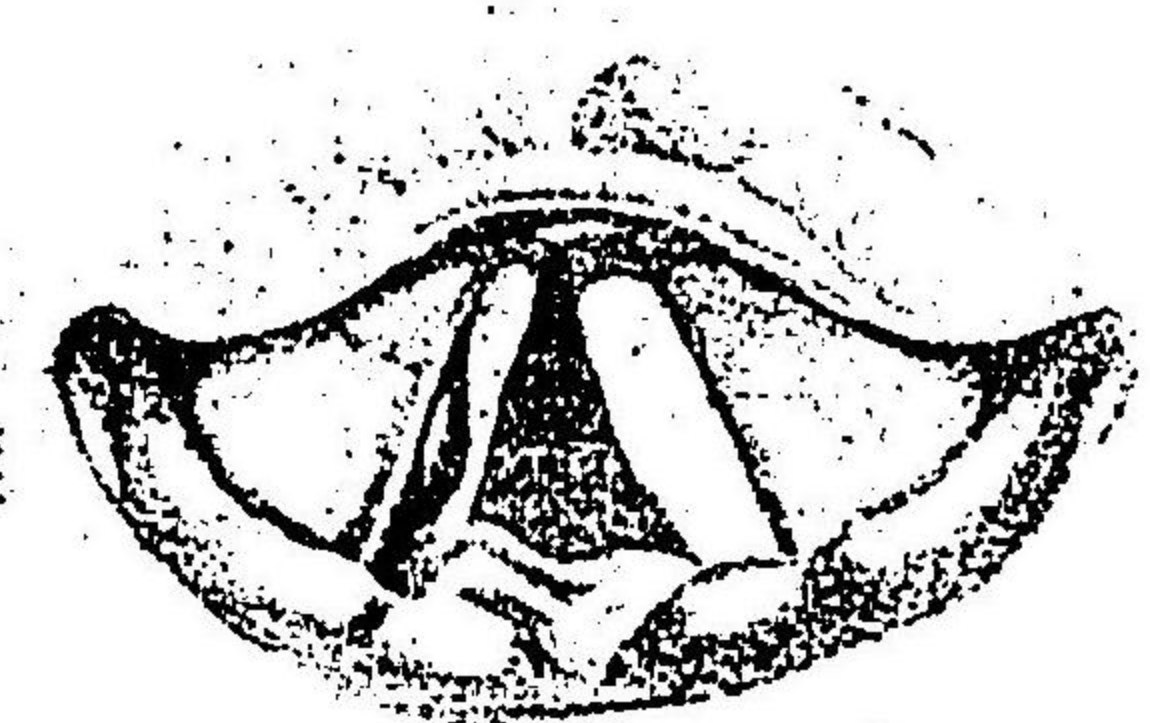
喉頭結核 (舌根に於ルケル浸潤)

次デ聲唇被裂會厭皺襞會厭室皺襞等ニ來ル  
喉頭後壁ニ於ケル者ハ濁濁セル灰白色ヲ呈シ堤狀  
丘狀(第百九十六圖)或ハ鋸齒狀ニ隆起シ(第百九十七圖)  
後者ニ在ツテハ單純硬皮症トノ區別ハ屢困難ニシテ  
漸クキリアン検査法或ハ直達鏡ニ據リテ浸潤ノ背後  
ニ結核性潰瘍ヲ認ムルコトアリ而シテ此浸潤ノ高度  
ナル時ハ單ニ之ニ因リテモ聲門閉鎖ヲ妨ゲラレ又々  
呼吸困難ヲ由來シ得ルナリ  
聲唇ニ於ケル者ハ初メ淡紅色ヲ呈スル汎發性浸潤  
トシテ現ハレ殊ニ其片側ナルト且ツ其變化ノ治癒ニ  
向ハザルトニ據リテ之ヲ單純性加答兒ト區別シ得可  
シ加答兒ハ常ニ兩側ヲ犯シ症候ハ變化シ易シトス  
被裂會厭皺襞被裂軟骨部會厭等ニテモ概テ一側ヲ  
犯シ其兩側ナルハ稀ニシテ會厭ノ遊離縁ハ鈍圓ニ肥  
厚シ甚シキハ其全部ガ頭巾狀ニ腫脹シ皺襞ニテハ棍棒狀或ハ糸瓜狀ヲ呈ス  
室皺襞ニモ其變化ハ聲唇ニ於ケルガ如ク初メハ常ニ片側ニ起リ之ガ腫脹シテ  
聲唇ヲ蔽ヒ時トシテ兩側共ニ犯サレ其邊縁ノ互ニ相接スル事アリ  
聲門下部ニ於ケル結核性浸潤ハ稀ニ見ルモノニシテ其鏡像ハ聲門下喉頭炎ノ

結核腫

條下ニ述ベタルト同ジ

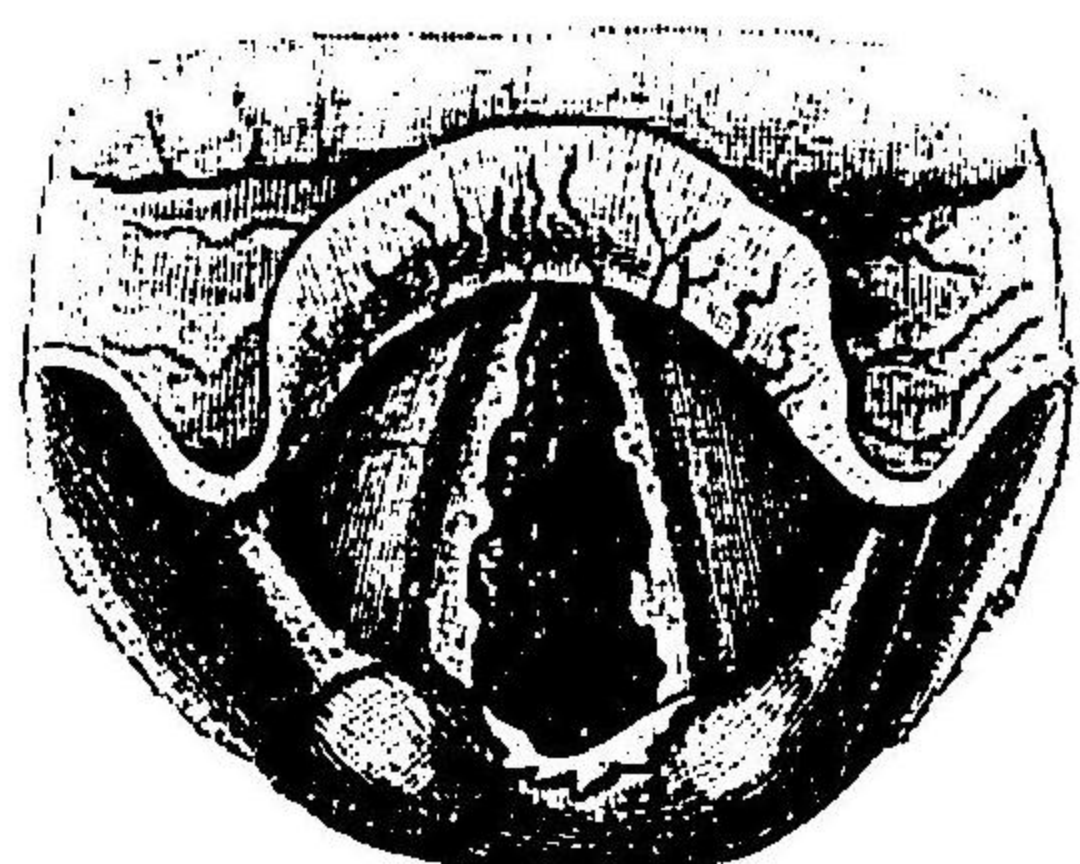
圖八十九百第



喉頭結核—ニシテ舌根

結核性潰瘍

圖九十九百第

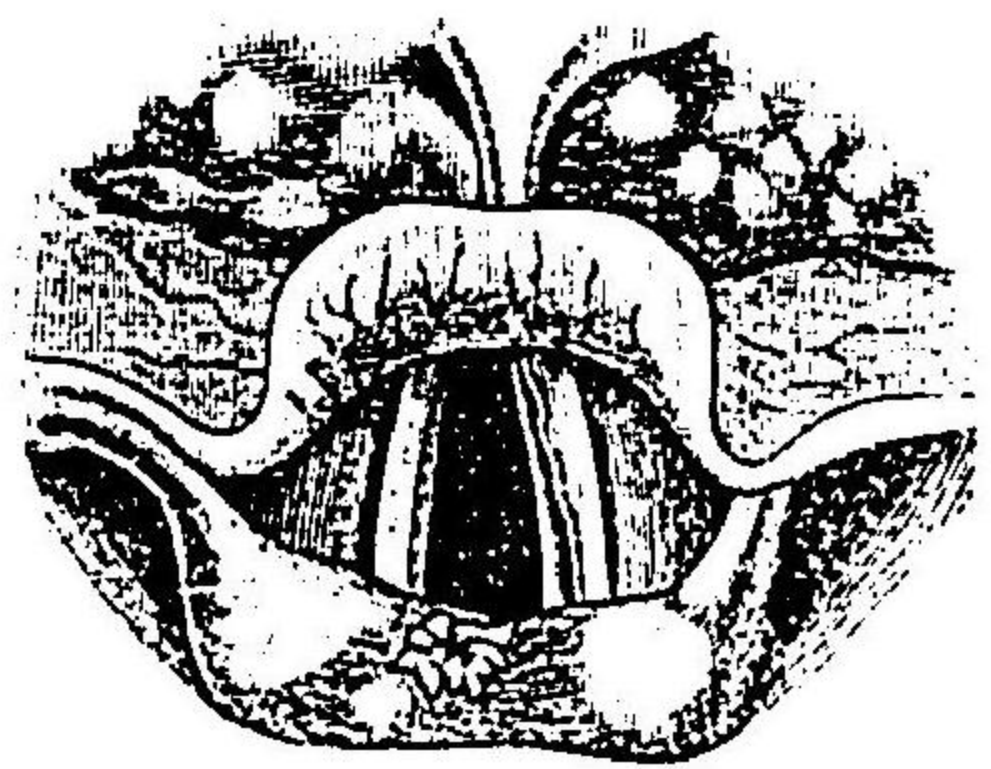


喉頭結核 (後壁に於ルケル潰瘍性變化)

二結核腫 Das Tuberculum. ノ好發部位ハ後壁モ  
ルガンニ一室室皺襞等ニシテ圓形ニシテ平滑ナ  
ル表面ヲ有シ比較的永ク其原形ヲ保ツヲ例トス  
是等ハ一見シテ前者ト等シケレドモ其ノ周圍織  
トノ境界ガ鮮明ナルヲ以テ區別スルヲ得但シ顯  
微鏡的ニハ全ク異ナル所ナシトスモルガンニ一  
實ニ於ケル者ハ時ニ其臍脫症ト誤マルコトアリ  
(第百九十八圖)  
三結核性潰瘍 Das tuberculöse Geschwür. ハ常ニ結  
核ノ崩壞ニ因リテ生ジ其度ニ從ツテ潰瘍ノ大小  
深淺等ハ種々ニシテ單ニ其表面ニ止マルアリ或  
ハ筋層又ハ軟骨膜ニ達スルアリ一般ニ表在性潰  
瘍ハ扁平上皮ヲ有スル部分ニ來リ深在性ハ圓柱  
上皮ヲ被ムレル所ヲ犯ス尙ホ此潰瘍ニ就テハ病  
理解剖ノ條ヲ參照スベシ  
喉頭後壁ニ於ケル潰瘍ハ本症ノ先驅トモ見做  
シ得ルモノニシテ多ク其縁ニ鋸齒狀ニ肉芽ノ發

生ズルアリ、時ニ直チニ之ヲ見ルヲ得ルト雖モ亦タ既述セルガ如ク増殖ノ後ニ隠レキリアン法又ハ直達検査ニ依リテ甫メテ之ヲ知ルコトアリ

聲唇ニテハ其線或ハ表面ニ孤立スルカ又ハ密集セル淺在潰瘍ヲ認メ線ハ恰モ蠶食セラレタルガ如キ像ヲ呈シ(第百九十九圖)尙ホ時ニハ潰瘍ハ深部ヲ犯シ聲唇ノ下縁ニ波及シ喉頭後壁或ハ前連合部ノ潰瘍ト融合スル事アリ、表面ニ於ケル者ハ彈力纖維ノ方向ニ溝狀ニ縱走シ爲メニ聲唇ノ分裂セルガ如キ觀ヲ呈スルアリ(第二百圖)殊ニ屢犯サルルハ聲帶突起部ニシテ此處ヨリ破裂軟骨ニ傳染シテ其軟骨膜炎ヲ起シ後壁ニ蔓延スルトキハ環狀軟骨膜炎ヲ由來スル事アリ



喉頭結核 (化變性筋液ルケ於ニ壁後及聲唇側左)

會厭ニテモ屢其遊離線或ハ喉頭面ニ淺在性潰瘍ヲ生ジ軟骨膜ヲ犯ス

於テ現ハレ殊ニ周圍ニ向ツテ蔓延ス

室・軟膜ニハ潰瘍ハ表面或ハ深部ニ向ツテ蔓延ス  
聲門下部竝ニ氣管ニテハ喉頭鏡検査ニ依リ之ヲ認メ難ケレドモ剖檢上ニ之ヲ見ルコト多シトス

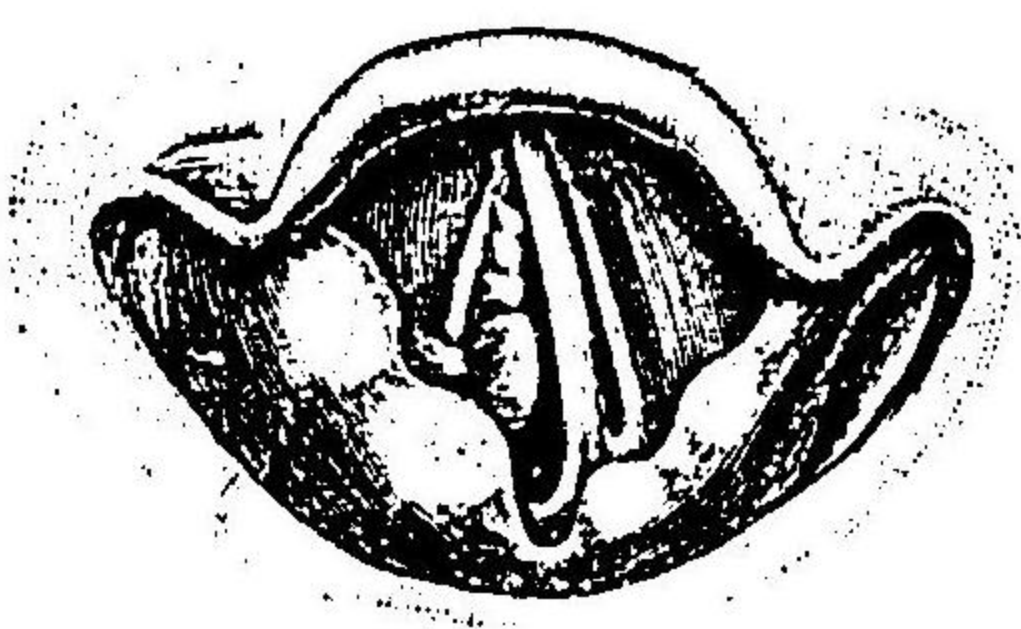
四、粟粒結核 Die miliare Knochen. 全身ノ粟粒結核ニ際シ格別ノ前徵ヲ呈セズシテ急ニ喉頭粘膜炎ノ發赤腫脹ト共ニ白色又ハ黃色ニシテ帽針頭大ナル結節ヲ生ジ是

軟骨膜炎

經過

診斷

第二〇一圖



喉頭結核ニ因ル右側軟骨膜炎

等ハ一二日ニシテ崩壞シ連合シテ廣キ潰瘍ト成リ尙ホ潰瘍線或ハ其周圍ニ多數ノ結節ヲ認ムベシ  
五、軟骨膜炎 Perichondritis 結核性潰瘍ニ繼發スル軟骨膜炎ハ多ク破裂軟骨ヲ犯シ次テ環狀軟骨會厭軟骨、甲狀軟骨等ニ之ヲ見而シテ此處見及ビ症狀ハ毫モ他ノ原因ニテ起レルモノト異ナルコト無シ(第二百〇一圖)

氣管ニ於テモ亦軟骨膜炎ヲ來ス事アリ

經過 甚ダ不同ニシテ或ル場合ニハ迅速ナル經過ヲ取レドモ一般ニ慢性ニシテ概チ同時ニ罹患シツアル肺結核ノ經過ト其步調ヲ一ニシ途ニ之ニ因リテ鬼籍ニ昇ル事多ケレドモ時ニ喉頭ノ症狀ハ著明ニシテ爲メニ攝食ヲ妨グラレ又ハ呼吸困難ニ陥ルアリ、又一方ニハ肺結核ガ漸次可良ナル經過ヲ取ルニ係ラズ喉頭ノ病變ハ増悪スル等極メテ不定ナリ

尙ホ妊・娠ガ喉頭疾患ノ經過ヲシテ急劇ナラシムルコトハ一般ニ承認セラレ人、工・早産ノ一適應症トシテ認メラル

診斷 多數ノ場合ニハ喉頭鏡検査ノ處見ト肺・臟竝ニ結核菌ノ検査ニ據リテ容易ナリトス、殊ニ喉頭病變ガ著明ニシテ肺・症狀ノ確實ナル時ニ然リトス、サレドモ喉頭病變ノ輕度ナル際ニ於テモ粘膜炎ガ著シク蒼白ニシテ同時ニ知覺又ハ發聲

障礙等ノ存スル時ハ、玆ニ疑ヲ置キ肺臟其他ニ就テ精密ナル検査ヲ施コスベシ  
 又タ若シ片側聲門炎アリテ其外傷ニ由來セルニ非ザルトキハ常ニ先ヅ結核ニ  
 考フルヲ至當トス  
 尙ホ喉頭後壁ノ浸潤ハ喉頭結核ニ固有ナル者ナルモ其輕度ナル場合ハ前述セ  
 ル如ク硬皮症ト容易ニ識別シ難シ然レドモ精密ナル検査ハ同時ニ存セル潰瘍ヨリ  
 或ハ肺結核ヨリ之ヲ推定シ得尙ホ此鑑別ニ就テハ硬皮症ノ條下第三章ヲ參照ス  
 可シ

最モ必要ナルハ潰瘍ニ就テ其結核ト徴毒性トヲ鑑別スルコトナリ之ニ就テハ  
 凡其ノ潰瘍ノ性質ニ據リ之ヲ知ルヲ得ルモノニシテ即チ結核性潰瘍ハ既述セル  
 ガ如ク邊緣ハ不規則ニ彎曲シテ鋸齒狀ヲ呈シ肉芽ノ發生薄弱ニシテ排泄物ハ稀  
 釋ナレドモ微毒ニハ縁ハ銳利ニシテ恰モ切割セラレタルガ如ク又タ肉芽ヲ缺如  
 シ且ツ其底部ハ脈脂樣膜ヲ被ムル而シテ潰瘍ノ周圍ハ結核ニテハ著シク蒼白ニ  
 シテ此處ニ又タ粟粒大ノ黃色又ハ白色ノ結節ヲ認ムレドモ微毒ニ於テハ却ツテ  
 高度ニ發赤シ且ツ浸潤アリ凡テ結核並ニ微毒ニ對スル全身検査ハ此診斷ノ有力  
 ナル補助タルベシ尙ホ癌腫トノ鑑別ヲ要スル事アリ何レニシテモ疑ハシキ場合  
 ニハ試験的驅微療法ツベルクリン注射ニヨル局處的反應、分泌物ノ細菌検査、切除  
 片ノ組織的検査ヲ行ヒテ確實ニ診斷シ得尙ホ喉頭結核ニ微毒又ハ癌腫ノ併發シ  
 ハ三者共ニ合併シテ現ルル事アリ注意ヲ要ス

豫後

其他喉頭癩急性發疹症又ハ時トシテ糖尿病ニ因スル潰瘍ト區別ヲ要スルコト  
 アリ狼瘡トノ區別ニ就テハ後章ニ述ベシ

豫後

稀ニ全治スル事アルモ概テ不良ニシテ一時的治癒ヲ營ムニ過ギズ一  
 般ニ肺臟ニ於ケル變化並ニ患者ノ一般状態ハ大ニ之ニ影響シ其良好ナラザルト  
 キハ縱令喉頭病變ガ輕度ニシテ一旦治癒ニ赴キタリトスルモ容易ニ再發ス可シ  
 尙ホ縱令治癒スル事アルモ後ニ多少ノ官能障礙ヲ來スヲ免カレズ

療法

療法

喉頭結核ノ治療ニ際シテハ常ニ肺炎患ヲ顧ミ其相互ノ關係ヲ忘ルベ  
 カラズ此間ノ消息ヲ若シ忽セニスルモノアラバ蓋シ誤レルノ甚シキモノナリ  
 一般療法 主トシテ肺結核ニ對スル療法ニシテ之ニ據リ營養状態ヲ保タシメ  
 ンガ爲メ食餌轉地氣候溫泉沈黙等ノ諸療法ノ他ニ藥劑療法ツベルクリン療法オ  
 プロニン療法等モ亦タ之ヲ試ムベシ殊ニ必要ナルハ濕潤シテ清潔ナル空氣ト氣  
 温變換ノ少キ地方ナリトス沈黙ニ依リテ喉頭ノ刺戟ヲ減ジ以テ其病變ニ善良ナ  
 ル結果ヲ與フ可キハ當然ナレドモ患者ヲシテ社交ヲ離レテ遂ニ精神沈鬱ニ陥キ  
 ラシム可ラズ

局處療法

尙ホ玆ニ一言ス可キハ妊娠トノ關係ナリ妊娠ガ喉頭結核ノ經過ヲ迅速ナラシ  
 ムルハ既述セルガ如シ故ニ之ニヨリテ増悪スル傾向アルトキハ人工流産ヲ早期  
 ニ於テ行フヲ善シトスト云フモノアリ  
 局處療法 之ヲ行フニモ毎ニ患者ノ一般状態ニ鑑ミテ前メテ其方針ヲ定ム可

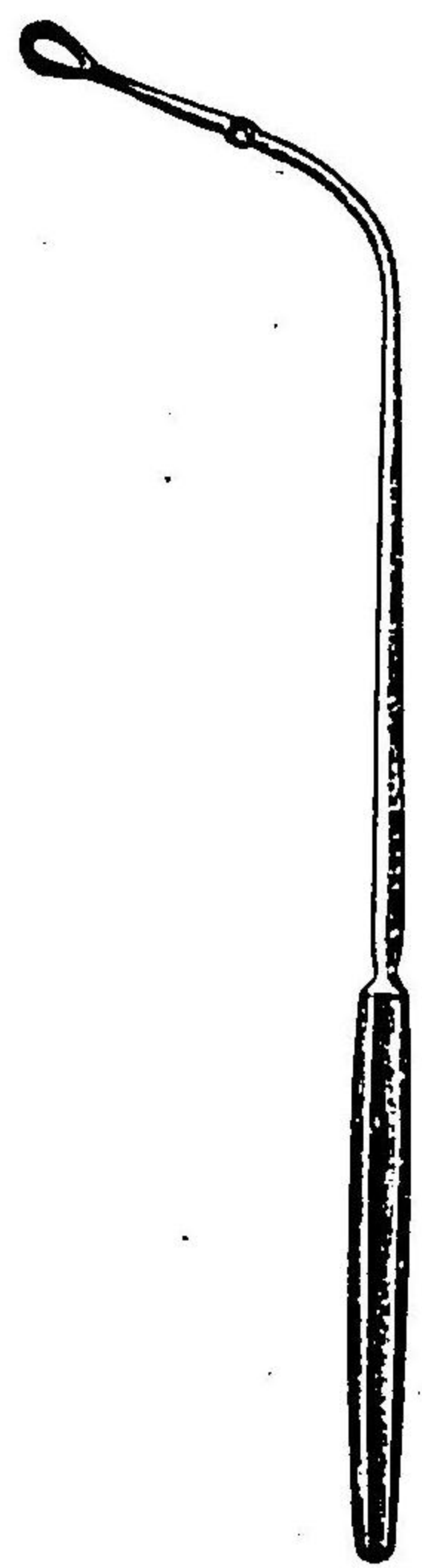
キモノニシテ其病變ノ著シク進行セル者ニハ寧ロ強烈ナル局處療法ヲ避ケ單ニ其症狀殊ニ嘔下痛呼吸困難等ヲ緩解セシムルニ止ム之ニハ殊ニ麻醉劑ノ塗布吸入又ハ吹撒ヲ善シトス之ニ依リテ患者ハ漸ク粥狀ノ食物ヲ攝取シ得但シ此際流動性食物ハ却ツテ咳嗽發作ヲ招來スル事アリ又強度ノ狹窄症狀アラバ氣管切開ヲ施コスベシ一般ニ局處療法ハ之ヲ藥劑的手術的及ビ理學的療法ノ三ニ分ツテ述ブルヲ便トス

藥劑的療法

一、藥劑的療法  
 (一) 塗布或ニ注入 喉頭結核ニ向ツテ最モ稱用スルハ乳酸及ビチアノールIIノ塗布ニシテ殊ニ潰瘍ニ向ツテ有效ナリ即チ初メハ二〇乃至三〇%溶液ヲ用ヒ漸次其濃度ヲ増シ五〇乃至八〇%迄ニ至ル之ヲ行フニハ先ヅ其局處ニコカイン麻酔ヲ施コシ卷綿子ニ浸セル溶液ヲ喉頭鏡下ニテ塗布スルニ在リ第四百十七頁此際其部ハ之ニ因リテ茶褐色ノ痂皮ヲ生ジ二三日ヲ經テ脱落スレバ更ニ其塗布ヲ反復シ漸次其濃度ヲ増スニ從ツテ一週間或ハ二週間ニ一回之ヲ試ム其他塗布藥トシテ  
 三〇%フエノールズルホリチニクム溶液或ハバラクロールフエノールノ五乃至二〇%グリセリン溶液等モ亦タ應用セラル尙ホ乳酸チアノール等ト共ニ良好ナルヲ一〇乃至二〇%メントール阿列布油トシ殊ニ汎發性潰瘍又ハ嘔下痛ニ

外科的療法

第二〇二圖



「テッレユキ」喉頭

シテ良效ヲ期待シ難キモノ亦患者ノ煩苦ヲ輕減スル上ニ於テ必要ナリトス

對シテ有效ナリ即チ患者ニ發聲セシメツツ喉頭注入器ヲ懸シテ注入或ハ點滴ス若シ氣管内ニ達セシメントスルトキハ吸氣時ニ之ヲ滴下スベシ

高度ノ嘔下痛ニハアルコール(一〇)ヲ上喉頭神經ノ喉頭穿通部ニ注射シテ特效アルアリコカイン(五—二〇%)モ亦屢應用セラレ或ハ每食前之ヲ塗布スルヲアリ  
 (二) 吸入或ニ吹撒 塗布又ハ注入等ニ比シテ一層緩和ニシテ殊ニ重症ニ宜シキハ即チエーテル油バルサム劑等ノ五乃至二〇滴ヲ半リーテルノ熱湯中ニ滴加シ之ヨリ蒸發スル瓦斯體ヲ紙製漏斗或ハ特別ノ裝置ヲ用ヒテ一日數回五分乃至十分時間吸入セシメ或ハジグレルノ吸入器ニテ藥液ノ蒸氣ヲ與フ之ニ就テハ總論第四一九頁ヲ參照ス可シ尙ホ此藥液ニハ一乃至五%乳酸水ヲ用ヒ或ハ一〇乃至三〇%メントール阿列布油ノ三〇乃至五〇%熱湯ニ滴加シ或ハ吸入器ニテ與フルモ良ナレドモ多クハ重曹食鹽ノ如キ中性物ヲ用ユ

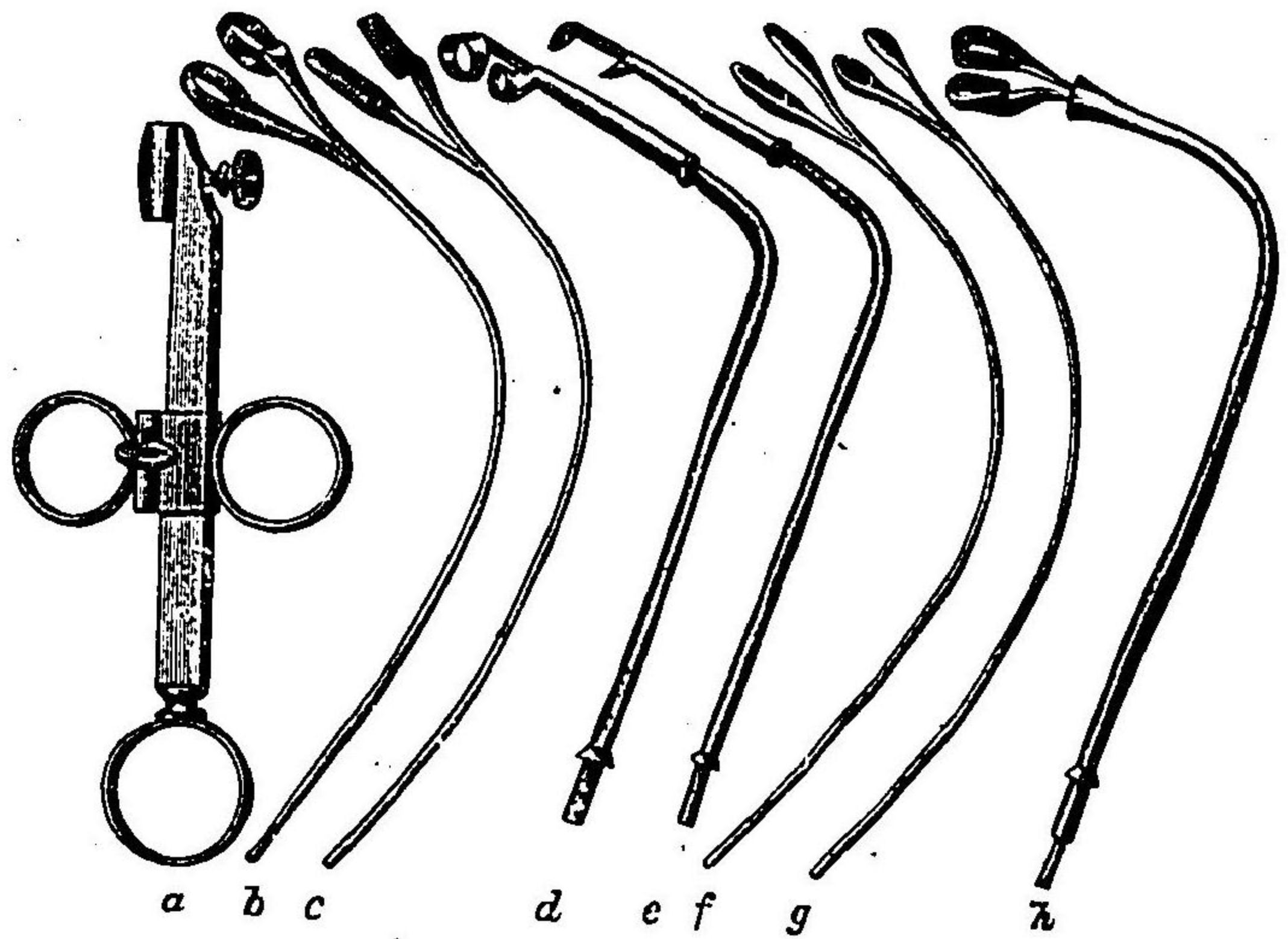
吹撒劑ニハ沃度仿誤硼酸ヨドールデルマトール或ハオルトホルムアネステジ等ヲ制腐若クハ麻醉ノ目的ニ用ユ

外科的療法 主トシテ喉頭内ヨリ稀ニ外手術ヲ行フ而シテ凡テ姑息的ニシテ良效ヲ期待シ難キモノ亦患者ノ煩苦ヲ輕減スル上ニ於テ必要ナリトス

喉頭内手術

搔爬術

第二〇三圖 喉頭内手術用器具



a. 共通把柄 b. c. d. 複「キュレット」 e. 異物鉗子 f. 鉤鉗子 g. 鉤異物鉗子 h. 合厭復「キュレット」

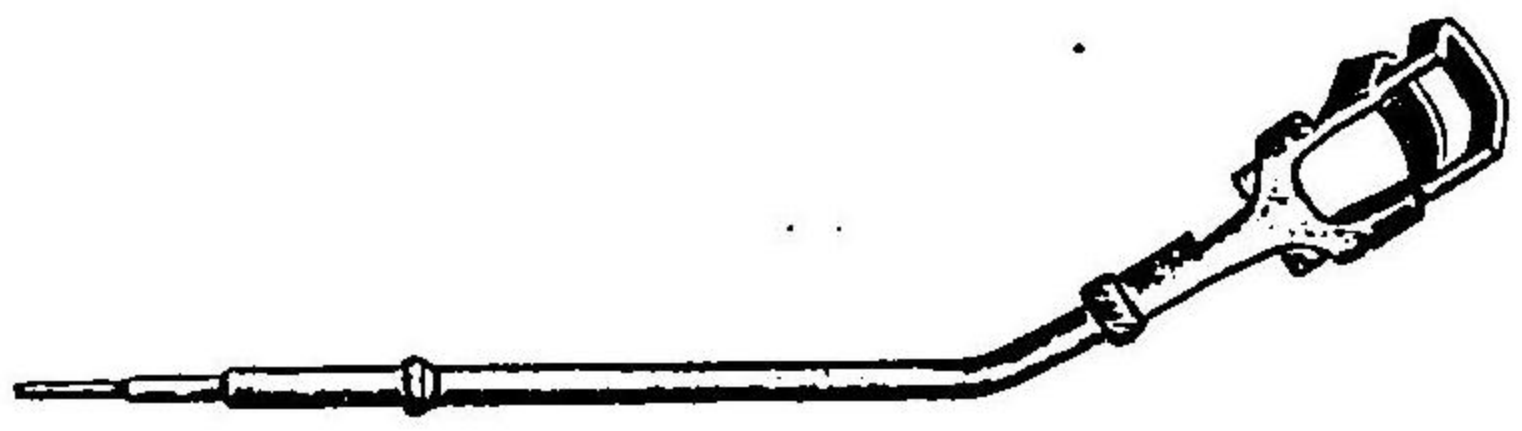
(一) 喉頭内手術トシテハ多ク搔爬術ヲ施コシ時ニ電氣燒灼分解ヲ用ユルモノアリ (1) 搔爬術 Die Curettage トハ單「キュレット」テ或ハ重複「キュレット」ヲ用ヒテ浸潤又ハ潰瘍ヲ爬除スルモノニシテ喉頭後壁ニハ單「キュレット」ヲ(第二〇〇二圖)又會厭側壁等ニハ重複「キュレット」(第二〇三圖)會厭切除鉗子(第二〇四圖)等ヲ用キ其他既述セルランドグラーフ重複「キュレット」ローゼンベルヒ鉤匙

鉗子フレンケル鉗子等ヲ撰ブモ宜シ 此手術ハ結核ノ限局シテ未ダ深部ヲ犯サザル者ニテ其肉芽増殖ヲ除去スルニ適シ若シ既ニ肺症狀ノ進行セル者或ハ汎ク喉頭ヲ犯セルモノ及ビ軟骨膜炎等ニハ寧口之ヲ禁忌セザル可ラズ會厭ニ於ケル浸潤又ハ潰瘍ニ因ツテ高度ノ嚥下痛ヲ有スルトキハ假令重症者ナリトモ之ヲ切除シテ效アル事アリ 此ノ如クシテ搔爬ヲ行ヒ若シ必要アラバ八乃至十二日ヲ經テ刺戟症狀ノ去ルヲ待テ之ヲ反復ス搔爬後疼痛アルモノニハ麻痺劑ヲ塗布シ次デ乳酸療法ヲ續行スベシ 手術ニハ通例出血ハ著シカラザルモ只咽喉會厭皺襞ヲ傷切ケタルトキハ多少ノ注意ヲ要スベシ 其他浮腫ハ之ヲ亂切シテ效アリ (2) 電氣燒灼法並ニ分解法 Die Galvanocaustik und Electrolyse 前者ハ肉芽増殖等ヲ破壊スルニ用ユレドモ或ハ却ツテ反應ニ因ツテ狭窄ヲ増スコトアリ後者ハ強固ナル浸潤ニ向ツテ應用セララル事アルモ其效果ハ著シカラズ

電氣燒灼法並ニ分解法

喉頭外手術

第二百四圖



ヲ有スルトキハ假令重症者ナリトモ之ヲ切除シテ效アル事アリ 此ノ如クシテ搔爬ヲ行ヒ若シ必要アラバ八乃至十二日ヲ經テ刺戟症狀ノ去ルヲ待テ之ヲ反復ス搔爬後疼痛アルモノニハ麻痺劑ヲ塗布シ次デ乳酸療法ヲ續行スベシ 手術ニハ通例出血ハ著シカラザルモ只咽喉會厭皺襞ヲ傷切ケタルトキハ多少ノ注意ヲ要スベシ 其他浮腫ハ之ヲ亂切シテ效アリ (2) 電氣燒灼法並ニ分解法 Die Galvanocaustik und Electrolyse 前者ハ肉芽増殖等ヲ破壊スルニ用ユレドモ或ハ却ツテ反應ニ因ツテ狭窄ヲ増スコトアリ後者ハ強固ナル浸潤ニ向ツテ應用セララル事アルモ其效果ハ著シカラズ (二) 喉頭外手術ハ氣管切開喉頭截開術等ニシテ氣管切開 Tracheotomie ハ單ニ狭窄ニ對シテ而已ナラズ之ニ據リテ喉頭ヲ擴張シ之ヲシテ安靜ナラシメ其病變ノ不斲性刺戟ヲ避クルヲ目的トシ或ハ之ニ食道胃等ノ切開ヲ兼テテ所謂咽喉擴張ヲ行フコトアリ 喉頭截開術 Laryngotomie トハ喉頭ヲ截割シ次デ罹患部ノ搔爬ヲ行フモノニシテ時ニ良好ナル結果ヲ得 尚ホ病變ガ若シ單ニ喉頭入口部ニ占位セル時ハ舌骨下咽頭截開術 Pharyngotomia

理學的療法

subhyoideaヲ行フモ可ナリ  
 ▲喉頭全別出 Totalectomy des Kehlkopfes ノ不可ナルハ一般ニ認メラルル所ニシテ時ニ部分的切除ノ行ハルルニ過ギズ、  
 三、理學的療法  
 其絕對ノ價值ニ就テハ未ダ定評無シト雖モ日光療法、光線療法、ラヂウム療法モ亦タ試ム可キモノナル可シ。

狼瘡

第八節 狼瘡 Lupus

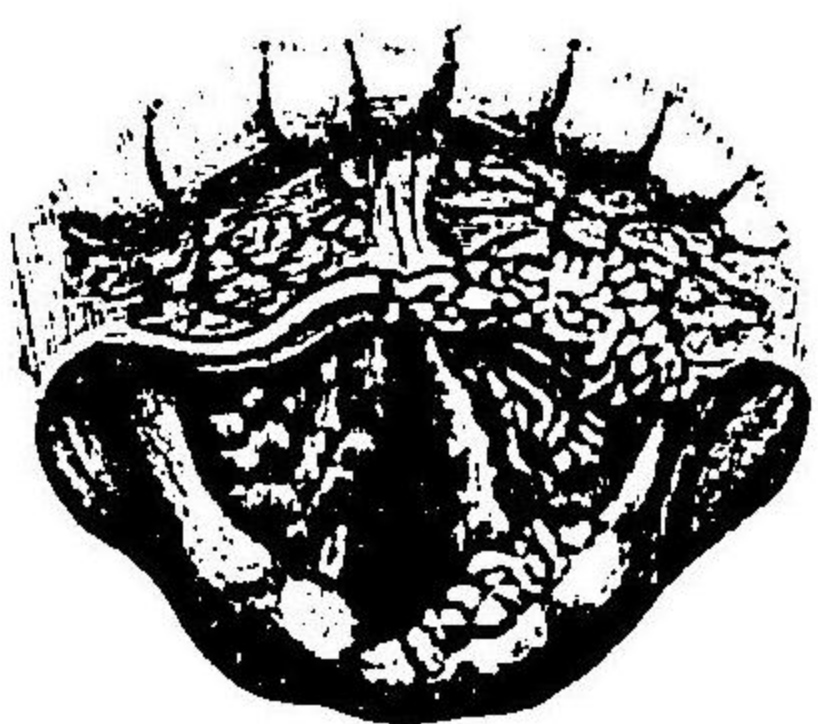
原因

症候竝ニ經過

原因竝ニ病理解剖 等シク結核ノ一種ニシテ組織的ニモ巨大細胞ヲ有スル結核ヲ證明シ得レドモ結核菌ハ極メテ小數ナリ  
 喉頭狼瘡ハ原發性ニ來ル事稀ニシテ概テ鼻、口腔、咽頭、或ハ外皮ノモノニ續發的ニ現ハレ殊ニ妙齡ノ女子ニ多シ  
 症候竝ニ經過  
 自覺症 ハ甚ダ少ナク唯ダ喉頭内ニ壓迫ヲ感ジ或ハ聲音嘶啞ヲ起セドモ其病變ハ寧ロ喉頭入口ニ在ルヲ例トスルガ故ニ發聲ハ著シク妨ゲラレズ、ザレド其進行セル者ニハ呼吸困難ヲ呈ス  
 他覺症 其好發部ハ會厭ニシテ茲ヨリ内部ニ進ム、浸潤ハ輕ク發赤腫脹シ其表面ニ蒼白色ナル小結節ノ密接シテ存在セルヲ認メ爲メニ粘膜ハ顆粒狀ヲ爲シ會

診斷

第二百五圖



喉頭狼瘡

厭ノ遊離縁ニ於テハ乳嘴樣増殖ヲ呈ス、此結節ハ或ハ吸收セラレテ治癒スルコトアレドモ概テ潰瘍ニ陥キリ次デ癩痕結成ニ傾ク、故ニ狼瘡ニハ一方ニ結節ヲ新生シ又他方ニ於テハ癩痕ヲ結ブヲ見ル、其經過ハ頗ル緩慢ナリ。

診斷 會厭ニ於テ是等ノ變化ヲ認ムルト同時

ニ外皮又ハ咽頭ニ狼瘡ノ存スル時ハ診斷ハ容易ナリ。  
 結核ハ癩痕ヲ結成スル事少ナク且ツ自覺症ハ著明ニシテ又本症ニ反シ常ニ肺結核ヲ伴フ

微毒トノ鑑別ハ其經過潰瘍ノ性質、或ハ驅微療法等ニ依リテ之ヲ爲スベシ  
 稀ニ癌腫ト區別ヲ要スル事アリ。

豫後 一般ニ不良ニシテ其破壊ハ漸次進行シ或ハ後ニ肺結核ヲ併發ス、只稀ニ自然ニ又ハ療法ニ依リテ治癒スルモノアリ。

療法

療法 ハ喉頭結核ニ於ケルト畧ボ同様ナリ。  
 一般療法 トシテ肝油、沃度鐵、砒素劑等ヲ與エ 局處ニハ乳酸、沃度丁幾等ノ腐蝕劑ヲ塗布スルノ他ニ時ニ搔爬術ヲ行ヒ電氣ヲ應用シ或ハ稀ニ喉頭結核ニ於ケルガ如ク喉頭外手術ヲ行フ

豫後

療法

第九節 梅毒 Syphilis.

喉頭梅毒

原因

原因 梅毒ハ口腔咽喉等ニ比スレバ喉頭氣管ニハ尠ナシトス西洋ニテハ消  
毒不充ナル器械ニヨリテ傳染セル例アルガ如シ多クハ續發的ニ全身梅毒ノ一  
分象トシテ現ハルルモノナリ。

即チ喉頭氣管ノ梅毒ハ第二期或ハ第三期ノ病症ヲ呈シ感染後早キハ二三个月  
遅キハ數十年ニシテ現ハルルモ平均五乃至十年ナリ

尙ホ多數ノ場合ニハ口腔咽喉等ヨリ波及セルモノナリ

先天性梅毒ハ上記ノモノニ比シ更ラニ稀ナリ

害ナル刺戟ニ因ル其病原體スピロヘータバルリダニ就テハ前篇ヲ見ヨ

病理解剖的變化ハ鼻口腔咽喉等ニ於ケル者ト同致ナリ

症候

症候

自覺症 輕度ノモノハ單ニ加答兒症ニ就テ訴ヘ殊ニ發聲障礙アレド

モ進行スルニ從ヒ嚥下痛嚥下困難失嚥及ビ呼吸困難等ノ症狀ヲ呈スルニ至ル嚥

下痛ハ結核ニ於ケルヨリ輕度ニシテ且ツ潰瘍ノ進行セルニ拘ハラズ時ニ全ク之

ヲ缺如スルアリ 他覺症 第二或ハ第三期ナルニ從ヒ之ヲ異ニスルモノナレドモ時ニ其區別ノ

第二期症

困難ナルアリ

一 第二期症 ニ於テハ紅斑又ハ肝腫トシテ現ハレ

紅斑 Das Erythem ハ咽喉ニ於ケルガ如ク粘膜ノ圓形又ハ廣汎性發赤ヲ呈シ健康  
粘膜トノ境界ハ劃然タレドモ又單純性炎ト區別スルコト困難ナリ

コンデローム, Das Kondylom, ハ粘膜斑 Plaques muqueuses ニテ現ハレ圓形ニシテ周

圍ニ少シク紅暈ヲ有シ灰白色ヲ呈スル扁平隆起ナリ殊ニ之ヲ會厭ノ遊離緣聲唇  
ノ中央或ハ喉頭ノ後壁等ニ見ル後チ器械的刺戟ニ因リ上皮ハ剝離シ遂ニ滲潤ハ

第三期症

崩壊シテ表在潰瘍ト成ルコトアリ

二 第三期症 即チ護膜腫ハ組織的ニ圓形細胞ノ集積ヨリ成ルモノニシテ汎ク  
又ハ限局シテ來リ潰瘍軟骨膜炎等ヲ併發シ又ハ癩痕ヲ結成スル等種々ナレバ各  
其處見ニ從ツテ之ヲ列記セン

護膜腫性浸潤

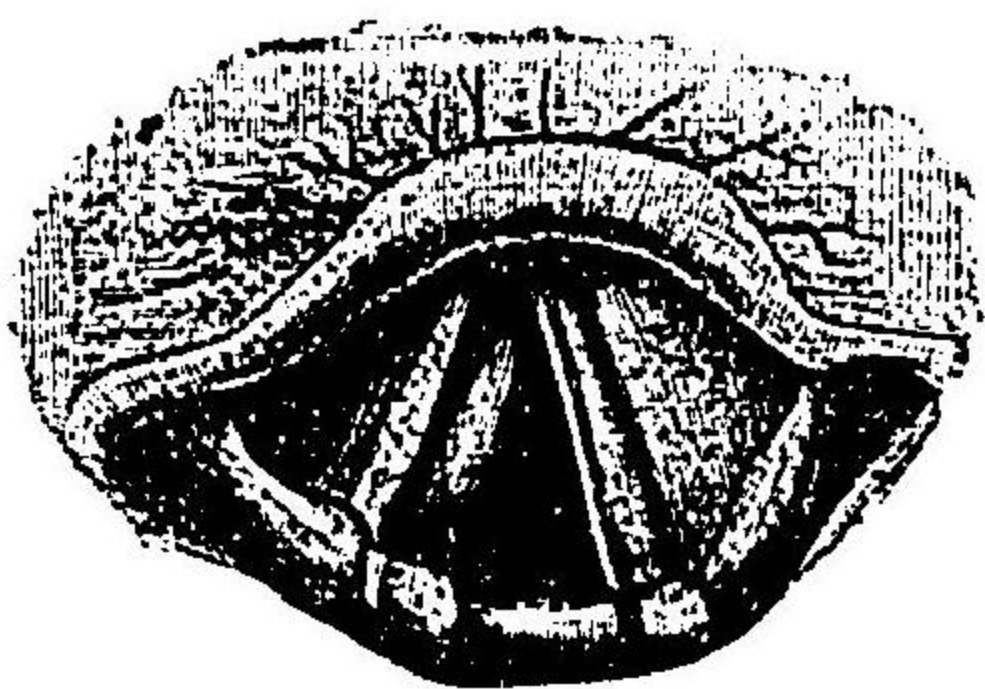
(一) 護膜腫性浸潤 Das gummatöse Infiltrat. 周圍ニ向ツテ

漸々ニ移行スル汎發性浸潤ニシテ粘膜ハ發赤腫脹シ多  
少附近ノ浮腫ヲ伴ヒ殊ニ會厭聲門下部等ヲ犯シ爲メ  
ニ喉頭内腔ノ狹窄ヲ來ス又其著シク蔓延スルトキハ

喉頭ノ大部ニテ筋及ビ軟骨ヲモ犯スアリ

(二) 護膜腫性結節 Der Gummi knoten 粘膜下組織ニ占  
位シ帽針頭ヨリ棗實大ニ至リ類圓ニシテ限局セル結

第二百六十六圖



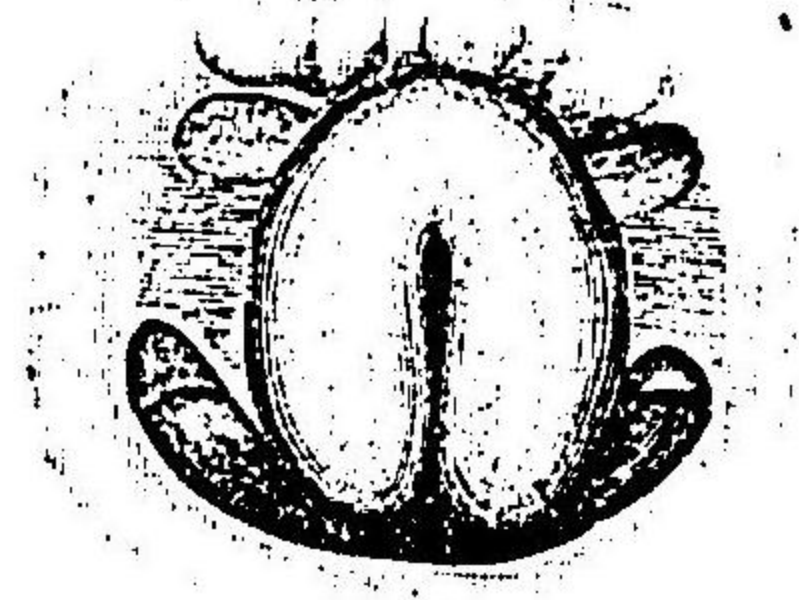
右聲門護膜腫性浸潤

護膜腫性結節



膿液膿性潰瘍

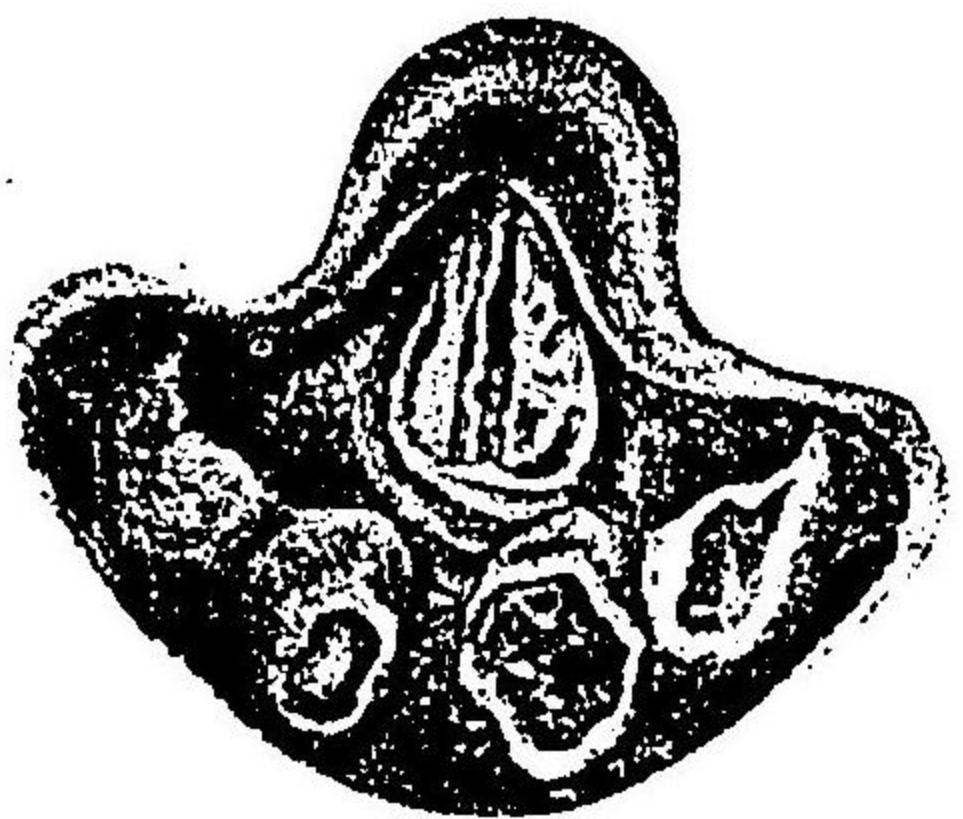
圖七百二第



膿液膿性潰瘍ノ概會

軟骨膜炎

圖八百二第



軟骨膜炎ノ概會

節ト成リ粘膜面ハ爲メニ暗赤又ハ紫藍色ヲ呈スル  
 大小ノ隆起ヲ生ジ初メハ硬固ナレドモ病期ノ進行  
 スルニ從ヒ崩壞シテ堤狀縁ヲ有スル潰瘍ト成ル此  
 種類ハ喉頭内ニ稀ニシテ會厭ヲ其好發部位ト爲ス  
 (三) 膿液膿性潰瘍 Das funföse Geschwür 上述セル  
 ガ如ク汎發或ハ限局セル浸潤ハ好ンデ潰瘍ヲ形成  
 シ邊縁ハ銳利ニシテ噴火口狀ヲ呈シ底部ニ脈脂狀  
 膜ヲ被ムリ周圍ハ潮紅腫脹シテ屢浮腫ヲ伴フ尙此  
 潰瘍ニ特徴トスル所ハ一方ニ於テ侵蝕性ヲ有スル  
 ニモ拘ハラズ一方ニテハ屢瘰癧ヲ結成スルコトニ  
 シテ殊ニ瘰癧ノ收縮作用ハ著シク爲メニ高度ノ狹  
 窄ヲ起シ或ハ周圍ト癒著シテ複雑ナル處見ヲ呈ス  
 (四) 軟骨膜炎 Perichondritis 本病原體ニヨリ若クハ  
 潰瘍ガ球菌ノ傳染ヲ受ケ軟骨膜炎ヲ起スコトアリ  
 此際多ク會厭軟骨ヲ犯シ披裂軟骨環狀軟骨等ハ之ニ次グ是等ノ處見ト其經過ト  
 就テハ軟骨膜炎ノ條下ヲ見ルベシ

診斷

診斷 喉頭微毒ハ概テ其病歴ト身體他部ニ於ケル微毒性變化トヨリシテ其  
 診斷ハ容易ナレドモ一般ニ

豫後

第二期症ハ固有ナル症候少ナキガ故ニ上記ノ變化ノミニテ之ヲ知ル能ハザレ  
 バ其他ノ徵候ト或ハワッセルマン法驅微療法等ニ對スル反應ニテ之ヲ明カニス  
 ベシ  
 第三期症ニ於テハ結核トノ鑑別ヲ以テ最必要ナリトス是等ハ各其潰瘍ニ特  
 色ヲ有シ概テ之ニ據リテ區別シ得ベシ只病歴並ニ身體他部ニ於ケル變化ノ陰性  
 ナル際ニハ頗ル困難ナレバワッセルマン法ノ他ニ組織片ノ顯微鏡的検査ヲ要ス  
 ルコトアリ且ツ瘰癧トノ識別ニ於ケルモ亦然リトス(結核並ニ瘰癧ノ診斷參照)  
 先天性微毒モ亦之ヲ知ルコト容易ナラザレドモ同時ニ身體他部ニ其症狀ヲ有  
 スルニ依リ概テ之ヲ推定シ得

療法

豫後 一般ニ可良ニシテ殊ニ時期ヲ誤ラズ適當ノ療法ヲ施ス時ハ何等ノ變  
 化後胎症無クシテ治癒ス然レドモ既ニ潰瘍或ハ軟骨膜炎ヲ續發セルトキハ多少  
 ノ官能障礙ヲ遺スヲ免カレズトス  
 療法 一般療法 喉頭安靜法驅微療法等ヲ行フ只沃度加里ハ稀ニ喉頭ノ浮  
 腫ヲ來ス事アリ注意スベシ  
 局處療法 浮腫ハ亂切シ軟骨膜炎ニ於ケル膿瘍ハ切開シ壞死軟骨ハ摘出シ又  
 ハ窒息症狀ニ對シテハ氣管切開ヲ行ヒ潰瘍アラバ之ヲ清潔ニ保ツベシ  
 經過後ニ來ル瘰癧狹窄ノ療法ニ就テハ後述ス可シ但シ未ダ潰瘍ノ存在スルニ  
 已ニ擴張法ヲ行フハ宜シカラズ

氣管微毒

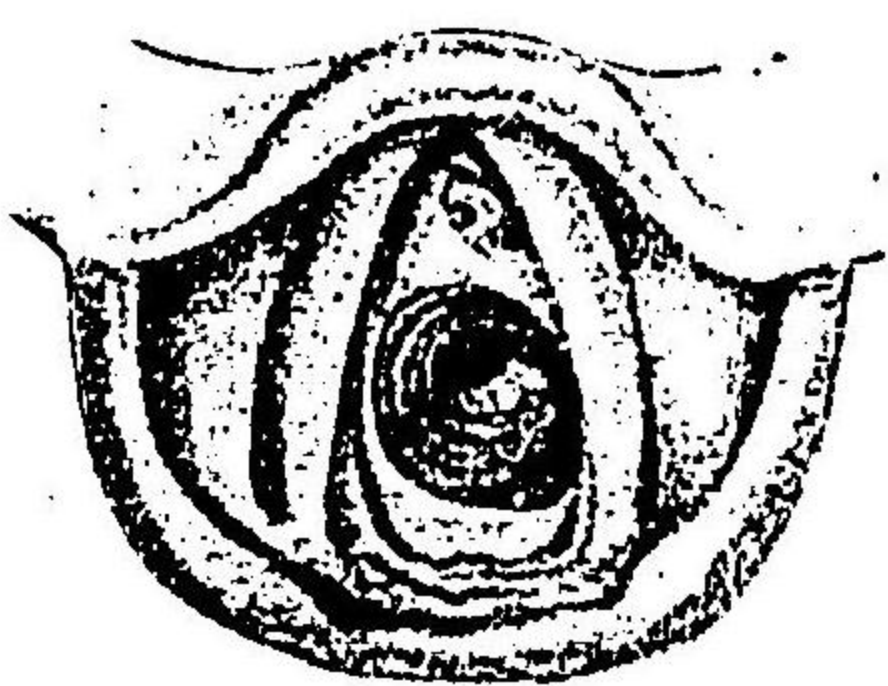
一 氣管ノ微毒 Syphilis der Luftröhre

喉頭ニ續發スルヲ多シトスレドモ時ニハ氣管ニノミ來ルアリ、概テ第三期ニシテ第二期症ハ稀ナリ、故ニ潰瘍若シクハ其後ニ現ハルル癩痕狹窄ナリトス

**症候** 自覺的ニハ初メ氣管炎ノ症狀ヲ呈シ進行スル時ハ呼吸不利、聲音薄弱、竝ニ呼吸遲徐等ヲ伴ヒ遂ニ窒息症狀ヲ呈スルニ至ル。

他覺的ニ氣管性呼吸困難ヲ有スル者ハ頭部ヲ前屈シテ吸氣の喘鳴ヲ發シ且ツ呼吸ニ於ケル喉頭ノ上下運動ハ僅微ナリ

第 二 百 九 圖



氣管ノ癩痕狹窄

鏡檢的ニ概テ喉頭ニ近キ處若クハ分岐部ニ圓形、橢圓形環狀又ハ溝狀等ヲ爲セル潰瘍ヲ認メ或ハ其癩痕狹窄ヲ見ル(第百九圖)潰瘍ハ深部ニ進メバ軟骨膜炎ヲ來タシ、或ハ縱隔竇、食道又ハ大血管中ニ破壊シテ不幸ノ轉歸ヲ取ルコトアリ

**診斷** 喉頭微毒ニ於ケルト同致ナレドモ氣管鏡

檢査ニ據リ始メテ其病變ノ性質ヲ知ル事アリ

**療法** 喉頭微毒ト同様ナリ、窒息症狀ニ對スル氣管切開ハ唯ダ病變ガ比較的癩痕狹窄ノ療法ハ後ニ述ブベシ

療法 診斷

症候

第十節 硬 腫 Sklerom. (一名 ステヨルク 慢性膿

漏症 Blenorrhoea chronica laryngis (Stürki)

**原因** 竝ニ病理 常ニ鼻咽喉頭ヨリ波及シ喉頭又ハ氣管ニ原發スルハ稀ナリ、此病原體ニ就テハ鼻硬腫ノ條下ニ述ベタルヲ見ヨ、又本症ハ一種ノ地方病ニシテ本邦ニハ未ダ之レ有ルヲ聞カズ解剖的ニ結締織間ニ於ケル紡錘形細胞竝ニ圓形細胞ノ浸潤ヲ呈シ喉頭ニハ聲門ノ下縁ニ來リ、聲門下炎ノ處見ヲ呈シ、之ヨリ上下ニ蔓延ス而シテ遂ニ癩痕收縮ヲ起シテ狹窄ニ陥キル

**症候** 自覺的ニハ通例聲音嘶啞、咳嗽ノ他ニ惡臭アリテ粘稠ナル分泌物ヲ漏ラシテ痲ト成リ又狹窄ヲ來ス時ハ呼吸困難ヲ伴フ可シ

**經過** ハ非常ニ慢性ニシテ二十年間モ繼續セル

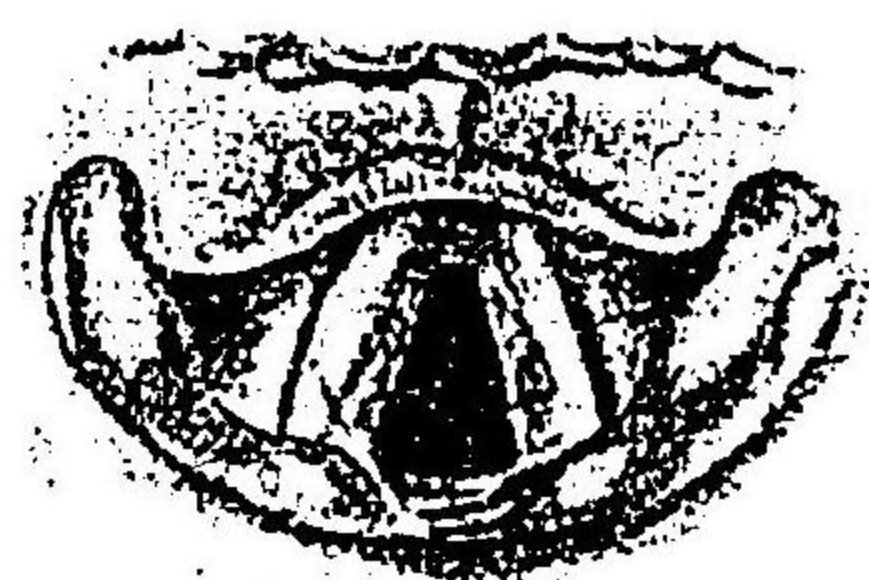
鏡檢的ニハ聲門下喉頭炎ノ處見ニ同ジ

**診斷** 通例鼻及ビ咽喉頭ニ同様ノ變化ヲ有スルガ

故ニ其診斷ハ容易ナリ

**豫後** 其經過ハ頗ル慢性ニシテ永ク何等ノ痛痒ヲ感ゼザルモ遂ニ狹窄症狀ノ下ニ不幸ノ轉歸ヲ取ル、シユミットハ近來X光線ヲ應用シテ全治癒ニ趣キシ

第 二 百 十 圖



喉頭硬腫

硬腫 原因

症候

經過

診斷

豫後

療法	馬疫	癩	原因並ニ病理	症候
<p>者アルヲ報ゼリ</p> <p><b>療法</b> 藥液ノ吸入ニテ結痂ヲ防ギ、狹窄ニハ擴張法ヲ試ム(第十一章)X光線ヲヂユウム光線等ノ療法モ亦タ宜シカラン</p>	<p><b>第十一節 馬 疫 Malleus (Folz)</b></p> <p>一種ノ桿菌ニ因リテ起リテ專ラ獸類ヨリ傳染シ喉頭及ビ氣管ヲ犯ス事少ナク其他ハ鼻及ビ咽頭ニ於ケル者ト同ジトス</p>	<p><b>第十二節 癩 Lepra</b></p>	<p><b>原因並ニ病理</b> 喉頭並ニ氣管ノ癩ハ凡テ續發性ナリ。元來本症ハ早晚途ニ喉頭ニ病變ヲ來スモノニシテ初メハ粘膜ノ加答兒狀ヲ呈シ結節性浸潤又ハ汎發性浸潤ヲ來タシ之ヨリ途ニ深淺不定ノ潰瘍ヲ形成シ又タ癩痕癩著ヲモ營ムニ至ル</p> <p><b>症候</b> 自覺症ハ聲嘶、嘔頭部癢、咳嗽等ニシテ已ニ進行セル者ハ呼吸困難ヲ呈シ疼痛ハ之ヲ缺如ス</p> <p>他覺的ニ其好發部ハ會厭ニシテ披裂會厭皺襞及ビ披裂軟骨部ニ波及ス</p> <p>此際會厭ハ肥厚内轉シテリ(オメガ)狀ヲ呈シ之ニ小結節ヲ生ジ恰モ狼瘡ニ類似セル處見ヲ呈ス而シテ此浸潤ハ途ニ崩壞シテ潰瘍ト成リ癩痕癩著或ハ狹窄ヲ貽ス</p>	

診斷	豫後	療法	氣管癩	癆口瘡
<p>尙ホ是等ノ病變部ハ常ニ知覺障礙ヲ伴フモノトス</p> <p><b>診斷</b> 身體他部殊ニ皮膚ガ同時ニ罹患スル事多キガ故ニ其診斷ハ困難ナラズ尙ホ罹患部ノ知覺障礙ハ特有ナリ。疑ハシキ場合ニハ癩菌ヲ檢出スベシ</p>	<p><b>豫後</b> 大體ニ於テ不良ナリ</p>	<p><b>療法</b> 對症療法ニ過ギズ</p>	<p><b>氣管癩</b> <i>Lepra der Luftröhre</i></p> <p>氣管ハ喉頭ヨリ尙ホ遅ク癩ニ罹患シ初メハ加答兒狀ヲ現ハスモ、途ニ氣管軟部ノ汎發性腫脹ヲ來シ之ヨリ又タ淺在性潰瘍ヲ形成シテ癩痕ヲ遺ス</p>	<p><b>癆口瘡</b> <i>Soot</i></p> <p>1. 癆口瘡</p> <p>喉頭癆口瘡ハ常ニ口腔咽頭ノモノニ續發スルモノニシテ時ニハ氣管並ニ氣管枝ノ粘膜ニ増殖シ爲メニ呼吸困難又ハ肺炎等ヲ惹起スルコトアリ</p> <p>尙ホ本症ニ於テノ詳細ハ咽頭ノ條下ニ讓ル</p>

第八章 寄生生物性疾患 Parasitäre Krankheiten

一 植物性寄生生物 Pflanzliche Parasiten.

寄生生物性疾患

診断	<p>診断ハ同時ニ存在セル口腔及び咽頭ノ病變ニ據リ、或ハ顯微鏡検査ニテ容易ナルベシ</p>
療法	<p>療法 咽頭ニ於ケルト異ナル所無シト雖モ時ニハ插管法、氣管切開等ノ必要アルコトアリ</p>
「アクチノミコーゼ」	<p>「アクチノミコーゼ」 Aktinomykose. 咽頭アクチノミコーゼハ稀ニ見ル者ニシテ概テ口腔或ハ咽頭ヨリ續發シ稀ニ原發性ノモノノ報告セラルルコトアリ</p>
「レプトトリックス」	<p>「レプトトリックス」 Leptothrix. 本症ハ咽頭ノ内外ニ腫瘍ヲ呈シテ來ルヲ以テ他ノ新生物ト誤マルコトアリ 三、レプトトリックス」 時トシテ咽頭又ハ氣管ニレプトトリックスガ寄生シ白色又ハ黄白色ノ沈著物ヲ作ルコトアリ</p>
旋毛蟲	<p>旋毛蟲 Trichinen ハ好ンデ喉頭筋ニ寄生シテ其全又ハ不全麻痺ヲ來タセドモ蟲體ノ石灰變性ト共ニ病症モ亦タ回復ス</p>
水蛭	<p>水蛭 Integri ガ不潔ナル飲料水ト共ニ或ハ之ヲ口腔ニ貼ゼルニ誤ツテ喉頭内ニ至リ此處ニ吸著シテ爲メニ窒息症狀ヲ呈スルコトアリ其他</p>
蛔蟲	<p>蛔蟲 Spurwurm モ亦喉頭或ハ氣管ニ迷入スルコトアレドモ是等ハ寧ロ異物ト</p>

二 動物性寄生物 Tierische Parasiten.

見做スベキモノナルベシ

第九章 異物 Fremdkörper.

原因	<p>原因 喉頭及ビ氣管内ノ異物ハ概テ口腔ヨリ入り稀ニ氣管切開孔又ハ外傷部ヨリ侵入シ是等ハ外界ヨリ來リ、或ハ其個人ノ体内ヨリ分離セル物質ニシテ例之ハ手術時ニ血液ヲ麻酔時ニハ吐物ヲ吸吮シ、或ハ壊死セル軟骨片、切除セル扁桃腺等ノ迷入スルアリ、又淋巴腺ガ氣管内ニ崩壊セル場合ノ如キモ之ニ屬スルモノナリ。然レドモ最多數ハ口腔ヲ經テ外物ガ吸氣ト共ニ吸引セラレタル場合ニシテ殊ニ食事中ニ、或ハ針鉤義齒又ハ玩具等ヲ口中ニ含ミツツ不意ニ哄笑シ或ハ談話シ又ハ驚愕スル等ニ當ツテ是等ガ闖入スルコト多ク殊ニ小兒ニ然リトス。尚ホ喉頭粘膜ノ知覺減退又ハ其消失セル時或ハ喉頭入口ニ近ク食道ノ狹窄アル時等ニハ殊ニ容易ニ嚥下ニ際シ若クハ睡眠中ニ異物ハ喉頭氣管内ニ入ルベシ 尚ホ時トシテ治療器械品ノ一片ガ異物トシテ殘留スルコトアリ</p>
症候	<p>一、喉頭異物 異物ノ大小形態位置及ビ粘膜ノ知覺狀態等ニ據ツテ種々ナレドモ其主徴ハ呼吸困難ニシテ或ハ直チニ窒息スルアリ其他ハ一時急性狹窄症狀ヲ現シ時ヲ經テ多少ハ輕快スルモ尚ホ痙攣性咳嗽聲音障礙疼痛又ハ粘膜ノ損傷セ</p>

氣管竝ニ氣管枝異物

ラルル時ハ出血等ヲ來ス但シ喉頭知覺ノ著シク減退セル場合或ハ異物ノ小ナル場合ニ於テ殊ニ之ガ皺襞内就中モルガンニ一竇内ニ插沒セルトキハ著明ナル症狀無シ時ニ呼吸竝ニ咳嗽ニ際シ患者ハ自カラ異物ノ移動ヲ感ズ

二氣管竝ニ氣管枝内異物 異物ノ小ニシテ且ツ圓形ナルキハ容易ニ聲門ヲ通過シテ氣管或ハ氣管枝内ニ達シ得時ニハ亦銳縁ヲ有スル物體或ハ針魚骨等モ亦タ墜落シ其壁ヲ穿テテ介在スルコトアリ此際氣管粘膜ハ喉頭ニ於ケルガ如ク鋭敏ナラザレドモ異物ノ大ニシテ氣管ヲ閉塞スルモノニハ直チニ窒息シ然ラザルモ概テ多少ノ呼吸困難及ビ咳嗽ヲ伴ヒ或ハ異物ガ可動性ナル時ハ患者ハ咳嗽發作ニ際シ其上下ニ移動スルヲ覺知シ又ハ聲唇ニ衝突シテ敲打音ヲ發シ或ハ笛ノ如キ異物ニ在リテハ同ジク呼吸咳嗽ニ際シ其笛聲ヲ聞クコトアリ(京都臨牀第四卷三島)又稀ニハ異物ハ再ビ咯出セラレ或ハ其存在スルモ別ニ症狀ヲ呈セザルモノアリ

凡テ氣管枝ノ異物ハ其右側ニ來ルコト多キモノニシテ其然ル所以ハ右枝ハ左侧ニ比シ内腔ハ廣ク且ツ氣管軸ニ對シテ傾針少ナク及ビ右肺ノ吸入力ハ強大ナルガ故ナリ

繼發症

繼發症 症例ト異物トニヨリテ相異ナリ粘膜ハ腫脹ヲ來タシ又ハ蜂窠織炎軟骨膜炎等ヲ惹起シ或ハ肉芽增殖癭痕形成等ニ據リテ一層ノ狹窄ヲ増シ或ハ潰瘍ノ穿孔ニヨリテ氣腫氣胸等ヲ伴フコトアリ又タ異物ガ氣管枝ヲ栓塞スル時ハ

診斷

之ニ屬スル肺葉ヲシテ萎縮(アテレクターゼ)ニ陥キラシメ次テ肺炎膿瘍壞疽等ヲ來タシ尙ホ進ンデ縱隔竇肋膜炎囊等ヲ犯スコト稀ナラズ

其他異物トシテノ針ハ屢組織内ヲ轉走シ却ツテ遠隔セル場處ニ現出スルコトアリ

診斷 ハ其既往症ト臨牀上ノ症候ト及ビ異物ノ直接證明ニ據ルベシ

既往症ニ於テ通例異物ノ闖入セルヲ知ルコト多ケレドモ時ニ小兒ニハ不確實ニシテ其果シテ氣管又ハ食道内ニ嚥下セラレシヤヲ知ル能ハザレドモ

臨牀上ノ症狀ヲ檢スルニ通例患者ガ異物ノ介在ヲ覺知スルノミナラズ概テ同時ニ呼吸困難癆瘵的咳嗽其他ノ刺戟症狀ヲ呈スルニ由リ異物ヲ想像シ又時ニ前述セルガ如ク異物ニ依リテ敲打音ヲ發シ又ハ笛聲ヲ放ツガ如キ際ニ於テハ愈確實ナリ

尙ホ此際必要ナルハ肺臟ニ於ケル理學的症狀ニシテ即チ一側氣管枝ノ閉塞セラルルトキハ胸廓半部ノ吸氣運動及ビ肺下界ノ吸氣時擴張等ハ減少シ呼吸音竝ニ聲音振顫ノ微弱狹窄音等ヲ證明シ得ルモノナリ

然レドモ既ニ異物ハ咯出セラレタルニ拘ハラズ尙ホ異物ノ感ヲ訴ヘ又ハ之ニ反シテ其存在セルモノニ症狀ノ著シカラザルコトアルヲ忘ル可ラス此場合ニ於テX光線照射殊ニ其攝影ニ據リ異物ノ存在ト位置トヲ知ルヲ得只此際異物ハ金屬又ハ骨片ナルヲ要ス而シテ最モ確實ナル診斷ヲ下スニハ

喉頭鏡或ハ氣管枝鏡検査ニ據ラザルベカラス即チ先ヅ喉頭鏡或ハ小兒ニハキ  
ルスタイン鏡ヲ用キ而シテ若シ異物ヲ認メ能ハズシテ尙ホ且ツ病歴ト其他ニ異  
物ヲ疑ハシムベキ徵アルトキハ進ンデ氣管枝鏡ヲ使用スベシ

之ニ據リテ異物ヲ發見セル時ハ直チニ其大小形狀竝ニ粘膜ノ變化ヲ檢スベシ  
ト雖モ時ニハ物體ヲ發見スルニ困難ナルコトアリ殊ニ硝子製物質又ハ淡色ノ護  
膜製酸漿ほうづきノ如キヲ然リトス只銳尖ナルモノハ概テ周圍粘膜ニ限局セル  
發赤腫脹アリテ之ヲ指示シ或ハ已ニ肉芽ニ蔽ハレタルトキハ注意シツツ消息子  
ニテ之ヲ觸診スベシ

但シ此氣管枝鏡検査法ハ概テ同時ニ治療ノ目的ニ應用セララルモノナレハ之  
ニ就テハ療法ノ條下ニ述ベシ

豫後

豫後

異物ノ早ク摘出セララル程善良ナリ殊ニ最近數年來ハキリヤン鏡ヲ  
一般ニ應用スルニ至リ從ツテ其死亡數ハ著シク減少セリ

然レドモ既ニ異物ノ摘出セラレタルニ拘ハラズ尙ホ繼發症狀ニ由リテ不幸ニ  
轉歸スルコト尠カラズ前記三島ノ例ノ如キモ小兒ガ風船玉ノ笛ヲ吸引シテ右氣  
管枝内ニ嵌入シタルモノアリテキリアン鏡ノ下使用法ニヨリ之ヲ牽出シタレド  
モ急性肺萎縮ハ恢復セズシテ遂ニ斃レ而シテ剖檢的ニモ亦其然ルヲ證明シタリ  
(京都臨牀)

一般ニ小兒ハ大人ニ比シ其豫後良シカラス蓋シ其喉頭氣管等ハ凡テ内腔ノ狹

療法

療法

小ナルト一面ニハ身體ノ抵抗力ニ乏シキトニ因ラズンハアル可ラズ

喉頭異物

ハ概テ容易ニ喉頭鏡監視ノ下ニ或ハ直達鏡内ニテ異物鉗子ヲ用ヒ

之ヲ摘出シ得ルモノニシテ此際通例局處麻醉ニテ充分ナレドモ時ニ小兒ニハ全

身麻醉ヲ要スルコトアリ尙ホ異物ガ脆弱ニシテ容易ニ破壊スルガ如キ物質ナル

トキハ其破壊片ガ更ラニ氣管深部ニ陷キラザルコトニ注意スベシ

但シ既ニ患者ガ窒息ヲ呈スル時ハ先ヅ氣管ヲ切開スベシ

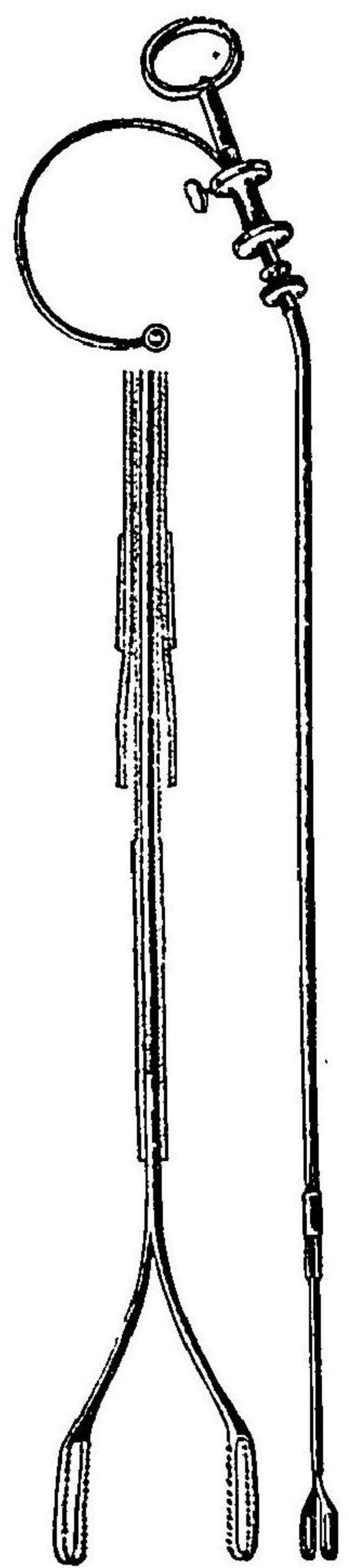
氣管或ハ氣管枝内異物ニ向ツテハ氣管枝鏡内ニテ鉗子或ハ鈎ヲ以テ之ヲ摘出

ス但シ此際各症例ニ就テ其上或ハ下使用法ヲ撰ブベキ乎ニ就テハ周到ナル考慮

ヲ要スルモノニシテ其適應症竝ニ検査方法ニ就テハ殊ニ總論(第四百二頁)ニ詳述  
シタリ

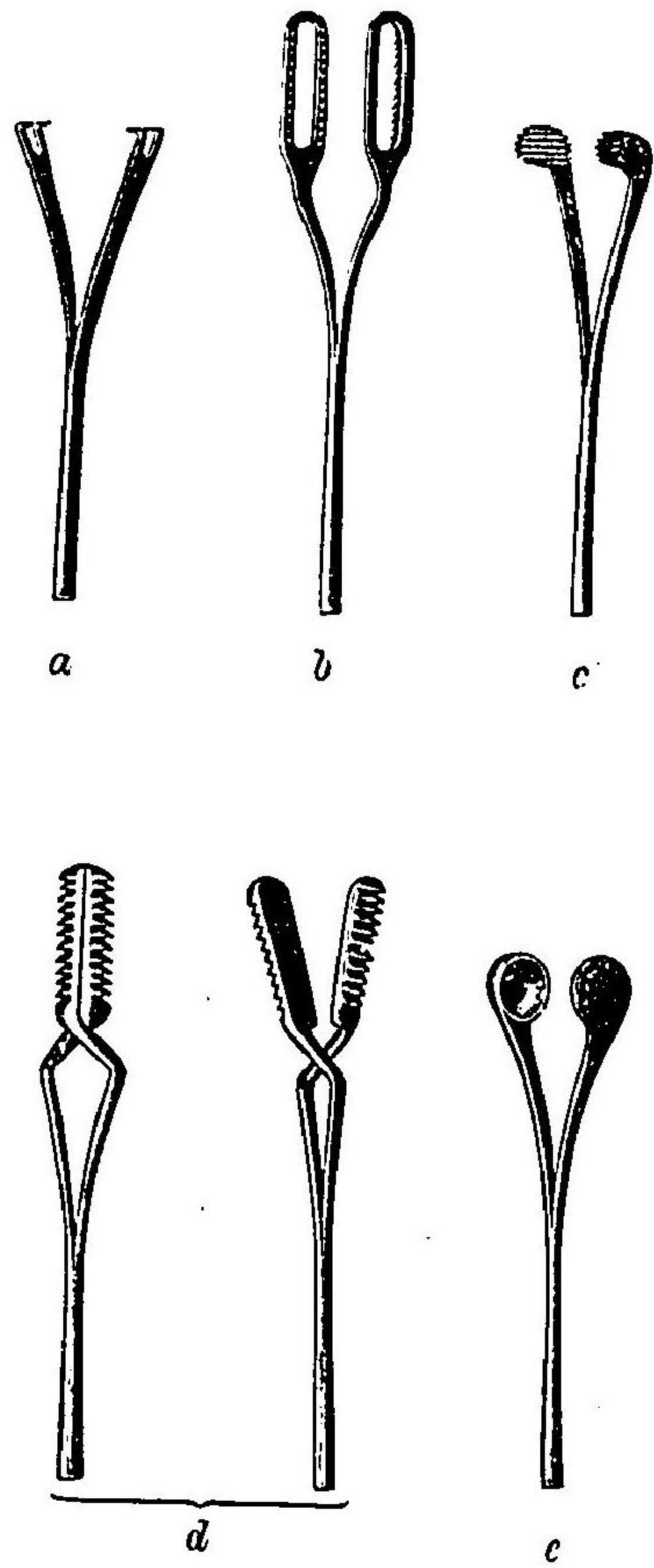
診断的検査ニ際シテモ亦同ジ

第二百一十圖



可延性鉗子

圖二十百二第



異物鉗子  
銳匙鉗子

a, b, c, d,  
e.

異物摘出ニ向ツテ特ニ作ラレタル異物鉗子アリ第二百十二圖ニ示スガ如シ近  
來ブリユニングスハ是等ノ鉗子ノ長サヲ隨意ニ加減シ得ル者第二百十一圖ヲ創  
作セリ

但シ鉗子ト共ニ鉤モ亦タ頗ル必要ニシテ殊ニ氣管枝ヲ栓塞シテ且ツ圓形滑澤  
ナル異物ニ向ツテハ鉗子ヨリモ遙カニ有利ナリトス  
織發症ノ療法ニ就テハ此處ニ詳述セズ

第拾章 損傷 Verletzungen

喉頭竝ニ氣管ノ損傷ハ自殺ノ目的ニ出テタル切創ヲ除ケバ比較的稀ナリトス、  
是レ蓋シ解剖的位置ガ外力ノ影響ヲ受クルコト少キト、其基梁ハ軟骨ヨリ成リ且  
ツ附近組織ト共ニ可動性ナルガ故ニ、外力ヲシテ他ニ轉向セシムルニ因ル、然レド  
モ老年ニ及ビテ其化骨ヲ終ルトキハ却ツテ挫折シ易キニ至ル。  
其起傷外襲ノ外部ヨリセルカ又ハ内部ヨリ作用スルニ從ツテ内外二種ノ損傷  
ニ分ツ。  
外損傷ハ振盪症、挫傷、創傷、骨折及ビ脱臼等ニシテ  
内損傷ハ腐蝕、湯瀝、手術的副損傷又ハ喉頭筋ノ過勞及ビ異物ニ因ツテ來レルモ  
ノ等ナリ

一 外損傷 Aeusere Verletzungen.

振盪症 Erschütterung (Commotio laryngis)

喉頭附近ノ壓迫或ハ打撲ニ際シテ局部ニ出血、骨折或ハ他ノ著明ナル變化ヲ呈  
スルコト無クシテ直チニ死ニ到ルコトアリ、之ヲ喉頭振盪症ト云フ、其死因ハ頭部  
ニ於ケル神經ノ刺戟ニ因ツテ心臟竝ニ呼吸作用ノ麻痺ヲ來スモノト認メラル  
一 挫傷 Quetschung oder Kontusion

衝突、打撲、墜落等ニ因ツテ來リ、組織内出血、外傷性血腫 (traumatisches Hämatom) ヲ形  
成シ局部ニハ疼痛、音障、腫脹等ノ症狀ヲ來スモ喉頭ノ安靜ヲ保チ、且ツ消炎療

外損傷

振盪症

挫傷

法ヲ施ストキハ治癒シ又ハ時ニ膿瘍浮腫軟骨膜炎等ヲ併發ス  
三創傷 Verwundungen.

創傷

銃創 Schusswunde ハ主トシテ戰時ニ之ヲ見稀ニ貫通スルコトアレドモ多ク不規則ナル粉砕骨折トシテ現ハル

刺創

刺創 Stichwunde ハ爭鬪或ハ自殺ニ際シテ生ジ通例出血ハ僅少ナルモ其氣管内ニ流下シ或ハ又創口ヨリ氣腫ヲ生ジ是等ニ因リテ呼吸困難ヲ呈スルコトアリ

切創

切創 Schnittwunde 多クハ自殺ノ目的ニ因ツテ生ジ創線ハ左上方ヨリ右下方ニ斜走スルヲ常トス只左利者ニテハ之ニ反セリ

切創ニテハ甲状軟骨ノ全部或ハ其一部ヲ切斷スルコト多ケレドモ時ニ舌骨甲状膜ヨリ深ク會厭咽頭等ニ達スルアリ或ハ下方氣管ニテ喉頭トノ間ヲ離斷セルアリ

概テ創口ハ強ク哆開シ頸部大血管ノ傷ケララルコト尠ナキニ拘ハラズ多量ノ出血アリテ氣管内ニ流入シ強度ノ咳嗽發作ヲ起シ或ハ爲メニ窒息シ又ハ後ニ肺炎ヲ招致ス其他聲音嘶啞及ビ若シ氣管ニ損傷アル時ハ失聲症ヲ呈シ疼痛呼吸困難下困難等ノ症狀ヲ見ル呼吸困難ハ始メハ輕度ナレドモ續發炎症ニ因リテ増劇シ遂ニ窒息スルカ或ハ創傷傳染下肺炎等ヲ繼發シテ斃ルルコト少カラズ幸ニ治癒スルモ多少ノ癍痕狹窄ハ之ヲ免ルル能ハズトス

豫後

豫後 ハ凡テ其創傷ノ大小位置及ビ繼發症ノ如何ニヨル

療法

療法 創傷ノ小ナル時ハ單ニ之ヲ縫合シ大ナル時ハ先ヅ豫防的氣管切開ヲ行ヒテ後チ縫合ヲ施コスベシ其何レナルモ出血ト創傷傳染ヲ防ギ次テ已ニ化膿セルモノハ膿汁ノ肺中ニ吸入セラレザルヲ注意スルハ必要ニシテ此目的ニ向ツテハ喉頭腔ニタンボンヲ施コシ或ハ氣管ニタンボンカニューレヲ挿入ヲ要スルコトアリ

縫合後其癒著スル迄ハ頭部ヲ前屈位ニテ固定シ(切創ノ斜走セルトキ)初メ二三

日ハ食道消息子ニテ流動食ヲ與フ

骨折

四骨折 Frakturen

挫傷ニ於ケルト等シク衝突打撲墜落又ハ絞扼縊死等ニ際シテ來リ殊ニ軟骨ノ石灰變性或ハ化骨セルモノニ多ク此際概テ挫傷ヲ兼テ其徵候ノ爲メ骨折ハ却ツテ看過セララルコトアルベシ

最モ屢犯サルルハ甲状軟骨ニシテ環狀軟骨モ亦タ其ニ骨折シ其他ノ軟骨ハ稀ニ破壊セララル又甲状軟骨ノ上角ガ其筋附着部ヨリ折離スルコト尠カラズ

骨折ハ通例鉛直線ニ於テシ挫碎ハ稀ナリ

症候

症候 輕度ノ者ニハ格別ノ症狀ナシト雖モ通例局部ノ疼痛聲音障礙呼吸困難等ヲ呈シ粘膜炎損傷ヲ有スル者ハ又タ血液ヲ咯出ス尙ホ損傷ヲ受ケタル瞬間

ニ一時失神スルコトアリ

他覺的ニハ喉頭ハ扁平ト成リ又ハ一部突出スル等ノ變形ヲ來シ尙ホ骨折部ニ



於テ異常運動摩擦音等ヲ證明シ、尙ホ之ニ氣腫ヲ加フルコトアリ、但シ健康ナル喉頭ニ於テモ之ヲ左右ニ動かス時ハ之ト脊椎トノ間ニ於ケル摩擦音ヲ發スルコトアリ、骨折ト誤マル可カラズ、鏡檢的ニハ喉頭内部ニ於テ廣汎ナル溢血、浮腫或ハ粘膜ノ裂傷又ハ骨片ノ突出等ヲ見ルコトアリ

**診斷** 通例前述セル他覺症狀ニ據リテ容易ナリ、時トシテ強度ノ腫脹並ニ疼痛ニ因ツテ觸診ノ困難ナルコトアリ、X光線透射ヲ行フ時ハ之ニ觸ルルヲ要セザルベシ

**豫後** 甚シク不良ト云フベカラザレドモ、窒息、損傷傳染、嘔下肺炎等ニ因リテ不幸ノ轉歸ヲ取り、又タ治療後癥痕狹窄ヲ殘スコトアリ

療法

**療法** 輕度ノ者ニハ格別ノ療法ヲ要セズ  
重症ニアリテハ危險ノ切迫セルモノ無クトモ先ヅ豫防的氣管切開ヲ行ヒ、及ビ損傷部ノ傳染ヲ避ケテ折片ノ強ク移動セルモノハ氣管切開口ヨリ套管ヲ插入シ、或ハ上方ヨリオドワイエル管ヲ裝ヒテ其復舊ヲ圖ルベシ

其他喉頭ヲ安靜ナラシム可キハ勿論ナリ

氣管ノ骨折

氣管ノ骨折 Frakturen der Luftröhre

氣管ニ於テモ亦タ喉頭ト同時ニ或ハ別ニ其連續ヲ斷離セララルコトアリ、即チ伸展セル側頭部ノ打撲衝突等ニ因リ又ハ胸部ノ挫傷ニ因リテ之ヲ來ス、此際又タ氣管枝モ斷裂ス而シテ殊ニ之ヲ小兒ニ見ルハ蓋シ其胸廓ノ彈力性ニシテ壓擠シ

診斷

豫後

療法

診斷

豫後

療法

脫臼

内損傷

腐蝕並ニ湯瀝

易ケレバナリ、此際氣管ハ横ニ裂傷ヲ生ズルモノナレドモ軟骨輪ニ於テ固有ノ骨折ヲ見ルコトハ寧ろ稀ナリ

**診斷** ハ困難ナレドモ、其病歴ト並ニ喉頭骨折ニ於ケルガ如キ症狀ヲ呈スル患者ハ高度ノ呼吸困難ト廣汎ナル氣腫トヲ來シ、之ニ咳嗽、血痰等ヲ伴フ

**豫後** ハ必ズシモ不良ナラザレドモ同時ニ受ケタル損傷或ハ他ノ重大ナル繼發症ニ因リテ斃ルルコト多シ

**療法** 氣管ノ安靜ヲ圖リ、消炎療法ヲ行フ、氣管切開ハ時ニ必要ナリ

五、脫臼 Luxationen

環狀披裂關節ニ來リ概テ高度ノ挫傷殊ニ其骨折ト同時ニ現ハレ、此際是等ノ症狀ノ他ニ鏡檢ニテ披裂軟骨ガ異常ノ位地ニ存シ且ツ不動性ナルヲ認メ得ベシ、尙ホ稀ニ環狀關節ニ於テ甲狀軟骨ノ下角ガ欠伸又ハ嘔吐等ニ際シテ脱臼スルコトアレドモ是ハ寧ろ關節ノ病的狀態ニ因ルモノナル可シ

二 内損傷 Innere Verletzungen.

一、腐蝕並ニ湯瀝 Verätzungen und Verbrühungen

腐蝕ハ通例強アルカリ又ハ強酸類ノ飲用ニ因リ、或ハアンモニアノ如キ腐蝕性瓦斯ノ吸入ニ因リテ來リ、湯瀝ハ熱性液體ノ飲用又ハ熱蒸氣ノ吸入ニ依リテ之ヲ

症候

生ズ  
 腐蝕劑或ハ熱性液體ノ飲用(自殺ノ目的、或ハ誤用)ニ因リテ生ジタル腐蝕或ハ湯  
 潑ハ同時ニ口腔、咽頭及ビ食道ニ於テ高度ノ作用ヲ現ハスモノニシテ喉頭ニ於ケ  
 ル變化ハ概テ其入口部ニノミ著明ナリ。  
 症候 變化ノ輕キハ單ニ發赤、腫脹ニ止マレドモ尙進ミテハ浮腫ヲ伴ヒ或ハ  
 物質缺損ヲ來タシ纖維索性滲出ヲ見ルニ至リ之レニ傳染ヲ起ストキハ蜂窠織炎  
 ニ陥キルコトアリ  
 是等ニ因リテ患者ハ疼痛、呼吸困難ヲ訴ヘ時ニ窒息、症狀ニテ不幸ニ轉歸シ或ハ  
 治癒スルモ癩痕狹窄ヲ貽スコト多シ

療法

手術的副損傷

出血竝ニ裂傷

療法 防腐消炎法ヲ主トシ、時トシテ插管法、氣管切開術等ヲ要スルコトアリ  
 二、手術的副損傷 Operative Nebenverletzungen.  
 喉頭又ハ氣管ノ手術ニ際シ、患者ノ不安ナルト手術ノ不熟練ナルトニ因リテ或  
 ハ損傷ヲ來シ、出血、氣腫等ヲ惹起スルコトアルベシ  
 三、喉頭筋ノ過勞ニ因スル出血竝ニ裂傷 Blutungen und  
 Rupturen infolge von Muskelüberanstrengung  
 過激ナル發聲強烈ナル咳嗽、絞扼、嘔吐等ニ因リテ喉頭組織ノ裂傷ヲ來シ、之ヨリ  
 粘膜炎下出血又ハ喉頭内出血ヲ來スコトアリ、但シ此際ハ概テ既ニ他ノ疾患ニ因リ  
 テ多少ノ抵抗力ヲ失ヘルモノナルコト多シ

喉頭狹窄症

原因

癩痕狹窄

喉頭鏡ニ據リテ聲唇ノ下縁ニ於テ其出血點ヲ認ムルヲ例トシ、且ツ聲唇ハ暗赤  
 色ニ腫脹スレドモ診斷ハ注意シテ之ヲ下シ、殊ニ出血多量ナル場合ニ於テハ鼻腔  
 肺臟等ノ檢索ヲ怠ル可カラズ

### 第十一章 喉頭及ビ氣管、氣管枝ノ狹窄症

Die Verengerungen des Kehlkopfes u.  
 der Trachea sowie der Bronchien

#### 第一節 喉頭狹窄症 Verengerungen des Kehlkopfes.

原因 喉頭狹窄症ハ先天性ニハ喉頭隔膜ニ因ツテ來ルノミニシテ凡テ後天  
 性ニ現ハレ一般ニ其原因ヲ喉頭ノ内外因ニ分ツト雖モ唯ダ喉頭ハ其外壁ノ強固  
 ナルガ故ニ縱令外襲機轉ガ之ニ加ハルトモ概テ喉頭全體トシテ移動シ、其内腔ハ  
 狹窄ヲ見ルハ稀ナリ、

即チ喉頭狹窄ハ多數ハ其内原因ニ基キ而シテ是等ノ原因的疾患ハ其各條下ニ  
 於テ記述セル所ナリ、故ニ本章ニ於テハ特ニ其後遺症タル癩痕狹窄ニ就テ述ベシ  
 トス、之ニ據リテ他ノ狹窄症竝ニ其療法ハ自ツカラ明瞭ナルベシ、

癩痕狹窄 Die Narbenstenose.

症候

幾ンド凡テ微毒性潰瘍ニ因ルモノナレドモ稀ニ結核、窒核、斯實扶、埤里、硬腫、癩等ニモ來リ時ニハ損傷後ニ之ヲ見ル而シテ喉頭ノ入口部、中喉頭腔、聲門下部等ニ著收縮變形等ヲ來シ殊ニ兩聲門間ニ隔膜ヲ作ルコト多ク又氣管ニモ癩痕ヲ見ル

**症候** ニ就テハ既ニ總論ニ於テ詳述セシガ再ビ之ヲ茲ニ概説センニ其主ナルモノハ呼吸式ニシテ即チ呼氣ニハ障礙少ナク吸氣ノミ延長シ從ツテ呼吸數ハ減少シテ副呼吸筋ノ活動ト共ニ胸廓内ニ陰壓ヲ生シ爲メニ頷窩、心窩、肋間等ノ部ニ吸氣的陷沒ヲ認メ尙ホ此際頸部長筋竝ニ横隔膜ノ運動ニ因リテ喉頭上下ニ移動ス即チ吸氣時ニ下降シ呼氣時ニ上昇シ氣管狭窄症ニ於テハ運動微弱且ツ概テ吸氣時喘鳴ヲ聽キ氣管狭窄ニハ呼氣時又々此際患者ハ頭部ヲ後屈氣管狭窄ニハ前屈ス聲音障礙ハ聲門部ニ著變ノ存セザル限リハ之ヲ來サザルモ氣管狭窄症ニ在ツテハ弱聲ト成ル

診斷

尙ホ高度ノ狭窄症ガ持續スル時ハ肺氣腫、アテレクター、心臓擴張等種々ノ呼吸器竝ニ循環器ノ障礙ヲ惹起スルニ至ル

**診斷** 臨牀的症狀ニ據リテ其狭窄ガ喉頭ニ存スルヤ或ハ氣管ニ在ルヤハ略ホ推定シ得レドモ是等ノ症狀ハ必ズシモ兩者ニ各固有ナルモノニ非ザレバ其何レヲ問ハズ喉頭鏡、氣管鏡等ノ検査ニ據リテ之ヲ確定スベシ但シ喉頭ト同時ニ氣管ニモ狭窄ノ存スルコト尠カラザレバ注意セザルベカラズ

豫後

**豫後** 原因的疾患ノ種類、病變ノ程度、竝ニ患者ノ忍耐力ニモ關スベシ

療法

**療法** 患者ガ既ニ高度ノ狭窄症狀ヲ呈スル時ニハ先ヅ其生命ノ危險ヲ救ヒ後チ狭窄ノ擴張ヲ圖ルベシ而シテ茲ニ其療法ヲ豫防竝ニ原因的療法ニ分チテ述ベントス。又是等ノ療法ハ單ニ癩痕ニ向ツテ而已ナラズ凡テノ狭窄症ニモ應用ス可キモノナリ

豫防的療法

一 豫防的療法

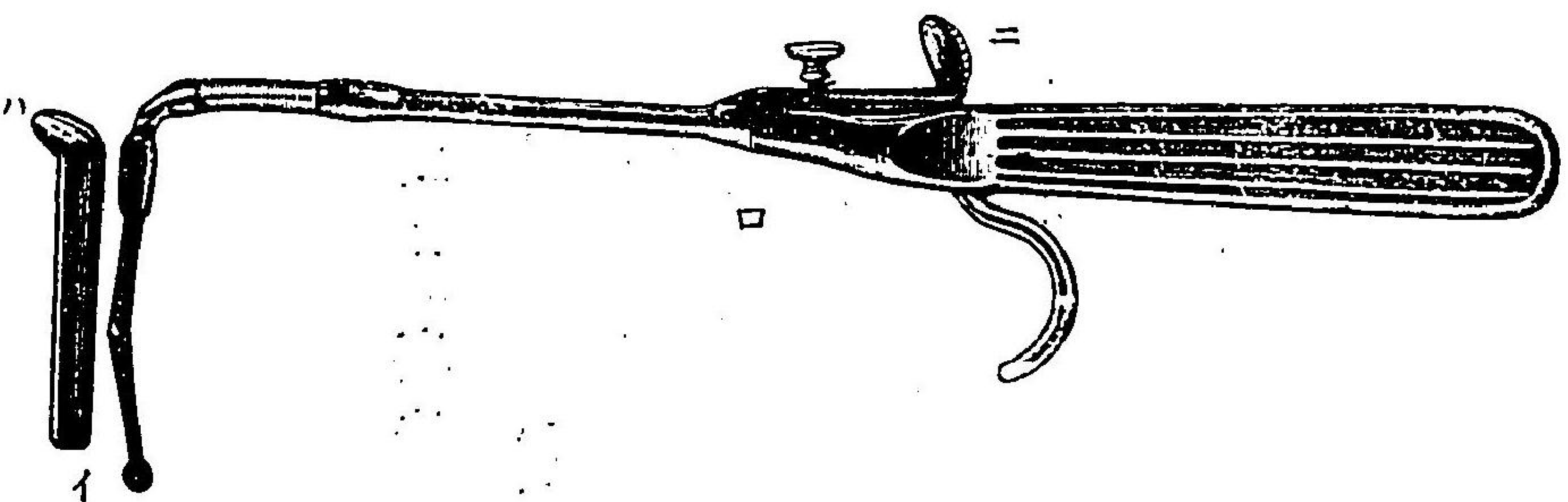
是ニハ自然道ヨリ呼吸氣ノ流通ヲ謀ルモノ即チ非觀血的ニ插管竝ニカテーテル挿入等ノ諸法ヲ行フト及ビ外部ニ假氣道ヲ作ルベキ氣管切開法トニアリ今各其方法利害等ニ就テ順次之ヲ記スベシ

オ、ドワイエル喉頭插管法

- 一 插管法 竝ニカテーテル挿入法 Intubation u. Katheterismus
- 一 オドワイエル喉頭插管法 Die Intubation des Kehlkopfes nach Odyer.

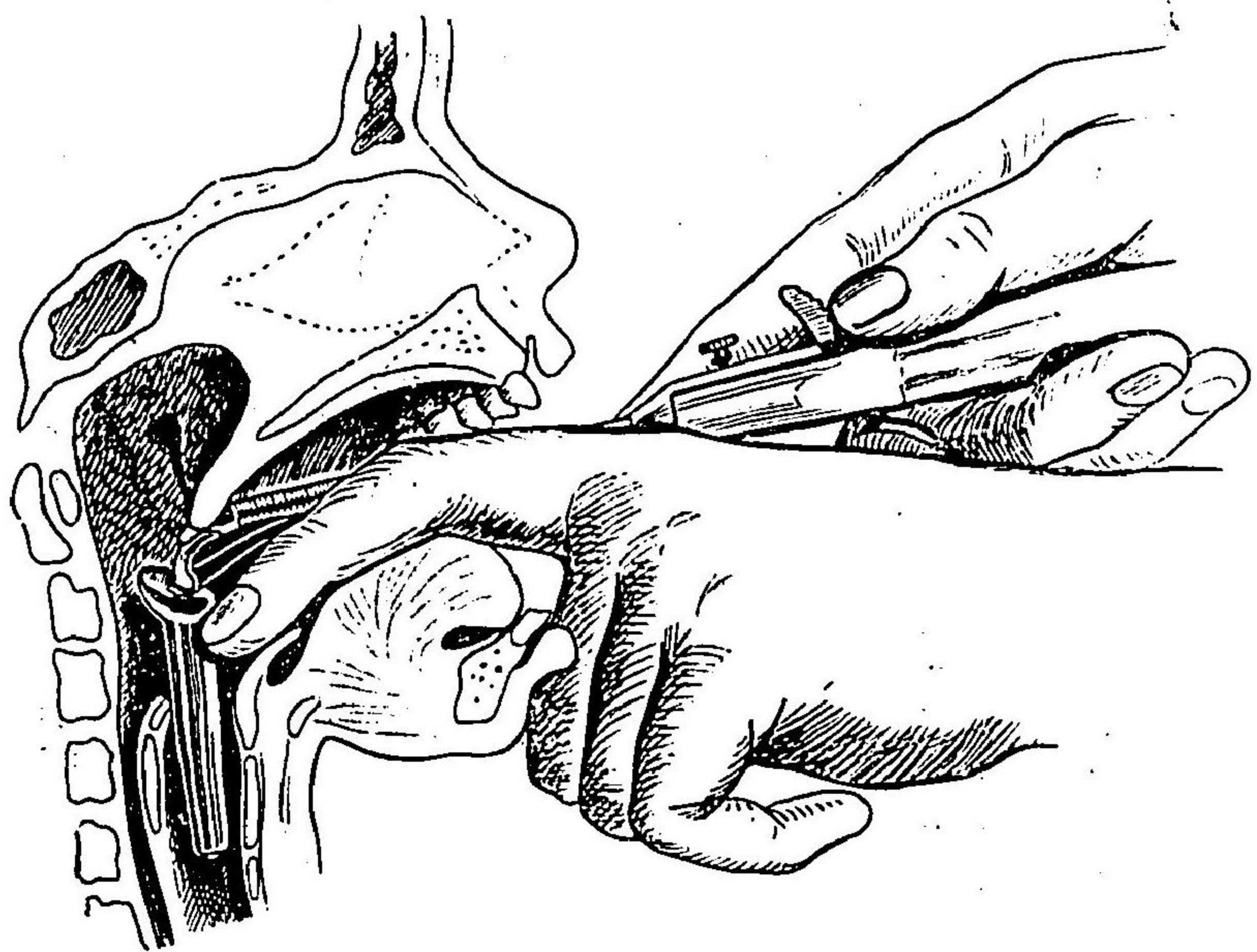
**方法** 金屬或ハ硬護膜製ノ一小直管(第二十三圖)ヲ喉頭腔ニ挿入スルモノニシテ其法ハ患者(通例小兒)ヲ坐位又ハ半臥位ニ固定シ開口器ヲ懸ケ醫家ハ左示指ヲ咽頭ニ挿入シテ患者ノ會厭ヲ前方舌根部ニ壓迫シ豫メ年齡ニ應ジタル插管(イ)ヲ取り其外端隆起(ハ)ヲ後方送管子ノ前方ニ向ケテ送管子(ロ)ニ依ツテ先ヅ咽頭ニ送り左示指ニ沿ヒテ會厭ノ後方ニ到ルヤ送管子ノ把柄ヲ舉上シ插管ノ先端ヲシテ喉頭入口部ヲ通過セシメ更ラニ示指ノ誘導ノ下ニ之ヲ前下方ニ送ル時ハ管ハ

圖 三 十 百 二 第



械器 用 管 插 ル エ イ ヲ ド オ  
子 管 送 口 管 挿 イ

圖 四 十 百 二 第



法 管 插 ル エ イ ヲ ド オ

聲門ヲ通過シ其外端隆起ハ室皺襞ニ據リテ支持セラレ管ノ氣管内ニ墜落スルヲ防グ之ヨリ把柄ニ設ケタル推進装置(ニ)ヲ前方ニ壓スルトキハ管ハ容易ニ離ルルヲ以テ今靜カニ送子ヲ口外ニ出スベシ此際管ガ正シク喉頭内ニ在ルトキハ呼吸

音ヲ聴キ及ビ患者ハ直チニ安靜ト成リ危險症狀ノ頓ニ輕快スルモノナリ但シ豫メ挿管ノ頭部ニ在ル小孔ニ糸ヲ通ジ其端ヲ口外ニ出シ之ヲ患者ノ耳翼ニ引懸ケ或ハ絆創膏ヲ以テ頰部ニ固定シ置クベシ

注意 挿管ヲ除去セントセバ此糸ヲ引キ或ハ除管子(第二十五圖)ヲ插入シ其先端ヲ管中ニ達セシメ把柄部ノ扛子(イ)ヲ壓スルトキハ除管子ノ先端ハ離開シ

テ管ヲ捉フルナリ但シ此除管子ヲ正シク管内ニ達セシムルニハ多少ノ熟練ヲ要スルノミナラズ管ヲ氣管内ニ壓下シ軟部ヲ損傷スルトキハ氣腫ヲ起スノ危險アルガ故ニ可成的糸ヲ保存スルヲ善シトス然レドモ不安ナル小兒ニシテ糸ヲ嚼斷セル際ニハ除管子ヲ用ヒザル可ラズ或ハ小兒ハ手ヲ糸ニ懸ケ爲メニ管ノ脱出スルコトアレバ一定時ハ其兩手ヲ緊縛シ置クノ已ムヲ得ザル場合アリ尙ホ實扶埤里ニ際シテ挿管ノ爲メ義膜ヲ深部ニ落シ却ツテ窒息症狀ヲ加フルコトアリ故ニ何レノ場合ニモ挿管法ニ際シテハ同時ニ氣管切開

圖 五 十 百 二 第

